

婦系図

泉鏡花

青空文庫

鯛、比目魚

一

素顔に口紅くつくしで美しいから、その色に紛まがうけれども、可愛い音ねは、唇が鳴るのではない。お薦つたは、皓齒しらはに酸漿ほおずきを含んでいる。……

「早瀬の細君レコはちようど（二十はたち）と見えるが三だとサ、その年紀としで酸漿を鳴らすんだもの、大概素性も知れたもんだ、」と四辺あたり近所は官員つとめにんの多い、屋敷町の夫人おくさま連が風説うわさをする。

すでに昨夜ゆうべも、神楽坂の縁日に、桜草を買ったついでに、可いいのを撰よって、昼夜帯の間に挟んで帰った酸漿を、隣家となりの娘——女学生に、一ツ上げましよう、と言つて、そんな野蛮なものは要らないわ！ と刎はねられて、利いた風な、と口惜くやしがった。

面当つらあてというでもあるまい。あたかもその隣家となりの娘の居間と、垣一ツ隔てたこの台所、腰障子の際に、懷手で佇たたずんで、何だか所在なさそうに、しきりに酸漿を鳴らしていたが、

ふと銀杏返しいちようがえのほつれた鬢びんを傾けて、目をぱちりと開けて何かを聞澄ますようにした。コロコロコロコロ、クウクウコロコロと声がする。唇の鳴るのに連れて。

ちよいと吹留ふきやむと、今は寂寞しんとして、その声が止まって、ぼつと腰障子へ暖う春の日は当るが、軒を伝う猫も居おらず、雀の影もささぬ。

鼠かと思つたそうで、斜ななめに棚の上を見遣みやつたが、鍋も重箱もかたりとも云わず、古新聞がまたがさりともせぬ。

四辺あたりを見ながら、うつかり酸漿に齒が触る。とその幽かすかな音おとにも直ちに応じて、コロコロ。少し心着いて、続けざまに吹いて見れば、透かさずクウクウ、調子を合わせる。

聞き定めて、

「おや、」と云つて、一段下しもながし流の板敷へ下りると、お源と云う女中が、今しがたここから駈かけ出して、玄関の来客を取次いだ草履が一ツ。ぞんざいに黒い裏を見せて引ひくり返ひつてゐるのを、白い指でちよいと直し、素足に引懸ひっかけ、がたり腰障子を左へ開けると、十時過ぎの太陽ひが、向うの井戸端の、柳の上から斜はつかけに、遍あまねく射さ込んで、俎まないたの上に揃そろえた、蒔ほうれんそう草の根を、紅くれないに照らしたばかり。

多分はそれだろう、口真似くちまねをするのは、と当りをつけた御用聞きの酒屋の小僧は、どこ

にも隠れているのではなかった。

眉を顰めながら、その癖恍惚した、迫らない顔色で、今度は口ずさむと言うよりもわざと試みにククと舌の尖で音を入れる。響に応じて、コロコロと行つたが、こつちは一吹きで控えたのに、先方は発奮んだと見えて、コロコロコロ。

これを聞いて、屈んで、板へ敷く半纏の裾を搔取り、膝に挟んだ下交の棲を内端に、障子腰から肩を乗出すようにして、つい目の前の、下水の溜りに目を着けた。

もとより、溝板の蓋があるから、ものの形は見えぬけれども、優しい連弾はまさしくその中。

笑を含んで、クウクウと吹き鳴らすと、コロコロと拍子を揃えて、近づいただけ音を高く、調子が冴えてカタカタカタ！

「蛙だね。」

と莞爾した、その唇の紅を染めたように、酸漿を指に取って、衣紋を軽く拊ちながら、
「憎らしい、お源や……………」

来て御覧、と呼ぼうとして、声が出たのを、圧えて酸漿をまた吸った。

ククと吹く、カタカタ、ククと吹く、カタカタ、蝶々の羽で三味線の胴をうつかと思わ

れつつ、静かに長くる春の日や、お蔦の袖に二三寸。

「おう、」と突込んで長く引いた、遠くから威勢の可い声。
来たのは江戸前の魚屋で。

二

ここへ、台所と居間の隔てを開け、茶菓子を運んで、二階から下りたお源という、小柄の可い島田の女中が、逆上せたような顔色で、

「奥様、魚屋が参りました。」

「大きな声をおしでないよ。」

とお蔦は振向いて低声で嗜め、お源が背後から通るように、身を開きながら、

「聞こえるじゃないか。」

目配せをすると、お源は莞爾して俯向いたが、ほんのり紅くした顔を勝手口から外へ

出して路地の中を目迎える。

「奥様は？」

とその顔へ、打着けるように声を懸けた。またこれがその（おう。）の調子で響いたので、お源が気を揉んで、手を振つて圧えた処へ、盤台を肩にぬいと立った魚屋は、渾名を（め組）と称える、名代の芝ッ児。

半纏は薄汚れ、腹掛の色が褪せ、三尺が捻じくれて、股引は縮んだ、が、盤台は美しいもの。向顱巻が、四五日陽気がほかほかするので、ひしやげ帽子を蓮の葉かぶり、ちつとも涼しそうには見えぬ。例によつて飲こしめした、朝から赤ら顔の、とろんとした目で、お薦がそこに居るのを見て、

「おいでなさい、奥様、へへへへへ。」

「お止しつてば、気障じやないか。お源もまた、」

と指の尖で、鬢をちよいと掻きながら、袖を女中の肩に当てて、

「お前もやつぱり言うんだもの、半纏着た奥様が、江戸に在るものかね。」

「だって、ねえ、めのさん。」

とお源は袖を擦抜けて、俎板の前へ蹲む。

「それじゃ御新造かね。」

「そんなお錢はありやしないわ。」

「じゃ、おかみさん。」

「あいよ。」

「へッ、」

と一ツ胸でしゃくつて笑いながら、盤台を下ろして、天秤てんびんを立掛ける時、蒺藜草を揃そろえている、お源の背せなを上から見て、
「相かわらず大な尻おわきだぜ、台所だいどころ充満いっぱいだ。串戯じょうだんじゃねえ。目量めかたにしたら、およそどのくらい掛るだろう。」

「お前さんの庄おしぐらい掛ります。」

「ああいう口だ。はははは、奥さんのお仕込みだろう。」

「めの字、」

「ええ、」

「二階にお客さまが居るじゃないか、奥様おくさんはおよしと言うのにね。」

「おっと、そうか、」

ぺろぺろと舌を吸って、

「何だって、日蔭ものにして置くだろう、こんな実のある、気前の可い……」

「値切らない、」

「ほんによ、所持持の可い姉さんを。分らない旦那じゃねえか。」

「可いよ。私が承知しているんだから、」

と眦まなじりの切れたのを伏目になって、お薦は襟おとがけに頤いをつけたが、慎ましく、しおらしく、且つ湿しめやかに見えたので、め組もおとなしく頷うなずいた。

お源が横向きに口を出して、

「何があるの。」

「へ、野暮な事を聞くもんだ。相変らず旨うめえものを食くわしてやるのよ。黙って入物を出しねえな。」

「はい、はい、どうせ無代価ただで頂戴いたしますものでございます。めのさんのお魚は、現金にも月末つきすえにも、ついぞ、お代をお取り遊ばしたことはございません。」

「皮肉を言うぜ。何てつたつて、お前はどうせ無代価で頂くもんじゃねえか。」

「大きに、お世話、御主人様から頂きます。」

「あれ、見や、島田を揺ゆすぶつてら。」

「ちよいと、番ごといがみあっていないでさ。お源や、お客様に御飯が出そうかい。」

「いかがでございますか、婦人^{おんな}の方ですから、そんなに、お手間は取れますまい。」

三

「だつてお前、急に帰りそうもないじゃないか。」

と云つて、め組の蓋を払つた盤台^{さしのぞ}を差覗くと、鯛^{たい}の濡色輝いて、広重の絵を見る風情、

柳の影は映らぬが、河岸の朝の月影は、まだその鱗^{うろこ}に消えないのである。

俎板をポンと渡すと、目の下一尺の鮮^{からくない}紅^{そり}、反^{まなばし}を打つて翻然^{ひらり}と乗る。

とろんこの目には似ず、キラリと出刃を真名簪^{かまえ}の構に取つて、

「刺身かい。」

「そうね、」

とお蔦は、半纏の袖を合わせて、ちよつと傾く。

「焼きねえ、昨日も刺身だつたから……」

と腰を入れると腕の冴^{さえ}、颯^{さつ}と吹いて、鱗がぱらぱら。

「ついでに少々お焼きなさいますなぞもまた、へへへへへ、お宜^{よろ}しゅうございましょう。」

御婦人のお客で、お二階じや大層お話が持てますそうでございますから。」

「憚^{はばかりさま}様。お客は旦那様のお友達の母^{おつかさん}様でございます。」

めの字が鯛をおろす形は、いつ見てもしみじみ可い、と評判の手つきに見惚^{みと}れながら、お源が引取つて口を入れる。

えらを一突き、ぐいと放して、

「凹^{へこ}んだな。いつかの新ぎれじやねえけれど、めの公塩^{こうしほ}が廻り過ぎたい。」

「そういや、めの字、」

とお薦は片手を懷に、するりと^{すべ}迂^{くろじゆす}る黒^{くろ}繻^{じゆす}子の襟を引いて、

「過^{このあいだ}日^{このち}頼んだ、河野さん許^{とこ}へ、その後廻^{のち}つてくれないッて言うじやないか、どうしたの？」

「むむ、河野ッて。何かい、あの南町のお邸^{やしき}かい。」

「ああ、なぜか、魚屋が来ないッて、昨日^{きのう}も内へ来て、旦那にそう言っていなすつたよ。行かないの、」

「行かねえ。」

「ほんとうに、」

「行きませんとも！」

「なぜさ、」

「なぜッて、お前めえ、あんけだもの獣ア、」

お源あわただが慌しく、

「めのさん、」

「何だ。」

「めのさんや。お前さんちよいと、お二階に来ていらつしやるのはその河野さんの母おつかさ様んじゃないか、気をお着けな。」

帽子をすつぽり亀の子すく竈くわみで、

「ホイ阿陀おだぶつ仏、へい、あすこにや隠居ばかりだと思つたら……」

「いいえね、つい一昨日おとといあたり故郷おくにの静岡からおいでなすつたんですとき。私がお取次に出たら河野の母でございます、とおっしゃったわ。」

「だから、母様が見えたのに、おいしいものが無いッて、河野さんが言っていなすつたのさ、お前、」

「おいしいものが聞いて呆れら。へい、そして静岡だってね。」

「ああ、」

「と御維新以来、江戸児の親分の、慶喜様が行つていた処だ。第一かく申すめの公も、江戸城を明渡し、落人を極めた時分、二年越居た事がありますぜ。」

馬鹿にしねえ、大親分が居て、それから私が居た土地だ。大概江戸ッ児になつてそんなもんだに、またどうして、あんな獣が居るんだろう。

聞きねえ。

過日もね、お前、まったくはお前、一軒かけ離れて、あすこへ行くのは荷なんだけれども、ちとポカと来たし、佳い魚がなくなつて困るツて言いなさる、廻つてお上げ、とお前さんが口を利くから、チョツ薦ちゃんの言うこつた。

脛を達引け、と二三度行つたわ。何じやねえか、一度お前、おう、先公、居るかいツて、景氣に呼んだと思ひねえ。」

お薦は莞爾して、

「せんこうツて誰のこつたね。」

「内の、お友達よ。河野さんは、学士だとか、学者だとか、先生だとか言うこつたから、一ツ奉つて呼んだのよ。」

と鰭^{ひれ}をばつさり。

四

「いいじゃねえか、お前^{めえ}、先公だから先公よ。何も野郎とも兄^{きょうでえ}弟とも言つたわけじゃねえ。」

と庖丁^{さき}の尖^{すべ}を危^{ふとつちよ}く迂^{ひっこす}らして、鼻の下を引擦^{ひっこす}つて、

「すると何だ。肥^{ふとつちよ}満のお三どんが、ぶつちよう面をしやあがつて、旦那様とか、先生とかお言いなさい、御近所へ聞えます、と吐^{ぬか}しただらうじゃねえか。

ええ、そんなに奉^{わつし}られたけりや三太夫でも抱えれば可い。口に税を出すくらいなら、憚^{はばか}んながら私^{わつし}あ酒も啖^{くら}わなけりや魚も売らねえ。お源ちゃんの前^{めえ}だけれども。おつとこうした処は、お尻の方だ。」

「そんなに、お邪魔なら退^どけますよ。」

お源が俎板を直して向直る。と面^{おもて}を合わせて、

「ははははは、今日^{こんち}あ、」

「何かい、それで腹を立つて行かないのかい。」

「そこはお前さんに免じて肝の虫を圧えつけた。翌日も廻ったがね、今度は言種がなお気に食わねえ。」

今日はもうお菜が出来たから要らないよサ。合点なるめえじゃねえか。私が商う魚だつて、品に因つちや好嫌えは当然だ。ものを見てよ、その上で欲しくなきや止すが可い。喰いたくもねえものを勿体ねえ、お附合いに買うにや当りやせん、食もたれの暖なんぞで、せせり箸をされた日にや、第一魚が可哀相だ。

こつちはお前、河岸で一番首を討取る氣組みで、佳いものを仕入れてよ、一ツおいしく食わせてやろうと、汗みずくで駈附けるんだ。醜女が情人を探しはしめえし、もう出来たよで断られちや、間尺に合うもんじゃねえ。ね、薦ちゃんの前だけれど、」

「今度は私が背後を向こうか。」

とお薦は、下に居る女中の上から、向うの棚へ手を伸ばして、摺鉢に伏せた目簀を取る。

「そらよ、こつちが旦の分。こりやお源坊のだ。奥様はあらが可い、煮るとも潮にするともして、天窓を嚙りの、目球をつるりだ。」

「私は天窓を噛るのかい。」

お薦は莞爾にっこりして、め組にその箆を持たせながら、指の尖で、涼しい鯛の目をちよいと当る。

「ワンワンに言うようだわ、何だねえ、失礼な。」

とお源は柄杓ひしゃくで、がたりと手桶ておけの底を汲くむ。

「田舎ものめ、河野の邸へ鞍替くらがえしろ、朝飯に牛ぎゆうはあっても、鯛てえの目を食った犬は昔から江戸にや無えんだ。」

「はい、はい、」

手桶ひつたを引立てて、お源は腰を切つて、出て、溝板どぶいたを下駄で鳴らす。

「あれ、邪険にお踏みでない。私の情人いろうが居るんだから。」

「情人がね。」

「へい、」

と言つたばかり、こっちは忙がしい顔色かおづきで、女中は聞棄てにして、井戸端へかたかた行く。

「溝みぞの中に、はてな。」

印半纏しるしばんてんの腰を落して、溝板を見当に指しながら、ひしやげた帽子をくるりと廻わして、

「変つてますね。」

「見せようか。」

「是非お目に懸りてえね。」

「お待ちよ、」

と目筈は流へ。お薦は立直つて腰障子へ手をかけたが、溝の上に背伸をして、今度は結構えて勿体らしく酸漿ほおずきをクウと鳴らすと、言合せたようにコロコロコロ。

「ね、可愛いだろう。」

カタカタカタ！

蛙だ、蛙だ。はははは、こいつア可い。なるほど薦ちゃんの情人かも知れねえ。」

「朧月夜の色なんだよ。」

得意らしく済ました顔は、柳に対して花やかである。

「畜生め、拜んでやれ。」

と好事に蹲込んで、溝板を取ろうとする、め組は手品の玉手箱の蓋を開ける手つ

きなり。

「お止しよ、遁^にげるから、」

と言う処へ、しとやかに、階^{はしご}子^{だん}段を下りる音。トタンに井戸端で、ざあと鳴ったは、柳の枝に風ならず、長閑^{のどか}に釣瓶^{つるべ}を覆^{かえ}したのである。

見知越

五

続いてドンドン粗^{ぞんざい}略^{りやく}に下りたのは、名を主税^{ちから}という、当家、早瀬の主人で、直ぐに玄関に声が聞える。

「失礼、河野さんに……また……お遊びに。さようなら。……」

格子戸の音がしたのは、客が外へ出たのである。その時、お薦の留めるのも聞かないで、溝^{どぶ}なる連^{つれ}弾^{びき}を見届けようと、やにわにその蓋を払ったため組は、蛙の形も認めない先に、

お蔭がすつと身を退いて、腰障子の蔭へ立隠れをしたので、ああ、落人でもないに気の毒だ、と思つて、客はどんな人間だろうと、格子から今出た処を透かして見る。とそこで一つ腰を屈めて、立直つた束髪は、前刻から風説のあつた、河野の母親と云う女性。

黒の紋羽二重の紋着羽織、ちと丈の長いのを襟を詰めた後姿。忤が学士だ先生だというのでも、大略知れた年紀は争われず、髪は薄いが、櫛にてらてらと艶が見えた。

背は高いが、小肥に肥つた肩のやや怒つたのは、妙齡には御難だけれども、この位な年配で、服装が可いと威が備わる。それに焦茶の肩掛をしたのは、今日あたりの陽気にはいささかお荷物だろうと思われるが、これも近頃は身騷の一つで、貴婦人方は、菖蒲が過ぎても遊ばさるる。

直ぐに御歩行かと思うと、まだそれから両手へ手袋を嵌めたが、念入りに片手ずつ手首へぐつと扱いた時、襦袢の裏の紅いのがチラリと翻る。

年紀のほどを心づもりに知つたため組は、そのちらちらを一目見ると、や、火の粉が飛んだように、ヘツと頸を窘めた処へ、

「まだ、花道かい？」

とお蔭が低声。

「附^{つけ}際^{ぎわ}々々、」

ともう一息め組の首を縮^{すく}める時、先方^{さき}は格子戸に立かけた蝙蝠傘^{こうもりがさ}を手に取って、またぞろ会釈がある。

「思^{だく}入れ沢^{さん}山だ。いよう！」

おつとその口を塞いだ。声はもとより聞えまいが、こなたに人の居るは知れたろう。振返^きつて、額の広い、鼻筋の通った顔で、屹^{きつ}と見越した、目が光って、そのまま悠々と路地を町へ。――勿論勝手口は通らぬのである。め組はつかつかと二足三足、

「おやおやおや、」

調子はずれな声を放って、手を拡げてぼうとなる。

「どうしたの。」

「可^{おか}訝^かしいぜ。」

と急に威勢よく引返^{ひっかえ}して、

「あれが、今のが、その、河野ッてえの母親^{おふくろ}かね、静岡だつて、故郷^{くに}あ、」

「ああ。」

「家は医師^{いしや}じゃねえかしらん。はてな。」

「どうした、め組。」

とむぞうきに台所へ現われた、二十七八のこぎつぱりしたのは主税である。

「へへへへへへ、」

満面に笑を含んだ、め組は蓮葉帽子の中から、夕映のような顔色。

「お早うござい。」

「何が早いものか。もう午飯だろう、何だ御馳走は、」

と覗込んで、

「ははあ、鯛だな。」

「鯛とおっしゃいよ、見ツともない。」

とお蔭が笑う。

「他の魚屋の商うのは鯛さ、め組のに限つちや鯛よ、なあ、めい公。」

「違えねえ。」

「だって、貴郎は柄にないわ、主公様は大人しく鯛魚とおっしゃるもんです、ねえ、

めのさん。」

「違えねえ。」

主税は色気のない大息ついて、

「何^{なん}にしろ、ああ腹が空いたぜ。」

「そうでしょうって、寝坊をするから、まだ朝御飯を食^{あが}らないもの。」

「違えねえ、確^{たしか}にアリヤ、」

と、め組は路地口へ伸上る。

六

「大分御執心のようなだが、どうした。」

と、め組のその素振に目を着けて、主税は空^{すきはら}腹だというのに。……

「後姿に惚れたのかい。おい、もう可^いい加減なお婆さんだぜ。」

「だって貴^{あなた}郎にやお婆さんでも、め組には似合^あいな年^{とし}紀ごろだわ。ねえ、ちよいと、」

「へへへ、違えねえ。」

「よく、（違えねえ。）を云う人さ。」

「だから、確^{たしか}だろと思うんでさ。」

と呟つぶやいて独ひとりで飲込み、仰向ようきやういて天秤棒を取りながら、

「旦那、」

「己おら御免だ。」と主税は懷手で一ツ肩ゆすを揺る。

「え、何を。」

「文でも届けてくれじゃないか。」

「御串戲ごしやうだん。いえさ、串戲は止して今のお客は直ぐに南町うちの家へ帰りそうな様子でしたかね。」

「むむ、ずツと帰ると言つたつけ。」

「難ありがて有え、」

額をびっしやり。

「後を慕つて、おおそうだ、と遣やれ。」

「行ゆくのかい、河野さんへ。」

「ちよつぴりね、」

「じゃ可いけれど。貴郎、」

と主税を見て莞爾にっこりして、

「めい公がね、また我儘わがままを云つて困つたんですよ。お邸風を吹かしたり、お惣菜並に扱うから、河野さんへはもう行かないツて。折角お頼まれなすったものを、貴郎が困るだろうと思つて、これから意見をしてやろうと思つた処だったのよ。」

「そうか。」

となぜか、主税は気の無い返事をする。

「御覧なさい。そうすると急にあの通り。ほんとうに氣が變るつちやありやしない。まるで猫の目ね。」

「違えねえ、猫の目の犬の子だ。どっこい忙しい、」

と荷を上げそうにするのを見て、

「待て、待て、」

「沢山よ。貴郎の分は三切あるわ。まだ昨日きのうのも残つてるじゃありませんか。めのさん、可いんだよ。この人にね、お前の盤台を覗かせると、皆欲みんなほしがるンだから……」

「これ、」

旦那様苦い顔で、

「端近こっで何の事たい、野良猫に扱いやあがる。」

「だつ……て、」

「め組も黙つて笑つてゐる事はない、何か言え、営業の妨害さまたげをする婦人おんなだ。」

「肯きかないよ、めの字、沢山なんだから、」

「まあ、お前、」

「いいえ、沢山、大事な所帯だわ。」

「驚おどろきますな。」

「私、もう障子を閉めてよ。」

「め組、この体ていだ。」

「へへへ、こいつばかりや犬も食わねえ、いや、四寸しずつ食ありまし。」

「おい、待てと云うに。」

「さつさとおいでよ、魚屋のようでもない。」

「いや、遣瀬やるせがねえ。」

と天秤棒てんぺんぼうを心しんにして、め組は一ツくると廻る。

「お菜かずのあとねだりをするんじや、ないと云うに。」

と笑いながらお蔭にらを睨にらんで、

「なあ、め組。」

「ええ、」

「これから河野へ行くんだろ。」

「三枚並で駈附けまさ。」

「それに就いてだ、ちよいと、ここに話が出来た。」

七

「その、河野へ行くに就いてだが、」

と主税は何か、言淀んで、

「何は、」

お蔭に目配せ、

「茶はないのか。」

「お茶ツて？ 有りますわ。ほほほほ、まあ、人に叱言こごとを云う癖に、貴郎あなたこそ端近で見ツともないじゃありませんか——ありますわ——さあ、あっちへいらつしやい。」

と上ろうとする台所に、主税が立塞がっているので、袖の端をちよいと突いて、

「さあ、」

め組は威勢よく、

「へい、跡は明晩……じゃねえ、翌^{あした}の朝だ。」

「待^{まち}なッてば、」

「可いよ、めのさん。」

「はて、どうしたら、」と首を振る。

「お前たちは、」

と主税は呆れた顔で呵^{から}々と笑つて、

「相応に気が利かないのに、早飲込だからこんがらがつて仕様がな。め組もまた、さんざ油を売った癖に、急にそわそわせずともだ。まあ、待て、己^{おれ}が話があると言えば。

そこでだ……お茶と申すは、冷たい……」

と口へつけて、指で飲む真似。

「と行^やる一件だ。」

「め組に……」

「沢山だ、沢山だ。私^{わっし}なら、」

と声ばかり沢山で、俄然^{がぜん}として蜂の腰、竜の口、させ、飲もうの構^{かまえ}になる。

「不可^{いけ}ません、もう飲んでるんだもの。この上^{あお}煽^{あお}らして御覽なさい。また過^{いつか}日のように、ちよいと盤台を預つとくんねえ、か何かで、」

お薦は半纏の袖を投げて、婀娜^{あだ}に酔ッぱらいを、拳固で見せて、

「それツきり、五日の間行方知れずになつちまう。」

「旦那、こうなると頂きてえね、人間は依怙^{いこじ}地なもんだ。」

「可いから、己が承知だから、」

「じゃ、め組に附合つて、これから遊びにでも何でもおいでなさい。お腹が空いたって私、知らないから。さあ、そこを退^どいて頂戴よ、通れやしないわね。」

「ああ、もしもし、」

主税は身を躲^{かわ}して通しながら、

「御立腹の処を重々恐縮でございますが、おついでに、手前にも一杯、同じく冷いのを、」
「知りませんよ。」

とつつと入る。

「旦那も、ゆすり方は素人じゃねえ。なかなか馴れてら、」

もう飲みかけたようなもので、腰障子から首を突込み、

「今度八丁堀の私の内へ遊びに来ておくんせえ。一番私がね、鼻々左衛門に酒を強

請る呼吸というのをお目にかけます。」

「女房が寄せつけやしまい、第一吃驚するだろう、己なんぞが飛込んだじゃ、山の手か

ら猪ぐらいに。所かわれば品かわるだ、なあ、め組。」

と下流へかけて板の間へ、主税は腰を掛け込んで、

「ところで、ちと申かねるが、今の河野の一件だ。」

「何です、旦那、」

と吃驚するほど真顔。

「お前さんや、奥様で、私に言い憎いつて事はありやしねえ、また私が承つて困るつて

事もねえじゃねえか。

鼻々を貸せとも言いなさりやしめえ、早い話が。何また御使い道がありや御用立て申し

ます。」

「打附けた話がこうだ。南町はちと君には遠廻りの処を、是非廻つて貰いたいと云うもん

だから、家内^{うち}で口を利用して行くようになったんだから、ここがちと言ひ憎いのだが、今云つた、それ、膚^{はだ}合^{あひ}の合わない処だ。

今来た、あの母^{おふくろ}親も、何のかのつて云つてゐるからな、もう彼家^{あそこ}へは行かない方が可いぜ。心持を悪くしてくれちや困るよ。また何だ、その内に一杯^{おほ}奢^そるから。」

とまめやかに言う。

八

皆まで聞かず、め組は力んで、

「誰^{とこ}が、誰^{わつし}があんな許^{とこ}へ、私^{わつし}ア今も、だからそう云つてたんで、頼まれたツて行きやしねえ。」

「ところが、また何か氣が變つて、三枚並で駈附けるなぞと云うからよ。」

「そりや、何でさ、ええ、ちよいとその氣になりやなツたがね、商いになんか行くもんか。あの母^{おふくろ}親ツて奴^{やつ}を冷かしに出かける肝^{はち}でさ。」

「そういう料^{りようけん}簡だから、お前、南町御構いになるんだわ。」

と盆の上に茶吞茶碗……不心服な二人分……焼海苔にはりはりは心意気ながら、極めて
 恭しからず押附おつけものに粗雑ぞんざいに持つて、お蔭が台所へ顕あらわれて、

「お客様は、め組の事を、何か文句を言つたんですか。」

「文句はこつちにあるんだけれど、言分は先方さきにあつたのよ。」
 と盆を受取つて押出して、

「さあ、茶を一ツ飲みたまえ。時に、お茶菓子にも言分があるね、もうちつとどうか腹に
 溜りそうなものはないかい。」

「貴郎のように意地汚きたなではありません。め組は何にも食べやしないのよ。」

「食べやしねえばかりじゃありませんや、時々、このせいで食べられなくなる騒ぎだ。へ
 へへ、」

と帽子を上へ拔上げると、元氣に額の皺しわを伸ばして、がぶりと一口。鵲せきれいの尾のごと
 く、左の人指ひとさしをひよいと匆はね、ぐいと首を据えて、ペロペロと舌舐したなめずる。

主税はむしやりと海苔を頬張り、

「め組は可いが己の方さ、何とももつて大空腹の所だから。」

「ですから御飯になさいなね、種々いろんな事を言て、お握飯むすびを拵こしらえろつて言いかねやしないん

だわ。」

「実は……」と莞爾々々、

「その気なきにしもあらずだよ。」

「可い加減になさいまし、め組は商売がありますよ。疾くお話しなさいなね。」

「そう、そう。いや、可い気なもんです。」

と糸底を一つ撫でて、

「その言分というのは、こうだ。どうも、あの魚屋も可いが、門の外から（おう）と怒鳴り込んで、（先公居るか。）は困る。この間も御隠居をつかまえて、こいつあ婆さんに食わしてやれば、いかにもあんまりです。内じやがえんに知己があるようで、真に近所へ極が悪い。それに、聞けば芸者屋待合なんぞへ、主に出入りをするんだそうだから、娘たちのためにもならず、第一家庭の乱れです。また風説によると、あの、魚屋の出入をする家は、どこでも工面が悪いって事だから、かたがた折角、お世話を願ったそうだけれど、宜しいように、貴下から……と先ずざつとこうよ。」

め組より、お蔭が呆れた顔をして、

「わざわざその断りに来なすつたの。」

「そうばかりじゃなかったが、まあ、それも一ツはあった。」

「仰山だわねえ。」

「ちと仰山なようだけれど、お邸つき合いのお勝手口へ、この男が飛込んだんじや、小火^{ほや}ぐらいには吃驚^{びっくり}したろう。馴れない内は時々火事かと思うような声で怒鳴り込むからな。こりや世話をしたのが無理だった。め組怒つちや不可^{いけな}い。」

「分つた……」

と唐突^{だしぬけ}に膝を叩いて、

「旦那、てつきりそうだ、だから、私ア違えねえツて云つたんだ。彼奴^{あいつ}、兇状持だ。」

「ええ——」

何としたか、主税、茶碗酒をふらりと持った手が、キッチンと極^{きま}る。

「兇状持え？」とお薦も袖を抱いたのである。

め組は、どこか当なしに睨^{にら}むように目を据えて、

「それを、私ア^{わっし}、私アそれをね、ウイ、ちゃんと知ってるんだ。知ってるもんだから、だもんだから。……」

なんだろう。」

「いずれ、何か隠喰^{かくしぐい}さ、盗人^{どろぼう}上戸^{じょうご}なら味方同士だ。」

「へへ、その通り、隠喰いにや隠喰いだが、喰ったものがね、」

「何だ、」

「馬でさ。」

「馬だと……」

「旅俳優^{やくしや}かい。」

「いんや、馬丁^{べっとう}……貞造^{ていそう}つて……馬丁でね。私が静岡^{わっし}に落ちてた時分の飲友達、旦那が

戦争に行った留守に、ちよろりと嘗^なめたが、病着^{やみつ}で、嘔^{おう}の出るほど食ったんだ。」

主税は思わず乗出して、酒もあつたが元気よく、

「ほんとうか、め組、ほんとうかい。」

と事を好んだ聞きようをする。

「嘘よ、貴郎、あの方たちが、そんなことがあつて可いもんですか、めの字、滅多なことは云うもんじゃありません、他^{ほか}の事と違うよ、お前、」

「あれ、串戯^{じょうだん}じゃねえ。これが嘘なら、私の鯛^{わっし}は場違^{ばちげえ}だ。ええ、旦那、河野の名家

は静岡で、医者だろうね。そら、御覧じろ、河野ツてえから気がつかなかった。門に大なおおき榎えのきがあつて、榎邸やしきと云や、お前めえ、興津江尻おきつまで聞えたもんだね。

今見りや、ここを出た客てえのは、榎邸えのきの奥様おくさんで、その馬丁いろおんなの情婦だ。

だから私ア、冷かしに行つてやろうと思つたんだ。嘘にもほんとうにも、児こがあらあ、児こが。ああ、」

また一口がぶりと遣やつて、はりはりを噛かんだ齒をすすつて、

「ねえ、大勢小児こどもがきましょう。」

「南町の学士先生にんもその一人、何でも兄弟は大勢ある。八九人かも知れないよ、いや、ほんとうなら驚いたな。」

「おお、待ちねえ、その先生は幾歳いくつだね。」

「六か、七だ。」

「二十とだね、するとその上か、それとも下かね。どっち道その人じゃねえ。何でも馬丁はたちの因果のたねは婦人おんななんだ。いづれ縁附いちやいるだろうが、これほど確たしかな事はねえ。私わつしア特別で心得てるんで、誰も知っちゃいますめえよ。知らぬは亭主ばかりなりじやねえんだから、御存じは魚屋惣助そうすけ（本名）ばかりなりだ。」

「はははは、下郎は口のさがねえもんだ。」

ぐいと唇を撫でた手で、ポカリと茶碗の蓋ふたをした。

「危え、危え、冷かしに行くどころじゃねえ。鰻汁てつぽうとこいつだけは、命がけでも留やめら

れねえんだから、あの人の酌でも頂き兼ねねえ。軍医の奥さんにお手のもので、毒薬いっぶく装もられちゃ大変だ。だが、何だ、旦那も知らねえ顔でいておくんねえ、とかく町内に事なかれだからね。」

「ああ、お前ももうおいででない。」

「行くもんか、行けつたつてお断りだ。お断り、へへへ、お断り、」

と茶碗を捻ひねくる。

「厭いやな人だよ。仕様がなね、さあ、茶碗をお出しなね。」

「おお、」

と何か考え込んだ、主税が急に顔を上げて、

「もうちつと精くわしくその話を聞かせないか。」

井戸端から、婦人おんなの風たこが切れて来たかと、お源が一字に飛込んだ。

「旦那様、あの、何が、あの、あのあの、」

矢車草

十

お源のその慌^{あわただ}しさ、駈^かけて来た呼吸^{いき}づかいと、早口^{せきこみ}の急^{まっか}込^みに真^ま赤^{あか}になりながら、直^なぐに台所から居間^{つつき}を突^つ切^きつて、取次^{たすき}ぎに出る手廻^{はだ}しの、襷^{たすき}を外すのが膚^みを脱^だぐような身悶^{みもだ}えで、

「真砂^{まざごちよう}町の、」

「や、先生^{せんせい}か。」

真砂町と聞いただけで、主税^{まっすぐ}は素直^{すっすぐ}に突立^{つった}ち上る。お蔭^{かげ}はさそくに身を躲^{かわ}して、ひらりと壁^{くっつ}に附^つ着^くいた。

「いえ、お嬢^{ぢやう}様でございます。」

「嬢^{ぢやう}的^{てい}、お妙^{たえ}さんか。」

と謂うと齊しく、まだ酒のある茶碗を置いた塗盆を、飛上る足で蹴覆して、羽織の紐を引拵んで、横飛びに台所を消えようとして、

「赤いか、」

お蔭を見向いて面を撫でると、涼しい瞳で、それ見たかと云う目色で、

「誰が見ても……」と、ぐつと落着く。

「弱った。」と頭を压える。

「朝湯々々、」と莞爾笑う。

「軍師なるかな、諸葛孔明。」といい棄てに、ばたばたと出て行つたは、玄関に迎えるのである。

ふらふらとした目を据えて、まだ未練にも茶碗を放さなかった、め組の惣助、満面の笑みに崩れた、とろんこの相格で、

「いよう、天人。」と向うを覗く。

「不可いよ、」

と強く云う、お蔭の聲が屹としたので、きよとんとして立つ処を、横合からお源の手が、ちよろりとその執心の茶碗を搔攪つて、

「失礼だわ。」

と極めつける。天下大變、吃驚して、黙って天秤の下へ潜ると、ひよいと盤台の真中へ。向うの板塀に肩を寄せたは、遠くから路を開く心得、するするとこれも出て行く。

もう、玄關の、格子が開きそうなものだと思うと、音もしなければ、声もせぬので、お薦が、

「御覧、」と目配せする。

覗くは失礼と控えたのが、遁腰で水口から目ばかり出したと思うと、反返るように引込んで、

「大變でございます。お台所口へいらつしやいます。」

「ええ、こちらへ、」

と裾を捌くと、何と思つたか空を望み、破風から出そうにきりりと手繰つて、引窓を力タリと閉めた。

「あれ、奥様。」

「お前、そのお盆なんぞ、早くよ。」と釣鐘にでも隠れたそうに、肩から居間へ翻然と飛込む。

驚いたのはお源坊、ぼうとなつて、ただくるくると働く目に、一目輝くと見たばかりで、意気地なくぺたぺたと坐つて、偏ひとえに恐入つてお辞儀をする。

「御免なさいよ。」

と優しい声やさし、はつと花降る留南奇とめきの薫に、お源は恍惚うつとりとして顔を上げると、帯も、袂たもとも、衣紋えもんも、扱しごき帯も、花いろいろの立姿。まあ！紫と、水浅黄と、白と紅咲くれないき重なつた、矢車草を片袖に、月夜に孔雀くじゃくを見ような。

め組が刎返はねかえした流汁どぶだまりの溝溜どぶだまりもこれがために水澄んで、霞をかけたる蒼空あおぞらが、底美しく映るばかり。先祖が乙姫に恋歌して、かかる処に流された、蛙の児よ、いでや、柳の袂に似た、君の袖すがに縫ぬいれかし。

妙子は、有名な独逸ドイツ文学者、なにがし大学の教授、文学士酒井俊蔵の愛娘である。

父とうさん様は、この家の主人、早瀬主税には、先生で大恩人、且つ御主おしゆうに当る。さればこそ、嬢様さんと聞くと齊ひとしく、朝から台所で冷酒ひやざけのぐい煽あおり、魚屋と茶碗を合わせた、その拳動魔ふるまいのごときが、立たちどころ処に影を潜めた。

まだそれよりも内証ないしよなのは、引窓を閉めたため、勝手勝手の暗い……その……誰だか。

十一

妙子の手は、矢車の花の色に際立つて、温しなやか柔な葉の中に、枝をちよいと持替えながら、

「こんなものを持っていますから、こちらから、」

とまごつくお源に気の毒そう。ふつくりと優しく微笑ほほえみ、

「お邪魔をしてね。」

「どういたしました、もう台なしでございまして、」と雑巾を引ひ掴つかんで、

「あれ、お召ものが、」

と云う内に、吾妻あずまげ下駄が可愛く並んで、白足袋薄く、藤色の裾を捌いて、濃いお納戸なんど地に、浅黄と赤で、撫子なでしこと水の縹しゆちん珍の帯腰、向う屈かがみに水瓶みずがめへ、花はな堇すみれの簪かんざしと、リボンの色が、蝶々の翼薄黄色に、ちらちらと先ず映って、矢車を挿込むと、五彩の露は一ひ入である。

「ここに置かして頂戴よ。まあ、お酒の香におがしてねえ、」と手を放すと、揺々ゆらゆらとなる矢車草より、薫ばかりも玉に染む、顔醉かんばいて桃に似たり。

「御覧なさい、矢車が酔ってふらふらするわ。」と罪もなく莞爾にっこりする。

お源はどきまぎ、

「ええ、酒屋の小僧が、ぞんざいだものでございますから。」

「ちよいと、溢こぼしたの。やっぱり悪いたずら戯な小僧さん？ 犬にばっかり弄からっているんですよ、私とこん許おんなじのも 同 一よ。」

一 廉いっかど 社会観のような口ぶり、説くがごとく言いながら、上に上って、片手にそれまで持っていた、紫の風呂敷包、真四角なのを差置いた。

「お裾が汚れます、お嬢様。」

「いいえ、可いいのよ、」

と褻つまは上げて、袖は板の間に敷くのであった。

「あの、お惣菜になすって下さい。」

「どうも恐れ入ります。」

「旨おいくはありませんよ、どうせ、お手製なんですから。」

少し途切れて、

「お内ですか。」

「はい、」

「主税さんは……あの旦那様は、」

と言いかけて、急に気が着いたか、

「まあ、どうしたの、暗いのねえ。」

成程、そこまでは水口の明が^{あかり}取れたが、奥へ行く道は暗かった。

「も、仕様がなかったのでございますよ、ほんとうに、あら、どうしましょう。」

とお源は飛上つて、慌てて引窓を、くるり、かたり。颯と明るく虹の幻、娘の肩から矢車草に。

その時台所へ落着いて顔を出した、主人の主税と、妙子は面^{おもて}を見合わせた。

「驚^{おど}かして上げましょうと思つたんだけれども。」と、笑つて串^{じょうだん}戯^{あそび}を言いながら、瓶^{かめ}なる花と対^つ丈^{たい}に、そこに娘が跪^つ居るので、渠^{かれ}は謹んで板に片手を支いたのである。

「驚かしちゃ、私厭^{いや}ですよ。」

「じゃ、なぜそんな水口からなんぞお入んなさいます。ちゃんと玄関へお出迎いをしているじゃありませんか。」

「それでもね、」

と愛々しく打傾き、

「お惣菜なんか持込むのに、お玄関からじや大業ですもの。それに、あの、花にも水を遣りたかったの。」

「綺麗ですな、まあ、お源、どうだ、綺麗じゃないか。」

「ほんとうにお綺麗でございますこと。」と、これは妙子に見惚れている。

「同じく頂戴が出来ますんで？」

「どうしようかしら。お茶を食^{あが}るんなら可^{いい}けれど、お酒を飲^{のむ}んじや、可哀相だわ。」

「え、酒なんぞ。」

「厭な、おほほ、主税さん、飲んでるのね。」

「はは、はは、さ、まあ、二階へ。」

と遁出^{にげだ}すような。後へするする衣^{きぬ}の音。階子段^{はしごだん}の下あたりで、主税が思出したように、

「成程、今日は日曜ですな。」

「どうせ、そうよ、（日曜）が遊びに来たのよ。」

二階の六畳の書齋へ入ると、机の向うへ引附けるは失礼らしいと思ったそうで、火鉢を座中へ持つて出て、床の間の前に坐り蒲団ぶとん。

「どうぞ、お敷きなさいまし。」

主税は更あらたまつて、慇懃いんぎんに手を支ついて、

「まあ、よくいらつしやいました。」

「はい、」とばかり。長年内に居た書生の事、随分、我儘わがままも言つたり、甘えたり、勉強の邪魔もしたり、悪口も言つたり、喧嘩けんかもしたり。帽子と花簪の中であつた。が、さてこゝうなると、心は同一おなじでも兵子帯へこおびと扱しづ帯きほど隔へてが出来る。主税もその扱しづにすれば、お嬢お嬢さんも晴がましく、顔の色とおなじような、毛巾ハンケチを便たよりにして、姿と一緒にひらひらと動かすと、畳に陽炎かげろうが燃えるようなり。

「御無沙汰を致しまして済みません。奥様おくさんもお変りがございまして、結構でございませす。先生は相変らず……飲酒めしあがりますか。」

「誰かたれ、と同一おんなじように……やつぱり……」と莞爾にっこり。落着かない坐りようをしているから、火鉢の角へ、力を入れて手を掛けながら、床の掛物に目を反そらす。

主税は額に手を当てて、

「いや、恐縮。ですが今日のは、こりや逆上のぼせますんですよ。前刻朝湯さつきに参りました。」

「父様とうさんもね、やつぱり朝湯に酔うんですよ。不思議だわね。」

主税は胸を据えた体ていに、両膝にぴたりと手を置き、

「平に、奥様おくさんには御内分。貴女あなたまた、早瀬が朝湯に酔っていたなぞと、お話をなすつてはいけませんよ。」

「ほんとうに貴郎あなたの半分でも、父様が母様の言うことを肯きくと可いんだけど、学校でも皆みんなが評判をするんですもの、人が悪いのはね、私の事を（お酌さん。）なんて冷評ひやかすわ。」

「結構じゃありませんか。」

「厭だわ、私は。」

「だって、貴女、先生がお嬢さんのお酌で快く御酒を召食めしあれば、それに越した事はありません。後いまにその筋から御褒美ごほうびが出ます。養老の滝でも何でも、昔から孝行な人物の親は、大概酒を飲みますものです。貴女を（お酌さん。）なぞと云う奴は、親のために焼芋を調え、牡丹餅おはぎを買い……お茶番の孝女だ。」

とおおいくすぐと大に擦おって笑うと、妙子は怨めしそうな目で、可愛らしく見たばかり。

「私は、もう帰ります。」

「御串戲べいしやうだんをおつしやつては不可ません。これからその焼芋やきいもだの、牡丹餅おはぎだの。」

「ええ、私はお茶番の孝女ですから。」

「まあ、御褒美を差上げましょう。」

と主税が引寄せる茶道具の、そこらを視みめて、

「お客様があつたのね。お邪魔をしたのじやありませんか。」

「いいえ、もう帰った後です。」

「厭いやな人ね？」

と唐突だしぬけに澄すまして云う。

「見たんですか。」

「見やしませんけれど、御覧なさいな。お茶台に茶碗ちawanが伏ふつっているじやありませんか、お

茶台あっぱに茶碗を伏せる人は、貴下嫌きらいだもの、父様も。」

「天晴あっぱれ御鑑定、本阿弥ほんあみでいらつしやる。」と急須きびしよ子をあける。

「誰方どなたなの？」

「御存じのない者です。河野と云う私の友達……来ていたのはその母親ですよ。」

「河野ね？ 主税さん。」と妙子はふつくりした前髪で打傾き、

「学士の方じゃなくって、」

「知っていらつしやるか。」と茶筒にかけた手を留めた。

「その母様おつかさんと云うのは、四十余りの、あの、若造りで、ちよいとお化粧なんぞして、
細面ほそおもての、鼻筋の通った、何だか権式の高い、違つて？」

「まったく。どうして貴女、」

「私の学校へ、参観に。」

新学士

十三

「昨日は母様きのう かあさんが来て御厄介ごえっかいでした。」

と、今夜主税の机わきの際に、河野英吉えいきちが、まだ洋服の膝も崩さぬ前さきから、

「君、困つたろう、母様は僕と違って、威儀堂々という風で厳肅だから、ははは、」

と肩を揺ゆつて、無邪氣と云えば無邪氣、余り底の無き過ぎるような笑方。文学士と肩書の名刺と共に、新あたいだけに美しい若々しい髭ひげを押揉おしんだ。ちと目立つばかり口が大おおいの、似合あわず声の優しい男で。氣焰きえんを吐くのが愚痴おかしのように聞きなされる事がある。もつとも、何をするにも、福、徳とだけ襟を数えれば済む身分。貧乏は知らないと言つても可いいから、愚痴になるわけではないが、自分の親を、その年とし紀で、友達の前で、呼ぶに母様をもつてするのでも大略解あらかたる。酒に酔わずにアルコオルに中毒あたるような人物で。

年とし紀は二十七。従五位勲三等、前さきの軍医監、同姓英臣ひでおみの長男、七人の同きようだい胞うちの中に英吉ばかりが男子で、姉が一人、妹が五人、その中縁附いたのが三人で。姉は静岡の本宅に、さる医学士を婿むすめにして、現に病院を開いている。

南町の邸おほあは、祖母さんが監督に附いて、英吉が主人あるじで、三人の妹が、それぞれ学校に通っている、すでに縁組みした令嬢たちも、皆そこから通学した。別家のようにで且つ質問所、家嚴はこれに桐楊塾とうようと題したのである。漢詩たしなみの嗜あそみがある軍医だから、何等か桐楊の出処しよがあらう、但しその義審つまびらかならず。

英吉に問うと、素湯さゆを飲むような事を云う。枝も栄えて、葉も繁ると云うのだろう、松柏も古いから、そこで桐楊だと。

説を為すものあり、曰く、桐楊の桐は男児に較べ、楊は令嬢たちに擬えたのであろう。

漢皇 重色思傾国

いろをおもんじてけいこくをおもう

……楊家女有、と同一字だ。

ようかにじよあり おんなじ 道理こそ皆美人であると、

それあるいは然らむ。が男の方は、桐に鳳凰、とばかりで出処が怪しく、花骨牌から出たようであるから、遂にどちらも信にはならぬ。

休憩、

さておき 南町の桐楊塾は、監督が祖母さんで、同窓が嬢たちで、更に憚る処が無いから、

天下泰平、家内安全、鳳凰は舞い次第、英吉は遊び放題。在学中も、雨桐はじめ 烏金

からすがね

の絶倍で、しばしばいがんに及んだのみか、卒業も二年ばかり後れたけれども、首尾よく学位を得たと聞いて、親たちは先ず占めた、びきで、あおたんの掴みだと思うと、手八の時直しで夜泊の、昼流連。祖母さんの命を承けて、妹連から注進櫛の歯を挽くがごとし。で、意見かたがたしかるべき嫁もあらばの気構えで、この度母親が上京したので、妙子が通う女学校を参観したと云うにつけても、意のある処が解せられる。

「どうだい、君、窮屈な思いをしたらう。」

親が参つて、さぞ御迷惑、と悪気は無い挨拶も、母様で、威儀で、厳肅で、窮屈な思いを、と云うから、何と豪いか、恐入つたろう、と極めつけるがごとくに聞える。

例の調子と知っているから、主税は別に気にも留めず、勿論、恐入る必要も無いので、

「姑に持とうと云うんじやなし、ちつとも窮屈な事はありません。」

机の前に鉄拐胡坐てつかあぐらで、悠然と煙草を輪に吹く。

「しかし、君、その自おのずから、何だろう。」

とその何だか、火箸で灰を引搔ひつかいて、

「僕は窮屈で困る。母様がああだから、自から襟を正すと云ったような工合でね。……

直じきの妹なんざ、随分脱兎だつとのごとしだけれど、母様の前じやほとんど処女だね。」

と髻ひねを捻ひねる。

十四

「で、何かね、母様かあさんは、」

と主税は笑いながら、わざと同おんなじ一いっように母様と云つて、煙管きせるを敲たたき、

「しばらく御滞在なんですかい。」

「一月ぐらい居るかも知れない、ああ、」と火鉢に凭掛よりかかる。

「じゃ当分謹慎だね。今夜なぞも、これから真直まっすぐにお帰りだろう、どこへも廻りやしま

すまいな。」

「うふふ、考えてるんだ。」とまた灰に棒を引く。

「相変らず辛抱が出来ないか。」

「うむ、何、そうでもない。母様が可愛がつてくれるから、来ている間は内も愉快だよ。

賑じやあるし、料理が上手だからお菜も旨いし、君、昨夜は妹たちと一所に西洋料理を奢

つて貰った、僕は七皿喰った。ははは、」

と火箸をポンと灰に投て、仰向いて、頬杖ついて、片足を鳶になる。

「御馳走と云えば内へ来るめ組だが、」

皆まで聞かず、英吉は突放したように、

「ありや君、もう来なくツても可いよ。余り失礼な奴だと、母様が大変感情を害したからね、君から断つてくれたまえ。」

と真面目で云つて、衣兜から手巾をそそくさ引張出し、口を拭いて、

「どうせ東京の魚だもの、誰のを買ったつて新鮮いのは無い。たまに盤台の中で刎ねて
ると思や、蛆で蠹くか、そうでなければ比目魚の下に、手品の鰻が泳いでるんだと、母様
がそう云つたつけ。」

め組が聞いたら、立たちどころ処に汝の一命覚束おぼつかない、事を云って、けろりとして、

「静岡は口の奢った、旨いものを食う処さ。汽車の弁当でも試みたまえ、東海道一番だよ。」
主税はどこまでも髯のある坊ちゃんにして、逆らわない気で、

「いや、何か、手前でもで、め組のものを召食めしあがって、大層御意に叶ったから、是非寄越してくれと誰かが仰有おっしゃるもんだから取あえず差立てたんだ。御家風を存じないでもなかったけれども、承知の上で、君がたつてと云ったから、」

「僕は構わん。僕は構わんが、あの調子だもの、祖母おばあさんや妹たちはもとよりだ。故郷くにから連れて来ている下女さえ吃驚びつくりしたよ。母様は、僕を呼びつけて談じたです。あんなものに朋輩呼ばわりをされるような悪い事をしたか。そこいらの芸妓げいしやにや、魚屋だの、蒲か銚屋まぼこの職人、蕎麦屋そばの出前持の客が有ると云うから、お前、どこぞで一座でもおしだらう、とね、叱られたです。」

僕は何、あれは通りもんです。早瀬の許とこへ行つても、同一く、今日おなじは旨えものを食わせやろう。居るか、と云った調子です、と云ったら、母様が云うにや、当あたりまえ前だ、早瀬じゃ、細君……」

と云いかけて、ぐつと支つかえたが、ニヤリとして、

「君、僕は饒舌^{しゃべ}りやしないよ。僕は決して饒舌らんさ。秘密で居ることを知ってるから、君の不利益になるような事は云わないがね、妹たちが知ってるんだ。どこかで聞いて来てたもんだから、ついね、」

と気の毒そう。

「まあ、可い、そんな事は構わないが、僕と懇意^{こんい}にしてくれるんなら、もうちつと君、遊^あ蕩^{そび}を控えて貰いたいね。

昨日^{きのう}も君の母様が来て、つくづく若様の不始末を愚痴^{ぐち}るのが、何だか僕が取巻きでもして、わつと浮かせるようじゃないか。

高利^{アイス}を世話して、口銭を取る。酒を飲ませてお流頂戴^{ながれ}。切々^{せつせつ}内へ呼び出しちや、花骨^{はな}牌^{ふだ}でも撒^まきそうに思ってるんだ。何の事はない、美少年録^{めいせうろく}のソレ何だっけ、安保箭五郎^{あほのやこうなほ}直行^{ゆき}さ。甚^つしきは美人局^{つもとせ}でも遣^はりかねないほど軽蔑^{けいべつ}していら。母様の口ぶり^{くち}が、」

とややその調子が強くなつたが、急に事も無げな串戯^{じやうだんぐち}口、

「ええ、隊長、ちと謹んでくれないか。」

「母様の来ている内は謹慎さ。」

と灰を搔きまわして、

「その代り、西洋料理七皿だ。」と火箸をバタリ。

十五

「じゃあ色気より食気の方だ、何だか自棄やけに食うようじゃないか。しかし、まあそれで済みや結構さ。」

「済みやしないよ、七皿のあとが、一銚子ひとちょうし、玉子に海苔のりと来て、おひけとなると可いんだけど、やつぱり一人で寝るんだから、大きに足が突張つっぱるです。それに母様が来たから、ちつとは小遣があるし、二三時間駈出して行つて来ようかと思う。どうだろう、君、迷惑をするだろうか。」

と甘えるような身体からだつき、座蒲団にぐったりして、横合から覗のぞいて云う。

「何が迷惑さ。君の身体で、御自分お出かけなさるに、ちつとも迷惑な事はない。迷惑な事はないが……」

「いや、ところが今夜は、君の内へ来たことを、母様が知ってるからね。今のような話じや、また君が引張出したように、母様に思われようかと、心配をするだろうと云うんだ。」

「お疑いなさるは御勝手さ。^{しやく}癪に障ればったって、恐い事、何あるものか、君の母親が何だ？」

と云いかけて、語気をかえ、

「そう云つちまえば、実も蓋^{ふた}もない。痛くない腹を探られるのは、僕だつて厭^{いや}だ。それにしても早瀬へ遊びに行くと言ふ君に、よく故障を入れなかったね。」

「うむ、そりやあれです、君に逢わない内は疑^{うたぐ}つていないでもなかったがね、」

あえて臆^{おく}面^{めん}は無い容子^{ようす}で、

「昨日^{きのう}逢つてから、そうした人じゃないようだ、と領^{うなず}いていた。母様はね、君、目が高いんだ、いわゆる士を知る明ありだよ。」

「じゃ、何か、士を知る明があつて、それで、何か、そうした人じゃないようだ、（ようだ。）とまだ疑があるのか。」

「だつてただ一面識^{たひつきあ}だものね、三四度交際^{たひつきあ}つて見たまえ。ちゃんと分るよ、五度とは言わない。」

「何も母様に交際うには当らんじやないか。せめて年増でもあればだが、もう婆さまだ。」

と横を向いて、微笑^{ほほえ}んで、机の上の本を見た。何の書だか酒井蔵書の印が見える。真砂町から借用のものであろう。

英吉は、火鉢越に覗きながら、その段は見るでもなく、

「年^{とし}紀は取つてゐるけれど、まだ見た処は若いよ。君、婦人会なんぞじゃ、後姿を時々姉と間違えられるさ。

で、何だ、そうやって人を見る明が有るもんだから、婿の選択は残らず母様に任せてあるんだ。取当てるよ。君、内の姉の婿にした医学士なんぞ大当りだ。病院の立派になった事を見たまえな。」

「僕なんぞ御選択に預れまいか。」

と気を、その書物に取られたか、木に竹を接^ついだのような事を云うと、もつての外真面目^{まじめ}に受けて、

「君か、君は何だ、学位は持つちやおらんけれど、独逸^{ドイツ}のいけるのは僕が知ってるからね。母様の信用さえ得てくれりや、何だ。ええ君、妹たちには、もとより評判が可いんだからね、色男、ははは、」

と他愛なく身体中^{からだ}で笑い、

「だって、どうする。階下^{した}に居るのを、」

背後^{うしろ}を見返り、

「湯かい。見えなかったようだっけ。」

主税は堪えず失笑^{ふきだ}したが、向直^{こち}つて話に乗るように、

「まあ、可い加減にして、疾^{はや}く一人貰^{そび}つちやどうだ。人の事より御自分が。そうすりや遊^あ蕩^{そび}も留^やみます。安保^{あんぽ}五郎悪い事は言^いわないが、どうだ。」

「むむ、その事だがね。」

とぐつたりしていた胸を起して、また手巾で口を拭いて、なぜか、縞^{しま}のズボンを揃^{そろ}えて、
ちやんと畏^{かしこ}まつて、

「実はその事なんだ。」

「何がその事だ。」

「やっぱりその事だ。」

「いずれその事だろう。」

「ええ、知^しつてゐるのか。」

「ちつとも知らない、」

と煙管きせるを取つて、

「いや、真面目に真面目に、何か、心当りでも出来たかね。」

縁談

十六

時に河野がその事と言え、いづれ婦おんなに違ちがひないが、早瀬はいつもこの人から、その収し紅拾紫ゆうこうしゅうしう、鶯うを鳴かしたり、蝶もてあそを弄もてあそんだりの件について、いや、ああ云つたがこれは何と、こう申したがそれは如何いかに。無心をされたがどうしたものか、なるべくは断りたい、断つたら嫌われようか、嫌われては甚だ不まず好ずい。一スウィート体恋スウィートでありながら金かね子をくれるは変な工合だ、妙だよ。その意志のある処を知るに苦くるしむ、などと、※紅をさして、蚯みみず蚓ずまでも突附つけて、意見？を問われるには恐れている。

誇るに西洋料理七皿をもつてする、式かたのごとき若様であるから、冷評ひやかせば真に受ける、

打棄^{うつちや}つて置けば梢^{しや}げる、はぐらかしても乗出す。勢い可い加減にでも返事をすれば、すなわち期せずして遊蕩^{あそび}の顧問になる。尠^{すくな}からず悩まされて、自分にお薦^{よわみ}と云う弱点があるだけ、人知れず冷汗^{なせ}が習^{ならい}であつたから、その事ならもう聞くまい、と手強く念を入れると、今夜はズボンの膝^かを畏^{かしこ}まつただけ大真面目。もっとも馴染^{なじみ}の相談も串^{じやうだん}戲^ぎではないのだけれども。特に更^{あらた}まつて、ついにない事、もじもじして、

「実はね、母様も云つたんだ、君に相談をして見ろと……」

「縁談だね、真面目な。」

珍らしそうに顔を見て、

「母様から御声懸りで、僕に相談と云う縁談の口は、当時心当りが無いが。ああ、」

と軽く膝を叩いた。

「隣家^{となり}のかい。むむ、あれは別嬪^{べっぴん}だ。ちよいと高慢じゃあるが、そのかわり学校はなかなか出来るそうだ。」

英吉は小児^{こども}のように頭^{かぶり}を振つて、

「ううむ、違^{ちが}うよ。」

「違^{ちが}う。じゃ誰^{たれ}だい。」

と落着いて尋ねると、慌てて衣兜へ手を突込み、肩を高うして、一ツ揺つて、

「真砂町の、」

「真砂町!!」

と聞くや否や、鸚鵡返しに力が入った。床の間にしつとりと露を被いだ矢車の花は、燈の明を余所に、暖か過ぎて障子を透した、富士見町あたりの大空の星の光を宿して、美しく活っている。

見よ、河野が座を、斜に避けた処には、昨日の袖の香を留めた、友染の花も、綾の霞も、畳の上を消えないのである。

真砂町、と聞返すと齊しく、屹とその座に目を注いだ、驚破と謂わば身をもって、影をも守らん意気組であつた。

英吉はまた火箸を突支棒のようにして、押立尻をしながら、火鉢の上へ乗掛つて、
「あの、酒井ね、君の先生の。あすこに娘があるんだね。」

「あるさ、」と云つたが、余り取つても着けないように、我ながら冷かに聞えたから、
「知らなかったかな、君は。随分その方へかけちや、脱落はあるまいに。」

「洋燈台下暗しで、（と大に洒落れて、）さつぱり気が付かなかった。君ン許へもちよい

ちよい遊びに来るんだろう。」

「お成りがあるさ。僕には御主人だ。」

「じゃ一度ぐらい逢いそうなものだった。」

何か残惜く、かごとがましく、不平そうに謂ったのが、なぜ見せなかった、と詰るよう
に聞えたので、早瀬は石を突流すごとく、

「縁が無かつたんだろうよ。」

「ところがあります、ははは、」と、ここでまた相好とともに足を崩して、ぐたりと横坐
りになって、

「思うに逢わずして思わざるに……じゃない。向うも来れば僕も来るのに、此家ここで逢いそ
うなものだったが、そうでなくて君、学校で見たよ。ああ、あの人の行く学校で、妙子
さんの行く学校で。」

と、何だか話しに乘らないから、畳かけて云った。妙子、と早や名のこの男に知られた
のを、早瀬はその人のために恥辱のように思つて、不快な色が眉の根に浮んだ。

「どうして、学校で、」

とこの際わざと尋ねたのである。母子で参観したことは、もう心得ていたのに。

十七

「どうもこうも無いさ。母様と二人で参観に出掛けたんだ。教頭は僕と同窓だからね。先せんにから来て見い、来て見い、と云うけれど、顔の方じゃ大した評判の無い学校だから、馬鹿にしていたが驚いたね。勿論五年級にや佳いいのが居ると云ったつけが、」

「じゃあその教頭、媒酌なこうど人も遣やるんだな。」

と舌尖したさき三分で切附けたが、一向に感じないで、

「遣るさ。そのかわり待合や、何かじや、僕の方が媒酌人だよ。」

「怪しからん。黒と白との、待て？ 海老茶と緋縮緬ひぢりめんの交換だな。いや、可つらい面の皮だ。ずらりと並べて選取りよりどりにお目に掛けます、小格子の風だ。」

「可いいじゃないか、学校の目的は、良妻賢母を造るんだもの、生理の講義も聞かせりや、媒酌なこうどもしようじやあないか。」

とこの人にして大警句。早瀬は恐入った体で、

「成程、」

「勿論人を見てするこつた、いくら媒酌人をすればって、人ごとに許しやしない。そこは地位もあり、財産もあり、学位も有るもんなら、」

と自若として、自分で云つて、意気頗る昂然たりで、

「講堂で良妻賢母を拵えて、ちゃんと父兄に渡す方が、双方の利益だもの。教頭だつて、そこは考えているよ。」

「で何かね、」

早瀬は、斜めに開き直つて、

「そこで僕の、僕の先生の娘を見たんだな。」

「ああ、しかも首席よ。出来るんだね。そうして見た処、優美で、品が良くつて、愛嬌がある。沢山ない、滅多にないんだ。高級三百顔色なし。照陽殿裏第一人だよ。あたかも可、学校も照陽女学校さ。」

と冷えた茶をがぶりと一口。浮かれの体とおいでなすつて、

「はは、僕ばかりじゃない、第一母様が氣に入つたさ。あれなら河野家の嫁にしても、まあまあ……恥かしくない、と云つて、教頭に尋ねたら、酒井妙子と云うんだ。ちよつと、教員室で立話しをしたんだから、委いことは追てとして、その日は帰った。」

すると昨日、母様がここへ訪ねて来たろう。帰りがけに、飯田町から見附を出ようとする処で、腕車を飛ばして来た、母衣の中のがそれだツたつて、矢車の花を。」

と言いかけて、床の間を凝と見て、

「ああ、これだこれだ。」

ひよいと腰を擡げて、這身にぬいと手を伸ばした様子が、一本引抜きそうに見えたので、

「河野！」

「ええ、」

「それから。おい、肝心な処だ。フム、」

乗つて出たのに引込まれて、ト居直つて、

「あの砂埃の中を水際立つて、駈け抜けるように、そりや綺麗だったと云うのだ。立留つて見送ると、この内の角へ車を下ろしたろう。」

そろそろ引返したんです、母様がね。休んでいた車夫に、今のお嬢さんは真中の家へですか。へい、さようで、と云うのを聞いて帰つたのさね。」

と早口に饒舌つて、

「美人だねえ。君、」とゆつたり顔を見る。

「ト遣つた工合は、僕が美人のようだ、厭だ。結婚なんぞ申込んだじゃ、」と笑いながら、大に諷するかのごとくに云つて、とんと肩を突いて、

「浮気ものめ。」

「浮気じゃない、今度ばかりや大真面目だがね、君、どうかなるまいか。」

また甘えるように、顔を正的まともに差出して、頤おとがを支えた指で、しきりに忙せわく髯ひねを捻る。

早瀬はしばらく黙つたが、思わず拱こまぬいていた腕に解くと、背後うしろざまに机に肱ひじ、片手をしかと膝に支いて、

「貰うさ。」

「え。」

「お貰いなさい。」

「くれようか。」

「話によつちや、くれましょう。」

「後継者あととりじゃないんだね。」

「勿論後継者じゃあない。」

「じゃ、まあ、話は出来るとして、」と、澄まして云つて、今度は心ありげに早瀬の顔を。
「だが、何だよ、あつし私ア」と云つた調子が変わつて、
「なこうど媒介人は断るぜ、照陽女学校の教頭じゃないんだから。」

十八

そうすると英吉が、かねて心得たりの態度で、媒酌人は勿論、しかるべき人をと云つたのが、其そのもと許ごときに勤まるものかと、かろ軽んじいや賤しめたように聞えて、

「そりや、いざとなりや、教育界に名望のある道学者先生の叔父もあるし、また父とうさん様の幕下で、現下その筋の頭職にある人物も居るんだから、立派に遣つてくれるんだけれど、その君、媒酌人を立てるまでに、」

と手を揃えて、火鉢の上へ突出して、じりりと進み、

「さき先方の身分も確めねばならず、妙子、（ともう呼棄てにして）の品行の点もあり、まあ、学校は優等としてだね。酒井は飲酒家だと云うから、遺伝性の懸念もありだ。それは大丈夫としてからが、ああいふ美しいのには有りがちだから、肺病の憂うれいがあつてはならず、酒

井の親属関係、妙子の交友の如何、そこらを一つ委しく聞かして貰いたいんだがね。」

主税は堪りかねて、ばりばりと烏府の中を突崩した。この暖いのに、河野が両手を翳すほど、火鉢の火は消えかかったので、彼は炭を継ごうとして横向になつていたから、背けた顔に稲妻のごとく閃いた額の筋は見えなかったが、

「もう一度聞こう、何だっけな。先方の身分？」

「うむ、先方の身分さ。」

「独逸文学者よ、文学士だ……大学教授よ。知つてゐるだろう、私の先生だ。」

「むむ、そりや分つてゐるがね、妙子の品行の点もあり、」

「それから、」

「遺伝さ、」

「肺病かね、」

「親族関係、交友の如何さ。何、友達の事なんぞ、大した条件ではないよ。結婚をすれば、処女時代の交際は自然に疎くなるです。それに母様が厳しく躰れば、その方は心配はないが、むむ、まだ要点は財産だ。が、酒井は困つていやしないだろうか。誰も知つた俠客風の人間だから、人の世話をすりや、つい物費も少くない。それにや、評判の飲酒

家の^{のみ}だし、遊ぶ方も盛だと云うし、借金はどうかろう。」

主税は黙つて、茶を注いだ^つが、強いて落着いた容子に見えた。

「何かね、持参金でも望みなのかね。」

「馬鹿を謂^いいたまえ。妹たちを縁附けるに、こちらから持参はさせるが、僕が結婚するに、いやしくも河野の世子が持参金などを望むものか。

君、僕の家じゃ、何だ、女の児^こが一人生れると、七夜から直ぐに積立金をするよ。それ立派に支度が出来るだろう。結婚してからは、その利息が化粧料、小遣となろうというんだ。自然嫁入先でも幅が利きます。もつともその金を、婿の名に書き替^{かえ}るわけじゃないが、河野家においてき、一人一人の名にして保管してあるんだから、例えば婿^{むこ}が多^{しばらく}日月給に離れるような事があつても、たちまち破綻^{はたん}を生ずるとき不面目は無い。

という円満な家庭になつてゐるんだ。で先方^{さき}の財産は望^さじやないが、余り困つてゐるよ。うだと、親族の關係から、つい迷惑をする事になつちや困る。娘の縁で、一時借用なぞと云うのは有^あがちだから。」

「酒井先生は江戸見^{えどっこ}だ！」

と唐突^{だしぬけ}に一喝して、

「神田の祭礼に叩き売つても、娘の縁で借りるもんかい。河野！」

と屹きつと見た目の鋭さ。眉を昂あげて、

「髻があつたり、本を読んだり、お互の交際は窮屈だ。撲倒はりたおすのを野蠻と云うんだ。」

お薦は湯から帰つて来た。艶やかな濡髪に、梅花の匂ふくいく馥郁として、繻子しゆすの襟の烏羽玉うばたま

にも、香やは隠るる路地の宵。格子戸を憚はばかつて、台所の暗がりへ入ると、二階は常ならぬ

声高で、お源の出迎える氣勢けはいもない。

石鹼シヤボンを巻いた手拭てぬぐいを持つたままで、そつと階子段はしごだんの下へ行くと、お源は扉ひらきに附着くつつ

いて、一心に聞いていた。

十九

「先生が酒を飲もうと飲むまいと、借金が有ろうと無かろうと、大きなお世話だ。遺伝が、

肺病が、品行が何だ。当方こちらからお給みやづかえ事をしようと云うんじやなし、第一欲しいと仰おつし

有つたつて、差上げるやら、平に御免を被るやら、その辺も分らないのに、人の大切な

令嬢を、裸体はだかにして検査するような事を聞くのは、無礼じゃないか。

私あ第一、河野。世間の宗教家と称^{とな}うる奴が、吾々を捕^{つか}まえて、罪の兇^こだの、救つてやるのと、商売柄^{すき}好^すな事を云う。薬屋の広告は構わんが、しらきちようめんな人間に向つて罪の子とは何んだい。本人はともかくも、その親たちに対して怪しからん言^い種^{ぐさ}だと思つてゐるんです。

今君が尋問に及んだ、先生の令嬢の身許^{みもと}検^{しら}べの条件が、ただの一ヶ条でもだ。河野英吉氏の意志から出たのなら、私はもう学者や紳士の交際^{こうむ}は御免蒙^{はんて}る。そのかわりだ、半纏^{はんぎ}着^ぎの附合^{ふあ}いになつて撲倒^{撲倒}すよ。はははは、えい、おい、」

と調子が砕けて、

「母様の指揮^{さしず}だろう、一々。私はこうして懇意^{こんい}にしているからは、君の性質は知つてゐるんだ。君は惚^あれたんだらう。一も二もなく妙ちやんを見染^{みそめ}たんだ。」

「うう、まあ……」と対手^{あいて}の血相^{けつさう}もあり、もじもじする。

「惚^あれてよ、可愛い、可憐^{いと}いものなら、なぜ命^{いのち}がけになつて貰^{もら}わない。

結婚をしたあとで、不具^{ふぐ}にならうが、肺病^{かたわ}にならうが、またその肺病^{かたわ}がうつつて、それがために共々倒れようが、そんな事を構^{かま}うもんか。

まあ、何は措^おいて、嫁^{よめ}の内の財産^{うんぬん}を云々するなんぞ、不埒^{ふちち}の到^{いた}りだ。万々一、実家^{さと}の親

が困窮して、都合に依つて無心ごうりよく合力ごうりよくでもしたとする。可愛い女房の親じやないか。自分にも親なんだぜ、余裕があつたら勿論貢ぐんだ。無ければ断る。が、人情なら三杯食う飯を一杯ずつ分わけるんだ。着物は下着から脱いで遣るのよ。」

と思ひ入つた体で、煙草を持った手の尖さきがぶるぶると震えると、相手の河野は一向気にも留めない様子で、ただ上の空で聞いて首こうべだけ垂れていたが、かえつて襖ふすまの外で、思わずはらはらと落涙したのはお蔭である。

何の話？ と声のはげしいのを憂慮きづかつて、階子段の下でそつと聞くと、縁談でございますよ、とお源の答えに、ええ、旦那の、と湯上りの颯さつと上氣した顔の色を変えたが、いいえ、河野様が御自分の、と聞いて、まあ、と呆れたように莞爾にっこりして、忍んで段を上つて上り口の次の室まの三畳へ、欄干てすりを擦つて拔足で、両方へ開けた襖の蔭へ入つたのを、両人ふたりには気が付かずに居るのである。

と河野は自分には勢いきおいのない、聞くものには張合のない口吻くちぶりで、

「だが、母さんが、」

「母様が何だ。母様が娶もらうんじやあるまい、君が女房にするんじやないか。いつでもその遣方だから、いや、縁談にかかったの、見合をしたの、としばしば聞かされるのが一々勘

定はせんけれども、ざつと三十ぐらいあつた。その内、君が、自分で断つたのは一ツもあるまい。皆母さんがこう云つた。叔父さんが、ああだ、父さんが、それだ、と難癖を附けちや破談だ。

君の一家は、およそどのくらいな御門閥ごもんばつかは知らん。河野から縁談を申懸けられる天下の婦人は、いずれも恥辱を蒙るようで、かねて不快に堪えんのだ。

昔の国守大名が絵姿で捜せば知らず、そんな御註文に應ずるのが、ええ、河野、どこにだつてあるものか。」

と果は歎息して云うのであつた。河野は急に景氣づいて、

「何、無いことはありやしない。そりや有るよ。君、僕とこン許の妹たちは、誰でもその註文に應ずるように仕立ててあるんだ。

揃きりようつて容色よしも好、また不思議に皆別嬪みんなつびんだ。知つてゐるだろう。生れたての嬰児あかんぼの時

は、随分、おかしな、色の黒いのもあるけれど、母さんが手しおに掛けて、妙齡としごろにするまでには、ともかくも十人並以上になるんだ、ね、そうじゃないか。」

主税は返す言もなく、これには否応なく頷うなずかされたのである。蓋けだし事実であるから。

一家一門

二十

「それから、財産は先刻も謂った通り、一人一人に用意がしてある。病氣なり、何なりは、父様も兄も本職だから注意が届くよ。その他は万事母様が預かって賡けるんだ。

好嫌は別として、こちらで他に求める条件だけは、ちゃんとこちらにも整えてあるんだから、強ち身勝手ばかり謂うんじゃない。

けれども、品行の点は、疑えば疑えると思うだろう。そこはね、性理上も斟酌をし、そろそろ色気が、と思う時分には、妹たちが、まだまだ自分で、男をどうのこうのという悪智慧の出ない先に、親の鑑定で、婿を見附けて授けるんです。

否も応も有りやしない。衣服の柄ほども文句を謂わんさ。謂わない筈だ、何にも知らないで授けられるんだから。しかし間違いはない、そこは母さんの目が高いもの。」

「すると何かね、婿を選ぶにも、およそその条件が満足に解決されないと不可んのだね。」

「勿論さ、だから、皆円満に遣つとるよ。第一の姉が医学士さね、直の妹の縁附いているのが、理学士。その次のが工学士。皆食いはぐれはないさ。……今また話のある四番目のも医学士さ、」

「妙に選取つて揃えたもんだな。」

「うむ、それは父様の主義で、兄弟一家一門を揃えて、天下に一階級を形造ろうというんだ。なるべくは、銘々それぞれの収入も、一番の姉が三百円なら、次が二百五十円、次が二百円、次が百五十円、末が百円といった工合に長幼の等差を整然と附けたいというわけだ。」

先ず行われている、今の処じや。そうしてその子、その孫、と次第にこの社会における地位を向上しようというのが理想なんです。例えば、今の代が学士なら、その次が博士さ、大博士さね。君。

謂つて見れば、貴族院も、一家族で一党を立てることが出来る。内閣も一門で組織し得るようという遠大の理想があるんだ。また幸に、父様にや孫も八九人出来た。姪を引取つて教育しているのも三四人ある。着々として歩を進めている。何でも妹たちが人才を引

着けるんだ。」

人事ひとごとながら、主税は白面に紅こうを潮して、

「じゃ、君の妹たちは、皆学士を釣る餌だ。」

「餌でも可い、構わんね。藤原氏の為だもの。一人や二人犠牲ぎせいが出来ても可いが、そりや大丈夫心配なしだ。親たちの目は曇りやしない。

次第々々に地位を高めようとするんだから、奇才俊才、傑物いは不可いかん。そういうのは時々失敗を遣る。望む処は凡才で間違いの無いのが可いのだ。正々堂々の陣さ、信玄流です。小豆長光を翳かざして旗下へ切込むようなのは、快は快なりだが、永久持重の策にあらず……

その理想における河野家の僕が中心なんだろう。その中心に据すわろうという妻さいなんだから、大に慎重おおいの態度を取らんけりやならんじやないか。詰り一家いつけの女クウイイン王クウイインなんだから、」

河野は、渠かれがいわゆる正々堂々として説くこと一条。その理想における根ざしの深さは、この男の口から言つても、例の愚痴のように聞えるのや、その落着かない腰には似ない、ほとんど動かすべからざる、確乎としたものであつた。

「いや、よく解つた、成程その主義じゃ、人の娘の体格検査をせざるまい。しかし私は厭いやだ！ 私の娘なら断るよ、たとい御試験には及第を致しましても、」

と冷かに笑うと、河野は人物に肖にず、これには傲然ごうぜんとして、信ずる処あるごとく、合の点みこんだ笑い方をして、

「でも、条件さえ通過すれば、僕は娶もらうよ。ははは、きつと貰うね、おい、一本貰って行くぜ。」

と脱兎のごとく、かねて計っていたように、この時ひよいと立つと、肩を斜めに、衣兜かくしに片手を突込んだまま、急つかつか々と床の間に立向うて、早や手が掛った、花の矢車。

片膝立てて、颯さつと色をかえて、

「不可いけないよ。」

「なぜかい？」

と済まして見返る。主税は、ややあせった気味で、

「なぜと云って、」

「はははは、そこが、肝心な処だ、と母様が云ったんだ。」

と突立つたまま、ニヤリとして、

「早瀬、君がどうかしているんじゃないか、ええ、おい、妙子を。」

二十一

冷^{れい}か、熱^{ねつ}か、ヒ首^{ひしゅ}、寸鉄にして、英吉のその舌の根を留めようと急^{あせ}つたが、咄^{とつ}嗟^さに針を吐くあたわずして、主税は黙^{もく}つて拳^{こぶし}を握る。

英吉は、ここぞ、と土俵に仕切った形で、片手に花の茎^{じく}を引^ひ掴^{つか}み、片手で髯^{ひげ}を捻^{ひね}りながら、目をぎろぎろと……ただ冴えない光で、

「だろう、君、筒井筒振分髪と云うんだろう。それならそう云いたまえ、僕の方にもまた手加減があるんだ、どうだね。」

信玄流の敵が、かえつてこの奇兵を用いたにも係らず、主税の答えは車懸りでも何でもない、極めて平凡なものであった。

「怪しからん事を云うな、串^{じょうだん}戯^ぎとは違う、大切なお嬢さんだ。」

「その大切のお嬢さんをどうかしているんじゃないか、それとも心で思ってるんか。」

「怪しからん事を云うなと云うのに。」

「じゃ確^{たしか}かい。」

「御念には及びません。」

「そんなら何も、そう我が河野家の理想に反対して、人が折角聞こうとする、妙子の容子を秘さんでも可いじゃないか。話が纏まりや、その人にも幸福だよ、河野一党の女王になるんだ。」

「幸か、不幸か、そりや知らん、が、私は厭だ。一門の繁栄を望むために、娘を餌にするの、嫁の体格検査をするの、というのは真平御免だ。惚れたからは、癩でも肺病でも構わんでなくっちゃ、妙ちゃんの相談は決してせん。勿論お嬢は瑕のない玉だけれど、露出しにして河野家に御覧に入れるのは、平相国清盛に招かれて月が顔を出すようなものよ。」
「といささか云い得て濃い煙草を吻と吐いたは、正にかくのごとく、山の端の朧気ならん趣であつた。」

「なら可い、君に聞かんでも余処で聞くよ。」

と案外また英吉は廉立った様子もなく、争や勝てりの態度で、

「しかし縁起だ、こりや一本貰つて行くよ。妙子が御持参の花だから、」

「……………」

「君がどうと云う事も無いのなら、一本二本惜むにや当るまい、こんなに沢山あるものを、」

「……………」

「失敬、」

あわや抜き出そうとする。と床しい人香が、はつと襲つて、

「不可^{いけ}ませんよ。」と半纏の襟を扱^{しご}きながら、お蔭^{ふすま}が襖から、すつと出て、英吉の肩へ手を載せると、蹠^{よろ}蹠けるように振向く処を、入違いに床の間を背負^{しよ}つて、花を庇^{かば}つて膝をついて、

「厭^{えん}ですよ、私が活けたのが台なしになります。」

と嫣然^{えんぜん}として一笑する。

「だつて、だつて君、突込んであるんじゃないか、池の坊も遠州もありやしない。ちつとぐらい抜いたつて、あえてお手前が崩れるというでもないよ。」

ときすがに手を控えて、例の衣兜へ突込んだが、お蔭^{めさき}の目を、（子を捉^とろ、子捉^とろ。）の体で、靴足袋で、どたばた、どたばた。

「はい、これは柳橋流と云うんです。柳のように房々活けてありましよう、ちゃんと流儀があるじゃありませんか。」

「嘘を吐きたまえ、まあ可いから、僕が惚込んだ花だから。」

主税は火鉢をぐつと手許へ。お薦はすらりと立って、

「だつてもう主のある花ですもの。」

「主がある！」と目を睜^{みは}る。

「ええ、ありますとも、主税と云つてね。」

「それ見ろ、早瀬、」

「何だ、お前、」

「いいえ、貴下^{あなた}、この花を引張^{ひっぱ}るのは、私を口説くのと同一^{おんなじ}訳よ。主があるんですもの。」

さあ、引張つて御覧なさい。」

と寄ると、英吉は一足引く。

「さあ、口説いて頂戴、」

と寄ると、英吉は一足引く。微笑^{ほほえ}みながら擦^すり寄るたびに、たじたじと退^{すき}つて、やがて

次の間へ、もそりと出る。

二十二

月の十二日は本郷の薬師様の縁日で、電車が通るようになっても相かわらず賑かな。書肆文求堂をもうちつと富坂寄の大道へ出した露店の、いかがわしい道具に交せて、ばらばら古本がある中の、表紙の除れた、けぼの立った、端摺の甚い、三世相を開けて、燻ぼったカンテラの燈で見ている男は、これは、早瀬主税である。

何の事ぞ、酒井先生の薫陶で、少くとも外国語をもつて家を為し、自腹で朝酒を呷る者が、今更いかなる必要があつて、前世の鸚鵡たり、猩々たるを懸念する？

もつとも学者だと云つて、天氣の好い日に浅草をぶらついて、奥山を見ないとも限らぬ。その時いかなる必要があつて、玉乗の看板を観ると云う、奇問を発するものがあれば、その者愚ならずんば狂に近い。鰻屋の前を通つて、好い匂がしたと云つても、直ぐに隣の茶漬屋へ駈込みの、箸を持ちながら嗅ぐ事をしない以上は、速断して、伊勢屋だとは言憎い。主税とても、ただ通りがかりに、露店の古本の中にあつた三世相が目を遮つたから、見たばかりだ、と言えはそれまでである。けれども、渠は目下誰かの縁談に就いて、配慮

しつつかあるのではないか。しかも開けて見ている処が——夫婦相性の事——は棄置かれぬ。且つその顔かお色が、紋附の羽織で、袴ふきの厚い内君マダムと、水兵服の坊やを連れて、別に一人抱いて、鯔うにしようか、汁粉にしようか、と歩て行くつてゐる紳士のような、平和な、樂たのしげなものではなく、主税は何か、思おもひ屈くした、沈しずんだ、憂うれわしげな色が見える。

好男子世に処して、屈託くつたくそうな面おも色もちで、露店の三世相を繰くるとなると、柳の下に掌てのひらを見せる、八卦の亡者と大差はない、迷いはむしろそれ以上である。

所以ゆえある哉かな、主税のその面上の雲は、河野英吉と床の間の矢車草……お妙の花を争つた時から、早やその影が懸つたのであつた。その時はお薦さその機知ちで、柔能よく強こを制こすることを得たのだから、例いづなら、いや、女房は持つべきものだ、と差さ対むかいで祝杯を挙げかねないのが、冴さえない顔をしながら、湯は込んでいたか、と聞きいて、フイと出掛けた様子も、その縁談を聞いた耳を、水道の水で洗わんと欲する趣があつた。

本来だと、朋とも友だちが先生の令嬢めいじうを娶めとりたいに就ついて、下した聴ぎに來たものを、聞かせないと云うも依い怙こ地じなり、料り簡ようけんの狭い話。二才らしくまた何も、娘がくれた花だといつて、人に惜むにも当らない。この筆法をもつてすれば、情婦いろうから來た文ふみ殻がらが紛まぎれれ込んだというので、紙屑買を追懸おっかけて、慌どろてて盜賊ぼうと怒鳴り兼ねまい。こちの人措おいて下さんせ、

と洒落しゃれにも嗜たしなめてしかるべき者までが、その折から、ちよいと留女の格で早瀬に花もたを持せたのでも、河野一家いっけに対しては、お薦さえ、如何いかんの感情を持つかが明かに解る。

それは英吉と、内の人の結婚に対する意見の衝突の次第を、襖の蔭で聴取ったせいもあるう。

そうでなくつても、惚れそうな芸妓げいしやはないか。新学士に是非と云つて、達引たてひきそうな朋輩うちはないか、と煩うるさく尋ねるような英吉に、厭いやなこつた、良人うちが手を支ついてものを言う大切なお嬢さんを、とお薦はただそれだけでさえ引退ひつさがる。処へ、幾条いくすじも幾条も家中うちの縁の糸は両親もとじめで元緊もとをして、颯さつさらりと鵜縄うなわに捌さばいて、娘たちに浮世の波を潜くぐらせて、こを先途あゆと鮎あゆを吞のませて、ぐツと手許ひつたぐへ引手繰ひつたぐつては、咽喉のどをギユウの、獲物を占め、一門いちもん一家いっけの繁昌を企きむような、ソンの勘作とこの許へお嬢さんを嫁やられるもんか。

いいえ、私が肯きかないわ、とお源をつかまえて談ずる処へ、熱いい湯だった、といくらか気色を直して、がたひし、と帰つて来た主税に、ちよいとお前さん、大丈夫なんですか、とお薦の方が念を入れたほどの勢いきおい。

何が大丈夫だか、主税には唐突で、即座には合点しかねるばかり、お蔭の方の意気込が凄じい。

まだ、取留めた話ではなし、ただ学校で見初めた、と厭らしく云う。それも、恋には丸木橋を渡つて落ちてこそしかるべきを、石の橋を叩いて、杖を支いて渡ろうとする縁談だから、そこいら聴合せて歩行く中に、誰かの口で水を注せば、直ぐに川留めの洪水ほどに目を廻わしてお流れになるだろう。

けれども、なぜか、母子連で学校へ観に行つた、と聞いただけで、お妙さんを観世物にし、またされたように癪に障つた。しかし物にはなるまいよ、と主税が落着くと、いいえ、私は心配です。どこをどう聞き廻つたつて、あのお嬢さんに難癖を着けるものはありません。いづれ真砂町様へ言入れるに違いますまい。それに河野と云う人が、他に取柄は無いけれど、ただ頼もしいのが押の強いことなんですから、一押二押で、悪くすると出来ますよ。出来るような気がしてならない。私は何だかもうお妙さんが、ペロペロと嘗められる夢を見て、今夜にも寝ていて覺されそうで、お可哀相でなりません。貴郎油断をしちや厭ですよ、と云つた——お蔭の方が、その晩毛虫に附着かれた夢を見た。いつも河野の

その眉が似ていると思つたから。――

もつとも河野は、綺麗に細眉にしていたが、剃りづけませぬよう、と父様の命令で、近頃太くしているの、毛虫ではない、臥蚕がさんである。しかるにこの不生産的の美人は、蚕の世を利するを知らずして、毛虫の厭いとうべきを恐れていた、不心得と言わねばならぬ。

で、お薦は、たとい貴郎が、その癖、内々お妙さんに岡惚おかほれをしているのでも可い。河野に添わせるくらいなら、貴郎の令夫人おくさんにして私が追出おんだされる方がいつそ増だ、とまで極端に排斥する。

この異体同心の無二の味方を得て、主税も何となく頼母たのもしかつたが、さて風はどこを吹いていたか、半月ばかりは、英吉も例いつもになく顔を見せなかつた。

と一日あるひ、

（早瀬氏は居おらるるかね。）

応柄おうへいのような、そうかと云つて間違ひの無いような訪ずれ方をして、お源に名刺を取次がせた者がある。

主税は、しかかつていた翻訳の筆ペンを留めて、請取つて見ると、ちよつと心当りが無かつたが、どんな人だ、と聞くと、あの、痘痕あはたのおあんなさいいます、と一番疾はやく目についた人

相を言ったので、直ぐ分った。

本名坂田礼之進、通り名をアバ大人、誰か早口な男がタの字を落した。ゆっくり言えばアバタ大人、どちらでもよく通る。通りが可よければと言つて、渾名あだなを名刺に書くものはない。手札は立派に、坂田礼之進……傍かたわらへ羅馬字ロオマじ、L. Sakata.

すなわち歴々の道学者先生である。

渠かれの道学は、宗教的ではない、倫理的、むしろ男女交際的である。とともに、その痘痕あばたと、細君が若うして且つ美であるのもつて、処々の講堂においても、演説会においても、音に聞えた君子である。

謂いうまでもなく道徳円満、ただしその細君は三度目で、前さきの二人とも若死をして、目下いまのがまた顔色が近来、蒼あおい。

と云つてあえて君子の徳を傷きずけるのではない、が、要のないお饒舌しゃべりをするわけではない。大人は、自分には二度まで夫人を殺しただけ、盞さかずきの数の三々九度、三度の松風、ささんざの二十七度で、婚姻の事には馴れてござる。

処へ、名にし負う道学者と来て、天下この位信用すべき媒妁人なこうどは少いから、呉ごも越えつも隔てなく口を利いて巧うまく纏まとめる。従うて諸家の閨門けいもんに出入すること頻繁にして時々厭らし

い！ と云う風説ふうせきを聞く。その袖を曳ひいたり、手を握にぎったりするのが、いわゆる男女交際の
 的で、この男の余徳ほまちであろう。もつとも出来た験ためしはない。蓋けだしせざるにあらず能あたわざるな
 りでも何でも、道德は堅固で通る。於ここにおいてか愛乎、品行方正、御媒妁人おなこうどでも食くつて行ゆかれる
 ……

二十四

道学先生の、その坂田礼之進であるから、少くともめ組が出入りをするような家庭？
 へ顔出しをする筈はずがない。と一度は怪あやしんだが、偶然河野の叔父に、同一道学者何某なにがしの
 有るのに心付いて、主税は思わず眉を寄せた。

諸家お出入りの媒妁人、ある意味における地者稼じものかせぎの冠たる大家、さては、と早やお妙
 の事が胸に応えて、先ずともかくも二階へ通すと、年配は五十ばかり。推しものの痘痕あばたは
 一目見て気の毒な程で、しかも黒い。字義をもつて論ずると月下氷人でない、竈かまのした下炭
 焼であるが、身みだし躰しなみよく、カラアが白く、磨込んだ顔がてらてらと光る。地の透く髪を
 一筋梳すきに整然きちんと櫛くしを入れて、髻さきの尖から小鼻へかけて、ぎらぎらと油ぎった処、いかにも

内君が病身らしい。

さて、お初にお目に懸かりまする、いかがでござりまするか、ますます御翻訳で、とさぞ食うに困つて切々稼かぐだらう、と謂いわなればかりな言ことを、けろりとして世辞に云つて、衣か兜くしから御殿持の煙草入、薄色の鉄の派手な塩瀬に、鉄扇かずらの浮織のある、近頃行わるる洋服持。どこのか媒妁人した御縁女の贈物らしく、貰つた時の移香を、今かく中ちゆうぶる古こに草臥くたびれても同一香おなじにおいの香水で、追おつかけ追かけ香におわせてある持物を取り出して、気になるほど爪の伸びた、湯が嫌きらひらしい手に短い延のべの銀煙管ぎせる、何か目出度い薄つぺらな彫ほりのあるのを控えながら、先ず一ツ奥歯をスツと吸つて、寛悠ゆつくりと構えた処は、生命保険の勧誘も出来そうに見えた。

甚だ突然でござりまするが、酒井俊蔵氏令嬢の儀で……ござりまして、とまたスツと歯せせりをする。

それ、えへん！ と云えば灰吹と、諸礼躡しつけかた方かた第一義に有るけれども、何にも御馳走をしない人に、たとい嚙おくびが葱臭ねぎくさかろうが、干鰯ひだらうの繊維が挟はさまつていそうであらうが、お楊よ枝うじを、と云うは無礼に当る。

そこで、止むことを得ず、むずむずする口を堪こらえる下から、直ぐに、スツとまたぞうろ

風を入れて、でござりまするに就いて、かような事は、余り正面から申入れまするよりと、考えることでござりまする……と搔かつまんで謂えば、自分はいまだ一面識も無いから、門生の主税から紹介をして貰いたいと言うのである。

南無三、橋は渡った、いつの間にか、お妙は試験済の合格になった。

今は表向に縁談を申込むばかりにしたらしい。それに、自分に紹介を求めるのは、英吉に反対した廉かどもあり、主税は面当つらあてをされるように慥くすくつたばかりか、少からず敵の機敏に、不意打を食ったのである。

いや、お断り申しましょう、英吉君に難癖のある訳ではないが、河野家の理想と言うものが根も葉も挙げて氣に入らない。余所よそで紹介をお求めなさるなり、また酒井先生は紹介の有り無しで、客の分わけ隔へだてをするような人ではないから——直接じかにお話しなすつて、御縁があれば纏まとまる分。心に潔しとしない事に、名刺一枚御荷担は申兼ねる、と若武者だけに逸はつてかかると、その分は百も合あ点てんで、戦場往来の古ふる兵つわもの。

取りあえず、スースーと齒をすすつて、ニヤニヤと笑いかけて、何か令嬢お身の上に就いて、下聴したぎきをするのが、御賛成なかつたとか申すことでござりましたな。御説に因れば、好いた女なら娼妓じやうぎでも（と少しおまけをして、）構わん、死なば諸共にと云う。いや、

人生意気を重んず、（ト齒をすすつて）で、ごわりまするが、世間もあり親もあり……

とこれから道学者の面目を発揮して、河野のためにその理想の、道義上完美にして非難すべき点の無いのを説くこと数千言。約半日にして一先ず日暮前に立歸つた。ざつと半日居たけれども、飯時を避けるなぞは、さすがに馴れたものである。

二十五

客が来れば姿を隠すお蔭が内に居るほどで、道学先生と太刀打して、議論に勝てよう道理が無い。主税の意気ずくで言うことは、ただ礼之進の齒ですすられるのみであつたが、厭なものは厭だ、と城を枕に討死をする態度で、少々自棄^{やけ}気味の、酒井先生へ紹介は断然、お断り。

そこを一つお考え直されて、と言を残^{ことば}して歸つた後で、アバ大人が媒^{なこうど}妁^どではなおの事。とお妙の顔が蒼^{あお}くなつて殺されでもするように、酒も飲まないで屈託をする、とお蔭はお蔭で、かくまつてあつた姫君を、鐘を合図に首討つて渡せ、と懸合^{けんあ}われたほどの驚き加減。可愛い夫が可^{いとおし}惜^しがる大切なお主^{しゅう}の娘、ならば身替りにも、と云う逆^の上^ぼせ方。すべてが淨

瑠璃の三の切を手本だが、憎くはない。

さあ、貴郎、そうしていらつしやる処ではありません、早く真砂町へおいでなすつて、先生が何なら奥様まで、あんな許へは御相談なさいませんに、お頼みなさならなくっちゃ不可ません。ちよいと、羽織を着換えて、と箆笥をがたりと引いて、アア、しばらく御無沙汰なすつた、明日め組が参りますから、何ぞお土産をお持ちなさいまし、先生はさっぱりしたものが好きだ、と云うし、彼奴が片思いになるように鮑がちょうど可い、と他愛もない。

馬鹿を云え、縁談の前へ立つて、讒口なんぞ利こうものなら、己の方が勘当だ、そんな先生でないのだから、と一言にして勿ねられた、柳橋の策不被用焉。

また考えて見れば、道学者の説を待たずとも、河野家に不都合はない。英吉とても、ただちとだらしの無いばかり、それに結婚すれば自然治まる、と自分も云えば、さもあるう。人の前で、母様と云おうが、父様と云おうが、道義上あえて差支はない、かえつて結構なくらいである。

そのこれを難ずるゆえんは……曰く……言い難しだから、表向きはどこへも通らぬ。困つたな、と腕を組めば、困りましたねえ、とお蔭も鬱ぐ。

ここへ大いなる福音を齎^{もた}らし来つたのはお源で。

手廻りの使いに遣^やつたのに、大分後れたにもかかわらず、水口の戸を、がたひし勢^{いきおい}よく、唯^{ただいま}今歸りました、あの、御新造^{ごしんぞう}様、大丈夫でございます。

明後日出来るのかい、とお薦^{あさつて}がきりもりで、夏の搔^かき巻^{まき}に、と思つて古浴衣の染を抜いて形を置かせに遣つてある、紺屋へ催促の返事か、と思うと、そうでない。

この忠義ものは、二人の憂^{うれ}いとして、紺屋から歸りがけに、千裁ものの、風呂敷包を持つたまま、内の前を一度通り越して、見附へ出て、土手際の売^うり者^{ない}に占^みて貰つた、と云うのであつた。

對手^{あいて}は学士の方ですつて、それまで申して占て貰いましたら、とても縁は無い断念^{あきら}めものだ、と謂^いいましたから、私は嬉しくつて、三銭の見料へ白銅一つ発奮^{はつ}みました。可い氣味でございますと、独りで喜んでアハア笑う。

まあ、嬉しいじやないか、よく、お前、お嬢さんの年なんか知っていたね、と云うと、勿怪^{もつ}な顔^けをして、いいえ、誰方^{どなた}のお年も存じません。お薦^ふは腑^ふに落ちない容子をして、売^うらないしや^とし^しト者は、年^{とし}紀^きを聞きやしないかい。ええ、聞きましたから私の年を謂つてやりました。あたりまえ
当前^{あた}よ、對手が学士でお前じや、と堪^たりかねて主税^まが云うのを聞いて、目^めを睜^はつて、

しばらくして、ええ！ 口惜いと、台所へ逃込んで、売卜屋の畜生め、どたどたどた。

二人は顔を見合せて、ようように笑が出た。

すぐにお薦が、新しい半襟を一掛礼に遣つて、その晩は市が栄えたが。

二三日経つて、ともかく、それとなく、お妙がお持たせの重箱を返しかたがた、土産ものを持つて、主税が真砂町へ出向くと、あいにく、先生はお留守、令夫人は御墓参、お妙は学校のひげが遅かった。

二十六

仮にその日、先生なり奥方なりに逢つたところで、縁談の事に就いて、とこう謂うつもりでなく、また言われる筋でもなかったが、久闊振ではあり、誰方も留守と云うのに気抜けがする。今度来た玄関の書生は馴染が薄いから、巻 菰の吸殻沢山な火鉢をしきりに突着けられても、興に乗る話も出ず。しかしこの一兩日に、坂田と云う道学者が先生を訪問はしませんか、と尋ねて、来ない、と聞いただけを取柄。土産ものを包んで行つた風呂敷を畳みもしないで突込んで、見ツともないほど袂を膨らませて、ぼんやりして歸りが

け、その横町の中程まで来ると、早瀬さん御機嫌宜しゅう、と頓興とんきように馴々しく声を懸けた者がある。

玄関に居た頃から馴染の車屋で、見ると障子を横にして眩まばゆい日当りを遮った帳場から、ぬい、と顔を出したのは、酒井へお出入りのその車わかいしゆ夫。

おうと立停まつて一言二言交すついでに、主税はふと心付いて、もしやこの頃、先生の事だの、お嬢さんの事を聞きに来たものはないか、と聞くと、月はじめにモオニングを着た、痘痕あぼたのある立派な旦那が。

来たか！ へい、お目出たい話なんだからちつとばかり様子を聞かせな、とおつしやいましてね。終しまいにや、き様、お伴をするだろう、懸かりつけの医師いしやはどこだ、とお尋ねなさいましたつけ。

台所から、筒袖を着た女房が、ひよっこり出て来て、おやまあ早瀬さん、と笑いかけて、いいえ、やどでもここが御奉公と存じましてね、もうもう賞ほめて賞めて賞め抜いてお聞かせ申しましてございますよ。お嬢様も近々御縁きまが極りますそうで、おめでとう存じます、えへへ、と燥はしやいだ。

余計な事を、と不興な顔をして、不愛想に分れたが、何も車屋へ搜りを入れずとももの事

だ、またそれにしても、モオニング着用は何事だと、苦々しき一方ならず。

曲角の漬物屋、ここいらへも探偵が入つたろうと思うと、筋向いのハイカラ造りの煙草屋がある。この亭主もベラベラお饒舌をする男だが、同じく申上げたろう、と通りがかりに睨むと、腰かけ込んだ学生を対手に、そのまた金齒の目立つ事。

内へ帰ると、お薦はお薦で、その晩出直して、今度は自分が売卜の前へ立つと、この縁はきつと結ばる、と易が出たので、大きに鬱ぐ。

もつとも売卜者も如才はない。お源が行つたのに較べれば、容子を見ただけでも、お薦の方が結ばるに違いないから。

一日措いて、主税が自分囑まれたののさる学校の授業を済まして帰つて来ると、門口にのそりと立つて、頤を撫でながら、じろじろ門札を覗めていたのが、坂田礼之進。

早やここから齒をスーと吸つて、先刻からお待ち申して……はちと変だ。

さては誰も物申に応うるものが無かつたのであろう。女中は外出で？ お薦は隠れた。

……

無人で失礼。さあ、どうぞ、と先方は編上靴で手間が取れる。主税は気早に靴を脱いで、癩癩かんしゃくまぎれ紛に、突然二階へ懸上る。段の下ひらきの扉の蔭から、そりやこそ旦那様。と、

によつと出た、お源を見ると、取次に出ないも道理、勝手働きの玉たま櫛くし、長刀小脇ながやちのこわきに搔か込んだりな。高たか箒ほうきに手拭てぬぐいを被かせたのを、柄長へいぢやうに構かまえて、逆上のぼせた顔色がんしよく。

馬鹿ばかめ、と噴ふきだ出して飛上とびある後から、ややあつて、道学先生どうがくせんせい、のそりのそり。

二階ろっばんの論判ひとき一時に余りけるほどに、雷様の時の用心の線香せんかうを芬ふんとさせ、居間ゐまから頭あわれたのはお薦もぐさで、艾まじはないが、禁厭まじないは心ゆかし、片手に煙草えんそうを一ひとつ撮まみ。拔足はつそくで玄關のろしへ出て、礼之進の靴の中へ。この燃草もえぐさは利きが可きかつた。※と煙へが、むらむらと立つ狼煙のろしを合図あひづに、二階から降りる氣勢けいはい。飜然ひつり路地へお薦もぐさが遁にげ込むと、まだその煙は消えないので、雑水ぞうみずを撒まきかけてこの一芸に見惚まどれたお源が、さしつたりと、手でしやくつて、ざぶりと掛かけると、おかしな皮の臭におがして、そこら中水だらけ。

二十七

それ熟々つらつら、史あを按おずるに、城しろなり、陣所じんじよ、戦場せんじやうなり、軍いくさは婦おんなの出る方が大概たいてい敗まける。この日、道学先生どうがくせんせいに対する語学者は勝利でなく、礼之進の靴は名譽めいよの負傷ふしやうで、揚々と引挙ひきあげた。

ゆえ如何となれば、お厭いやとあれば最早紹介は求めますまい、そのかわりには、当方から酒井家へ申入れまする、この縁談に就きまして、貴方あなたから先生に向つて、河野に対する御非難をなされぬよう。御意見は御意見、感情問題は別として、これだけはお願ひ申したいでござりまするが、と婉曲に言ひ言つたが、露骨に遣やつたら、邪魔をする勿なであるから、御懸念無用と、男らしく判はつきり然答えたは可いけれども、要するに釘を刺されたのであつた。礼之進の方でも、酒井へ出入りの車夫くるまやまで捜さがり入れた程だから、その分は随分手が廻つて、従つて、先生が主税に対する信用の点も、情愛のほども、子のごとく、弟のごときものであることさえ分つたので、先んずれば人を制すで、ぴたりとその口を圧おさえたのであるう。

讒なぐち口は決して利かない、と早瀬は自分も言つたが、またこの門生の口一ツで、見事、纏まとまる縁も破ることは出来たのだつたに。

ここで賽さいは河野の手に在あり矣。ともかくもソレ勝負、丁か半かは酒井家の意志の存する処に因るのみとぞなんぬる。

先生が不承知を言えばだけれども、諾、とあればそれまで。お妙は河野英吉の妻になるのである。河野英吉の妻にお妙がなるのであるか。

お薦さえ、憂慮きづかうよりむしろ口惜くやしがつて、ヤイヤイ騒ぐから、主税の、とつおいつは一通りではない。何は措おても、余所よそながら真砂町の様子を、と思うと、元来お薦あるために、何となく疵持足きず、思ひなしで敷居が高い。

で何となく遠のいて、ようよう二日前に、久しぶりで御機嫌うかが窺いに出た処、悪くすると、もう礼之進が出向いて、縁談が始まっていそうな中へ、急に足近くは我ながら気が咎める。愚図ぐずぐず々々すれば、貴郎例あななつもに似合わない、きりきりなさいなね……とお薦が齒痒はがゆがる。

勇を鼓して出掛けた日が、先生は、来客があつて、お話中。玄関の書生が取次ぐ、と

(この次、来い。)は、ぎよつとした。さりとして曲がない。内証ないしやうのお薦の事、露頭なにでも及んだかと、まさかとは思うが気怏きわくれがして、奥方にもちよいと挨拶をしたばかり。その挨拶を受けらるる時の奥方が、端然として針仕事の、気高い、奥床しい、懐なつかい姿を見るにつけても、お薦に思較べて、いよいよ後暗うしろめたさに、あとねだりをなさらないなら、久しぶりですから一銚ひとちやうし子、と莞爾にっこりして仰せある、優しい顔が、眩まぶしいように後退しりごみして、いずれまた、と逃出すがごとく帰りしなに、お客は誰?……とそつと玄関の書生に当つて見ると、坂田礼之進、噫あゐ、止やんめる哉かな。

しばらくは早瀬の家内、火の消えたるごとしで、憂慮きづかわしさの余り、思切つて、更に真砂

町へ伺ったのが、すなわち薬師の縁日であつたのである。

ちと、恐怖おすおすの形で、先ず玄関を覗のぞいて、書生が燈下に読書するのを見て、またお邪魔に、と頭から遠慮をして、さて、先生は、と尋ねると、前刻御外出。奥様おくさんは、と云うと、少々御風邪の気味。それでは、お見舞に、と奥に入ろうとする縁側で、女中おんなが、唯今すやすやと御寐おやすみになつていらつしやいます、と云う。

悄悄すこすこ々々玄関へ戻つて、お嬢さんは、と取つて置きの頼みの綱を引いて見ると、これは、以前奉公していた女中おんなで、四ツ谷の方へ縁附かたづいたのが、一年ぶりで無沙汰見舞に来て、一晩御厄介になる筈はずで、お夜食が済むと、奥方おおせの仰に因り、お嬢さんのお伴をして、薬師の縁日へ出たのであつた。

それでは私も通とおの方を、いづれ後刻のちほど、とこれを機しおに。出しなにも念のために、その後、坂田と云うのは来ませんか、と聞くと、アバ大人ですか、と書生は早や渾名を覚えた。ははは、来ましたよ。今日の午後ひるすぎ。

二十八

主税は、礼之進が早くも二度の魁^{かけ}を働いたのに、少なからず機先を制せられたのと——
かてて加えてお蔭の一件が暴露^{ばれ}たために、先生が太く感情を損ねられて、わざとにもそう
されるか、と思われないでもない——玄関の畳が冷く堅いような心持とに、屈託の腕を拱^{こまぬ}
いて、そこともなく横町から通りへ出て、件^{くだん}の漬物屋の前を通ると、向う側がとある大^{おお}
構^{まえ}の邸の黒板塀で、この間しばらく、三方から縁日の空が取囲んで押揺^{おしゆる}がすごとく、
きらきらと星がきらめいて、それから富坂をかけて小石川の樹立^{こだち}の梢^{こずえ}へ暗くなる、ちよつ
と人足の途絶え処。

東へ、西へ、と置場処の間^{けんすう}数を示した標杙^くが灰白^{ほのしろ}く立って、車は一台も無かった。
真^ま黒な溝の縁に、野を焚^やいた跡の湿ったかと見える破風^{やぶれぶろしき}呂敷を開いて、式^{かた}のごとき小^こ
灯^{ともし}が、夏になつてもこればかりは虫も寄るまい、明^{あかり}の果敢^{はかな}さ。三束五束^{みたばい}附木を並べた
のを前に置いて、手を支^ついて、縛^{もつ}れ髪^{うなじ}の頸清らかに、襟脚白く、女房がお辞儀をした、仰
向けになつて、踏反^{ふんぞ}つて、泣寐^{なきねい}入りに寐入^{あかんぼ}つたらしい嬰兒^{あかんぼ}が懷に、膝に縛^{すが}つて六歳^{むっつ}ばか

りの男の子が、指を銜えながら往来をきよろきよと視める背後に、母親のその背に凭れ
 かつて、四歳ぐらいなのがもう一人。

一 陣 風が吹くと、姿も店も吹き消されそうであわな光景。浮世の影絵が鬼の手の機

関で、月なき辻へ映るのである。

さりながら、縁日の神仏は、寶錢の降る中ならず、かかる処にこそ、影向して、露

にな濡れそ、夜風に堪えよ、と母子の上に袖笠して、遠音に觀世ものの囃子の声を打聞か
 せたまうらんよ。

健在なれ、御身等、今若、牛若、生立てよ、と窃に河野の一門を呪つて、主税は袂か
 ら戛然と音する松の葉を投げて、足疾くその前を通り過ぎた。

ふと例の煙草屋の金齒の亭主が、箱火鉢を前に、胸を反らせて、煙管を逆に吹口でぴた
 り戸外を指して、ニヤリと笑ったのが目に附くと同時に、四五人店前を塞いだ書生が、
 こなたを見向いて、八の字が崩れ、九の字が分れたかと同じに立騒いで、よう、と声を懸
 ける、万歳、と云う、叱、と压えた者がある。

向うの真砂町の原は、真中あたり、火定の済んだ跡のように、寂しく中空へ立つ火気を
 包んで、黒く輪になつて人集り。寂寞したその原のへりを、この時通りかかった女が二

人。

主税は一目見て、胸が騒いだ。右の方が、お妙である。

リボンも顔も単ひとえに白く、かすりの羽織が夜の艶つやに、ちらちらと蝶が行交う歩行あるきぶり、紅くれないちらめく袖は長いが、不断着の姿は、年も二ツ三ツ長たけて大人びて、愛らしいよりも艶あでや麗かであつた。

風呂敷包を左手ゆんでに載せて、左の方へ附いたのは、大一番の円まるまげ髻だけだけでも、花簪はなかんざしの下になつて、脊が低い。渾名を鮎たこと云つて、ちよんぼりと目の丸い、額に見上げ皺しわの夥お多びただしい婦おんなで、主税が玄関に居た頃勤めた女中おきんどん。

心懸けの好いいい、実じつてい体もので、身が定まつてからも、こうした御機嫌うかがいに出る志しお主しゆうの娘に引添ひつそうて、身を固めて行く態ふりの、その円髻おおきの大いのも、かかる折から頼もしい煙草屋の店でくるくるるぱちぱち、一いち打ダアスばかりの眼め球のたまの中を、仕切しきつて、我身でお妙を遮るように、主税は真中へ立つたから、余り人目に立つので、こなたから進んで出て、声を掛けるのは憚はばかつて差控えた。

そうしてお妙が気が付かないで、すらすらと行過ぎたのが、主税は何となく心寂さびしかつた。つい前さきの年までは、自分が、ああして附いて出たに。

とりボンが靡なびいて、お妙は立停おきまった。

肩が離れて、大おおきな白足袋の色新しく、附木つけぎを売る女房のあわれな灯ともに近しづいたのは円鬚づかづで。

実直ものの丁寧かたがに、屈かがみ腰になつて手を出したは、志を恵んだらしい。親子が揃ぬかつて額ぬかずいた時、お妙の手の巾きんちやく着きが、羽織の紐の下へ入つて、姿は辻の暗がりへ。

書生たちは、ぞろぞろと煙草屋の軒を出て、齊ひとしく星を仰いだのである。

二十九

おとこかねおんなつちおおいよし
○男金女土 大おおいに吉、子五人か九人あり衣食満ふつきち富貴ふつきにして――

男金女土こそ大吉よ

衣食みちみち……………

と歌の方も衣食みちみちのあととは、虫蝕むしくいと、雨染あまじみと、摺剥すりむけたので分らぬが、上に、業なりひら平と小町のようなのが対向さしむかいで、前に土器かわらけを控かえると、万歳まんざい烏帽子えぼしが五人ばかり、ずらりと拝伏した処うしろが描えがいてある。いかさまにも大吉に相違ない。

主税は、お妙の背後姿うしろを見送つて、風が染みるような懷手で、俯向うつむき勝ちに薬師堂の方

へ歩行あるいて来て、ここに露店の中に、三世相がひっくりかえって、これ見よ、と言わなければかりなのに目が留とどまって、漫そぞろに手に取って、相性の処を開けたのであった。

その英吉が、金の性しょう、お妙が、土性であることは、あらかじめお薦うつくしが美しい指の節から、寅卯戌亥とつういぬいと繰出したものである。

半吉でもある事か、大おおに吉よしは、主税に取って、一向に芽出度めでたくない。勿論、いかに迷えば、と云って、三世相を気にするような男ではないけれども、自分とはとにかく、先生は言うに及ばずながら、奥方はどうかすると、一白九紫を口にされる。同じ相性でも、始はじめわるし、中程宜しからず、未覚束おぼつかなしと云う縁なら、いくらか破談の方に頼みはあるが……衣食満ち満ち富貴……は弱った。

のみならず、子五人か、九人あるべしで、平家の一門、藤原一族、いよいよ天下はびこに蔓はらぬずる根ねざしが見えて容易でない。

すでに過日いつかも、現に今日の午後ひるすぎにも、礼之進が推参に及んだ、というきつさきなり、何となく、この縁、纏まりそうで、一方ならず氣に懸る。

ああ、先生には言われぬ事、奥方には遠慮をすべき事にしても、今しも原の前で、お妙さんを見懸けた時、声を懸けて呼び留めて、もし河野の話が出たら、私は厭いや、とおっしや

いよ、と一言いえば可かつたものを。

大道で話をするのが可訝おかしければ、その辺の西洋料理へ、と云つても構わず、鳥居の中には藪蕎麦やぶそばもある。さしむかいに云うではなし、円鬘おんなも附添つた、その女中とても、長年の、犬鷹朋輩の間柄、何の遠慮も仔細しさいも無かつた。

お妙さんがまた、あの目で笑つて、お小遣いはあるの？ とは冷評ひやかしても、どこかへ連れられるのを厭味らしく考えるような間まではないに、ぬかつたことをしたよ。

なぞと取留めもなく思い乱れて、凝じつとその大吉を瞻みつめていると、次第次第に挿画さしえの殿上人に髻ひげが生えて、たちまち尻尾のように足を投げ出したと思うと、横倒れに、小町の膝へ凭もたれかかつて、でれでれと溶けた顔が、河野英吉に、寸分違わぬ。

「旦那いかがでございます。えへへ、」と、かんでらの灯の蔭から、気味の悪い唐突だしぬけの笑わらい声は、当露店の亭主で、目を細うして、額で睨にらんで、

「大分御意に召しましたようで、えへへ。」

「幾干いくくらだい。」

ときよつとした主税は、空くうで値を聞いて見た。

「そうでげすな。」

と古帽子の庇ひさしから透かして、撓ためつつ、
「二十銭にいたして置きます。」と天窓あたまから十倍に吹懸ふっかける。
その時かんでらが煽あおる。

主税は思わず三世相を落して、

「高価たかい！」

「お品が少うげして、へへへ、当節の九星早合点、陶宮手引草などと云う活版本とは違いますで、」

「何だか知らんが、さんざ汚れて引断ひつちぎれているじゃないか。」

「でげすがな、絵が整然ちやんとしておりますでな、挿絵は秀蘭斎貞秀で、こりや三世相かきの名人でげす。」

と出放題な事を云う。相性さえ悪かったら、主税は二十銭のその二倍でもあえて惜くはなかつたろう。

「余り高価いよ。」と立ちかける。

「お幾干で？ ええ、旦那。」

と引据ひっすえるように圧おさえて云った。

「半分か。」

「へい。」

「それだって廉くはない。」

三十

亭主は膝を抱いて反身になり、禪の問答持つて来い、という高慢な顔色で。

「半価値は酷うげす。植木屋だと、じゃあ鉢は要りませんか、と云つて手を打つんでげす。画だけ引剥して差上げる訳にも参りませんで。どうぞ一番御奮発を願いてえんで。五錢や十錢、旦那方にや何だけの御散財でもありやしません。へへへへへ、」

「一体高過ぎる、無法だよ。」

と主税はその言い種が憎いから、ますます買う気は出なくなる。

「でげすがな、これから切通しの坂を一ツお下りになりや、五両と十両は飛ぶんでげしう。そこでもつて、へへへ、相性は聞きたし年紀は秘したしなんて寸法だ。ええ、旦那、三世相は御祝儀にお求め下さいな。」

いよいよむつとして、

「要らない。」と、また立とうとする。

「じゃもう五錢、五百、たつた五錢。」

片手を開いて、^{ひじ}肱で^{けんぺき}肩癖の手つきになり、ばらばらと主税の^{めさき}目前へ^も揉み立てる。

憤然として^{つづ}衝と立った。主税の肩越しにきらりと飛んで、かんでらの^{くすぶ}燻った^{あかり}明を切つて

玉のごとく、古本の上に異彩を放った銀貨があつた。

同時に、

「要るものなら買つて置け。」

と^{さび}錆のある、^{りん}凜とした声がかかった。

主税は思わず身を^{すく}窘めた。帽子を払つて、は、と手を下げて、

「先生。」

露店の亭主は這出して、慌てて古道具の中へ手を^つ支いて、片手で銀貨を^{おさ}圧えながら、き

よとんと見上げる。

茶の中^{なか}折帽^{おれ}を無造作に、黒地に茶の千筋、平お召の一枚小袖。黒^{くろ}斜^{ななこ}子に^{ちようじ}丁子^{どもえ}巴の

三つ紋の羽織、紺の無地献上博多の帯腰すつきりと、片手を懷に、^{ゆきみじか}裾短^かな袖を投げた

風采は、丈高く瘦せぎすな肌に粹である。しかも上品に衣紋正しく、黒八丈の襟を合わせ、色の浅黒い、鼻筋の通つた、目に恐ろしく威のある、品のある、眉の秀でた、ただその口許はお妙に肖て、嬰兒も懐くべく無量の愛の含まるる。

一寸見には、

かの令嬢にして、その父ぞとは思われぬ。令夫人は許嫁で、お妙は先生がいまだ金鈕であつた頃の若木の花。夫婦の色香を分けたのである、とも云うが

……

酒井はどこか小酌の帰途と覺しく、玉樹一人縁日の四辺を払つてゐた。またいつか、人足もややこの辺に疎になつて、薬師の御堂の境内のみ、その中空も汗するばかり、油煙が低く、露店の大傘を圧している。

会釈をしてわずかに擡げた、主税の顔を、その威のある目で屹と見て、

「少いものが何だ、端錢をかれこれ人中で云っている奴があるかい、見つともない。」

と言ひ棄てて、直ぐに歩を移して、少し肩の昂つたのも、霜に堪え、雪を忍んだ、梅の

樹振は潔い。

呆氣に取られた顔をして、亭主が、ずつと乗出しながら、

「へい。」

とばかり怯^{おび}えるように差出した三世相を、ものをも言わず引^ひ搥^{つつ}んで、追^{おい}縊^{すが}つて跡に附くと、早や五六間前途^{むこう}へ離れた。

「どうも恐入ります。ええ、何、別に入^{いり}用^{よう}なのじゃないのでございますから、はい、」
と最初の一喝に怯^{びく}々々^{びく}もので、申^ひ訳^りらしく独^{ひとり}言^{ごと}のように言う。

酒井は、すらりと懐手のまま、斜めに見返つて、

「用^いらないものを、何だつて価^ひを聞^きくんだ。素^ひ見^{やか}すのかい、お前は、」

「……………」

「素^ひ見^{やか}すのかよ。」

「ええ、別に、」と俯^{うつ}向^むいて怨^うめしように、三世相を揉^もみ、且^ひつ捻^ねくる。

少^{しば}時^{らく}して、酒井はふと歩^{あゆ}みを停^とめて、

「早^は瀬。」

「はい、」

とこの返事は嬉しそうに聞えたのである。

名を呼ばれるさえ嬉しいほど、久闊懸違しほらく かけちがつていたので、いそいそ懐かしそうに擦寄つたが、続いて云った酒井の言は、太く主税の胸を刺した。ことば いた

「どこへ行くんだ。」

これで突放されたようになって、思わず後退あとしぎりすること三尺半。

この前の、原一つ越した横町が、先生の住居すまいである。そなたに向って行くのに、従って歩行くものを、（どこへ行く。）は情ない。散々の不首尾に、云う事も、しどろになって、散歩でございます。」

「わざわざ、ここの縁日へ出て来たのか。」

「いいえ、実は……」

といささか取附くことが出来た……

「先刻、御宅へ伺いましたのですが、御留守でございましたから、後程にまた参りましようと存じまして、その間この辺にぶらついておりました。先生は、」

酒井がずつと歩行あるき出したので、たじたじと後を慕うて、

「どちらへ？」

「俺か。」

「ずツと御帰宅おかえりでございますか。」

知れ切ったような事を、つなぎだけに尋ねると、この答えがまた案外なものであつた。

「俺は、何だ、これからお前の処へ出掛けるんだ。」

「ええ！」と云つたが、何は措おいても夜が明けたように勇み立つて、

「じゃ、あのこちらから……角の電車へ、」と自分は一足引返ひっかえしたが、慌ててまた先へ出て、

「お車を申しましょうか。」

とそわそわする。

「水道橋まで歩行くが可い。ああ、酔醒えいざめだ。」と、衣紋えもんを揺ゆつて、ぐつと袖口へ突込んだ、引緊ひきしめた腕組になつたと思うと、林檎りんごの綺麗な、芭蕉実バナナの芬ふんと薫る、燈あかりの真蒼まっさおな、明あかるい水菓子屋の角を曲つて、猶予ためらわず衝つと横町の暗がりへ入つた。

下宿屋の瓦斯がすは遠し、顔が見えないからいくらか物が云いよくなつて、

「奥さんが、お風邪氣いけでいらつしやいますそうで、不可いけませんでございます。」

「逢あつたか。」

「いえ、すやすやお寐みだと承りましたから、御遠慮申しました。」

「妙は居たかい。」

「四谷へ縁かたづ附ついております、先のお光をお連れなさいまして、縁日へ。」

「そうか、娘こどもが歩ある行くようじや、大した御容態でもなしさ。」

と少し言ことばが和らいで来たので、主税は吻ほっと呼吸いきを吐ついて、はじめて持扱ふった三世相を懷ふ中ところへ始末とこをすると、壱岐殿坂の下口おりぐちで、急な不意打。

「お前の許とこでも皆健康みんなたつしやか。」

また冷りとした。内には女中と……自分ばかり、（皆健康か。）は尋常事ただごとでない。けれども、よもや、と思うから、その（皆）を僻耳ひがみみであらう、と自分でも疑つて、

「はい？」

と、聞直したつもりを、酒井がそのまま聞流してしまったので（さようでございます。）と云う意味になる。

で、安からぬ心地がする。突当りの砲兵工廠どうへいの夜の光景は、楽天的に視ながめると、向島の花盛を幻燈で中空へ踊うわしたようで、轟ごうごう々と轟く響とどろが、吾妻橋を渡る車かと聞なさるるが、悲観すると、煙が黄に、炎が黒い。

通りかかる時、蒸気が真^ま白^{つしろ}な滝のように横^{よこ}ざまに漲^{みなぎ}って路を塞いだ。
やがて、水道橋^{たもと}の袂^{たもと}に着く——酒井はその雲に駕^がして、悠々として、早瀬は霧に包まれ
て、ふらふらして。

無言の間、吹かしていた、香の高い卷^{まきたばこ} 蓑^{かさ}を、煙の絡んだまま、ハタとそこで酒井が
棄てると、蒸気は、ここで露になつて、ジューと火が消える。

萌^{もえぎ}黄^{きよ}の光が、ぱらぱらと暗^{やみ}に散ると、炬^{きよ}のごとく輝く星が、人を乗せて衝^つと外^{そと}濠^{ぼり}を流
れて来た。

電車

三十二

河野から酒井へ申込んだ、その縁談の事の為ではないが、同じこの十二日^よの夜、道学者
坂田礼之進は、渠^{かれ}が、主なる発企者で且つ幹事である処の、男女交際会——またの名、家

族懇話会——委くわしく註するまでもない、その向の夫婦が幾組か、一処に相会して、飲んだり、食ったり、饒舌しゃべつたり……と云うと尾籠びろうになる。紳士貴婦人が互に相親睦あいしんぼくする集会で、談政治に渉わたることは少ないが、宗教、文学、美術、演劇、音楽の品定めがそこで成立つ。現代における思潮の淵源、天堂と食堂を兼備えて、薔薇しょうび薫じ星の輝く美的の会合、とあつて、おしめと襷たすきを念頭に置かない催しであるから、留守では、芋が焦げて、小児こどもが泣く。町内迷惑な……その、男女交際会の軍用金。諸処から取集めた百有余円を、馴染なじみの会席へ支払いの用があつて、夜、モオニングを着て、さて電燈の明い電車あかるに乗った。（アバ大人ですか、ハハハ今日の午後ひるすぎ。）と酒井先生方の書生が主税に告げたのと、案ずるに同日であるから、その編上靴は、一日に市中のどのくらいに足跡を印するか料られぬ。御苦労千万と謂わねばならぬ。

先哲曰く、時は黄金である。そんな隙潰ひまつぶしをしないでも、交際会の会費なら、その場で請取つて直ぐに払いを済したら好きそうなものだが、一先ず手許へ引取つて、更あらためて夫子自身を勞するのは？ 知らずや、この勘定の時は、席料なしに、その何とか云う姉さんに、茶の給仕をさせて無錢ただで手を握るのだ、と云ったものがある。世には演劇しばいの見物の幹事をして、それを縁に、俳優やくしやと接吻キスする貴婦人もあると云うから。

もつともこれは、嘘であろう。が、会費を衣兜かくしにして、電車に乗ったのは事実である。

「ええ、込合さげかわいますから御注意を願います。」

礼之進は提革さげかわに掴つかりながら、人と、車の動揺の都度、なるべく操りのポンチたらざる態度を保つて、しこうして、乗合の、肩、頬、耳などの透間から、痘痕あばたを散らして、目を配びんずかんざしつて、鬢びんずかんざし、簪かんざし、底、目つきの色々を、膳の上の箸休めの気で、ちびりちびりと独酌どしやくの格。ああ、江戸児はこの味を知るまい、と乗合の婦おんなの移香たのしを、楽たのしみそうに、齒がをスーと遣やつて、片手あしで頤あごを撫なででいたが、車掌のその御注意に、それと心付くと、俄然がぜんとして、慄然りっぜんとして、膚寒はだうして、腰が軽い。

途端ひっこに引込めた、年紀としの若い半纏はんてんぎ着の手ツ首を、即座の冷汗と取つて置きあぶらあせの膏汗あぶらあせで、ぬらめいた手で、夢中にしつかと引ひ掴つかんだ。

道学先生の徳孤ならず、隣りに掏摸すりが居たそうな。

「……………」

と、わなないて、気が上ずつて、ただ睨にらむ。

対手あいては手拭てぬぐいも被かぶらない職人体のが、ギツクリ、髪かみの揺れるほど、頭あたまを下さげて、
「御免なすつて、」と盗むように哀憐あわれみを乞う目づかいをする。

「出、出しおろう、」

と震え声で、

「馬鹿！」と一つ極めつけた。

「どうぞ、御免なすつて、真平、へい……」

と革に縫ったまま、ぐったりとなつて、悄気返った職人の状は、消えも入りたいとよりは、さながら罪を恥じて、自分で縊ったようである。

「コリヤ」とまた怒鳴つて、満面の痘痕を蠢かして、堪えず、握拳を挙げてその横頬を、ハタと撲った。

「あ、痛、」

と横に身を反らして、泣声になつて、

「酷、酷うござんすね……旦那、ア痛々、」

も一つ拳で、勝誇つて、

「酷いも何も要つたものか。」

哄と立上る多人数の影で、月の前を黒雲が走るような電車の中。大事に革鞆を抱きながら、車掌が甲走つた早口で、

「御免なさい、何ですか、何ですか。」

三十三

カラアの純^{まつしろ}白な、髪をきちんと分けた紳士が、職人体の半纏着^{ひつとら}を引^ひ拵^{とら}えて、出せ、と喚^{わめ}いているからには、その間の消息一目して瞭^{りようぜん}然^{ぜん}たりで、車掌もちつとも猶^た予^めわらず、むずと曲者の肩^{とりしば}を握^{にぎ}った。

「降りろ——さあ、」

と一ツしやくり附けると、革を離して、蹠^{よろよろ}跟^{もた}と凭^{もた}れかかる。半纏着にまた凭^{もた}れ懸^かかるようになつて、三人揉^{もみ}重^{かさ}なつて、車掌台へ圧^おされて出ると、先^{せん}から、がらりと扉を開けて、把^{ハンドル}手に手を置きながら、中を覗^{のぞ}込^こんでいた運転手が、チリン無しにちようどその停留所に車を留めた。

御^{おん}嶽^{たけ}山^{さん}を少し進んだ一ツ橋通^{どおり}を右に見る辺りで、この街鉄は、これから御承知のごとく東明館前を通つて両国へ行くのである。

「少々お待ちを……」

と車掌も大事件の肩を掴まえているから、息急せいて、四五人押込もうとする待合わせの乗組を制しながら、後退あとじきりに身を反そらせて、曲者を釣身つっぱに出ると、両手を突張つっぱつて礼之進も続いて、どたり。

後からぞろぞろと七八人、我勝ちに見物に飛出たのがある。事ありと見て、乗ろうとしたのもそのまま足を留めて、押取おつとり巻いた。二人ばかり婦おんなも交つて。

外へ、その人数を吐出したので、風が透いて、すつきり透明になって、行儀よく乗合の膝だけは揃いながら、思い思いに捻向ねむいて、硝子戸がらすどから覗く中に、片足膝の上へ投げて、丁子巴ちようじどもえの羽織の袖を組合わせて、茶のその中折を額ひたいぶか深く、ふらふら坐眠いねむりをしていたらしい人物は、酒井俊蔵であつた。

けれども、礼之進が今、外へ出たと見ると同時に、明かにその両眼みみを睜みひらいた瞳には、一点も睡ねむそうな曇くもりが無い。

惟おもうに、乗合いの蔭ではあつたが、礼之進に目を着けられて、例の（ますます御翻譯で。を前置きに、（就きましては御縁女儀、）を場処柄かまも介かわらず弁わじられよう恐おそれがあるため、計略ここに出たのであろう。ただしその縁談を嫌ったという形跡はいささかも見当らぬが。

「攫やられたのかい。」

「はい、」

と見ると、酒井の向い合わせ、正面を右へ離れて、ちょうどその曲者の立つた袖下の処に主税が居て、かく答えた。

「何でございますか、騒ぎです。」

先生の前で、立騒いでは、と控えたが、門生が澄まし込んで冷淡に膝に手を置いているにも係わらず、酒井はずつと立つて、脊せだか高く車掌台へ出かけて、ここにも立淀むひとかたまり一団の、弥次の上から、大路へ顔を出した……時であつた。

主客顛倒しゅかくてんどう、曲者の手がポカリと飛んで、礼之進の痘痕あばたは碎けた、火の出るよう。

「猿唐人め。」

あろう事か、あつと頬おさげたをすき圧えて退る、道学者の襟ネクタイ飾へ、斜はすかに肩つかを突懸つけて、横押にぐいと押して、

「何だ、何だ、何だ、何だ？ 掏摸すりだ、盗賊どろぼうだと……クソをくら啖くえ。ナニその、胡麻和ごまあえのような汝てめえが面つらを甜なめろい！ さあ、どこに私わつが汝の紙入しりを掏すったんだ。

こつちあまた、串じょうだん戯しじゃねえ。込合しやうだんつてる中だから、汝の足でも踏んだんだろう、

と思つてよ。足ぐれえ踏んだにしちや、怒りようが御大層だが、面を見や、踵かかとと大した違えは無えから、ははは、」

と夜の大路へ笑が響いて、

「汝てめえの方じや、面を踏まれた分にして、怒りやがるんだ、と断念あきらめてよ。難有ありがたく思え、日ひ傭取ようとりのお職人様が月給取に謝罪あやまつたんだ。

いつ出来た規則だか知らねえが、股ももツたア出すなツてえ、肥満ふとつた乳母おんぼどんが焦じれツたがりやしめえし、厭味ひきずりツたらしい言分だが、そいつも承知で乗つてゐるからにや、他ほか様の足を踏みや、引摺ひきずり下される御法だ、と往生してよ。」

と、車掌にひよこと頭を下げて、

「へいこら、と下りてやりや、何だ、掏摸だ。掏摸たア何でえ。」

また礼之進に突懸つっかる。

三十四

「掏すられた、盗とられたツて、幾千いくちばかり台所の小遣いりようをごまかして来やあがつたか知らね

えけれど、^{てめえ}汝がその面^{つら}で、どうせなけなしの小遣^{こづかい}だろう、落しっこはねえ。

へん、鈍^{のろま}漢。どの道、掏^{ぬす}られたにや違えはねえが、汝がその間拔^{まは}けな風で、内からここのまで^{がまぐち}墓^{はか}口^{ぐち}が有るもんかい、疾^{とつ}くの昔にちよろまかされていやあがつたんだ。

さあ、お目通りで、着物を引^ひ掉^つって神田^{かんだ}児^この膚^{はだ}合^{あい}を見せてやらあ、汝が口説^{おん}く婦^なじゃねえから、見たって目の潰^{つぶ}れる憂慮^{きづ}はねえ、安心して切^き立^だの褌^{ふんどし}を拝^をみやあがれ。

ええこう、念晴^{ねんはる}しを澄^すました上^うじや、汝^{うぬ}、どうするか見^みろ。」

「やあ、風が變^へつた、風が變^へつた。」

と酒井は快活^もに云^いつて、原^{もと}の席^{しき}に歸^{かえ}つた。

車掌台^{しやうだい}からどやどやと客^{きやく}が引込^{ひきこ}む、直^ちぐ後^ごへ——見張^{みはり}員^{いん}に事情^{じきやう}を通^{とほ}じて、事件^{じけん}を引渡^{ひきわた}したと思^{おも}われる——車掌^{しやうしやう}が勢^{いきおい}なく戻^{もど}つて、がちやりと提^{さげ}革^か鞆^{ぼん}を一つ揺^ゆつて、チチンと遣^やつたが、まだ残惜^{ざんしやく}そうに大路^{だいろ}に半身^{はんしん}を乗出^{のりだ}して人^{ひと}だかりの混^{ごた}々^{ごた}揉^もむのを、通^{とほ}り過^かぎ状^{じやう}に見^みて進^{すす}む。

と錦^{きん}帯^{たい}橋^{きよ}の月^{つき}の景色^{けいしき}を、長谷川^{ながはがわ}が大道具^{だうどうぐ}で見^みせたように、ずらりと繋^{つな}が^がつて停留^{ていりゅう}していた幾^{いく}つとない電車^{でんしゃ}は、大通^{おほど}りを廻^{まわ}り舞^ま台^{だい}。事^{こと}の起^おつた車内^{しやない}では、風説^{ふうせき}とりどりの。

あれは掏^す摸^もの術^てでございます。はじめに恐^{おそ}入^いつていた様子^{ようす}じや、確^{たしか}に業^{わざ}をしたに違^{ちが}いま

せんが、もう電車を下りますまでには同類の袂たもとへすっこかしにして、証拠が無いから逆捻さかねじを遣るでございます、と小商人こあきんど風の一分別ありそうなのがその同伴つれらしい前垂掛まえだれかけに云うと、こちらでは法然天窓ほうねんあたまの隠居様が、七度ななたび捜して人を疑えじや、滅多な事は謂われんもので、のう。

そうおつしやれば、あの掬くられた、と言いなさる洋服ふくを着た方も、おかしな御仁でござりますよ。此娘これの貴下あなた、（と隣に腰かけた、孫らしい、豊肌ぼつてりした娘の膝を叩いて、）簪かんざしへ、貴下、立っていてちよいちよい手をお触りなさるでございます。御仁体が、御仁体なで出ましたのを堪こらえていたのでござりますよ。お止しよ、お祖母さんと、その娘はまた同じことをここで云つて、ぼうと紅くなる。

法然天窓は苦笑いをして……後からせせるやら、前からは毛の生えた、大な足おおきを突出すやら……など、浄瑠璃にもあつて、のう、昔、この登り下りの乗合船では女子衆おなごしゅが怪しからず迷惑をしたものじやが、電車の中でも遣りますか、のう、結句、掬摸よりは困りものじやて。

駄目でさ、だつてお前さん、いきなり引摺り下ろしてしまったんだから、それ、ばらば

ら一緒に大勢が飛出しましたね、よしんばですね、同類が居た処で、疾とつくの前、どこかへ、すつ飛んでいるんですから手係りはありやしません。そうでなくって、一人も乗客のりてが散らずに居りや、私達わつしだちだって関合かかりあいは抜けませんや。巡查おまわりが来て、一応検べるなんぞッて事になりかねません。ええ、後はどうなるッて、お前さん、掏摸は現行犯ですからね、証拠が無くって、知らないと言や、それまででさ。またほんとうに拘られたんだか何だか知れたもんじゃありません、どうせ間抜けた奴なんでさあね、と折革鞄おりかばんを抱え込んだ、どこかの中小僧らしいのが、隣合った田舎の親仁おやじに、尻上りに弁じたのである。

いずれ道学先生のために、祝すべき事ではない。

あえて人の憂うれいを見て喜ぶような男ではないが、さりとして差当りああした中の礼之進のため、その憂を憂かなしとして悲むほどの君子でもなからう。悪くすると（状を見ろ。）ぐらいは云うらしい主税が、風向きの悪い大人の風説ふうわさを、耳を澄まして聞き取りながら、太く憂いたわしげな面おも色もちで。

実際鬱ふさぎ込んでいるのはなぜか。

忘れてはならぬ、差向いに酒井先生が、何となく、主税を睨にらむがごとくになっていることを。

三十五

鬱ぐも道理^{ことわり}、そうして電車の動くままに身を任せてはいるものの、主税は果してどこへ連れらるるのか、雲に乘せられたような心持がするのである。

もつとも、薬師の縁日で一所になつて、水道橋から外濠線^{そとぼりせん}に乗った時は、仰せに因つて飯田町なる、自分の住居^{すまい}へ供をして行つたのであるが、元来その夜は、露店の一喝と言ひ、途中の容子と言ひ、酒井の調子が凜^{りん}として厳しくつて、かねて恩威並び行わるる師の君の、その恩に預かれそうではなく、罰利生^{ばちりしやう}ある親分の、その罰の方が行われそうな形勢は、言わずともその事であつたから、電車でも片隅^{すく}へ蹙^{すく}んで、僥倖^{さいわい}そこでも乗客^{のりて}が込んだ、人蔭になつて、眩^{まばゆ}い大目玉の光から、顔を躲^かわして免^{まぬ}かしては可いが、さて、神楽坂で下りて、見附の橋を、今夜に限つて、高い処のように、危つかしく渡ると、件の売^う卜^{うら}者^{ない}の行燈^{あんどう}が、真黒^{まっくろ}な石垣の根に、狐火かと思^{おも}へて、急に土手の松風を聞^きく辺^{あたり}から、そろそろ足許が覺束^{おそろし}なくなつて、心も暗く、吐胸^{とむね}を支^ついたのは、お薦^{すす}の儀。

ひとえに御目玉の可恐^{おそろし}いのも、何を秘^{かく}そう繻子^{しゆす}の帯に極^{きわま}つたのであるから、これより

門口へかかる……あえて、のろけるにしもあらずだけれども、自分の蹻音は、聞覚えて
いる。

その蹻音が、他の蹻音と共に、澄まして音信れれば、（お帰んなさい。）で、出て来る
は定のもの。分けて、お妙の事を、やきもき氣を揉んでいる処。それが為にこうして出向
いた、真砂町の様子を聞き度さに、特に、似たもの夫婦の譬、信玄流の沈勇の方ではない
から、随分翻然と露れ兼ねない。

いぎ、露れた場合には……と主税は冷汗になつて、胸が躍る。

あいにく例のように話しもしないで、ずかずか酒井が歩行いたので、とこう云う間もな
かつた、早や我家の路地が。

堪りかねて、先生と、呼んで、女中が寝ていますと失礼ですから、一足！と云うが疾
いか、（お先へ、）は身体で出て、横ッ飛びに駈け抜ける内も、ああ、我ながら拙い言分。
（待て！ 待て！）

それ、声が掛つた。

酒井はそこで足を留めた。

屹と立つて、

（宵から寐るような内へ、邪魔をするは気の毒だ。他へ行こう、一緒に来な。）

で路が變つて、先生のするまま、驚に攫われたような思いで乗ったのが、この両国行―

なかなか道学者の風説に就いて、善惡ともに、自から思虜を回らすような余裕とは無いのである。

電車が万世橋の交叉点を素直ぐに貫いても、驚は翼を納めぬので、さてはこのまま隅田川へ流罪ものか、軽くて本所から東京の外へ追放になろうも知れぬ。

と観念の眼を閉じて首垂れた。

「早瀬、」

「は、」

「降りるんだ。」

一場展開した広小路は、二階の燈と、三階の燈と、店の燈と、街路の燈と、蒼に、萌黄に、紅に、寸隙なく鏤められた、綾の幕ぞと見る程に、八重に往来う人影に、たちまち寸々と引分けられ、さらさらと風に連れて、鈴を入れた幾千の輝く鞠となつて、八方に投げ交わさるるかと思われる。

ここに一際夜の雲の濃やかに緑の色を重ねたのは、隅田へ潮がさすのであろう、水の影か、星が閃く。

我が酒井と主税の姿は、この広小路の二点となつて、浅草橋を渡果てると、富貴竈が巨人のごとく、仁丹が城のごとく、相對して角を仕切つた、横町へ、斜めに入つて、磨硝子の軒の燈籠の、媚かしく寂寞して、ちらちらと雪の降るような数ある中を、蓑を着た状して、忍びやかに行くのであつた。

柏家

三十六

やがて、貸切と書いた紙の白い、その門の柱の暗い、敷石のぽつと明い、静肅としながら幽なように、三味線の音が、チラチラ水の上を流れて聞える、一軒大構の料理店の前を通つて、三つ四つ軒燈籠の影に送られ、御神燈の灯に迎えられつつ、地の濡れた、軒

に艶ある、その横町の中程へ行くと、一条朧な露路がある。

芸妓家二軒の廂合で、透かすと、奥に薄墨で描いたような、竹垣が見えて、涼しい若葉の梅が一本、月はなけれど、風情を知らせ顔にすつきりと匂むと、向い合った板塀越に、青柳の忍び姿が、おくれ毛を銜えた態で、すらすらと靡いている。

梅と柳の間を潜って、酒井はその竹垣について曲ると、処が何となく羽織の背の婀娜めくのを、隣家の背戸の、低い石燈籠がト踞んだ形で差覗く。

主税は四辺を見て立つたのである。

先生がその肩の聳えた、懐手のまま、片手で不精らしくとんとんと枝折戸を叩くと、ばたばたと登音聞えて、縁の雨戸が細目に開いた。

と派手な友染の模様が透いて、真円な顔を出したが、燈なしでも、その切下げた前髪の下、くるツとした目は届く。隔ては一重で、つい目の前の、丁子巴の紋を見ると、莞爾々と笑いかけて、黙って引込むと、またばたばたばた。

程もあらせず、どこかでねじを圧したと見える、その小座敷へ、電燈が颯と点くのを合図に、中脊で瘦ぎすな、二十ばかりの細面、薄化粧して眉の鮮明な、口許の引緊った芸妓島田が、わざとらしい堅気づくり。袷をしゃんと、前垂がけ、褌を取るのは

知らない風に、庭下駄を引掛^{ひっか}けて、二ツ三ツ飛石を伝うて、カチリと外すと、戸を押してずツと入る先生の背中を一ツ、黙^{だんまり}言^ごで、はたと打った。これは、この柏屋^{かしわや}の姐^{ねえ}さんの小芳^{こよし}と云うものの妹分で、綱次^{つなじ}と聞えた流行妓^{はやりっこ}である。

「大層な要害だな。」

「物騒ですもの。」

「ちつとは貯蓄^{たま}ったか。」

と粗雑^{ぞんざい}に廊下へ上る。先生に従うて、浮かぬ顔の主税と入違いに、綱次は、あとの戸を閉めながら、

「お珍しいこと。」

「……………」

「薦吉姉さんはお達者？」と小さな声。

主税はヒヤリとして、ついに無い、ものをも言わず、恐れた顔をして、ちよつと睨^{にら}んで、そつと上つて、開けた障子へ身体^{からだ}は入れたが、敷居際^{かしこ}へ畏^{かしこ}まる。

酒井先生、座敷の真中へぬいと突立ったままで——その時茶がかった庭を、雨戸で消^いして入り来る綱次に、

「どうだ、色男が糺出せりだしたように見えるか。」

とずつと胸を張つて見せる。

「私には解りません、姉さんにお見せなさいまし、今に帰りますから、」

「そう目前めさきが利かないから、お茶を挽ひくのよ。当節は女学生でも、今頃は内には居ない。ちつと日比谷へでも出かけるが可い。」

「憚はばかりさま様、お座敷は宵の口だけですよ。」

と姿見の前から座蒲団をするりと引いて、床の間の横へ直した。

「さあ、早瀬さん。」と、もう一枚。

主税は膝の傍わきへ置いたままなり。

友染の羽織を着たのが、店から火鉢を抱えて来て、膝と一所に、お大事のもののように据えると、先生は引跨ひんまたぐ体に胡坐あぐらの膝へ挟んで、口の辺あたりを一ツ撫でて、

「敷きな、敷きな。」

と主税を見向いた。

「はい、」

とばかりで、その目玉に射られるようで堅くなつてどこも見ず、面おもてを背けると端はしなく、

重簞笥かさねだんすの前なる姿見。ここで梳くしけずる柳の髪は長かろう、その姿見の丈が高い。

三十七

「お敷きなさいなね、貴下あなた、此家ここへいらつしやりや、先生も何もありません、御遠慮をなさらなくても可いんですよ。」

と意気、文学士を呑む。この女は、主税きしんが整然せいぜんとしているのを、気の毒がるより、むしろ自分の方が、為に窮屈きうくつを感じるので。

その癖、先生には、かえつて、遠慮の無い様子で、肩を並べるようにして支膝つきひざで坐りながら、火鉢の灰をならして、手でその縁をスツと扱しごく。

「茶を一ツ、熱いのを。」

酒井は今のを聞かない振で、

「それから酒だ。」

綱次は入口の低い襖ふすまを振返つて、ト拝む風に、雪のような手を敲たたく。

「自分で起たて。少わかいものが、不精ふせいを極きめるな。」

「厭いやですよ。ちゃんと番をしていなくつては。姉さんに言いつかっているんだから。」

と言いながら、人懐かしげに莞爾にっこりして、

「ねえ、早瀬さん。」

「で、ございますかな。」とようよう膝いざ去り出して、遠くから、背を円くして伸上つて、腕を出して、巻まきた苳ばこに火を点けたが、お蔭ものさしが物指を当てた襦袢じゆばんの袖が見えたので、

氣にして、慌てて、引込める。

「ちつと透かさないか、籠こもるようだ。」

「縁側ですか。」

「ううむ、」
と頭かぶりを掉ふつたので、すつと立つて、背後うしろの肱掛窓ひしかけまどを開けると、辛うじて、雨落だけの隙すきを残して、厳いかめしい、忍返しのある、しかも真ま新あたらしい黒板塀が見える。

「見霽みはらしでも御覧なさいよ。」

と主税を振向いてまた笑う。

酒井しづが凝じつと、その塀なを視ながめて、

「一面の杉の立樹だ、森々としたものさ。」

とくすぐ撥ひつて、独ひとりで笑った。

「しかし山焼の跡だと見えて、真黒は酷ひどいな。俺もゆくゆくは此家こちへ引取られようと思つたが、裏が建つて、川が見えなくなつたから分別を変えたよ。」

そこへ友染がちらちら来る。

「お出花を、早く、」

「はあ、」

「熱くするんだよ。」

「これ、小児こどもばかり使わないで、ちつと立つて食うものの心配でもしろ。民たみはどうした、あれは可いい。小老実こまめに働くから。今に帰つたら是非酌をさせよう。あの、愛あい嬌きようのある処で。」

「そんなに、若いのが好すなら、御内のお嬢さんが可いんだわ。ねえ早瀬さん。」

これには早瀬も答いえなかつたが、先生も苦笑した。

「妙も近頃は不可いくなつたよ。奥方と目配めくばせをし合つて、とかく銚子をこぎつて不可いかん。

第一酌をしないね。学校で、（お酌さん。）と云うそうだ。小児どもの癖に、相応に皮肉なことを云うもんだ。」

「貴郎あなたには小児こどもでも、もうお嫁入よめいり盛さかじやありませんか。どうかすると、こつちへもいらつしやる、学校出の方にや、酒井さんの天女エンゼルが、何のと云つちや、あの、騒いでおいでなさるのがありますわ。」

「あの、嬰あかんぼ児こをか、どこの坊やだ。」

「あら、あんなことを云つて。こちらの早瀬さんなんかでも、ちようど似合にあいの年とし紀ぎ頃ころじやありませんか。」

と何でものう云つてのけたが、主税は懷ふところ中の三世相とともに胸つかに支うえて俯うつむ向むいた。

「その癖、当人は嫁入と云や鼠ねずみの絵だと思つてゐるよ。」

と云いかけて莞爾かんじとして、

「むむ、これは、猫の前で危い話だ。」

と横顔へ煙を吹くと、

「引ひ搔搔いてよ。」と手を挙げたが、思い出したように座を立て、

「どうしたんだらうねえ、電話は、」と呶つぶやいて出ようとする。

「おい、阿婆おっかあは？」

「もう寐ねました。」

「いや、老人としよりはそう有りたい。」

座の白ける間は措かず、綱次はすぐに引返ひっかえして、

「姉さんは、もう先方むこうは出たそうですわ。」

云う間程なく、矢を射るような腕車くるま一台、からからと門かどに着いたと思うと、

「唯今ただいま！」と車夫の声。

三十八

「そうかい。」

と……意味のある優しい声を、ちよいと誰かに懸けながら、一枚の襖音ふすまなく、すらりと開あいて入ったのは、座敷歸りの小芳である。

瓜核うりざねがお顔の、鼻の準じん縄じょうな、目の柔和やさしい、心ばかり面おも窠やつれがして、黒髪の多いのも、

世帯を知ったようで奥床しい。眉のやや濃い、生際はえぎわの可いい、洗い髪を引詰ひっめた総髪そうがみの銀杏いちょうがえ返しに、すっきりと櫛の齒が通つて、柳に雨の艶つやの涼しき。撫肩の衣紋えもんつき、少し

高目なお太鼓の帯の後姿が、あたかも姿見に映つたれば、水のように透通る細長い月の中

から抜出したように氣高いくらい。成程この婦の母親なら、芸者家の阿婆でも、早寝をしよう、と頷かれる。

「まあ、よくいらしつてねえ。」

と主税の方へ挨拶して、微笑みながら、濃い茶に鶴の羽小紋の紋着二枚衿、藍氣鼠の半襟、白茶地に翁格子の博多の丸帯、古代模様空色縮緬の長襦袢、慎ましやかに、酒井に引添うた風采は、左支えなく頭が下るが、分けてその夜の首尾であるから、主税は丁寧に手を下げて、

「御機嫌宜う、」と会釈をする。

その時、先生撫然として、

「芸者に挨拶をする奴があるか。」

これに一言句あるべき処を、姉さんは柔順いから、

「お出花が冷くなつて、」

と酒井の呑さしを取つて、いそいそ立つて、開けてある肱掛窓から、暗い雨落へ、ざ

ぶりと覆すと、斜めに見返つて、

「大な湯覆しだな、お前ン許のは。」

「あんな事ばかり云つて、」

と、主税を見て莞爾にっこりして、白歯を染めても似合う年紀とし、少しも浮いた様子は見えぬ。それから、小芳は伏目になつて、二人の男へ茶を注いだつが、ここに居ればその役目の、

綱次は車が着いた時、さあお帰りだ、と云うとともに、はらはら座敷を出たのを知るべし。酒井は軽く襟かるを扱しごいて、

「そこで、御馳走は、」

「綱次さんが承知をします。」

「また寄鍋だろう、白滝沢山と云う。」

「どうですか。」

と横目で見て、嬉しえみそうに笑を含む。

「いずれ不漁しけさ。」

と打棄うちちやるように云つたが、向直つて、

「早瀬、」と呼んだ声あらたが更まつた。

「ええ。」

「先刻さつきの三世相を見せろ。」

一仔細ひとしさいなくてはならぬ様子があるので、ぎよつとしながら、辞いなむべき数すうではない。…柏家は天井裏を掃除しても、こんなものは出まいと思われる、薄汚れたのを、電燈もとの下に、先生の手に、もじもじと奉る。

引取ひくとつて、ぐいと開けた、氣が入って膝を立てた、顔の色が厳しくなった。と見て胆きもを冷したのは主税で、小芳は何の氣も着かないから、晴々しい面色おももちで、覗のぞきこ込んで、

「心当りでも出来たんですか。」

不答こたえず。煙草の喫すいさしを灰の中へ邪険に突込つつこみ、

「何は、どうした。」

と唐突だしぬけに聞かれたので、小芳は恍惚うつとりしたように、酒井の顔を視ながめると……

「あれよ、ちよいと意氣な、清元うまの旨い、景氣いの可い、」

いいいい本を引返ひっかえして、

「扱帶しづきで、鏡に向った処は、絵のようだという評判の……」

と凝じつと見られて、小芳は引入れられたように、

「薦吉さん。」

と云つて、喫きいかけた煙管きせるを忘れる。

主税は天窓あたまから悚然ぞっとした。

「あれはどうした。」

「え、」

「俺はさっぱり山手のてになつて容子を知らんが、相変らず繁昌はんじょうか。」

三十九

小芳は我知らず、（ああ、どうしよう。）と云う瞳が、主税の方へ流るるのを、無理に堪こらえて、酒井みまもを瞻みまもつた顔が震えて、

「薦吉さんはもう落籍ひきしましたそうです。」

と言わせも果てずに、

「（そうです。）は可怪おかしい。近所に居ながら、知らんやつがあるか、判然はつきり謂いえ、落籍ひきたのか！」

「はい、」と伏目になったトタンに、優しげな睫毛まつげが、（どうかなさいよ。）と、主税の顔へ目配せする。

酒井は、主税を見向きもしないで、悠々とした調子になり、

「そりや可い事をした、泥水稼業を留めたのは芽出度い。で、どこに居る、当時は………よ？」

「私はよく存じませんので……あの、どこか深川に居るんですって。」

「深川？ 深川と云う人に落籍されたのか、川向うの深川かい。」

「……………」

「どうだよ、おい、知らない奴があるか。お前、仲が好くって、姉妹のようだと云ったじゃないか。姉妹分が落籍たのに、その行先が分らない、べら棒があるもんかい。

姉さんとか、小芳さんとか云って、先方でも落籍祝いに、赤飯ぐらい配つたらう、お前食つたらう、そいつを。

蒸立だとか、好い色だとか云って、喜んでよ、こつちからも、イの切手の五十錢ぐらい祝つたらう。小遣帳に記っているだろう。その婦の行先が知れない奴があるものか。

知らなきや馬鹿だ。もつとも、己のような素一步と腐合おうと云う料簡方だから、はじめから惻憐でないのは知れてるんだ。馬鹿は構わん、どうせ、芸者だ、世間並じゃない。芸者の馬鹿は構わんが、薄情は不可んな！ 薄情は。薄情な奴は俺ら真平だ。」

「いつ、私が、薄情な、」

と口惜しく屹となる処を、酒井の劍幕が烈いので、悄れて声が霑んだのである。

「薄情でない！ 薄情さ。懇意な婦の、居処を知らなけりや薄情じゃないか。」

「だって、貴郎。だって、先方でも、つい音信をしないもんですから、」

「先方が音信をしなくっても、お前の薄情は帳消は出来ん。なぜこつちから尋ねんのだ。

こんな稼業だから、暇が無い。行通はしないでも、居処が分らんじゃ、近火はどうす

る！ 火事見舞に町内の頭も遣らん、そんな仲よしがあるものか、薄情だよ、水臭いよ。」

姉さんの震えるのを見て、身から出た主税は堪りかねて、

「先生、」

と呼んだが、心ばかりで、この声は口へは出なかった。

酒井は耳にも掛けないで、

「済まん事さ、俺も他人でないお前を、薄情者にはしたくないから、居処を教えてやろう。

堀の内へでも参詣る時は道順だ。煎餅の袋でも持って尋ねてやれ。おい、薦吉は、当時

飯田町五丁目の早瀬主税の処に居るよ。」

真蒼になつて、

「先生、」

「早瀬！」

と一声屹きつとなつて、膝を向けると、疾風一陣、黒雲を捲まいて、三世相を飛ばし来つて、主税の前へはたと落した。

眼の光射るがごとく

「見ろ！ 野郎は、素すあわせ裕のすツとこ被かぶりよ。婦おんなは編笠あみかさを着て三味線さんみせんを持った、その門かど附つけの絵のある処が、お前たちの相性だ。はじめから承知だろう。今更本郷くんだりの俺の縄張内を胡乱うろついて、三世相の盗人ぬすつと覗のぞきをするにや当るまい。

その間抜けさ加減だから、露店ほしみせの亭主に馬鹿にされるんだ。立派な土百姓になりやあがつたな、田舎漢いなかものめ！」

四十

主税はようよう、それも唾つばが乾くか、かすれた声で、

「三世相を見ておりましたのは、何も、そんな、そんな訳じゃございません……」とだけ

で後が続かぬ。

「翻訳でも頼まれたか、前世は牛だとか、午だとか。」

と串^{じょうだん}戯^しのような警拔な詰問が出たので、いささか言^{ことば}が引^ひ立^つつて、

「いいえ、実はその何でございまして。その、この間中から、お嬢さんの御縁談がはじま
つております、と聞きましたもんですから、」

小芳はそつと酒井を見た。この間^{なか}でも初に聞いた、お妙の縁談と云うのを珍らしそうに。

「ははあ、じゃ何か、妙と、河野英吉との相性を検^{しら}べたのかい。」

果^{かな}せる哉、礼之進が運動で、先生は早や平家の公^{きん}達^{だち}を御存じ、と主税は、折柄も、我
身も忘れて、

「はい、」と云つて、思わず先生の顔を見ると、瞼^{まぶた}が颯^{さつ}と暗くなるまで、眉の根がじりり
と寄つて、

「大きに、お世話だ。酒井俊蔵と云う父親と、歴^{れつき}然とした、謹（夫人の名。）と云う母親
が附いている妙の縁談を、門附風情が何を知つて、周章^{あわて}なさんな。

僭^{せん}上^{じょう}だよ、無礼だよ、罰当り！

お前が、男世帯をして、いや、菜^まが不味^{まず}いとか、女中^{おんな}が焼豆腐ばかり食わせるとか愚痴

った、と云つて、可^いいか、この間持つて行つた重詰^{もつたい}なんざ、妙が独活^{うど}を切つて、奥さんが煮^もたんだ。お前達ア道具の無い内だから、勿^{もつたい}体ない、一度先生が目を通して、綺麗に装^もつてあるのを、重箱のまま、売^{ばいた}婦とせせり箸^{ばし}なんぞしやあがつて、弁松にや叶わないとか、何とか、薄生意気な事を言つたろう。

よく、その慈姑^{くわい}が咽喉^{のど}に詰^{とんし}つて、頓死^{とんし}をしなかつたよ。

無礼千万な、まだその上に、妙の縁談の邪魔をするというは何事だ。」
と大喝した。

主税は思わず居直つて、

「邪魔を……私^{わたくし}、私^{わたくし}が、邪魔なんぞいたしますものでございますか。」

「邪魔をしない！ 邪魔をせんものが、縁談の事に付いて、坂田^{おれ}が己に紹介を頼んだ時、お前なぞそれを断つたんだ。」

「……………」

「なぜ断つた？」

「あんな、道学者、」

「道学者がどうした。結構さ。道学者はお前のような犬でない、畜生じゃないよ。何か、

お前は先方さきの河野一家の理想とか、主義とかに就いて、不服だ、不賛成だ、と云ったそう
だ。不服も不賛成もあったものか。人間並の事を云うな。畜生の分際で、出過ぎた奴だ。

第一、汝きさまのような間違った料簡りょうけんで、先生の心が解るのかよ！ お前は不賛成でも己
は賛成だか、お前は不服でも己は心服だか——知れるかい。

何のかのと、故障を云つて、（御門生は、令嬢に思召しがあるのでござりましょう。）
と坂田が齒を吸つて、合点のみこんでいたが、どうだ。」

「ええ！ あの、痘痕あばたが、」

と色をかえて戦わなないた。主税はしかも点々たらたらと汗を流して、

「他ほかの事とは違います、聞棄てになりません。私わたくしは、私は、これは、改めて、坂田に談じ
なければなりません。」

「何だ、坂田に談じる？ 坂田に談じるまでもない。己がそう思ったらどうするんだ、先
生が、そう思ったら何とするよ。」

「誰が、先生、そんな事。」

「いいや、内の玄関の書生も云った、坂田が己の許とこへ来たと云うと、お前の目の色が違う
そうだ。車夫も云った、車夫の女房も云ったよ。（誰か妙の事を聞きに来たものはないか

。と云つて、お前、車屋でまで聞くんだそうだな。恥しくは思わんか、大きな態なりをしやあがつて、薄髯うすひげの生えた面つらを、どこまで曝さらして歩行あるしているんだ。」
と火鉢をぐいぐいと揺ゆつて。

四十一

「あつちへ蹠ひよろひよろ々々、こつちへ踉よろよろ々々、狐の憑ついたように、俺の近所を、葛西街道かさいにして、肥料桶こえたごの臭をさせるのはどこの奴だ。」

何か、聞きや、河野の方で、妙の身体からだに探搜さぐりを入れるのが、不都合だとか、不意気ぶいきだとか言うそうだが、

噫あゝ、礼之進しやべが皆饒舌しゃべつた……

「意気も不意気も土百姓の知つた事かい。これ、河野はお前のような狐憑こじやないのだぜ。学位のある、立派な男が、大切な嫁とを娶とるのだ。念を入れんでどうするものか。検しらべるのは当あたりまえ前だ。芸者かかあを媽々かかあにするんじゃない。」

また己おれの方じや、探搜さぐりを入れて貰もらいたいのよ。さあ、どこでも非難ひだをして見ろ、と裸体はだか

で見せて差支えの無いように、己と、謹とで育てたんだ。

何が可おそろし恐い？ 何が不平だ？ 何が苦しい？ 己は、渠等かれらの検べるのより、お前がそこらをまごつく方がどのくらい迷惑か知れんのだ。

よしんば、奴等に、身元検べをされるのが迷惑とする、癰しやくに障るとなりや、己がちやんと心得てる。この指一本、妙の身体からだを秘かくした日にや、按摩あんまの勢揃つえほど道学者輩が杖を突張つえつて押寄せて、垣かき覗のぞきを遣ったつて、黒子ほくろ一点も見せやしない、誰だと思う、おい、己だ。」

とまた屹ぎつと見て、

「なぜ、泰然と落着払つて、いや、それはお芽出度い、と云つて、頼まれた時、紹介をせん。癰に障る、野暮だ、と云う道学者に、ぐツと首根ツ子を圧おさえられて、（早瀬氏はこれがために、ちと手負猪じしでござりましたな。）なんて、齒をすすらせるんだ。

馬鹿野郎！ 俺おいら弟子はいくらでもある、が小児こどもの内から手許に置いて、飴あめ棒までねぶらせて、妙と同一内ひとつで育てたのは、汝きさまばかりだ。その子分が、道学者に冷かされるような事を、なぜするよ。

（世間に在るやつでござります。飼犬に手を噛かまれると申して。以来あの御門生には、令

嬢お氣を着けなさらんと相成りませんで。」坂田が云つたを知ってるか。

馬鹿野郎、これ、」

と迫つた調子に、慈愛が籠つて、

「さほどの鈍^{とんちき}的でもなかったが、天罰よ。先生の目を眩^{くら}まして、売婦^{ばいた}なんぞ引摺込む罰が当つて、魔が魅^さしたんだ。

嫁入前の大事な娘だ、そんな狐の憑いた口で、向後^{こうご}妙の名も言うな。

生意氣に道学者に難癖なんぞ着けやあがつて、汝^{てめえ}の面当^{つらあて}にも、娘は河野英吉にたたツ呉れるからそう思え。」

「貴郎^{あなた}、」

と小芳が顔を上げて、

「早瀬さんに、どんな仕損いが、お有んなすつたか存じませんが、決して、お内や、お嬢さんの……（と声が曇つて、）お為悪かれ、と思つてなすつたんじやござんすまいから、」

「何だ。為悪かれ、と思わん奴が、なぜ芸者を引摺込んで、師匠に対して申訳のないような不埒^{ふちち}を働く。第一お前も、」

稻妻が西へ飛んで、

「同類だ、共謀だ、同罪だよ。おい、芸者を何だと思っている。藪入に新橋を見た素丁すでのうちに難有ありがたいもんだと思つていいのか。馬鹿だから、己が不便ふびんを掛けて置きや、増長して、酒井は芸者の情婦いろうを難有がうづむつてると思ふんだらう。高慢に口なんぞ突出しやがうづむつて、俯向うつむいておれ。」

はつと首垂うなだれたが、目に涙一杯。

「そんな、貴郎、難有がうづむつてゐるなんのツて、」

「難有くないものを、なぜ俺の大事な弟子に薦吉を取持うづつたんだい！」

主税は手を支うづいて摺ずつて出た。

「先せ、先生、姉さんは、何にも御存じじゃございません、それは、お目違いでございまして、」

と大呼吸おおいきを胸で吐つくと、

「黙もくれ！ 生れてから、俺おいら、目違いをしたのは、お前達二人ばかりだ。」

「お言葉を反かえしますようでございますが、」

主税は小芳の自分に対する情が仇あだになりそうなので、あるにもあられず据身すえみになって、

「誰がそういうことをお耳に入れましたか存じませんが、芸者が内に居りますなんてとんだ事でございます。やつぱり、あの坂田の奴が、怪しかりません事を。わたくし私は覚悟がござい
ます、彼奴あいつに對しましては、」と目の血走るまで意氣込んだが、後暗い身の明あかりは、ちつとも立つのではなかった。

「覚悟がある、何の覚悟だ。己おれに申訳が無くつて、首を縊くる覚悟か。」

「いえ、坂田の畜生、根もない事を、」

「馬鹿！」

と叱しつして、調子を弛ゆるめて、

「も休み休み言え。失礼な、他人の壁訴訟を聞いて、根も無い事を疑うような酒井だと思
っているか。お前がその盲目めくらだから悪い事を働いて、一端いっぽう己の目を盗んだ気で洒垂しゃあしやあ々々
としているんだ。」

先刻さつきどうした、牛込見附でどうしたよ。慌てやあがつて、言種いぐさもあろうに、（女中が
寝ていますと失礼ですから。）と駈出した、あれは何の状さまだ。婆ばあが高利貸をしていやしま

い、主人あるじの留守に十時前から寝込む奴がどこに在る。

また寝ていれば無礼だ、と誰が云つたい。これ、お前たちに掛けちゃ、己の目は暗やみでも光るよ。飯田町の子分の内には、玄関の揚板の下に、どんな生意気な、婦おんなの下駄が潜ひそんでるか、鼻緒の色まで心得てるんだ。べらぼうめ、内証ないしやうでする事は客の靴へ灸を据えるのさえ秘かくしおおされないで、（恐るべき家庭でござります。）と道学者に言われるような、薄っぺらな奴等が、先生の目を抜こうなぞと、天下を望むような叛逆を企てるな。

悪事をするならするように、もつと手際よく立派に遣れ。見事に己を間抜けに見せろ。同じ叱言こいごとを云うんでも、その点だけは恐入こいりつたと、鼻毛を算よまして讃ほめてやるんだ。三下め、先生の目を盗んでも、お前なんぞのは、たかだか駈出しの（タツシエン、デイープ）だ。」

これは、（攫徒すり）と云う事だそうである。主税は折れるように手をハツと支ついた。

「恐入こいりつたか、どうだ。」

「ですが、全く、その、そんな事は……」

「無い？」

「……………」

「芸者は内に居ないと云うのか。」

「はい。」

霹靂へきれきのごとく、

「帰れ！」

小芳が思わず肩を窘すくめる。

「早瀬さん、私、私じゃ、」

と声が消えて、小芳は紋着もんつきの袖そのまま、眉も残さず面おもてを蔽おほう。

「いや、愛想の尽きた蛆虫うじむしめ、往生際の悪い丁稚でっちだ。そんな、しみつたれた奴は盗賊どろぼう

だつて風上にも置きやしない、酒井の前は恐れ多いよ、帰れ！」

これ、姦通まわとこにも事情はある、親不孝でも理窟を云う。前座のような情実わけでもあつて、

一旦内へ入れたものなら、猫の児この始末をするにも、鯉節かつおぶしはつきものだ。談はなしを附けて、

手を切らして、綺麗さばに捌さばいてやろうと思つて、お前の許とこへ行くつもりで、百と、二百は、

懐中ふとこに心得て出て来たんだ。

この段になつても、まだ、ああ、心得違いをいたしました。先生よしなに、とは言い得ないで、秘し隠しをする料簡りょうけんじゃ、汝うぬが家を野天のてんにして、婦おんなときかっていたいのだろ

う。それで身が立つなら立つて見る。口惜しくば、おい、こうやって馴染の芸者を傍に置いて、弟子に剣突をくわせられる、己のような者になって出直して来い。

さあ、帰れ、帰れ、帰れ！ 汚わしい。帰らんか。この座敷は己の座敷だ。己の座敷から追出すんだ。帰らんか、野郎、帰れと云うに、そこを起たんと蹴殺すぞ！」

「あれ、お謝罪をなさいまし。」と小芳が楯に、おろおろする。

主税は、砕けよ、と身を揉んで、

「小芳さん、お取なしを願います。」と熟と瞻めて色が変わった。

「奥さんに、奥さんに、お願いなさいよ、」

四十三

「何を、奥さんに頼めだい、黙れ。謹が芸者の取持なんぞすると思うか。先刻も云う通り、芳、お前も同類だ、同類は同罪だよ。早瀬を叩出した後じや己が追出る、お前ともこれきりだから、そう思え。」

と言わるるままに、忍び音が、声に出て、肩の震えが、袖を揺った。小芳は幼いものの

ごとく、あわれに頭^{かぶり}を掉^ふつて、厭々をするのであつた。

「姉さん、」

と思込んだ顔を擡^{もた}げた、主税は瞼^{まぶた}を引擦^{ひっこす}つて、元氣づいたような……調子ばかりで、

一向取留の無い様子、しどろになつて、

「貴女^{あなた}は、貴女は御心配下さいませんように……先生、」

と更めて、両手を支^{あつ}いて、息を切つて、

「申訳がございません。とんだ連累^{まきぞえ}でお在んなさいます。どうぞ、姉さんには、そんな事をおっしゃいません様に、私^{わたくし}を御存分になさいまして。」

「存分にすれば蹴殺すばかりよ。」

と吐出すように云つて、はじめて、豊かに煙を吸つた。

「じゃ恐入ったんだな。」

内に蔦吉が居るんだな。

もう陳じないな。」

「心得違いをいたしました……何とも申しようがございません。」

と吻^{ほっ}と息を吐^ついたと思うと、声^{うろ}が霑^{うる}む。

最早罪に伏したので、今までは執成とりなすことも出来なかつた小芳が、ここぞ、と見計みはからつて、初心にも、袂たもとの先を爪つまさぐりながら、

「大目に見てお上あげなすつて下さいまし。薦吉さんも仇あだな氣じゃありません。決して早瀬さんのお世帯の不為ふためになるような事はしませんですよ。一生懸命だつたんですから。あんな派手な妓こが落籍ひきいらい祝いどころじゃありません、貴郎あなた、着換きがえも無くしてまで、借金の方をつけて、夜遁よにげをするようにして落籍ひいたんですもの。」

堅氣に世帯が持てさえすれば、その内には、世間でも、商売したのは忘れましょうから、早瀬さんの御身分に障るようなこともござんすまい。もうこの節じゃ、洗濯ものも出来るし、単衣ひとえものぐらい縫えますつて、この間も夜晩おそく私に逢いに來たんですがね。」

と婀娜あだな涙声になつて、

「羽織が無いから日中は出られない、と拗すねたように云うのがねえ、どんなに嬉しうだつたでしょう。それに土地馴ところれないのに、臆おく病びような妓おですから、早瀬さんがこうやって留守にしていなさいます、今頃は、どんなに心細がつて、戸に附着くつついて、土間に立つて、歸りを待つているか知れませんが、私あそれを思うと……」

と空色の、脛まぶたを染めて、浅く圧おさえた襦袢じゆばんの袖口。月に露添う顔を見て、主税もはらは

らと落涙する。

「世迷言よまいことを言うなよ。」

と膠にべもなく、虞氏ぐしが涙を斥けて、

「早瀬どうだ、分れるか。」

「行処ゆきどころもございません、仕様が無いんでございますから、先生さえ、お見免みのがし下さいませれば、私の外聞わたくしや、そんな事は。世間体なんぞ。」と半云なかばつて唾つが乾く。

「いや、不可いん、許かしやしないよ。」

「そう仰有おっしゃって下さいますのも、世間を思つて下さいますからでございます。もう、私は、自分だけでは、決心をいたしまして、世間には、随分一人前の腕うでを持っていながら、財産を当に婿養子になりましたり、汝てまえが勝手に嫁にすると申して、人の娘の体格検査を望みましたり、」

と赫かつとなつて、この時やや血の色が眉宇びうに浮んだ。

「女学校の教師をして、媒妁なこうどをいたしましたり……それよりか、拾人ひろいての無い、社会の遺失物おとしものを内へ入れます方が、同じ不都合でも、罪は浅かろうと存じまして。それも決して女房になんぞ、しますわけではございません。一生日蔭ないしょものの下女同様に、ただ内

証^うで置いてやりますだけのことでございますから。」

「血迷うな。腕があつて婿養子になる、女学校で見合をする、そりや勝手だ、己の弟子じやないんだから、そのかわり芸者を内へ入れる奴も弟子じやないのだ、分らんか。」

四十四

折から食卓を持つて現れた、友染のその愛々しいのは、座のあたかも吹荒んだ風の跡のような趣に對して、散り残つた歸^{かえり}花^{ばな}の風情に見えた。輝く電燈の光さえ、風^{こがらし}の對手^{あいて}や空に月一つ、で光景^{すさま}が凄じい。

一言も物いわぬ三人の口は、一度にバアと云つて驚かそうと、我がために、はた爾^{しか}く閉されてるように思つて、友染は簪^{かんざし}の花とともに、堅くなつて膳を据えて、浮上るように立つて、小刻^{こきざみ}に襖^{ふすま}の際。

川千鳥がそこまで通つて、チリチリ、と音が留^ねまつた。杯^{はい}洗^{せん}、鉢^{はち}洗^{せん}など、ちよこちよこ運んで、小ぢんまりと綺麗に並べる中^{うち}も、姉さんは、ただ火鉢をちつとずらしたばかり、悄^{しお}れて俯向^{うつむ}いて、ならば直ぐに、頭^{つむり}が打つのを壓^{おさ}えたそうに、火箸に置く手の白

々と、白けた容子を、立際に打傾いで、熟と見て出ようとする時、

「食うものはこれだけか。」

と酒井は笑みを含んだが、この際、天窓から塩で食うと、大口を開けられたように感じたそうで、襖の蔭で慄然と萎んで壁の暗さに消えて行く。

慌てて、あとを閉めないで行ったから、小芳が心付いて立とうとすると、するすると裾を捌いて、慌しげに來たのは綱次。

唯今の注進に、ソレと急いで、銅壺の爛を引抜いて、長火鉢の前を衝と立ち狀に來た。

前垂掛けとはがらりと變つて、鉄お納戸地に、白の角通しの縮緬、かわり色の裳を払つて、上下対の袷の襲、黒繻珍に金茶で菖蒲を織出した丸帯、緋綸子の長襦袢、冷く絡んだ雪の腕で、猶予らう色なく、持つて來た銚子を向けつつ、

「お酌、」

冴えた音を入れると、鶯のほうと立つ、膳の上の陽炎に、電氣の光が和いで、
 ぼろ 々と春に返る。 臙

「まだ宵の口かい。」

「柏家だけではね。」と莞爾する。

「遠慮なく出懸けるが可い、しかし猥褻わいせつだな。」

「あら、なぜ？」

「十一時過ぎてからの座敷じゃないか。」

「御免なさいよ、苦界だわ。ねえ、早瀬さん、さあ、めしあがれよ、ぐうと、」

「いいえ、もう、」

主税は猪口ちよくを視ながむるのみ。

「お察しなさいよ。」

と先生にまたお酌をして、

「御鼻ごひいき肩の民子ちゃん、大江山に捕まえられていますから、助出しに行くんだわ。渡辺

の綱次なのよ。」

「道理こそ、鎖帷子くさりかたびらの扮装いでたちだ。」

「綴しころのように、根が出過ぎてはしなくつて。姉さん、」

と髭たばに手を触る。

「いいえ、」

と云つて、言ことばの内に、（そんな心配をおしでない。）の意味が籠る。綱次は、（安心）

の体に、胸をちよいと軽く撫でて、

「おいしいものが、直ぐにあとから、」

「綱次姉さん、また電話よ。」

と廊下から雛妓こどもの声。

「あい、あい、あちらでも御用とおっしゃる。では、直じき行つて来ますから、貴下あなた帰つちや、厭いやですよ、民ちゃんを連れて来て、一所にまたお汁粉をね。」

酒井は黙うなずつて頷うなずいた。

「早瀬さん、御ご緩ゆつくり。」

と行く春や、主税はそれさえ心細そうに見送つて、先生の目から面おもてを背ける。

酒井は、杯を、つとと献さし、

「早瀬、近う寄れ、もつと、」

と進ませ、肩を聳そびかして屹きつと見て、

「さあ、一ツ遣ろう。どうだ、別離わかれの杯にするか。」

「……………」

「それとも婦おんなを思切るか。芳、酌ついでやれ、おい、どうだ、早瀬。これ、酌ついでやれ、酌

がないかよ。」

銚子を挙げて、猪口ちよくを取って、二人は顔を合せたのである。

四十五

その時、眼光稲妻のごとく左右を射て、

「何を愚図ぐずぐず々々しているんだ。」

「私がお願いでござんすから、」と小芳は胸の躍るのを、片手で密そつと圧おさえながら、

「ともかくも今夜の処は、早瀬さんを帰して上げて下さいまし。そうしてよく考えさして、更あらためてお返事をお聞きなすって下さいましな、後生おっしやですわ、貴郎あなた。」

ねえ、早瀬さん、そうなさいよ。先生も、こんなに仰おっしや有るんですから、貴下あなたもよく御分別おんべんをなさいまし、ここは私が身にかえてお預り申しますから。よ……」

と促うなががされても立ちかねる、主税は後を憂慮きづかうのである。

「薦吉なんきちさんが、どんなに何なんしたって、私が知らない顔をしていれば可よかったのですけれど、思う事は誰も同一おなじだと、私、」

と襟に頤おとが深く、迫った呼吸いきの早口に、

「身につまされたもんだから、とうとうこんな事にしてしまつて、元はと云えば……」

「そんな、貴女あなたが悪いなんて、そんな事があるもんですか。」

と酒井の前を庇かばう気で、肩に力味りきみを入れて云つたが、続いて言おうとする、

（貴女がお世話なさいませんでも……）の以下は、怪しからず、と心着いて、ハツとまた小さくなつた。

「いいえ、私が悪いんです。ですから、後で叱られますから、貴下、ともかくもお帰んなすつて……」

「ならん！ この場に及んで分別へちまも糸瓜もあるかい。こんな馬鹿は、助けて返すと、婦おんなを連れて駈落かけおちをしかねない。短兵急に首を圧おさえて叩つ斬つてしまうのだ。

早瀬。」

と苛々した音調で、

「是も非も無い。さあ、たとえ俺が無理でも構わん、無情でも差支えん、婦おんなが怨んでも、泣いても可い。憧れ死こがしにに死んでも可い。先生の命令いいつけだ、切れつちまえ。

俺を棄てるか、婦を棄てるか。

むむ、この他に言句はないのよ。」

（どうだ。）と頤あごで言わせて、悠然と天井を仰いで、くるりと背を見せて、ドンと食卓に肱ひじをついた。

「婦を棄てます。先生。」

と判然はつきり云った。そこを、酌をした小芳の手の銚子と、主税の猪口ちよくと相触れて、カチリと鳴った。

「幾久く、お杯を。」と、ぐつと飲んで目を塞いだのである。

物をも言わず、背向うしろむきになったまま、世帯話をするように、先生は小芳に向つて、

「そつちの、そつちの熱い方を。——もう一杯ひとつ、もう一ツ。」

と立続けに、五ツ六ツ。ほつと酒が色に出ると、懷中物を懷へ、羽織の紐を引懸けて、ずつと立った。

「早瀬は涙を乾かしてから外へ出ろ。」

小芳はひとと、酒井の肩に、前髪の附くばかり、後に引添ひっそうて縋すがり状ざまに、

「お帰んなさるの。」

「謹が病氣よ。」

と自分で雨戸を。

「それは不可いませんこと。」と縁側に、水際立つてはらりと取った、隅田の春の空色の棲つ力なき小芳の足は、カラリと庭下駄に音を立てたが、枝折戸のまだ開かぬほど、主税は座をずらして、障子の陰になつて、忙せわく巻ま蓑たばこを吸うのであつた。

二時ふたときばかり過ぎてから、主税が柏家の枝折戸を出たのは、やがて一時に近かつたろう。その時は姉さんはじめ、綱次ともう一人のその民子と云う、牡丹ぼたんの花のような若いのも、一所に三人で路地の角まで。

「お互に辛抱するのよう。」と酒氣さかけのある派手な声で、主税を送つたのは綱次であつた。ト同時に渠かれは姉さんと、手をしっかりと取り合つた。

時に、寂ひっそりした横町の、とある軒燈籠の白い明あかりと、板塀の黒い蔭はざまとに挟ひらつて、平くひらたなつていた、類ほおかむり被ひをした伝坊でんぼうが、一人、後先みまわをして、密そつと出て、五六歩行過ぎた、早瀬はやせの背後うしろへ、……拔足つかつで急々。

「もし、」

「……………」

「先刻さつきアどうも。よく助けて下さつたねえ。」

と頬かむりを取った顔は……礼之進に捕まった、電車の中の、その半纏着^{はんでんぎ}。

誰が引く袖

四十六

土曜日は正午までで授業が済む^{ひる}——教室を出る娘たちで、照陽女学校は一斉に温室の花を緑の空に開いたよう、澆^{ばっ}と麗^{うら}な日を浴びた色香は、百合よりも芳しく、杜^{かきつばた}若よりも紫である。

年上の五年級が、最後に静々と出払って、もうこれで忘れた花の一枝もない。四五人がちらほらと、式台へ出かかる中に、妙子が居た。

阿嬢^{おじょう}は、就^な中^{かんずく}活澆^なに、大形の紅入友染の袂^{たもと}の端を、藤色の八ツ口から翻然^{ひらり}と掉^ふつて、何を急いだか飛下りるように、靴の尖^{さき}を揃えて、トンと土間へ出た処へ、小使が一人ばたばたと草履穿^{ばき}で急いで来て、

「ああ酒井様。」

と云う。優等生で、この容色きりようであるから、寄宿舎へ出入りの諸商人しよあきんども知らぬ者は無いのに、別けて馴染なじみの翁様じいさまゆえ、いずれ菖蒲あやめと引き煩わづらわずに名を呼んだ。

「はい。」

と振向くと、小使は小腰かがを屈かめて、

「教頭様が少し御用がござります。」

「私に、」

「ちよつとお出で下さります。」

「あら、何でしょう、」

と友達も、吃驚びっくりしたような顔で、すと、出口に一人、駒下駄こまげたを揃そろえて一人、一人は日傘を開け掛けて、その辺の辻まで一所に帰る、お定まりの道連みちづれが、斉ひとしく三方からお妙みよの顔おもてを瞻みつて黙った。

この段は、あらかじめ教頭が心得こころえしたか、翁様じいさまがまた、そこらの口くちが姦かんいと察さした気転か。

「何か、お父様へ御託おことづけものがござりますで。」

「まあ、そう、」

と莞爾にっこりして、

「待つて下すつて？」と三人へ、一度に黒目勝なのを働して見せると、言合せた様に、二人まで、胸を撫で下して、ホホホと笑った——お腹が空いた——という事だそうである。お妙はずんずん小使について廊下を引返ひっかえしながら、怒ったような顔をして、振向いて同じように胸の許もとを擦さすつて見せた。

「応接室までござりますわ。」

教員室の前を通ると、背後うしろむきで、丁寧ていねいに、風呂敷ふしの皺しわを伸のびして、何か包みかけていたのは習字の教師。向うに仰のけぞ様に寝て、両りょう脇わきを空ひらきに、後脳こうのうを引ひ摺つむようにして椅子にかかつていたのは、数学の先生で。看護婦のような服装で、ちょうど声高こゝろに笑った婦おんなは、言わずとも、体操の師匠である。

行きがかりに目についた、お妙は直ぐに俯目ふしめになって、コトコト蹠あしおと音が早くなった。階子段はしごだんの裏を抜けると、次の次の、応接室ドアの扉は、半開きになって、ペンキ塗の硝子戸がらすど入いりの、大書棚の前に、卓子テイブルに向つて二三種新聞は見えたが、それではなしに、背文字の金の燦爛さんらんたる、新あたらし洋書ブックの中ほどを開けて読む、天窓あたまの、てらてら光るのは、当女学校

の教頭、倫理と英文学受持…の学士、宮畑閑耕。同じ文学士河野英吉の親友で、待合では世話になり、学校では世話をする（蝦茶と緋縮緬の交換だ。）と主税が憤った一人である。

この編の記者は、教頭氏、君に因つて、男性を形容するに、留南奇の薰馥郁としてと云う、創作的文字をここに挟み得ることを感謝しよう。勿論、その香の、二十世紀であるのは言うまでもない。

お妙は、扉に半身を隠して留まる。小使はそのまま向うへ行過ぎる。

閑耕は、キラリ目金を向けて、じろりと見ると、目を細うして、髯の尖をピンと立てた、頤が円い。

「こちらへ、」

と鷹揚に云つて、再び済まして書見に及ぶ。

お妙は扉に附着いたなりで、入口を左へ立つて、本の包みを抱いたまま、しとやかに会釈をしたが、あえてそれよりは進まなかった。

「こちらへ。」と無造作なように、今度は書見のまま声をかけたが、落着かれず、またひよいと目を上げると、その発奮で目金が躍る。

頬^ほへ両手^{りやうて}をびったり、慌^{あわ}てて目金^{めぎん}の柄^{えい}を、鼻筋^{はなぢ}へ揉^も込^こむと、睫毛^{まつげ}を圧^{おさ}え込んで、驚^{おど}いて、指^{さし}の尖^くを潜^{くぐ}らして、瞼^{まぶた}を擦^{こす}つて、

「は、は、は、」と無意味な笑方^{わらかた}をしたが、向直^{むかひ}つて真面目^{まじめ}な顔^{かお}で、

「どうですな。」

四十七

もう傍^{そば}へ来^きそうなものと、閑耕^{かんこう}教頭^{けうとう}が再び、じろりと見ると、お妙^{みよ}は身動^{みどう}きもしないで、熟^{じう}と立^たつて、臍^{ろう}たけた眉^{まゆ}が、雲^{うん}の生際^{せいさい}に浮^ういて見えるように俯向^{うつむ}いているから、威勢^{いせい}に怖^おじて、頭^{かしら}も得^え上げぬのであろう、いや、さもあらん、と思うと……そうでない。酒井先生^{さかいせんせい}の令嬢^{れいじやう}は、笑^{えみ}を含^こんでいるのである。

それは、それは愛々^{あいあい}しい、仇気^{あどけ}ない微笑^{ほほえみ}であつたけれども、この時の教頭^{けうとう}には、素直^{すちう}に言^いう事^{こと}を肯^きいて、御前^{おんまえ}へ侍^{さむらい}わぬだけに、人^{ひと}の悪^{わる}い、与^{くみ}し易^{やす}からざるものがあるように思^{おも}われた。で、苦^{くる}い顔^{かお}をして、

「酒井さん、ここへ来^きなくちや不可^{いか}んですよ。」

時に教頭胸を反らして、卓子タイプルをドンと拳こぶしで鳴らすと、妙子はつつと勇ましく進んで、差向おもていに面を合わせて、そのふっくりした二重ふたかわめ瞼を、臆おくする色なく、円く睜みはつて、

「御用ですか。」

と云った風采、云い知らぬ品威こもが籠こもつて、閑耕は思いかけず、はつと照らされて俯向うつむいた。

教場でこそあれ、二人だけで口を利くのは、抑々そもそも生れて以来最初はじめてである。が、これは教場以外ではいかなる場合にても、こうであろうも計られぬ。

はて、教頭ほどの者が、こんな訳ではない筈はずだが、と更あらためて疑の目を挙げると、脊もすらりとして椅子に居る我を仰ぐよ、酒井の嬢むすめは依然として気高いのである。

「酒井さん……」

声の出処でどころが、倫理を講ずるようには行かぬ。

咽喉のどが狂つて震えがあるので、えへん！ と咳せわぶいて、手巾ハンケチで擦こすつて、四辺あたりをみまわしたが、湯も水も有るのでない、そこで、

「小ウ使いい、」と怒鳴った。

「へ——い、」

と謹んだ返事が響く。教頭はこれに因つて、大にその威嚴を恢復し得て、勢に乗じて、

「貴娘あなたに聞く事があるのですが、」

「はい。」

「参謀本部の翻訳をして、まだ学校なども独逸語を持っていますな——早瀬主税——と云う、あれは、貴娘の父様とうさんの弟子ですな。」

「ええ、そう……………」

「で、貴娘の御宅に置いて、修業をおさせなすつたそうだが、一体あれの幾歳ぐらいの時からですか。」

「知りません。」

と素気なく云つた。

「知らない？」

と妙な顔をして、額でお妙を見上げて、

「知らないですか。」

「ええ、前ぜんにからですもの。内の人と同おんなじ一ですから、いつ頃からだか分りませんの。」

「貴娘は幾歳いくつぐらいから、交際をしたですか。」

「……………」

と黙って教頭を見て、しかも不思議そうに、

「交際^いつて、私、厭^{いや}ねえ。早瀬さんは内の人なんですもの。」と打微笑む。

「内の人。」

「ええ、」と猶^{ためら}予^うわ^なず^ず頷いた。

「貴娘、そういう事を言つては不可^いますまい。あれを（内の人）だなんと云うと、御両親をはじめ、貴娘の名誉に関わるでしょうが、ああ、」

と口を開いてニヤリとする。

お妙はツンとして横を向いた、^{まなじり}睄に優^{やさ}しい怒が籠つたのである。

閑耕は、その背けた顔を覗^{のぞ}込^き込むようにして、胸を曲げ、膝を叩きながら、鼻の尖に、
へへん、と笑つて、

「あんな者と、貴娘交際するなんて、芸者を細君にしていると云うじゃありませんか。汚
わしい。怪しからん不行跡です。実に学者の体面を汚すものです。そういう者の許^{とこ}へ貴娘
出入りをしてはなりません。知らない事はないでしょう。」

妙子は何にも言わなかったが、はじめて眩まぶしそうに瞬まきした。

小使が来て、低頭して命を聞くと、教頭は頤あごで教えて、

「何を、茶をくれい。」

「へい。」

「そこを閉めて行け、寄宿生が覗くようだ。」

四十八

扉とが閉ると、教頭身みがまえ構を崩して、仰向けに笑い懸かけて、

「まあ、お掛なさい、そこへ。貴娘あなたのためにならんから、云うのだよ。」

わざわざ立つて突着けた、椅子の縁へりは、袂たもとに触れて、その片袖を動かしたけれども、お妙は規則正しいお答礼しぎをしただけで、元の横向きに立っている。

「早瀬の事はまだまだ、それどころじゃないですが、」と直ぐにまた眉ひそを顰ひそめて、談じつけるような調子に変わって、

「酒井さん、早瀬は、ありや罪人だね、我々はその名を口にするさえ憚はばかるべき悪漢ですね

。」

とのツそり手を伸ばして、卓子タイプルの上に散ばった新聞を撫でながら、

「貴娘、今日のA……新聞を見んのですか。」

一言聞くと、颯さつと瞼まぶたを紅なれにして、お妙は友染の襦袢じゆばんぐるみ袂の端を堅く握った。

「見ませんか、」

と問返した時、教頭は傲然ごうぜんとして、卓子に頤杖あごづえを支く。

「ええ、」とばかりで、お妙は俯向うつむいて、瞬きしつつ、流しりめづかい眄めづかいをするのであった。

「別に、一大事に関して早瀬は父様の許とこへ、頃日このごろに参った事はないですかね。或あるいは何か

貴娘、聞いた事はありませんか。」

小さな声だったが判然はつきりと、

「いいえ。」と云つて、袖に抱いた風呂敷包みの紫を、皓齒しらはで噛かんだ。この時、この色は、
瞼まぶたのその朱あけを奪あうて、寂さみしく白く見えたのである。

「行かん筈はずはないでしょうが、貴娘、知っていて、まだ私の前に、秘かくすのじゃないかね。」

「存じませんの。」

と頭つむりを掉ふつたが、いたいけに、拗すねたようで、且つくどいのを煩うるさそう。

「じゃ、まあ、知らないとして。それから、お話するですがね。早瀬は、あれは、攫徒の手伝いをする、巾着切の片割のような男ですぞ！」

簪の花が凜として色が冴えたか気が籠つて、屹と、教頭を見向いたが、その目の遣場が無さそうに、向うの壁に充滿の、偉なる全世界の地図の、サハラ砂漠の有るあたりを、清い瞳がうろろする。

「勿論早瀬は、それがために、分けて規律の正しい、参謀本部の方は、この新聞が出ない先に辞職、免官に、なつたです。これはその攫徒に遭つた、当人の、御存じじやろうね、坂田礼之進氏、あの方の耳に第一に入つたです。」

で、見ないんなら御覧なさい。他の二三の新聞にも記いてあるですが。このA……が一番悉しい。」

と落着いて向うへ開いて、三の面を指で教えて、

「ここにありますが、お読みなさい。」

「帰つて、私、内で聞きます。」と云つた、唇の花が戦いだ。

「は、は、は、貴娘、（内の人）だなんと云つたから、極りが悪いかね。何、知らないんなら宜しいです。私は貴娘の名誉を思つて、注意のために云うんだから、よくお聞きなさ

い。帰って聞いたって駄目さね。」

と太く侮いたつた語氣を帯びて、

「父様は、自分の門生だから、十に八九は秘かくすですもの。何で真相が解りますか。」

コツコツ廊下から剥啄ノツクをした者がある。と、教頭は、ぎろりと目金を光らしたが、反身そりみに伸びて、

「カム、イン、」と猶予ためらわずに答えた。

この剥啄と、カム、インは、余りに呼吸が合過ぎて、あたかもかねて言合せてあつたもののようである。

すなわち扉ドアを細目に、先ず七分立しちぶだちの写真のごとく、顔から半身を突入れて中を覗いたのは河野英吉。白地に星模様の堅ネクタイたて、金剛石ダイヤモンドの針留ピンどめの光っただけでも、天窗あたまから爪つまさき先まで、その日の扮装いでたち想うべしで、髪から油とろが溶けそう。

早や得えも言われぬ悦喜の面で、

「やあ、」と声を懸けると、入違いに、後をドーン。

扉の響きは、ぶるぶると、お妙の細い靴の尖に伝わって、揺らめく胸に、地図の大西洋の波あおが煽る。

四十九

「失敬、失敬。」

とちと持上げて、浮かせ気味に物馴れた風で、河野は教頭と握手に及んで、
「やあ、失敬、」と云いながら、お妙の背後から、横顔をじろりと見る。

河野の調子の発奮^{はず}んだほど、教頭は冷やかな位に落着いた態度で、

「どこの帰りか。」

「大学（と力を入れて、）の図書館に検^{しら}べものをして、それから精養軒で午飯^{ひるめし}を食うて来た。これからまたH博士の許^{とこ}へ行かねばならん。」

と忙^{せわ}しそうに肩を掉^ふって、

「君（とわざと低声^{こごえ}で呼んで、）この方は……」

「生徒——」と見下げたように云う。

「はあ、」

「ミス酒井と云う、」と横を向いて忍び笑を遣る。

「うむ、真砂町の酒井氏の、」

と首を伸ばして、分つたような、分らぬような、見知越みしりこしのような、で、ないような、その辺あやふやなお妙の顔の見方をしたが、

「君、紹介してくれたまえ。」

「学校で、紹介は可訝おかしかろう。」

「だってもう教場じやないじやないか。」

「それでは、」と真まことに余儀なさそうに、さて、厳格に、

「酒井さん、過般いつかも参観に見えられた、これは文学士河野英吉君。」

同じ文字を露あらわした大形の名刺の芬ぶんと薰かるのを、疾とく用意をしていたらしい、ひよいと抓つまんで、蚤はやいこと、お妙の袖摺そでずれに出そうとするのを、拙ますい！と目で留め、教頭は髻むすで制して、小鼻へ掛けて揉み上げ揉み上げ揉んだりける。

英吉は眼を睜みはつて、急いでその名刺と共に、両手を衣兜かぶしへ突込んだが、斜めに腰を掉るよと見れば、ちよこちよこ歩行あるきに、ぐるりと地図を背負しょつて、お妙の真正面まっしょうめんへ立つて、も一つ肩を揉んで、手の汗を、ずぼんの横へ擦りつけて、清めた気で、くの字形なりに腕を出したは、短兵急に握手の積つもりか、と見ると、揺ゆかぬ黒髪に自然おのずと四辺あたりを払はらわ

「やあ、はははは、失敬。」

と英吉大照れになって、後ざまに退つて（おお、神よ。）と云いそうな態になり、
「お遊びにいらつしやい、妹たちが、学校は違いますが、皆貴女を知っているのですよ。」

はあ……」

と独で領ひとりうなずいて、大廻りに卓子ティブルの端を廻つて、どたりと、腹這はらんばいになるまでに、拡げ
た新聞の上へ乗懸のりかかつて、

「何を話していたのだい。」

教頭をちよいと見れば、閑耕は額で睨めつけ、苦き顔して、その行過やりすごしを驕たしなめながら、
「実は、今、酒井さんに忠告をしている処だ。」

お妙は色をまた染めた。

「そうだとも！ ええ、酒井さん……」

黙っているから、

「酒井さん！」

「はい、」と声がふるえて聞える。

「貴娘あなた知らんのならお聞きなさい。頃日このころの事ですが、今も云った、坂田礼之進氏が、両

国行の電車で、百円ばかり攫^{すり}徒に拘^やられたです。取られたと思うと、気が着いて、直^{ただち}に其奴^{いつひつかま}を引搥^{ひつか}えて、車掌とで引摺下ろしたまでは、恐入^{おそい}つて冷却^{れいきやう}していたその攫^{すり}徒がだね、たちまち烈火のごとくに猛^{たけ}り出して、坂田氏をなぐつた騒^{さわ}ぎだ。」

「撲^{なぐ}られたつてなあ、大人、気の毒だったよ。」

「災難とも。で、何です。巡查が来たけれども、何の証^{あが}拠も拳^{あが}らんもんで、その場はそれツきりで、坂田氏は何の事はない、打^ぶたれ損の形だったんだね。お聞きなさい——貴娘。

証^{あやし}拠は無かったが、怪^{あやし}むべき風体の奴だから、その筋の係が、其奴を附廻^{ふくま}して、同じ夜^よの午前二時頃に、浅草橋辺で、フトした星が附いて取抑^{とど}えると、今度は袱紗^{ふくさ}に包んだ紙入^かぐるみ、手も着けないで、坂田氏の盗^かられた金子^{かね}を持っていたんだ。

ねえ、貴娘。拘^{こういん}引^ひして嚴重に検^{けん}べたんだね。どこへそれまで隠^{かく}して置いたか。先刻は無かつた紙入を、という事になる……とです。」

あくまで慎重に教頭が云うと、英吉が輕^{そそっか}しく、

「妙だ、妙だよ。妙さなあ。」

「攫^{すり}徒の名も新聞に出ているがね、何とか小僧^{まんた}万太と云うんだ。其奴^{そいつ}の白状した処では、電車の中で搦^おつた時、大不出^{おおふで}来しに打^{ふんづ}攫^かまつて、往生をしたんだが、対^{あいて}手が面^{つら}を撲^{なぐ}つたから、癩^{しやく}に障^さつて堪^{たま}らないので、ちょうど袖の下に俯^{うつむ}向^むいていた男の袖口から、早業でその紙入をずらかし込んで、もう占めた、とそこで逆^{さか}捻^{ねじ}に捻^{ねじ}じたと云うんだね。

ところで、まん直しの仕事でもしたいものだ、と、柳橋^お邊を、晩^{おそ}くなつてから胡^う乱^ろついていると、うっかり出合つたのが、先^{さつ}刻^き、紙入^{すべ}れを^{すべ}に^{すべ}ら^{すべ}かした男だから、金^{かね}子^ねはどうなつたろうと思つて、捕^{とら}まつたらそれ迄だ、と悪^{あく}度^ど胸^{むね}で当^{あた}つて見ると、道理で袖が重い、と云つて、はじめ、氣が着^きいて、袂^{たもと}を探^{たづ}つてその紙入を出^だしてくれて、しかし、一旦こつちの手へ渡^{わた}つたもんだから、よく攫^{すり}徒仲間が遣^はると云う、小包^{こふ}みにでもして、その筋へ出さなくつちや不^ふ可^かんぞ、と念^{ねん}を入れて渡^{わた}してくれた。一所に交番へ来い！ とも云わずに、すつきりしたその人へ義理^{ぎり}が有^あるから、手も附^つけないで突出^ひすつもりで、一先^{ひとしき}ず木賃^き宿^{しゆく}へ帰ろうとする処を、御用^{ごよう}になりました。たつた一^{ひと}時^{とき}でも善人^{ぜん}になつてぼうとした処だつたから掴^{つか}まつたんで、盗^{ぬす}人^{ひと}心^{こころ}を持^もつた時なら、浅草橋^{あさくさ}の欄干^{てすり}を踏^ふんで、富貴^{ふうき}竈^{かまど}の屋根^やへ飛^とんでも、且^{かつ}那^な方^{はう}の手^てに合^あうんじやないと、太平^{たいへい}楽^{らく}を並^{なら}べた。太^{たい}い奴^{やつ}は太^{たい}い奴^{やつ}として。

酒井さん。その攫徒の、袖の下になって、坂田氏の紙入を預ったという男は、誰だと思
いますか、ねえ、これが早瀬なんだ。」

と教頭は椅子をずらして、卓子を軽く打って、

「どうです、貴娘が聞いても変だろうが。

その筋じゃ、直じきその関係者にも当りがついて、早瀬も確か一二度警察へ呼ばれた筈はずだ。
しかしその申立てが、攫徒の言ことばに符合するし、早瀬もちつとは人に知られた、しかるべき
身分だし、何は措おいても、名の響いた貴娘の父様の門下だ、というので、何の仔細しさいも無く
済むにや済んだ。

真砂町の御宅へも、この事に附いて、刑事が出向いたそうだが、そりや憚はばかって新聞にも
書かず、御両親も貴娘には聞かせんだろう。

で、とんだ災難で、早瀬は参謀本部の訳官も辞した、と新聞には体裁よく出してあるが、
考えて御覧なさい。

同じ電車に乗っていて、坂田氏が拘られた事をその騒ぎで知らん筈がない。知っていて
だね、紙入が自分の袂に入っている事を……まあ、仮に攫徒に聞かれるまで気がつかなん
だにしてからがだ、いよいよ分った時、面識の有る坂田氏へ返そうとはしないで、ですな

、
「河野にも言ことばを分けて、

「直接じかに攫徒に渡してやるもいかなもんだよ。何よりもだね、そんな盗賊どろぼうとひそひそ話を……公然とは出来んさ、いずれ密々ひそひそ話さ。」

誰も否とは云わんのに、独りで嵩かさにかかつて、

「紙入を手から手へ譲ゆずりわたし渡をするなんて、そんな、不都合な、後暗い。」

「だがね、」

とちよいちよい、新聞を見るようにしては、お妙の顔を伺い伺い、嬢があらぬ方を向いて、今は流しりめづかい眇めづかいもしなくなつたので、果は遠慮なく視ながめていたのが、なえた様な声を出して、

「坂田が疑うように、攫徒の同類だという、そんな事は無いよ。君、」

「どうとも云えん。酒井氏の内に居たというだけで、誰の子だか素性も知れないんだというじゃないか。」

「父上とうさんに……聞いて……頂戴。」

とお妙は口惜くやしそうに、あわれや、うるみ声して云った。

二人密と目を合せて、苦々しげに教頭が、

「あえてそういう探索をする必要は無いですがね、よしんば何事も措いて問わんとして、少くとも攫徒に同情したに違いない、そうだろう。」

「そりやあの男の主義かも知れんよ。」

「主義、危険極まる主義だ。で、要するにです、酒井さん。ああいう者と交際をなさるというと、先ず貴嬢の名誉、続いてはこの学校の名誉に係りますから、以来、口なんぞ利いてはなりません。宜しいかね。危険だから近寄らんようになさい、何をするか分らんから、あんな奴は。」

お妙は気を張つめんと勤むるごとく、熟と贖る地図を的に、目を睜つて、先刻からどんなに堪えたらう。得忍ばず涙ぐむと、もうはらはらと露になって、紫の包にこぼれた。あわれ主税をして見せしめば、ために命も惜むまじ。

五十一

いや、学士二人驚いた事。

「貴娘、どうしたんだ。」

と教頭が椅子から突立つた時は、お妙は始からしつかり握った袂をそのまま、白羽二重の肌襦袢の筒袖の肱を円く、本の包に袖を重ねて、肩をせめて揉込むばかり顔を伏せて、声は立てずに泣くのであった。

「ええ、どうして泣くです。」

靴音高く傍へ寄ると、河野も慌しく立つて来て、

「泣いちゃ可ませんなあ、何も悲い事は無いですよ。」

「私は貴娘を叱ったんじゃない。」

「けれども、君の話振がちと穩でなかったよ。だから誤解をされたんだ。貴娘泣く事はありません、」

と密と肩に手を掛けたが、お妙の振払いもしなかったのは、泣入って、知らなかったせいであつたに……

河野英吉嬉しそうな顔をして、

「さあ、機嫌を直してお話しなさい。」と云う時、きよときよと目で、お妙の俯向いた玉の頸へ、横から徐々と頬を寄せて、リボンの花結びにちよつと触れて、じたじたと総身

を戦^わかしたが、教頭は見て見ぬ振^おの、謂^もえらく、今夜の会計は河野持^{もち}だ。

途端にお妙が身動をしたので、匆^{はね}飛ばされたように、がたりと退^する。

「もう帰つても可^いいんですか。」

と顔を隠したままお妙が云つた。これには返^こす言^{こと}もあるまい。

「可^いですとも！」

と教頭が言いも果てぬに、身を捻^ひつたなりで、礼もしないで、つかつかと出そうにする
と、がたがたと靴を鳴らして、教頭は及^{およ}腰^びに追^おつかけて、

「貴娘内へ帰つて、父様にこんな事を話しては不可^いんですよ。貴娘の名誉を重んじて忠告
をしただけですから、ね、宜^いいですかね、ね。」

急^せいた声で賺^すすがごとく、顔を附着^{くっ}けて云うのを聞いて、お妙は立留^{とど}まつて、おとなし
く頷^{うな}いたが、（許^すす。）の態度で、しかも優^{やさ}しかった。

「ああ。」と、安堵^{あんど}の溜息を一所にして、教頭は室の真中に、ぼんやりと突立^とつ。

河野の姿が、横ざまに飛んで、あたふた先へ立つて扉^{ドア}を開いて控えたのと、擦違^{すり}いに、
お妙は衝^つと抜けて、顔に当てた袖を落した。

雨を帯びたる海棠^{かいどう}に、廊下の埃^{ほこり}は鎮まつて、正午過^{ひるすぎ}の早や蔭^{かげ}になつたが、打向^{うちむ}いたる

式台の、戸外は麗な日なのである。

ト押おつかさな重こつて、木の実の生なつた状さまに顔を並べて、斉ひとしくお妙を見送った、四ツの髻の粘り加減は、蛞蝓なめくじの這うにこそ。

真砂町の家へ帰ると、玄関には書生が居て、送迎いの手数を掛けるから、いつも素通りにして、横の木戸をトンと押して、水口から庭へ廻つて、縁側へ飛上るのが例で。

さしむき今日あたりは、飛石を踏んだまま、母様御飯かあさん、と遣つて、何ですね、唯ただいま今も言わないで、と躑たしなめられそうな処。

そうではなかった。

例いつもの通りで、庭へ入ると、母様は風邪が長引いたので、もう大概は快いが、まだちつと寒気がする肩つきで、寝着ねまきの上に、縞しまの羽織を羽織つて、珍らしい櫛巻で、面簾おもやつれがした上に、色が抜けるほど白くなって、品の可いのが媚なまめかしい。

寢床の上に端然きちんと坐つて、膝かひへ搔かき巻まきの襟をかけて、その日の新聞を読む——半面が柔かに蒲団ふとんに敷いている。

これを見ると、どうしたか、お妙は飛石に突据えられたようになって、立留まった。美しい袂の影が、座敷へ通つて、母様は心着いて、

「遅かったね。」

「ええ、お友達と作文の相談をしていたの。」

優しくも教頭のために、腹案があつたと見えて、淀みなく返事をしながら、何となく力なさそうに、靴を脱ぎかける処へ、玄関から次の茶の間へ、急いで来た跽音^{あしおと}で、襖^{ふすま}の外から、書生の声、

「お嬢さんですか、今日の新聞に、切抜きをなすつたのは。」

紫

五十二

お茶漬さらさら、大好^{だいすき}な鰺^{あじ}の新切で御飯が済むと、硯^{すずり}を一枚、房楊枝^{ふさようじ}を持添えて、袴を取ったばかり、くびれるほど固く巻いた扱帯^{しこき}に手拭^{てぬぐい}を挟んで、金盃^{かなだらい}をがらんと提げて、黒塗^{もえぎ}に萌葱^{もえぎ}の綿天の緒の立った、齒の曲つた、女中の台所穿^{ばき}を、雪の素足に突^つ

掛けたが、靴足袋を脱いだままの裾短すそみじかなのをちつとも介意かまわず、水口から木戸を出て、日の光を浴びた状さまは、踊舞台の潮汲しおくみに似て非なりで、藤間が新案の（羊飼。）と云う姿、お妙は玄関傍わき、生垣の前の井戸へ出て、乾いてはいたが迂すべりのある井戸流ながしへ危あぶなげ気も無くその曲つた下駄で乗った。女中も居るが、母様の躰しつぺが可いいから、もう十一二の時分から膚はだについたものだけは、人手には掛けさせないので、ここへは馴染なじみで、水心があつて、つい去年あたりまで、土用中は、遠慮なしにからからと汲み上げて、釣瓶つるべへ唇を押附おっつけるので、井筒の紅梅は葉になつても、時々花片はなびらが浮ぶのであつた。直すぐに桃色の襷たすきを出して、袂くぐを投げて潜くぐらした。惜氣の無い二の腕あたり、柳の絮わたの散るよと見えて、井戸縄が走つたと思うと、金盥へ入れた硯の上へ颯さつとかかる、水が紫に、墨が散つた。

宿墨を洗う気で、楊枝の房を、小指を刎はねて撈むしりはじめたが、何を焦じれたか、ぐいと引ひ断つちぎるように邪険である。

ト構内かまえうちの長屋の前へ、通勤つとめに出る外、余り着て来た事の無い、珍らしい背広の扮いでた装ち、何だか衣兜かくしを膨らまして、その上暑中でも持ったのを見懸けぬ、蝙蝠傘こうもりがささえ携えて、早瀬あとしきが前後みまわをしながら、悄しょうぜん然として入つて来たが、梅の許もとなるお妙を見る…

：

「おお、」

あわただと慌しい、懐しげな声をかけて、

「お嬢さん。」

お妙はそれまで気がつかなかった。呼よばれて、手を留とめて主税を見たが、水を汲んだ名残なごりか、顔の色がほんのりと、物いわぬ目は、露や、玉や、およそ声なく言なき世ことばのそれらの、美しいものより美しく、歌よりも心が籠こもった。

「また、水いたずらをしているんですね。」

と顔を視ながめて元氣らしく、呵から々と笑うと、柔い瞳やさしが睨にらむように動き止まって、

「金魚じゃなくつてよ。硯を洗うの。」

「ああ、成程。」

と始めて金盥のぞきこを覗込んで俯向うつむいた時、人知れず目をしばたたいたが、さあらぬ体で、

「御清書ですかい。」

「いいえ、あの、絵なの。あの、上手な。明後日学校へ持って行くのを、これから描かくだわ。」

「御手本は何です、姉様あねさまの顔ですか。」

「嘘よ、そんなものじゃないわ。ああ、」

と莞爾にっこりして、独りうなずで頷いて、

「もつと可いもの、杜かきつばた若たに八橋よ。」

「から衣きつつ馴なれにし、と云うんですね。」

と云いかけて愁然しゅうぜんたり。

お妙は何の気もつかない、派手な面おももち色して、

「まあ、いつ覚えて、ちよいと、感心だわねえ。」

「可哀相に。」

と苦笑いをする、お妙は真顔で、

「だって、主税さん、先年いっか私の誕生日に、お酒に酔って唄ったじゃありませんか。貴下あなたは、

浅くとも清き流れの方よ。ほんとの歌は柄に無いの。」

とつけつけ云う。

「いや、恐入りましたよ。（トちよつと額に手を当てて、）先生は？」と更あらためて聞くと、

心ありげに頷いて、

「居てよ、二階に。」（おいでなさいな。）を色で云って、臍ろったく生垣から、二階を振仰

ぐ。

主税はたちまち思いついたように、

「お嬢さん、」と云うや否や、蝙蝠傘こうもりがさを投出すごとく、井の柱へ押倒おつたおして、勢猛いきおいに、

上衣を片腕から脱ぎかけて、

「久しぶりで、私が洗って差上げましょう。」と、脱いだ上衣を、井戸側へ突込つっこむほど引ひ掛つかけたと思うと、お妙がものを云う間ひまも無かった。手を早や金盥に突込んで、

「貴娘、その房楊枝を。——浅くとも清き流れだ。」

五十三

「あら、乱暴ねえ。ちよいと、まだ釣瓶しずくから雫しずくがするのに、こんな処へ脱ぐんだもの。」
と寝たしなめるように云つて、お妙は上衣を引取ひつとつて、露あらわに白い小腕こがいなで、羽二重で結ゆわえたよ
うに、胸へ、薄色を抱いたのである。

「貴娘は、先生のように癩かんしょう性で、寒うちの中も、井戸端へ持出して、ざあざあ水を使うんだから、こうやって洗うのにも心持は可いいけれども、その代り手を墨だらけにするんです。

爪の間へ染みた日にや、ちよいとじや取れないんですからね。」

「厭ねえ、恩に被^きせて。誰も頼みはしないんだわ。」

「恩に被せるんじやありません。爪^{つまへに}紅と云つて、貴娘、紅をさしたような美^{うつくし}い手の先を台なしになさるから、だから云うんです。やっぱり私が居た時分のように、お玄関の書生さんにしてお貰いなさいよ。」

ああ、これは、」

と片^{かた}頬^{ほえ}笑みして、

「余り上等な墨ではありませんな。」

「可いわ！ どうせ安いんだわ。もう私がするから可^よくつてよ。」

「手が墨だらけになりますと云うのに。貴娘そんな邪険な事を云つて、私の手がお身^{みがわり}代に立っている処じやありませんか。」

「それでもね、こうやつてお召物を持つている手も、随分、随分（と力を入れて、微笑んで、）迷惑してよ。」

「相変らずだ。（と独^{ひとりごと}言のように云つて、）ですが、何ですね、近頃は、大層御勉強でございますね。」

「どうしてね？ 主税さん。」

「だって、明後日^{あさって}お持ちなさろうという絵を、もう今日から御手廻しじやありませんか。」

「翌日^{あした}は日曜だもの、遊ばなくっちゃ、」

「ああ日曜ですね。」

と雫を払った、硯は顔も映りそう。熟^{じゅ}と見て振仰いで、

「その、衣兜^{かぶし}にあります、その半紙を取って下さい。」

「主税さん。」

「はあ、」

「ほほほほ、」とただ笑う。

「何が、可笑^{おか}しいんです。え、顔に墨が勿^はねましたか。」

「いいえ、ほほほほ。」

「何ですてば、」

「あのね、」

「はあ。」

「もしかすると……」

「ええ、ええ。」

「ほほほ、翌日あしたまた日曜ね、貴郎あなたの許ところへ遊びに行つてよ。」

水に映つた主税の色は、颯さつと薄墨の暗くなつた。あわれ、仔細しさいあつて、飯田町の家はもう無かつたのである。

「いらつしやいまして。」

と勢込んで、思入つた語氣で答えた。

「あの、庭の白百合はもう咲いたの、」

「……………」

「この間行つた時、まだ荅つぼみが堅かつたから、早く咲くように、おまじないに、私、フツフツとふくらまして来たけれど、」

と云う口許くちもとこそふくらなりけれ。主税の背せなは、搾木しめぎにかけて細つたのである。

ト見て、お妙が言おうとする時、からりと開あいた格子の音、玄関の書生がぬつと出た。心づけても言うことを肯きかぬ、羽織の紐を結ばずに長くさげて、大跨おおまたに歩行あるいて来て、

「早瀬さん、先生が、」

二階の廊下は目の上の、先生はもう御存じ。

「は、唯今、」

と姿は見えぬ、二階へ返事をするようにして、硯を手に据え、急いで立つと、上衣を開いて、背後へ廻つて、足駄穿いたが対丈に、肩を抱くように着せかける。

「やあ、これは、これはどうも。」

と骨も砕くる背に被いで、戦くばかり身を揉むと、

「意地が悪いわ、突張るんだもの。あら、憎らしいわねえ。」

と身動きに眉を顰めて——長屋の窓からお饒舌りの媽々の顔が出ているのも、路地口の

野良猫が、のっそり居るのも、書生が無念そうにその羽織の紐をくるくると廻すのも——

一向気にもかけず、平気で着せて、襟を圧えて、爪立つて、

「厭な、どうして、こんなに雲脂が生きて？」

五十四

主税が大急ぎで、ト引挟まるようになって、格子戸を潜った時、手をぶらりと下げて見送ったお妙が、無邪気な忍笑。

「まあ、粗そそつかしいこと。」

まことに硯を持って入って、そのかわり蝙蝠傘こうもりと、その柄に引掛けた中折帽なかおれを忘れた。後へ立淀んで、こなたを覗ながめた書生が、お妙のその笑顔を見ると、崩れるほどにニヤリとしたが、例の羽織の紐を輪形なりに掉ふつて、格子を叩きながら、のそりと入った。

誰も居なくなると、お妙はその二重瞼ふたかわめをふつくりとするまで、もう、（その速力をもつてすれば。）主税が上つたらしい二階を見上げて、横歩ある行きに、井の柱へ手をかけて、伸上るよう_ににしていた。やがて、柱に背せなをつけて、くると向をかえて凭もたれると、学校から帰つたなりの袂たもとを取つて、振ふりをはらりと手許へ返して、睫毛まつげの濃くなるまで熟じつと見て、袷あわせめりんすと唐縮緬友染の長襦袢ながじゆばんのかさなる袖を、ちゅうちゅうたこかいなと算かぞえるばかりに、丁寧_にに引分けて、深いほど手首を入れたは、内心人目を忍んだつもりであるが、この所作で余計に目に着く。

ただし遣方が仇気あしけないから、まだ覗くいている件くだんの長屋窓の女房かみさんの目では、おやおや細き螺しやごか、鞠まりか、もしそれ堅豆かたまめだ、と思つた、が、そうでない。

引出したのは、細長い小さな紙で、字のかいたもの、はて、怪しからんが、心配には及ばぬ——新聞の切抜であつた。

さればこそ、学校の応接室でも、しきりに袂を氣にしたので、これに、主税——対坂田の百有余円を掏った……掏摸に關した記事が、細こまに一段ばかり有ることは言うまでもない。お妙は、今朝学校へ出掛けに、女中おんなが味噌汁おみおつけを装もつて来る間に、膳そばの傍へ転んだようになつて、例に因つて三の面の早読と云うのをする、（独語学者の掏摸。）と云う、幾分か挑撥的みだしの標語で、主税のその事が出ていたので、持ちかえて、見直したり、引張ひっぱつたり、畳たたんだり、太く氣を揉いたんだ様子だったが、ツンと怒つた顔をしたと思うと、お盆を差出した女中おんなと入違いに、洋燈棚ランペンへついと起たつて、剪刀はさみを袖の下へ秘かくして来て、四辺あたりをし、ずぶりと入れると、昔取つた千代紙なり、めつきり裁縫しごとは上達なり、見事な手際でチヨキチヨキチヨキ。

母様かあさんは病氣を勤めて、二階へ先生を起しに行つて、貴郎あなた、貴郎と云う折柄。書生は玄關どたんばたん。女中はちようど、台所の何かの湯氣に隠れたから、その時は誰も知らなかつたが、知れずに済みそんな事でもなし、またこれだけを切取つても、主税の迷惑は隠おかまれぬ、内へだつて、新聞は他ほかに二三種も来るのだけれども、そんな事は不関おかま焉。

で、教頭の説くを待たずして、お妙は一切を知つていたので、話を聞いて驚くより、無念の涙が早かつたのである。

と書生はまた、内々はがき便見た^{だより}ようなものへ、投書をする道楽があつて、今日当り出
そうな処と、床の中から手ぐすねを引いたが、寝坊だから、奥へ先繰^{せんぐり}になつたのを、あ
とで飛附いて見ると、あたかもその裏へ、目的物が出る筈^{はず}の、三の面が一小間切抜いてあ
るので、落胆^{がっかり}したが、いや、この悪戯^{いたずら}、嬢的に極^{きわま}つたり、と怨恨骨髓^{うらみ}に徹して、いつ
もより帰宅^{かえり}の遅いのを、玄関の障子から睨め透^{ねすか}して待構えて、木戸を入つたのを追かけて
詰問に及んだので、その時のお妙の返事というのが、ああ、私よ。と済^{すま}したものだつた。
それをまたひとりでここで見直しつつ、半ば過ぎると、目を外らして、多時^{しばらく}思入つた
風であつたが、ばさばさと引裂^{ひつさ}いて、くるりと丸めてハタと向う見ずに投^{ほう}り出すと、もう
一ツの柱の許^{もと}に、その蝙蝠傘^{こうもり}に掛けてある、主税の中折帽^{なかおれ}へ留まつたので、
「憎らしい。」と顔を赤めて、刎^はね飛ばして、帽子^{ハット}を取つて、袖で、ばたばたと埃^{ほこり}を払つ
た。

書生が、すつ飛んで、格子を出て、どこへ急ぐのか、お妙の前を通りかけて、

「えへへへ。」

その時お妙は、主税の蝙蝠傘^{ひっかか}を引抱えて、

「どこへ行くの。」

「車屋へ大急ぎでございます。」

「あら、父上はお出掛け。」

「いいえ、車を持たせて、アバ大人を呼びますので、ははは。」

はなむけ

五十五

媒妁人は宵の口、燈火を中に、酒井とさしむかいの坂田礼之進。

「唯今は御使で、特にお車をお遣わしで恐縮にございます。実はな、ちよと私用で外出をいたしりましたが、俗にかの、虫が知らせるとか申すような儀で、何か、心急ぎ、帰宅いたしますると、門口に車がごわりまして、来客かと存じましたれば、いや、」と、額を撫でて笑うのに前歯が露出。

「はははは、すなわち御持せのお車、早速間に合いました。実は好都合と云って宜しいの

で、これと申すも、偏ひとえに御縁のごわりまする兆しるしでござりまするな、はあ、」

酒井も珍らしく威儀を正して、

「お呼立て申して失礼ですが、家内が病気で居ますんで、」と、手を伸して、巻まきた 蓑たばこをぐつ、と抜く。

「時に、いかがでござりまするな、御令室御病気は。御勝おすぐれ遊ばさん事は、先達ての折も伺いましてござりましてな。河野でも承り及んで、英吉君の母なども大きにお案じ申しております。どういう御容体でいらつしやりまするか、私わたくしもその、甚だ心配を仕つかまつりまするの
で、はあ、」

「別に心配なんじやありません。肺病でも癩病でもないんですから。」

と先生警拔なことを云つて、俯うつむ向きざまに、灰を払つたが、左手ゆんでを袖口へ搔か込んで胸を張つて煙を吸つた。礼之進は、畏かしこまつたズボンの膝を、張はり 肱ひじの両手で二つ叩いて、スーと云つたばかりで、斜めに酒井の顔を見込むと、

「たかだか風邪のこじれです。」

「その風邪が万病の原もとじや、と誰でも申すこととでござりまするが、事まつ 実たくでな。何分御注意なさらんとなりません。」

と妙に白けた顔が、燈火に赤く見えて、

「では、さように御病中でごわりましては、御縁女の事に就きまして、御令室とまだ御相談下さります間もごわりませんので？」

と重々しく素引きかけると、酒井は事も無げな口吻くちぶり。

「いや、相談はしましたよ。」

「ははあ、御相談下さりましたか。それは、」と頤あごを揉んで、スーと云つて、

「御令室の思おもひ召めしはいかがでござりましょうか。実はな、かような事は、打明けて申せ

ば、貴下あなたより御令室の御意向が主でござりまするで、その御言葉一ツが、いかがの極まり

まする処で、推着おしつけがましゅうござりますが、英吉君の母も、この御返事……と申しま

るより、むしろ黄道吉日をば待ちまして、唯今もつて、東京こちらに逗留とまりゆういたしております

る次第で。はあ。御令室の御言葉一ツで、」

と、意気込んで、スーと忙せわしく噉すすつて、

「何か、私わたくしまでも、それを承りまするに就いて、このな、胸とどろが轟とどろくでござりまするが、」

と熟じつと見据じつえると、酒井は半ば目を閉じながら、

「他ほかならぬ先生の御口添じやあるし、伺った通りで、河野さんの方も申分も無い御家です。」

實際、願つてもない良縁で、もとよりかれこれ異存のある筈はずはありませんが、ただ不束ふつつかな娘ですから、

「いや、いや、」

と頭を掉ふつて、大に発奮おおきはげみ、

「とんだ事でござります、怪しかりませんな、河野英吉夫人を、不束などと御意なされますると、親御の貴下のお口でも、坂田礼之進聞棄てに相成りません、はははは。で、御承諾下さりますかな。」

「家内は大喜びで是非とも願いたいと言いますよ。」

時に襖ふすまに密そと当つた、柔やわな衣わの氣勢けいはいがあつた——それは次の座敷からで——先生の二階は、八畳と六畳二室ふたまたで、その八畳の方が書斎であるが、ここに坂田と相對したのは、壇あがりぐちから上うへの六畳の方。

礼之進はまた額に手を当て、

「いや、何とも。私大願成就わたくし仕りましたような心持で。お庇かげを持ちまして、痘痕あばたが栄えるでござりまする。は、はは、」

道学先生が、自からその醜を唱うるは、例として話の纏まつた時に限るのであつた。

五十六

望んでも得難き良縁で異存なし、とあれば、この縁談はもう纏まとまったものと、今までの経験に因つて、道学者はしか心得るのに、酒井がその氣骨稜りようりよう々たる姿に似ず、悠然と構えて、煙草の煙を長々と続ける工合が、どうもまだ話の切目ではなさそうで、これから一物あるらしい、底の方の擦くすくつたさに、礼之進は、日一日歩行廻あるきる、ほとぼりの冷めやらぬ、靴足袋の裏が何となく生熱い。

坐つた膝をもじもじさして、

「ええ、御令室が御快諾下されましたとなりますと、貴下あなたの思召おほしめしは。」
ちつとも猶予ためらわずに、

「私もんくに言句のあろう筈はありません。」

「はあ、成程、」と乗かかったが、まだ荷が済まぬ。これで決着しなければならぬ訳だが……

「しますと、御当人、妙子様でござりまするが。」

「娘は小児こどもです。箸を持って、婿をはさんで、アンとお開き、と嘯くめてやるような縁談ですから、否いやも応もあつたもんじゃありません。」

と小刻こきぎみに灰を落したが、直ぐにまた煙草にする。

道学先生、堪たまりかねて、手を握り、膝ゆすを揺つて、

「では、御両親はじめ、御縁女にも、御得心下されましたれば、直ぐ結納と申すような御相談はいかなものでござりましょうか。善は急げでござりまするで。」と講義の外の格言を提出した。

「先生、そこですよ。」と灰吹に、ずいと突込む。

「成程、就きまして、何か、別儀が。」

「大有り。（と調子が碎けて、）私どもは願う処の御縁であるし、妙にもかれこれは申させません。無論ですね、お前、河野さんの嫁になるんだ。はい、と云うに間違いはありませんが、他ほかにもう一人、貴下からお話し下すつて、承知をさせて頂きたいものがあるんです。どうでしょう、その者へ御相談下さるわけに参りましょうか。」

「お易い事で。何でござりまするか、どちらぞ、御親類でもおあんなさりまするならば、直ぐにこの足で駈着けましても宜しゅう存じまするで。ええ、御姓名、御住所は何とおつ

しやる？」

「住居すまいは飯田町ですが、」

と云う時、先生の肩がやや聳そびえた。

「早瀬ですよ。」

「御門生。」と、吃驚びっくりする。

「掏摸すり一件の男です。」と意味ありげに打微笑む。

礼之進、苦り切った顔色がんしよくで、

「へへい、それはまた、どういう次第でござりまするか、ただ御門生と承りましたが、何ぞ深しき理由でもありません」と云う……」

「理由も何にもありません。早瀬は妙に惚れています。」と澄まして云った、酒井俊蔵は世に聞えたる文学士である。

道学者はアツと痘痕、目を円つぶらかにして口をつぐむ。

「実の親より、当人より、ぞッこん惚れてる奴の意向に従った方が一番間違が無くて宜しい。早瀬がこの縁談を結構だ、と申せば、直ぐに妙を差上げますよ。面倒は入らん。先生が立たちどころ処に手を曳ひいて、河野へ連れてお出でなすつて構いません。早瀬が不可いけない、と

云えば、断然お断りをするまでです。」

黙つてはいられない。

「しますると、その、」

と少し顔の色も変えて、

「御門生は、妙子様に……」と、あとは他人でもいささか言いかねて憚つたのを、……酒井は平然として、

「惚れていますともさ。同一家に我儘を言合つて一所に育つて、それで惚れなければどうかしているんです。もつともその惚方——愛——はですな、兄妹のようか、従兄妹

のようか、それとも師弟のようか、主従のようか、小説のようか、伝奇のようか、そ

こは分りませんが、惚れているにや違いはないのですから、私は、親、伯父、叔母、諸親類、友達、失礼だが、御媒酌人、そんなものの口に聞いたり、意見に従ったりするよりは、一

も二もない、早手廻しに、娘の縁談は、惚れてる男に任せるんです。いかがでしょう、先

生、至極妙策じやありませんか。それともまた酒飲みの料簡でしようか。」

と串戯のように云つて、ちよつと口切つたが、道学者の呆れて口が利けないのに、

押被せて、

「さっぱりとそうして下さい。」

五十七

「貴下、ええ、お言葉ではごわりまするが、スー」と頬の窪むばかりに吸って、礼之進、ねっねっ、……

「さよういたしますると、御門生早瀬子が令嬢を愛すると申して、万一結婚をいたしたいと云うような場合におきましては……でござりまする……その辺はいかがお計らいなされまする思召でござりまするな。」

「勝手にさせます。」と先生言下に答えた。

これにまた少なからず怯おびやかされて、

「しますというと、貴下は自由結婚を御賛成で。」

「いや、」

「はあ、いかような御趣意に相成りまするか。」

「私は許嫁いいなすけの方ですよ。」と酒井は笑う。

「許嫁？　では、早瀬子と、令嬢とは、許嫁でお在いなされますので。」

「決してそんな事はありません。許嫁は、私と私の家内とです。で、二人ともそれに賛成……ですか。同意だったから、夫婦になりましたよ。妙の方はどんな料簡せうけんだか、更さらに私には分りません。早瀬とくつついて、それが自由結婚なら、自由結婚、誰かと駈落さをすれば、それは駈落結婚、」と澄ましたものである。

「へへへ、御串戯ごしやうだんで。御議論がちと矯激きやうげきでござりましょう！」

「先生、人の娘を、嫁に呉くれい、と云う方がかえつて矯激きやうげきですな、考えて見ると。けれども、習慣しやうはんだからちつとも誰あやしも怪まんのです。」

貴下きげから縁談の申込みがある。娘には、惚おれてる奴が居ますから、その料簡次第で御話を取極とりきめる、と云うに、不思議はありますまい。唐突だしぬけに嫁入よめらせると、そのぞつこんであつた男が、いや、失望おうのうだわ、懊惱はんもんだわ、煩悶すべだわ、ととかく世の中が面倒臭いくつて不可かんのです。」

「で、ござりますが、この縁談が破れますと、早瀬子はそれで宜しいとして、英吉君の方が、それこそ同じように、失望、懊惱、煩悶はんもんいたしように、……その辺も御勘考下さりまするように。」

「大丈夫、」

と話は済んだように莞爾して、

「昔から媒酌人附の縁談が纏まらなかつた為に、死ぬの、活きるのは、と云つた例はありません。騒動の起るのは、媒酌人なしの内証の奴に極つたものです。」

「はあ、」

と云つて、道学者は口を開いて、茫然として酒井の顔を見ていたが、

「しかし、貴下、聞く処に抛りますると、早瀬子は、何か、芸妓風情を、内へ入れておると申すでござりまするが。」

「さよう、芸妓を入れていて、自分で不都合だと思つたら、妙には指もさしますまい。直ちに河野へ嫁入らせる事に同意をしましょう。それとも内心、妙をどうかしたいというなら、妙と夫婦になる前に、芸妓と二人で、世帯の稽古をしているんでしょう。どちらとも彼奴の返事をお聞き下さい。或は、自分、妙を欲しいではないが、他なら知らず河野へは嫁つちや不可ん、と云えば、私もお断だ。どの道、妙に惚れてる奴だから、その真実愛しているものの云うことは、娘に取つては、神仏の御託宣と同一です。」

形勢かくのごとくんば、掏摸の事など言い出したら、なおこの上の事の破れ、と礼之進

行詰つて真赤になり、

「是非がごわりませぬ。ともかく、早瀬子を説きまして、更めて御承諾を願おうでござりまする。が、困りましたな。ええ、先刻も飯田町の、あの早瀬子の居らるる路地を、私通りがかりに覗きますると、何か、魚屋体のものが、指図をいたして、荷物を片着けおりまする最中。どこへ引越される、と聞きましたら、（引越すんじゃない、夜逃げだい。）と怒鳴ります仕誼で、一向その行先も分りませんが。」

先生哄然として、

「はははは、事実ですよ。掏摸の手伝いをしたとかで、馬鹿野郎、東京には居られなくなつて、遁げたんです。もうこちらへも暇乞に來ましたが、故郷の静岡へ引込む、と云つていましたから、河野さんの本宅と同郷でしょう。御相談なさるには便宜かも知れせん。……御随意に、——お引取を。」

ああ、媒酌人には何がなる。黄色い手巾を忘れて、礼之進の帰るのを、自分で玄関へ送出して、引返して、二階へ上つた、酒井が次のその八畳の書斎を開けると、そこには、主税が、膳の前に手を支いて、畏つて落涙しつつ居たのである。夫人も傍に。

先生はつかつかと上座に直つて、

「謹、酌をしてやれ。早瀬、今のはお前へ餞別だ。」

五十八

主税は心も闇やみだつたろう、覺束おぼつかなげな足取で、階子壇はしごだんをみしみしと下りて来て、もつとも、先生と夫人が居らるる、八畳の書斎から、一室越ひとまし袋の口を開いたような明あかりは射すが、下は長六畳で、直ぐそこが玄関の、書生の机も暗かった。

さすがは酒井が注意して——早瀬へ驢はなむけにする為だつた——道学者との談話を漏聞かせまいため、先んじて、今夜はそれとなく余所よそへ出して置いたので。羽織の紐は、結んだかどうか、まだ歸らぬ。

酔つてはいないが、蹠踉よろよろと、壁へ手をつくばかりにして、壇を下り切ると、主税は眞まっく暗な穴へ落ちた思おもがして、がつくりとなつて、諸膝もろひざを支つこうとしたが、先生はともかく、そこまで送り出そうとした夫人を、平に、と推着けるように辞退して来たものを、ここで躊躇ちゅうちよしている内に、座を立たれては恐多い、と心を引立てひったた腰を、自分で突飛まつばすごとく、大跨おおまたに出合頭。

颯と開いた襖とともに、唐縮緬友染の不断帶、格子の銘仙の羽織を着て、いつか、縁
日で見たような、三ツ四ツ年紀の長けた姿。円い透硝子の笠のかかった、背の高い竹台
の洋燈を、杖に支く形に持つて、母様の居室から、衝と立ちざまの容子であつた。

お妙の顔を一目見ると、主税は物をも言わないで、そのままそこへ、膝を折つて、畳に
突伏すがごとく会釈をすると、お妙も、黙つて差置いた洋燈の台擦れに、肩を細うして指
の尖を揃えて坐る、袂が畳にさらりと敷く音。

こんな慇懃な挨拶をしたのは、二人とも二人には最初で。玄関の障子にほとんど裾
の附着く処で、向い合つて、こうして、さて別れるのである。

と主税が、胸を斜めにして、片手を膝へ上げた時、お妙のリボンは何の色か、真白な
蝶のよう、燈火のうつろう影に、黒髪を離れてゆらゆらと揺めいた。

「もう帰るの?」

と先へ声を懸けられて、わずかに顔を上げてお妙を見たが、この時の倂は、主税が世を
終るまで、忘れまじきものであつた。

机に向つた横坐りに、やや乱れたか衣紋を気にして、手でちよいちよいと掻合わせるの
が、何やら薄寒そうで風采も沈んだのに、唇が真黒だったのは、杜若を描く墨

の、紫の雫を含んだのであろう、艶に媚めかしく、且つ寂しく、翌日の朝は結う筈の後れ毛さえ、眉を掠めてはらはらと、白き牡丹の花片に心の影のたたずまえる。

「お嬢さん。」

「……………」

「御機嫌宜う。」

「貴下も。」とただ一言、無量の情が籠つたのである。

靴を穿いて格子を出るのを、お妙は洋燈を背にして、框の障子に掴まって、熟と覗くように見送りながら、

「さようなら。」

と勢よく云つたが、快く別れを告げたのではなく、学校の帰りに、どこかで朋達と別れる時のように、かかる折にはこう云うものと、規則で口へ出たのらしい。

格子の外にちらちらした、主税の姿が、まるで見えなくなつたと思うと、お妙は拗ねた状に顔だけを障子で隠して、そのつかまつた縁を、するする二三度、烈しく掌で擦つたが、背を捻つて、切なそうに身を曲げて、遠い所のように、つい襖の彼方の茶の間を覗くと、長火鉢の傍の釣洋燈の下に、ものの本にも実際にも、約束通りの女中の有様。

ちよいと、風邪を引くよ、と先刻から、隣座敷の机に怗つかかつて絵を描きながら、低声で気をつけたその大揺れの船が、この時、最早や見事な難船。

お妙はその状を見定めると、何を穿いたか自分も知らずに、スツと格子を開けるが疾いか、身動ぎに端が解けた、しどけない扱帯の紅。

五十九

「厭よ、主税さん、地方へ行つては。」

とお妙の手は、井戸端の梅に縫つたが、声は早瀬をせき留める。

「……………」

「厭だわ、私、地方へなんぞ行つてしまつては。」

主税は四辺を見たのであろう、闇の青葉に帽子が動いた。

「直き帰つて来るんですからね、心配しないで下さいよ。」

「だって、直だつて、一月や二月で帰つて来やしないんでしょう。」

「そりや、家を畳んで参るんですもの。二三年は引込みます積りです。」

「厭ねえ、二三年。……月に一度ぐらゐは遊びに行つた日曜さえ、私、待遠しかつたんだもの。そんな、二年だの、三年だの、厭だわ、私。」

お妙は格子戸を出るまでは、仔細らしく人目を忍んだようだけれども、こうなるとあえて人聞きを憚るとき、低い声ではなかったのが、ここで急に密りして、

「あの、貴下、父様に叱られて、内証の……奥さん、」

「ええ！」

「その方と別れたから、それで悲くなつて地方へ行つてしまふのじゃないの、ええ、じゃなくつて？」

「……………」

「それならねえ、辛抱なさいよ。母様が、その方もお可哀相だから、可い折に、父様にそう云つて、一所にして上げるつて云つてゐるんですよ。私がね、（お酌さん。）をして、沢山お酒を飲まして、そうして、その時に頼めば可いのよ、父様が肯いてくれますよ。」

「……罰、罰の当つた事をおつしやる！ 私は涙が溢れます、勿体ない。そりやもう、先生の御意見で夢が覺ましたから、生れ代りましたように、魂を入替えて、これから修行と思ひましたに、人は怨みません。自分の越度だけれど、掏摸と、どうしたの、こうしたの、

という汚名を被^きては、人中へは出られません。

先生は、かれこれ面倒だったら、また玄関へ来ておれ、置いてやろう、とおっしゃって下さいますけれども、先生のお手許に居ては、なお掏摸の名が世間に騒^{さわ}しくなるばかりです。

卑怯なようですけれど、それよりは当分地方^{いなか}へ引込んで、人の噂も七十五日と云うのを、果敢^{はか}ないながら、頼みにします方が、万全の策だ、と思いますから、私は、一日旅行してさえ、新橋、上野の停車場^{ステーション}に着くと拝みたいほど嬉しくなります、そんな懐^{なつか}しい東京ですが、しばらく分れねばなりません。」

「厭だわ、私、厭、行っちゃ。」

言^{ことば}が途絶えると、音^{おと}がした、釣瓶^{つるべ}の雫^{しずく}が落ちたのである。

差俯^{さしうつむ}向くと、仄^{ほの}かにお妙の足が白い。

「静岡へ参つて落着いて、都合が出来ますと、どんな茅屋^{あばらや}の軒へでも、それこそ花だけは綺麗に飾つて、歓^{ウエルカム}迎^{むか}をしますから、貴娘^{あなた}、暑中休暇には、海水浴にいらして下さい。

江尻も興津も直^じきそこだし、まだ知りませんが、久能山だの、竜華寺だの、名所があつ

て、清見寺も、三保の松原も近いんですから、」

富士の山と申す、天までとどく山を御目にかけますまで、主税は姫を賺^{すか}して云った。

「厭だわ、そんな事よりか、私、来年卒業すると、もうあんな学校や教頭なんか用は無いんだから、そうすると、主税さんの許^{とこ}へ、毎日朝から行つて、教頭なんかに見せつけてやるのにな。口惜^{くや}しいわ、攫^{すり}徒の仲間だの、巾着切の同類だのって、貴郎^{あなた}の事をそう云うのよ。そして、口を利いちや不可^{いけな}いって、学校の名譽に障るって云うのよ。可^ようござんす、帰途^{かえり}に直ぐに、早瀬さんへ行つていッつけてやるって、言おうかと思つたけれど、行状点を減^ひかれるから。そうすると、お友達に負^{まけ}るから、見つともないから、黙つていたけれど、私、泣いたの。主税さん。卒業したら、その日から、（私も掏摸^{もくもく}かい、見て頂戴。）と、貴下の二階に居て讐^{かたき}を取つてやりたかつたに、残念だわねえ。」

と擦寄^{すりよ}つて、

「地方^{いなか}へ行かない工夫はないの？」と忘れたように、肩^{かた}に凭^{もた}れて、胸^{むね}へ縫^{すが}つたお妙の手を、上へ頂^{うへ}くがごとくに取つて、主税は思わず、唇^{ゆびわ}を指環^{ゆびわ}に接^つけた。

「忘れません。私は死んでも鬼になつて。」

君の影身に附添^{つきぞ}わん、と青葉をさらさらと鳴らしたのである。

巢立の鷹

六十

「おつと、ここ、ここ、飯田町の先生、こつちだ、こつちだ、はははは。」

十二時近い新橋停車場ステイションの、まばらな、陰気な構内も、冴返る高調子で、主税を呼懸けたのは、め組の惣助。

手荷物はずつかり、このいさみが預つて、先へ来て待合させたものと見える。おおきしな革鞆かばんを横倒しにして、えいこらさと腰を懸けた。重荷に小附の折革鞆ボオトフオリオ、慾張つて挟んだ書物の、背のクロオスの文字が、伯林ベルリンの、星の光はかくぞとて、きらきら異彩を放つのを、瓢箪ひょうたん式に膝に引着け、あの右角の、三等待合の入口を、叱られぬだけに塞いで、樹下石上の身の構え、電燈の花見る面色つらつき、九分九厘に飲酒おみつたり矣。

あれでは、我慢が仕切れまい、真砂町の井筒もとの許で、青葉落ち、枝裂けて、お嬢と分れ

て来る途中、どこで飲んだか、主税も陶然たるもので、かつと二等待合室を、入口から帽子を突込んで覗く処を、め組は渠のいわゆる（こつち。）から呼んだので。これが一言でブーンと響くほど聞えたのであるから、その大音や思うべし。

「やあ、待たせたなあ。」

主税も、こうなると元気なものなり。

ドッコイシヨ、と荷物は置棄てに立つて来て、

「待たせたぜ、先生、私あ九時から来ていた。」

「退屈したろう、気の毒だったい。」

「うんや、何。」

とニヤリとして、半纏の腹を開けると、腹掛へ斜つかいに、正宗の四合罎、ト内証

で見せて、

「これだ、訳やねえ、退屈をするもんか。時々喇叭を極めちやあね、」

と向顔巻の首を掉つて、

「切符の売下口を見物でさ。ははは、別嬪さんの、お前さん、手ばかりが、あすこで、

真白にこうちらつく工合は、何の事あねえ、さしがねで蝶々を使うか、活動写真の花火

と云うもんだ、見物みものだね。難ありがて有え。はははは。」

「馬鹿だな、何だと思う、お役人だよ、怪しからん。」

と苦笑いをして賤たしなめながら、

「家はすっかり片附いたかい、大変だったろう。」

「戦いくさだ、まるで戦だね。だが、何だ、帳場の親方も来りや、挽ひきこ子も手伝って、燈あかりの点つく前

にや縁ランブの下こわの洋燈の破れまで掃出した。何をどうして可いんだか、お前めえさん、みんな根こ

そぎ敲たたき売れ、と云うけれど、そうは行かねえやね。薦わかしちゃんが、手を突込んだ糠味なぐ噌な

んざ、打うち棄ちやるのは惜おしいから、車屋かかあの媽かあ々に遣りさ。お仏壇は、薦わかしちゃんが人手にや渡さ

ねえ、と云うから、私は引背負ひつしよつて、一度内へ帰けえつたがね、何だつて、お前さん、女人禁

制で、薦わかしちゃんに、采さいを掉ふらせねえで、城を明渡すんだから、煩むずかしいや。長火鉢の引出し

から、紙にくるんだ、お前さん、仕つけ糸の、抜屑を丹念に引丸ひんまるめたのが出たのにや、

お源坊が泣出した。こんな御新造ごしんぞうさんが氣をつけてなすつたお世帯だのにツて、へん、

遣つてやあがら。

ええ、飲みましたとも。鉄砲巻は山に積むし、近所の肴さかなや屋やから、鰯かつおはござつてら、鮪まぐろ

の活いきの可いやつを目利して、一土手提げて来て、私が切味きれあじをお目にかけたね。素敵な切

味、一分だめしだ。転がすと、一が出ようというやつを親指でなめずりながら、酒は鉢はちめ前で、焚火えで、煮爛にがんだ。

さあ、飲めつてえ、と、三人で遣りかけましたが、景氣づいたから手明きの挽子どもを在りつたけ呼よんで来た。薄暗い台所だいどころを覗く奴あ、音羽から来る八百屋だって。こつちへ上れ。豆腐イもお馴染だろう。彼奴背負引あいつしよびけ。やあ、酒屋の小僧か、き様喇叭節を唄え。面白え、となつた処へ、近所の挨拶を済すまして、帰けえつて来た、お源坊がお前さん、一枚いちめえ着換えて、お化粧つくりをしていたろうじやありませんか。蚤取眼のみとりまなこで小切こぎれを探して、さつさと出てでも行く事か。御奉公のおなごりに、皆さんお酌、と来たから、難有ありがてえ、大日如来、己おらが車に乗せてやる、いや、私わっちが、と戦だね。

戦と云やあ、音羽の八百屋は講釈の真似を遣つた、親方が浪花節だ。

ああ、これがお世帯をお持ちなさいますお祝いだったら、とお源坊が涙ぐんだしおらしさに。お前めさん、有象無象うげうむげうが声を納めて、しんみりとしたろうじやねえか。戦だね。泣くやら、はははははは、笑うやら、はははははは。」

「そこでお前さん、何だつて、世帯をお仕舞えなさるんだか、金銭ずくなら、こちらが無尽をしたつて、此家の御夫婦に夜逃げなんぞさせるんじゃないやねえ、と一番しみたれた服装をして、銭の無さそうな豆腐屋が言わあ。よくしたもんだね。

金金ずくなら、め組がついてる、と鉄砲巻の皿を真中へ突出した、と思ひねえ。義理にや叶わねえ、御新造の方は、先生が子飼から世話になった、真砂町さんと云う、大先生が不承知だ。聞きねえ。師匠と親は無理なものと思ひえ、とお祖師様が云つたとよ。無理でも通さにやならねえ処を、一々御尤なんだから、一言もなしに、御新造も身を退いたんだ。あんなにお睦じかつた、へへへ、」

「おい、可い加減にしないかい。」

「可いやね、お前さん、遠慮をするにや当らねえ、酒屋の御用も、挽子連も皆知つてらな
。」

「なお、悪いぜ。」

「まあ、忍けときねえな。それを、お前、大先生に叱られたつて、柔順に別れ話にした早瀬さんも感心だろう。」

だが、何だ、それで家を畳むんじやねえ。若い^{すり}掏摸が^{やッそく}遣損なつて、人中で面を打たれながら、お助け、と瞬^{まばたき}するから、そこア男だ。諾^{よしき}来た、と頼まれて、紙入を隠してやったのが暴露^{ばれ}たんで、掏摸の同類だ、とか何とか云つて、旦那方の交際^{つきええ}が面倒臭くなつたから、引^{ひッぱら}払つて駈落だとな。話は間違つたかも知れねえけれど、何だつてお前さん頼まれて退^ひかねえ、と云やあ威勢が可いから、そう云つて、さあ、おい、皆^{みんな}、一番しやん、と占める処だが、旦那が学者なんだから、万歳、と遣れ。いよう旦那万歳、と云うと御新造万歳、大先生万歳で、ついでに源ちゃん万歳——までは可かつたがね、へへへ、かかり合だ、その掏摸も祝つてやれ。可からう、」

と乗氣になつて、め組の惣助、停車場^{ステーション}で手真似が交つて、

「掏摸万歳——と遣つたが、（すりばんだい。）と聞えましよう。近火^{きんか}のようだね。火事はどこだ、と木遣で騒いで、巾着切万歳！ と祝い直す処へ、八百屋と豆腐屋の荷の番をしながら、人だかりの中へ立つて見てござつた差配^{おおよさん}様が、お前^めさん、苦笑いの顔をひよつこり。これこれ、火の用心だけは頼むよ、と云うと、手廻しの可い事は、車屋のかみさんが、あとへもう一度^{はたき}払を掛けて、縁側を拭^ふき直そう、と云う腹で、番手桶に水を汲んで控えていて、どうぞ御安心下さいましッさ。

私は、お仏壇と、それから、薦ちゃんわっしが庭の百合の花を惜おしがったから、荅つぼみを交まじせて五六本ぶらさげて、お源坊と、車屋の女房かみさんとで、縁の雨戸を操さるのを見ながら、梅坊主の由良之助、と云う思入おもいれで、城を明渡して来ましたがね。

世の中にや、とんだ唐変木も在ったもので、まだがらくたを片附けてる最中でさ、だん袋を穿きあがった、」

と云いかけて、主税の扮装いでたちを、じろり。

「へへへ、今夜はお前めさんも着やつてるけれど。まあ、可いや。で何だ、痘痕あばたの、お前さん、しかも大面おおつらの奴が、ぬうと、あの路地を入いって来やあがって、空いたか、空いたか、と云やあがる。それが先生、あいたかった、と目に涙でも何でもねえ。家は空いたか、と云うんでさ。近頃流行はやるけれど、ありや不躰ぶしつけだね。お前さん、人の引越しの中へ飛込んで、値なんか聞くのは。たとい、何だ、二ツがけ大きな内へ越すんだって、お飯まんまつぶ粒つぶを撒まいてやった、雀ツ子にだつて残懷なごりは惜おしいや、薦ちゃんなんか、馴染なじみになつて、酸漿ほおずきを鳴らすと鳴く、流元ながしもとの蛙けえろはどうしたろうツて鬱ふさぐじゃねえか。」

「止せよ、そんな事。」

と主税は帽子の前を下げる。

「まあさ、そんな中へ来やあがつて、お刺まけに、空くの待っていた、と云う口吻くちぶりで、その上横柄だ。」

誰しやくの癪しやくに障るのも同おんなじ一だ、と見えて、可笑おかしゆうがしたぜ。車屋の挽子めがね、お前めさん、え、え、ええッて、人の悪いッたら、聾つんぼの真似まねをして、痘痕うきの極印うきを打った、其奴そいつの鼻はな頭らへ横のめりに耳みみを突つかけたと思おもいねえ。奴もむか腹はらが立たった、と見えて、空いた家うちか、と喚わめいたから、私わつしア階子段はしごだんの下に、葛くずちゃんにが香においを隠かくして置おいたらしい白粉おしろい入いれを引出ひしながら、空家くうだい！ と怒鳴どなった。吃驚びっくりしやがつて、早瀬はやせは、と聞くから、夜遁よにげげをしたよ、と威おどかすと、へへへ旦那だんな、」

め組は極めて小さい声で、

「私わア高利貸だ、と思おもったから……」

話も事にこそよれ、勿体むたいない、道学だいがくの先生せんせいを……高利貸。

六十二

ちと黙もくったか、と思うと、め組はきよろきよろ四辺あたりを見ながら、帰天斎きてんさいが扱あうように、

敏捷く四合罎から倒にがぶりと飲つて、呼吸も吐かず、

「それからね、人を馬鹿にしやあがつた、その痘痕めい、差配はどこだと聞きやあがる。

差配様か、差配様は此家の主人が駈落をしたから、後を追つかけて留守だ、と言ったら、

苦った顔色をしやがつて、家賃は幾干か知らんが、前にから、空いたら貸りたい、と思う

ておつたんじや、と云うだらうじやねえか。お前さん、我慢なるめえじやねえかね。こう、

可い加減にしねえかい。柳橋の薦吉さんが、情人と世帯を持った家だ、汝達の手に渡

すもんか。め組の惣助と云う魚河岸の大問屋が、別荘にするつてよ、五百両敷金が済ん

でるんだ。帰れ、と喚くと、驚いて出て行つたつけ、はははは、どうだね、氣に入つたら

う、先生。」

「悪戯をするじやないか。」

「だって、お前さん、言種が言種な上に、図体が氣に食わねえや。しらふの時だつたか

ら、まだまあそれで済んだがね。掏摸万歳の時で御覧じろ、えて吉、存命は覚束ねえ。」

と図に乗つて饒舌るのを、おかしそうに聞惚れて、夜の潮の、充ち満ちた構内に滯

標のごとく千鳥脚を押据えて憚からぬ高話、人もなげな振舞い、小面憎かったものであ

らう、夢中になつた渠等の傍で、駅員が一名、密と寄つて、中にもめ組の横腹の辺で唐

突^けに、がんからん、がんからん、がんからん。

「ひゃあ、」と据^{すえ}眼^{まなこ}に呼吸^{いき}を引いて、たじたじと退^すると、駅員は冷々然として衝^つと去つて、入口へ向いて、がらんがらん。

主税も驚いて、

「切符だ、切符だ。」

と思わず口へ出して、慌てて行くのを、

「おっと、おっと、先生、切符なら心得てら。」

「もう買つといたか、それは豪^{えら}い。」

惣助これには答えないで、

「ええ、驚きたい、串^{じょうだん}戯^ごじゃねえ、二合半^{こなから}が処^こフイにした。さあ、まあ、お乗んなせ

え。」

荷物を引立^{ひつた}てて来て、二人で改札口を出た。その半纏^{はんてんぎ}着と、薄色背広の押並んだ対照

は妙であつたが、乗客^{のりて}はただこの二人の影のちらちらと分れて映るばかり、十四五人には過ぎないのであつた。

め組が、中ほどから、急にあたふたと駈出して、二等室を一ツ覗^{のぞ}き越しにも一つ出て、

ひよいと、飛込むと、早や主税が近寄る時は、荷物を入れて外へ出た。

「ここが可いや、先生。」

「何だ、青切符か。」

「知れた事だね、」

「大束おおたばを言うな、駈落の身分じゃないか。幾千いくらだっけ。」

と横へ反身そりみに衣兜かぐしを探ると、め組はどんぶりを、ぎつくと叩き、

「心得てら。」

「お前に達引かして堪るものか。」

「ううむ、」と真面目で、頭かぶりを掉ふつて、

「不残のこらず叩き売った道具のお銭あしが、ずツしりあるんだ。お前めさんが、蔦ちゃんに遣れつて

云うのを、まだ預っているんだから、遠慮はねえ、はははは、」

「それじゃ遠慮しますまいよ。」

と乗込んだ時、他に二人。よくも見ないで、窓へ立って、主税は乗出すようにして妙なことを云った。それは——め組の口から漏らした、河野の母親が以前、通じたと云う——
馬丁べつとう貞造の事に就いてであつた。

「何分頼むよ。」

「むむ、可いって事に。」

主税は笑つて、

「その事じやない、馬丁の居処さ。己も捜すが、お前の方も。」

「……分つた。」

と後退つて、向うざまに顱卷はちまきを占め直した。手をそのまま、花火のごとく上へ開いて、

「いよ、万歳！」

傍かたわらへ来た駅員に、突つんのめるように、お辞儀をして、

「真平御免ねえ、はははは。」

主税は窓から立直る時、向うの隅に、婀娜あだな櫛卷の後姿を見た。ドンと硝子戸がらすどをおろしたトタンに、斜めに振返つたのはお蔭である。

はつと思うと、お蔭は知らぬ顔をして、またくるりと背うしろを向いた。

汽車出でぬ。

貴婦人

一

その翌日、神戸行きの急行列車が、函根の隧道を出切る時分、食堂の中に椅子を占めて、卓子は別であるが、一人外国の客と、流暢に独逸語を交えて、自在に談話しつつある青年の旅客があつた。

こなたの卓子に、我が同胞のしかく巧みに外国語を操るのを、嬉しそうに、且つ頼母しように、熟と見ながら、時々思出したように、隣の椅子の上に愛らしく乗かかった、かすりで揃の、袷と筒袖の羽織を着せた、四ツばかりの男の児に、極めて上手な、肉叉と小刀の扱い振で、肉を切つて皿へ取分けてやる、盛装した貴婦人があつた。

見渡す青葉、今日しとしと、窓の緑に降りかかる雨の中を、雲は白鷺の飛ぶごとく、ちらちらと来ては山の腹を後に走る。

函嶺を絞る点滴に、自然浴した貴婦人の膚は、滑かに玉を刻んだように見えた。

真白なりボンに、黒髪の艶は、金時絵の櫛の光を沈めて、いよいよ漆のごとく、藤紫

のぼかしに牡丹ぼたんの花、蕊しべに金入の半襟、栗梅の紋お召あわせの袷あはせ、薄色の袷つまを襲かさねて、幽かすかに紅の入った黒地友染の下襲したがさね、折からの雨に涼しく見える、柳の腰を、十三の糸で結んだかと黒縹くろじゆす子の丸帯に金泥おきでするすると引いた琴の絃いし、添えた模様の琴柱ことじの一枚ひとつが、ふつくりと乳房を包んだ胸を圧おさえて、時計の金鎖を留めている。羽織は薄い小豆色の縮緬ちりめんに……ちよいと分りかねたが……五ツ紋、小刀持つ手の動くに連れて、指環ゆびわの玉の、幾つか連つてキラキラ人の眼を射るのは、水晶の珠数を爪繰つまぐるに似て、非ず、浮世は今を盛さかりの色あでやかな女俳優おんなやくしやが、子役を連れているような。年齢としは、されば、その児この母親とすれば、少くとも四五であるが、姉とすれば、九でも二十でも差支はたえはない。

婦人は、しきりに、その独語に巧妙な同胞の、鼻筋の通った、細表の、色の浅黒い、眉のやや迫った男の、少々わかわかしい口許くちもとと、心の透通るような眼光まなざしを見て、ともすれば我を忘れるばかりになるので、小児こどもは手が空いたが、もう腹は出来たり、退屈らしく皿の中へ、指でくるくると環わを描かいた。それも、詰らなそうに、円い目で、貴婦人の顔を視ながめて、同一おなじようにそなたを向いたが、一向珍らしくない日本の兄あにいより、これは外国の小父ちちさんの方が面白いから、あどけなく見入つて傾く。

その、不思議そうに瞳をくるくると遣やった様子は、よつぽど可愛くつて、隅の窓を三角

に取つてゐんだボオイさえ、莞爾した程であるから、当の外国人は髯をもじやもじやと破顔して、ちやうど食後の林檎を剥きかけていた処、小刀を目八分に取つて、皮をひよいと雷干に、菓物を差上げて何か口早に云うと、青年が振返つて、身を捻じぎまに、直ぐ近かつた、小児の乗かつた椅子へ手をかけて、

「坊ちゃん、いらつしやい。好いものを上げますとさ。」とその言を通じたが、無理な乗出ししようをして逆に向いたから、つかまつた腕に力が入ったので、椅子が斜めに、貴婦人の方へ横になると、それを嬉しそうに、臆面なく、

「アハアハ、」と小児が笑う。

青年は、好事にも、わざと自分の腰をずらして、今度は危気なしに両手をかけて、揺籠のようにぐらぐらと遣ると、

「アハハ、」といよいよ嬉しがる。

御機嫌を見計らつて、

「さあ、お来なさい、お来なさい。」

貴婦人の底意なく頷いたのを見て、小さな靴を思う様上下に刎ねて、外国人の前へ行くくと、小刀と林檎と一緒に放して差置くや否や、によいと手を伸ばして、小児を抱えて、

スポンと床から振取ったように、目よりも高く差上げて、おぼつか 覚束ない口で、

「万歳——」

ボオイが愛想に、ハタハタと手を叩いた。客は時に食堂に、この一組ばかりであつた。

二

「今のは独逸ドイツ人でございますか。」

外客がいかくの、食堂を出たあとで、貴婦人は青年に尋ねたのである。会話の英イングリッシュ語でないので、すでに承知していたので、その方の素養のあることが知れる。

青年は椅子をぐるりと廻して、

「僕もそうかと思いましたが、違います、伊太利人イタリイだそうです。」

「はあ、伊太利の、商人ですか。」

「いえ、どうも学者のようです。しかしこつちが学者でありませんから、科学上の談話はなしは出来ませんでした。が、様子が、何だか理学者らしゅうございます。」

「理学者、そうでございますか。」

小児こどもの肩に手を懸けて、

「これの父親ちちも、ちとばかりその端くれを、致しますのでございますよ。」
さては理学士か何ぞである。

貴婦人はこう云った時、やや得意気に見えた。

「さぞおもしろい、お話しがございましたでしょうね。」

雪踏せったをずらす音がして、柔かな肱ひじを、唐草の浮模様ある、卓子タイプルの蔽おおいに曲げて、身を入れて聞かれたので、青年はなぜか、困った顔をして、

「どう仕りつかまつまして、そうおっしゃられては恐縮しましたな、僕のは、でたらめの理学者ですよ。ええ、」

とちよいと天窓あたまを搔かいて、

「林檎を食べた処から、先祖のニュウトン先生を思い出して、そこで理学者と遣やったんです。はは、はは、実際はその何だかちつとも分りません。」

「まあ。お人の悪い。貴郎あなたは、」

と莞爾にっこりした流眄ながしめなまめの媚かしさ。熟じつと見られて、青年は目を外らしたが、今は仕切の外に控えた、ボオイと硝子がらす越に顔の合つたのを、手招きして、

「珈琲コオヒイを。」

「ああ、こちらへも。」

と貴婦人も註文しながら、

「ですが、大層お話が持てましたじやありませんか。彼地あちらの文学のお話でもございましたんですか。」

「どういたしまして、」

と青年はいよいよ弱って、

「人を見て法を説けは、外国人も心得ているんでしょう。僕の柄じや、そんな貴女あなた、高尚な話を仕かけッこはありませんが、妙なことを云っていましたよ。はあ、来年の事を云っていました。西洋じや、別に鬼も笑わないと見えましてね。」

「来年の、どんな事でございます。」

「何ですって、今年は一度国へ帰って来年出直して来る、と申すことです。（日 蝕にっしよくがあるからそれを見にまた出懸ける、東洋じやほとんど皆既蝕かいきしよくだ。）と云いましたが、まだ日本には、その風説ふうわさがないようでございますね。」

有つても一向心懸こころがけのございませぬ僕なんぞ、年の暮に、太神宮から暦の廻りますま

では、つい気がつかないでしまいます。もつとも東洋とだけで、支那^{しな}だか、朝鮮だか、それとも、北海道か、九州か、どこで観ようと云うのだから、それを聞き懸^{かけ}た処へ、貴女が食堂へ入っておいでなさいましたもんですから、（や、これは日蝕どころじゃない。）と云いましたよ。」

「じゃ、あとは、私をおなぶんなすったんでございましょうねえ。」

「御串戯^{ごじょうだん}おつしやつては不可^{いけ}ません。」

「それでは、どんなお話でございましたの。」

「実は、どういう御婦人だ、と聞かれまして……」

「はあ、」

「何ですよ、貴女、腹をお立てなすつちや困りますが、ええ、」

と俯向^{うつむ}いて、低声^{こごえ}になり、

「女俳優^{やくしや}だ、と申しました。」

「まあ、」と清い目を睜^{みは}つて、屹^{きつ}と睨^{にら}むがごとくにしたが、口に微笑が含まれて、苦しく

はない様子。

「沢山^{たん}、そんなことを云つてお冷かしなさいまし。私はもう下りますから、」

「どちらで、」

と遠慮らしく聞くと、貴婦人は小児の事も忘れたように、調子が冴えて、

「静岡——ですからその先は御勝手におなぶり遊ばせ、室^{へや}が違いましても、私の乗っております内は殺生でございますわ。」

「御心配はございません。僕も静岡で下りるんです。」

「お湯^{ぶう}。」

と小児が云う時、一所に手にした、珈琲はまだ熱い。

三

「静岡はどちらへお越しなさいます。」

貴婦人が嬉しそうにして尋ねると、青年はやや元気を失った体に見えて、

「どこと云って当なしなんです。当分、旅籠屋^{はたしや}へ厄介になりますつもりで。」

もしそれならば、土地の様子が聞きたそうに、

「貴女^{あなた}、静岡は御住居^{おすまい}でございますか、それともちよつと御旅行でございますか。」

「東京から稼ぎに出ますんと、まだ取柄はございますが、まるで田舎俳優やくしゃですからお恥しゅう存じます。田舎も貴下あなた、草深くさふかと云つて、名も情ないじやありませんか。場末の小屋がけ芝居に、お飯炊まんまたきの世話場ばかり勤めます、おやまですわ。」

と董色すみれの手巾ハンケチで、口許くちを蔽おほうて笑つたが、前髪に隠れない、俯向うつむいた眉の美しさよ。青年は少時しばらく黙つて、うつかり巻まきた芭蕉ばしやうを取出しながら、

「何とも恐縮。決して悪気があつたんじやありません。貴女ぐらいな女優があつたら、我國の名譽だと思つて、對手あいてが外国人だから、いえ、まったくそのつもりで言つたんですが、真まことに失礼。」

と真面目まじめに謝罪あやまつて、

「失礼ついでに、またお詫をします気で伺いますが、貴女もし静岡で、河野こうのさん、と云うのを御存じではございませんか。」

「河野……あの、」

深く頷うなずき、

「はい、」

「あら、河野は私わたくしどもですわ。」

と無意識に小児こどもの手を取って、卓子テイブルから伸上るようにして、胸を起こした、帯の模様の琴ことの糸、揺ぐゆるがごとく気を籠めて、

「そして、貴下は。」

「英吉君には御懇親に預ります、早瀬主税ちからと云うものです。」

と青年は衝つと椅子を離れて立つたのである。

「まあ、早瀬さん、道理こそ。貴下は、お人が悪いわよ。」と、何も知った目に莞爾にっこりする。

主税は驚いた顔で、

「ええ、人が悪うございますって？ その女俳優おんなやくしや、と言いました事なんですかい。」

「いいえ、家が気に入らない、と仰有おつしやって、酒井さんのお嬢さんを、貴下、英吉に許しちや下さらないんですもの、ほほほ。」

「……………」

「兄はもう失望して、蒼あおくなっておりますよ。早瀬さん、初めまして、」

とこなたも立って、手巾を持ったまま、この時更あらためて、略式の会釈あり。

「私わたくしは英さんの妹でございます。」

「ああ、おうわさで存じております。島山さんの令夫人でいらつしやいますか。……これはどうも。」

静岡県……某……校長、島山理学士の夫人菅子、英吉がかつて、脱兎のごとし、と評した美人はこれであつたか。

足一度静岡の地を踏んで、それを知らない者のない、浅間の森の咲耶姫に対した、草深の此花や、実にこそ、と頷かる。河野一族随一の艶。その一門の富貴榮華は、一にこの夫人に因つて代表さると称して可い。

夫の理学士は、多年西洋に留学して、身は頭職にありながら純然たる学者肌で、無慾、恬淡、衣食ともに一向気にしない、無趣味と云うよりも無造作な、腹が空けば食べるので、寒ければ着るのであるから、ただその分量の多からんことを欲するのみ。たのでも、焼いたのでも、酢でも構わず。兵児帯でも、ズボンでも、羽織に紐が無くつても、更に差支えない人物、人に逢つても挨拶ばかりで、容易に口も利かないくらい。その短を補うに、令夫人があつて存する数か、菅子は極めて交際上手の、派手好で、話好で、遊びずきで、御馳走ずきで、世話ずきであるから、玄関に引きも切れない来客の名札は、新聞記者も、学生も、下役も、呉服屋も、絵師も、役者も、宗教家も、……悉く夫人の手に受取ら

れて、偏ひとえにその指環の宝玉の光によって、名を輝かし得ると聞く。

四

五円包んで恵むのもあれば、ビールを飲ませて帰すのもあり、連れて出て、見物をさせるのもあるし、音楽会へ行く約束をするのもあれば、慈善バザア市の相談をするのもある。飽かず、倦うまず、撓たゆまないで、客に接して、いずれもをして随喜渴仰せしむる妙を得ていて、加うるにその目がまた古今の能弁であることは、ここに一目見て主税も知った。

聞くがごとくんば、理学士が少なからぬ年俸は、過半菅子のために消費されても、自から求むる処のない夫は、すこしの苦痛も感じないで、そのなすがままに任せる上に、英吉も云った通り、実家さとから附属の化粧料があるから、天のなせる麗質に、紅粉よそおいの装をもつてして、小遣が自由になる。しかも御衣勝おんぞがちの着瘦きやせはしたが、玉の膚豊はだえかにして、汗は紅くれないの露となろう、宜むべなる哉かな、楊家ようかの女、牛込南町における河野家の学問所、桐楊塾とうようの楊の字は、菅子あって、扱えらばれたものかも知れぬ。で、某女学院出の才媛である。

当時、女学校の廊下を、紅色の緒のたった、襲かさねうら裏の上穿草履うわばきで、ばたばたと鳴ら

したもので、それが全校に行われて一時物議を起した。近頃静岡の流行は、衣裳も髪飾もこの夫人と、もう一人、——土地随一の豪家で、安部川の橋の袂に、大巖山の峰を蔽う、千歳の柳とともに、鶴屋と聞えた財産家が、去年東京のさる華族から娶り得たと云う——新夫人の二人が、二つ巴の、巴川に渦を巻いて、お濠の水の溢る勢。

「ちつとも存じませんで、失礼を。貴女、英吉君とは、ちつとも似ておいでなさらないから勿論気が着こう筈がありませんが。」

主税のこの挨拶は、真に如才の無いもので。熟々視ればどこにか倅が似通つて、水晶と陶器とにしろ、目の大きい処などは、かれこれ同一であるけれども、英吉に似た、と云つて嬉しいような婦人はないから、いささかも似ない事にした。その段は大出来だったが、時に衣兜から燐寸を出して、鼻の先で吸つけて、ふっと煙を吐いたが早いか、矢のごとく飛んで来たボオイは、小火を見附けたほどの騒ぎ方で、

「煙草は不可んですな。」

「いや、これは。」主税は狼狽えて、くるりと廻つて、そそくさ扉を開いて、隣の休憩室の唾壺へ突込んで、喫みさしを揉消して、太く恐縮の体で引返すと、そのボオイを手許へ呼んで、夫人は莞爾々々笑いながら低声で何か命じている。ただしその笑い方は、他人の

失策を嘲けたのではなく、親類の不出来しを面白がったように見える。

「すっかり面目を失いました。僕は、この汽車の食堂は、生れてから最初だ。」

と、半ば、独言を云う。折から四五人どやどやと客が入った。それらには目もくれず、

「ほほほ、日本式ではないんだわねえ、貴下、お気には入りますまい。」

「どういたしまして、大恥辱。」

「旅馴れないのは、かえって江戸子の名誉なんですわ。」

ボオイが剩銭を持つて来て、夫人の手に渡すのを見て、大照れの主税は、口をつけたばかりの珈琲もそのまま、立ったなりの腰も掛けずに、

「ここへも勘定。」

傍へ来て腰を屈めて、慇懃に小さな声で、

「御一所に頂戴いたしました、は、」

「飛んでもない、貴女、」

と今度は主税が火の附くように慌しく急つて云うのを、夫人は済まして、紙入を帯の間へ、キラリと黄金の鎖が動いて、

「旅馴れた田舎稼ぎの……」

（女俳優）と云いそうだったが、客が居たので、

「女形にお任せなさいまし。」

とすらりと立った丈高う、半面を颯と彩る、樺色の窓掛に、色彩羅馬の女神のごとく、愛神の手を片手で曳いて、主税の肩と擦違い、

「さあ、こつちへいらしつて、沢山お煙草を召上れ。」

と見返りもしないで先に立つて、件の休憩室へ導いた。背に立つて、ちよつと小首を傾けたが、腕組をした、肩が聳えて、主税は大跨に後に続いた。

窓の外は、裾野の紫雲英、高嶺の雪、富士皓く、雨紫なり。

五

聞けば、夫人は一週間ばかり以前から上京して、南町の桐楊塾に逗留していたとの事。桜も過ぎたり、菖蒲の節句というでもなし、遊びではなかったので。用は、この小児の二年姉が、眼病——むしろ目が見えぬというほどの容態で、随分実家の医院においても、

治療に詮議^{せんぎ}を尽したが、その効^{かい}なく、一生の不幸になりそうな。断念^{あきらめ}のために、折から夫理学士は、公用で九州地方へ旅行中。あたかも母親は、兄の英吉の事に就いて、牛込に行っている、かれこれ便宜だから、大学の眼科で診断を受けさせる為に出向いた、今日がその帰途^{かえり}だと云う。

もとよりその女の児^こに取つて、実家^{さと}の祖父^{おじい}さんは、当時の蘭医（昔取つた杵^{きね}づかですわ、と軽い口をその時交えて、）であるし、病院の院長は、義理の伯父^{おふ}さんだし、注意を等閑にしようわけではないので、はじめにも二月三月、しかるべき東京の専門医にもかかったけれども、どうしても治らないから、三年前にすでに思切つて、盲目^{めくら}の娘、（可哀相だわねえ、と客観^{きゃくかん}的^{てき}の口吻^{くちぶり}だつたが、）今更大学へ行つたつて、所詮^{しかい}効^{かい}のない事は知れ切っているけれど、……要するにそれは口実にしたんですわ、とちよいと堅い語^{ことば}が交つた。

夫がまた、随分自分には我^{わが}儘^{まま}をさせるのに、東京へ出すのは、なぜか虫が嫌うかして許さないから、是非行きたいと喧嘩も出来ず。ざつと二年越、上野の花も隅田の月も見ないでいると、京都へ染めに遣つた羽織の色も、何だか、艶^{つや}がなくなつて、我ながらくすんで見えるのが情ない。

まあ、御覧なさい、と云う折から窓を覗^{のぞ}いた。

この富士山だつて、東京の人がまるつきり知らない、こんなに名高くはなりません。自分は田舎で埋木うもれぎのような心地こころもちで心細くつてならない。夫が旅行で多日留守しばらく、この時こそ思つても、あとを預つてゐる主婦あるじならなおの事、実家さとの手前も、旅をかけては出憎いから、そこで、盲目めくらの娘をかこつに、籠を抜けた。親鳥も、とりめにでもならなければ可い、小児の罰が当りましょう、と言つて、夫人は快活に吻々ほほと笑う。

この談話は、主税が立続けに巻煙草を煙くゆらす間に、食堂と客室とに挟まった、その幅狭な休憩室に、差向いでされたので。

椅子と椅子と間が真まことに短いから、袖と袖と、むかい合つて接するほどで、裳もすそは長く足袋に落ちても、腰の高い、雪踏せつたの尖さきは爪立つまたつばかり。汽車の動揺どうよみに留南奇とめきが散つて、友染の花の乱るるのを、夫人は幾度いくたびも引かさね、引かさねするのであつた。

主税はその盲目の娘こと云うのを見た。それは、食堂からここへ入ると、突然いきなり客室の戸を開けようとして男の児こが硝子扉がらすどに手をかけた時であつた。――銀杏返いちょうがえしに結つた、三十四五の、実直らしい、小綺麗な年増が、ちょうど腰掛けの端に居て、直ぐにそこから、扉とを開けて、小児を迎え入れたので、さては乳母よ、と見ると、もう一人、被布ひふを着た女の子の、キチンと坐つて、この陽気に、袖口へ手を引込ひっこめて、首を萎すくめて、ぐったりして、

その年増の膝に凭^{より}かかっていたのがあつて、病氣らしい、と思つたのが、すなわち話の、目の病^{わる}い娘^こなのであつた。

乳母の目からは、奥に引込んで、夫人の姿は見えないが、自分は居ながら、硝子越に彼^む方^{こう}から見透^{みえす}くのを、主税は何か憚^{はば}かつて、ちよいちよい氣にしては目遣いをしたようだったが、その風を見ても分る、優しい、深切らしい乳母は、太^{いた}くお主^{しゅう}の盲^め目^めなのに同情したために、自然^{おのず}から氣が映つてなつたらしく、女の児と同一^{おなじ}ように目を瞑^{ねむ}つて、男の児に何かものを言いかけるにも、なお深く差^さ俯^{しう}向^{つむ}いて、いささかも室の外を窺^{うかが}う氣色^{けしき}は無かつたのである。

かくて彼一句、これ一句、遠慮なく、やがて静岡に着くまで続けられた。汽車には太^{いた}く倦^{うん}じた体で、夫人は腕^{かいな}を仰向けに窓に投げて、がつくり鬢^{びん}を枕するごとく、果は腰帶^{ゆる}の弛^{ゆる}んだのさえ、引繕^{ひまも}う元氣も無くなつて見えたが、鈴のような目は活々と、白い手首に瞳大きく、主税の顔^{みまも}を瞻^{みまも}つて、物打語るに疲れなかつた。

六

県庁、警察署、師範、中学、新聞社、丸の内をさして朝ごとに出勤するその道その道の紳士の、最も遅刻する人物ももう出払つて、——初夜の九時十時のように、朝の九時十時頃も、一時は魔の所有に寂寞する、草深町は静岡の侍小路を、カラカラと挽いて通る、一台、艶やかな幌に、夜上りの澄渡った富士を透かして、燃立つばかりの鳥毛の蹴込み、友染の背当てした、高台細骨の車があつた。

あの、音の冴えた、軽い車の軋る響きは……例のがお出掛けに違いない。昨日東京から帰った筈。それ、衣更えの姿を見よ、と小橋の上で留るやら、旦那を送り出して引込んだばかりの奥から、わざわざ駈出すやら、刎釣瓶の手を休めるやら、女連が上も下も齊しく見る目を聳てたが、車は確に、軒に藤棚があつて下を用水が流れる、火の番小屋と相角の、辻の帳場で、近頃塗替えて、島山の令夫人に乘初めをして頂く、と十日ばかり取つて置き of 逸物に違いないが——風呂敷包み一つ乗らない、空車を挽いて、車夫は被物なしに駈けるのであつた。

ものの半時ばかり経つと、同じ腕車は、通の方から勢よく茶畑を走つて、草深の町へ曳込んで来た。時に車上に居たものを、折から行違つた土地の豆腐屋、八百屋、（のりはどうですね——）と売つて通る女房などは、若竹座へ乗込んだ俳優だ、と思つたし、旦那が留守の、座敷から縁越に伸上つたり、玄関の衝立の蔭になつて差覗いた奥様連は、千鳥座で金色夜叉を演ずるといふ新俳優の、あれは貫一に扮る誰かだ、と立騒いだ。

主税がまた此地へ来ると、ちとおかしいほど男ぶりが立勝つて、雍放しの頭髮も洗つたように水々しく、色もより白くすつきりあく抜けがしたは、水道の余波は争われぬ。土地の透明な光線には、（埃だらけな洋服を着換えた。）酒井先生の垢附を拝領ものらしい、黒羽二重二ツ巴の紋着の羽織の中、古なのさえ、艶があつて折目が凜々しい。久留米か、薩摩か、紺紺の単衣、これだけは新しいから今年出来たので、卯の花が咲くとともに、お蔭が心懸けたものであらう。

渠は昨夜、呉服町の大東館に宿つて、今朝は夫人に迎えられて、草深さして来たのである。

仰いで、浅間の森の流るるを見、俯して、濠の水の走るを見た。たちまち一朵紅の雲あり、夢のごとく眼を遮る。合歡の花ぞ、と心着いて、流の音を耳にする時、車はがらり

と石橋にのり乗懸つかつて、黒の大おお構がまえの門かじに楯かじが下りた。

「ここかい。」とひらりと出る。

「へい、」

と門内へ駈とけ込んで、取附とつぎの格子戸をがらがらと開けて、車夫は横ざまに身を開いて、浅黄裏かがを屈かめて待つ。

冠木門かぶきもんは、旧式のままで敷木があるから、横附けに玄関まで曳込むわけには行かない。男の児こが先へ立って駈出わきして来る事だろう、と思ひながら、主税ぼうしが帽ぼうしを脱いで、雨あまあがりの松まつの傍わきを、緑の露に袖擦りながら、格子くぐを潜くぐつて、土間へ入ると、天井には駕籠かごでも釣つつてありそうな、昔ながらの大玄関。

と見ると、正面に一段高い、式台、片隅の板戸を一枚開けて、後の縁うしろから射さす明りに、黒髪だけ際立つたが、向った土間の薄暗さ、衣きぬの色朦朧もうろうと、倅おも白かき立姿、夫人は待兼ねた体に見える。

会釈もさせず、口も利かさず、見迎えの莞爾にっこりして、

「まあ、遅かったわねえ。ああ御苦労よ。」

ちよいと車夫わかいしゆに声を懸けたが、

「さぞ寝坊していらつしやるだろうと思つたの。さあ、こちらへ。さあ、」

口早に促されて、急いで上る、主税は明い外から入つて、一倍暗い式台に、高足を踏んで、ドンと板戸に打附るのも、菅子は心づかぬまで、いそいそして。

「こちらへ、さあ、ずつとここから、ほほほ、市川菅女、部屋の方へ。」

と直ぐに縁づたいで、はらはらと、素足で捌く裳の音。

七

市川菅女……と耳にはしたが、玄関の片隅切つて、縁へ駈込むほどの慌しさ、主税は足早に続く咄嗟で、何の意味が分らなかつたが、その縁の中ほどで、はじめて昨日汽車の中で、夫人を女俳優だと、外人に揶揄一番した、ああ、崇だ、と気が付いた。

気が付いて、莞爾とした時、渠の眼は口許に似ず鋭かつた。

ちようどその横が十畳で、客室らしい造だけれども、夫人はもうそこを縁づたいに通越して、次の（菅女部屋）から、

「ずつといらつしやいよ。」と声を懸ける。

主税が猶^{ためら}予うと、

「あら、座敷を覗^{のぞ}いちや不可^いません、まだ散らかっているんですから、」
と笑う。これは、と思うと、縁の突当り正面の大姿見に、渠の全身、飛白^{かすり}の紺も鮮麗^{あざやか}に、部屋へ入っている夫人が、どこから見透^{みすか}したろうと驚いたその目の色まで、歴然^{ありあり}と映っている。

姿見の前に、長椅子^{ソオファ}一脚、広縁だから、十分に余裕がある。戸袋と向合った壁に、棚を釣つて、香水、香油、白粉^{おしろい}の類^{たぐい}、花瓶まじりに、ブラッシ、櫛などを並べて、洋式の化粧の間と見えるが、要するに、開き戸の押入を抜いて、造作を直して、壁を塗替えたものらしい。

薄^{うすもえぎ}萌葱の窓掛を、件^{くだん}の長椅子と兩戸の間^{あい}へ引掛^{ひつか}けて、幕が明いたように、絞^{すそ}った裾が靡^{なび}いている。車で見た合歡^{ねむ}の花は、あたかもこの庭の、黒塀の外になつて、用水はその下を、門前の石橋続きに折曲つて流るので、惜いかな、庭はただ二本三本を植棄てた、長方形の空地に過ぎぬが、そのかわり富士は一目。

地を坤軸^{こんじく}から掘覆^{ほりかえ}して、将^{しょう}棊倒^{ぎだおし}に凭^よせかけたような、あらゆる峰を麓^{ふもと}に抱^{いだ}いて、折からの蒼空^{あおぞら}に、雪なす袖を翻^{ひるがえ}して、軽くその薄^{うすくれない}紅の合歡の花に乗っていた。

「結構な御住居でございますな。」

ここで、つい通りな、しかも適切なことを云つて、部屋へ入ると、長火鉢の向うに坐つた、飾を挿さぬ、S巻の濡色が滴るばかり。お納戸の絹セルに、ぎつくり、山繭縮緬やままゆぢりめんの縞しまの羽織を引掛けて、帯の弛ゆるい、無造作な居住居いずまいは、直ぐに立膝にもなり兼ねないような横に飾つた筆筒たんすの前なる、鏡台の鏡の裏うちへ、その玉の頸うなじに、後毛おくれげのはらはらとあるのが通つて、新に薄化粧した美しさが背中まで透通る。白粉の香は座蒲団にも籠こもつたか、主税が坐ると馥郁ふいくたり。

「こんな処へお通し申すんですから、まあ、堅くるしい御挨拶はお止しなさいよ。ちよいと昨夜は旅籠屋で、一人で寂しかったでしょう。」

と火箸を压おさえたような白い手が、銅壺の湯気を除よけて、ちらちらして、

「昨夜にも、お迎いに上げましようと思つたけれど、一度、寂しい思をさして置かないと、他国へ来て、友達の難有ありがたさが分らないんですもの。これからも粗末にして不実ふいをすると不可けないから……。」

と莞爾にっこり笑つて、瞥ちらりと見て、

「それにもう内が台なしですからね、私が一週間も居なかつた日にや、門前雀羅じゃくらを張る

んだわ。手紙一ツ来ないんですもの。今朝起抜けから、自分で払^{はたき}を持つやら、掃出すやら、大騒ぎ。まだちつとも片附ないんですけれど、貴下^{あなた}も詰らなからうし、私も早く逢いたいから、可^いい加減にして、直ぐに車を持たせて、大急ぎ、と云ってやつたんですがね。

あの、地方^{いなか}の車だつて疾^{はや}いでしよう。それでも何よ、まだか、まだか、と立つて見たり坐つて見たり、何にも手につかないで、御覧なさい、身化粧^{みじまい}をしたまんま、鏡台を始末する方角もないじやありませんか。とうとう玄関^{とこ}の処へ立切りに待っていたの。どこを通していらして？」

返事も聞かないで、ボンボン時計を打仰ぐに、象牙のような咽喉^{のど}を仰向け、胸^そを反らした、片手を畳へ。

「まあ、まだ一時間にもならないのね。半日ばかり待つてたようよ。途中でどこを見て来ました。大東館の直^しきこつちの大きな山葵^{わさび}の看板を見ましたか、郵便局は。あの右の手の広小路の正面に、煉瓦の建物があつたでしょう。県庁よ。お城の中だわ。ああ、そう、早瀬さん、沢山^{たんとあが}喫つて頂戴、お煙草。露西亜^{ロシア}巻だつて、貰ったんだけれど、島山（夫を云う）はちつとも喫みませんから……」

八

それから名物だ、と云つて扇屋の饅頭を出して、茶を焙ほうじる手つきはなよやかだったが、鉄瓶のはまだ沸たぎらぬ、と銅壺から湯を掬くむ柄杓ひしやくの柄が、へし折れて、短くなつていたのみか、二度ばかり土瓶にうつして、もう一杯、どぶりと突込む。他愛たわいなく、抜けて柄になつてしまつたので、

「まあ、」と飛んだ顔をして、斜めに取つて見透みすかした風情は、この夫人ひとの艶えんなるだけ、中な指かざしの鼈べつこ甲こうの斑ふを、日影に透かした趣だつたが、

「仕様がないわね。」と笑つて、その柄を投ほうり出した様子は、世帯しよたいの事には余り心を用いない、学生生活おもかげの倅こしもが残つた。

主税しゅぜが、小児衆こどもは、と尋ねると、二人とも乳母ばあやが連れて、土産ものなんぞ持つて、東京から歸つた報知しらせ旁かたがた々、朝早くから出向いたとある。

「河野の父さんの方も、内々小児をだしに使つて、東京へ遊びに行つた事を知っているんですから、言句もんくは言わないまでも、苦い顔をして、髻ひげの中から一睨ひとにらみ睨ひとにらむに違いはないんですもの、難有ありがたくないわ。母様かあさんは自分の方へ、娘が慕つて行つたんですから御機嫌が可

いでしよう、もうちつと経つと帰つて来ます。それまでは、私、実家へは顔を出さないつもりで、当分風邪をひいた分よ。」

と火鉢の縁に肱をついて、男の顔を視めながら、魂の抜け出したような仇気ないことを云う。

「そりや、悪いでしょう。」

と主税がかえつて心配らしく、

「彼方から、誰方かお来なさりやしませんか。貴女がお帰りだ、と知れましたら。」

「来るもんですか。義兄（医学士——姉婿を云う）は忙しいし、またちつとでも姉さん

を出さないのよ。大でれでねなんですから。父さんはね、それにね、頃日は、家族主義

の事に就いて、ちつと纏まった著述をするんだって、母屋に閉籠つて、時々は、何よ、

一日蔵の中に入りきりの事があつてよ。蔵には書物が一杯ですから。父さんはね、医者な

んですけれど、もと個人、人一人二人の病を治すより、国の病を治したい、と云う大な希

望の人ですからね。過年、あの、家族主義と個人主義とが新聞で騒ぎましたね。あの時も、

父様は、東京の叔父さんだの、坂田（道学者）さんに応援して、火の出るように、敵と

戦つたんだわ。

惜い事に、兄さん（英吉）も奔走してくれたんですけれど、可い機関がなくなつて、ほんの教育雑誌のようなものに掲つたものですから、論文も、名も出ないでしまつて、残念だからつて、一生懸命に遣つてますの。確か、貴下の先生の酒井さんは、その時の、あの敵方の大立ものじゃなくなつて？」

と不意に質問の矢が来たので、ちと、狼狽ついたようだったが、

「どうでしたか、もう忘れしましたよ。」と気もなく答える。

別に狙つたのでないらしく、

「でも、何でしょう、貴下は、やつぱり、個人主義でおいでなさるんでしょう。」

「僕は饅頭主義で、番茶主義です。」

と、なぜか気競つて云つて、片手で饅頭を色気なくむしやりと遣つて、息も吐かずに、番茶を呷る。

「あれ、嘘ばかり。貴下は柳橋主義の癖に、」

夫人は薄笑いの目をぱつちりと、睫毛を裂いたように黒目勝なので睨むようにした。

「ちよいと、吃驚して。……そら、御覧なさい、まだ驚かして上げる事があるわ。」

と振返りざまに背後向きに肩を捻じて、茶棚の上へ手を遣つた、活潑な身動きに、下

交いの棲つまがすべにつつた。

そのまま横坐りに見得もなく、長火鉢の横から肩を斜めに身を寄せて、翳かぎすがごとく開いて見せたは……

「や！ 読とく本ほんを買いましたね。」

「先生、これは何て云うの？」

「冷評ひやかしては不可いけませんな、商売道具を。」

「いいえ、真面目に、貴下がこの静岡で、独逸語の塾を開くと云うから、早いでしょう、もう買つて来たの。いの一い番のお弟子入よ。ちよいと、リイダアと云うのを、独逸では……」

「レエゼウツフ（読本）——月謝が出ますぜ。」

「レエゼウツフ。」

九

「あの、何？」

と真まことに打解けたものいいで、

「精々勉強したら、名高い、ギョウテの（ファウスト）だとか、シルレルの（ウイルヘルム、テル）………でしたっけかね、それなんぞ、何年ぐらいで読めるようになるんでしよう。」

「直じき読めます、」

と読本を受取つて、片手で大おおづか掴みに引開けながら、

「僕ぐらいにはという、但書が入りますけれど。」

「だって……」

「いいえ、出来ます。」

「あら、ほんとに……」

「もつとも月謝次第ですな。」

「ああだもの、」

と衝つと身を退のいて、叱るがごとく、

「なぜそうだろう。ちゃんと御馳走は存じておりますよ。」

茶棚わきふすまの傍の襖を開けて、つんつるてんな着物を着た、二百八十間の橋向う、鞠まりこ子辺あたりの

産らしい、十六七の婢おさんどんが、

「ふアい、奥様。」と訛なまって云う。

聞いただけで、伶俐りこうな菅子は、もうその用を悟ったらしい。

「誰か来たの？」

「ひやあ、」

「あら、厭いやな。ちよいと、当分は留守とおいしいと云ったじゃないの？」

「アニ、はい、で、ござりますけんど、お客様で、ござんしねえで、あれさ、もの、呉服町の手代衆しゅでござりますだ。」

「ああ、谷屋のかい、じゃ構わないよ、こちらへ、」

と云いかけて、主税を見向いて、

「かくまつて有る人だから……ほほほ、そっちへ行きましようよ。」

衣紋えもんを直したと思うと、はらりと気早に立って、踞つくばった婢おんなの髪を、袂で払って、もう居ない。

トきよとした顔をして、婢は跡も閉めないで、のっそり引込む。

はて心得ぬ、これだけの構かまえに、乳母の他はあの女中ばかりであろうか。主人は九州へ旅

行中で、夫人が七日ばかりの留守を、彼だけでは覺束ない。第一、多勢の客の出入に、茶の給仕さえ鞠子はあやしい、と早瀬は四辺あたりをみまわしたが——後で知れた——留守中は、実家さとの抱車夫かかえが夜宿りしよまに来て、昼はその女房が来ていたので。昼飯の時に分つたのでは、客へ馳走は、残らず電話で料理屋から取寄せる……もつとも、珍客というのであつたかも知れぬ。

そんな事はどうでも可いが、不思議なもので、早瀬と、夫人との間に、しきりに往來ゆききがあつたその頃しばらくの間は、この家に養われて中学へ通っている書生の、美濃安八みのあはちの男が、夫人が上京したあと直ぐに、故郷の親が病氣というので帰っていた——これが居ると、たとい日中は学校へ出ても、別に仔細しさいは無かつたろうに。

さて、夫人は、谷屋の手代というのを、隣室となりのその十畳へ通したらしい、何か話声がしている内、

「早瀬さん——」

主税は、夫人が此室ここを出て、大廻りに行つた通りに、声も大廻りに遠い処に聞き取つて、静にその跡を辿りたどつつ返事が遅いと、

「早瀬さん、」

と近くまた呼ぶ。今しがた、（かくまつて有る人だ）と串戯じょうだんを云ったものを。

「室数まかずは幾つばかりあれば可よくつて？」

「何です、何です。」

余だしぬけり唐突で解し兼ねる。

「貴下あなたのお借りなさろうというお家うちよ。ちよいと、」

「ええ、そうですね。」

「おほほほ、話しが遠いわ。こっちへいらつしやいよ。おほほほ、縁側から、縁側から。」

夫人がした通りに、茶棚わきの襖口へ行きかけた主税は、（菅女部屋）の中を、トぐる

りと廻めぐつて、苦笑にがわらいをしながら縁へ出ると、これは！ 三足と隔てない次の座敷。開け

た障子に背せなを凭もたせて、立膝の棲は深いが、円く肥えた肱ひじも露あらわに夫人は頬を支えていた。

「朝から戸迷とまどいをなすつては、泊とまどつたら貴下、どうして、」

と振向いた顔の、花の色は、合ねむ歡の影。

「へへへへへ」

と、向うに控えたのは、呉服屋の手代なり。鬱金木綿うこんの風呂敷に、浴衣地うずたかが堆い。

二人連

十

午後、宮ヶ崎町の方から、ツンツンとあちこちの二階で綿を打つ音を、時ならぬ砧きぬたの合方にして、浅間の社の南口、裏門にかかった、島山夫人、早瀬の二人は、花道へ出たようである。

門際の流に臨むと、頃日の雨で、用水が水嵩増して溢るばかり道へ波を打って、しかも濁らず、蒼く翻つて竜の躍るがごとく、茂の下を流るるさえあるに、大空から賤しずは機山の蔭がさすので、橋を渡る時、夫人は洋傘をすぼめた。

と見ると黒髪に变りはないが、脊がすりりとして、帯腰の靡くように見えたのは、羽織なしの一枚衾あわせという扮装のせいで、また着換えていた——この方が、姿も佳く、よく似合う。ただし媚しさは少なくなつて、いくらか氣韻が高く見えるが、それだけに品が可い。セルで足袋を穿はいては、軍人の奥方めく、素足では待合から出たようだ、と云つて邸やしきを

出掛けに着換えたが、膚に、緋の紋縮緬の長襦袢。

二人の児の母親で、その燃立つようなのは、ともすると同一軍人好みになりたがるが、垢抜けのした、意気の壮な、色の白いのが着ると、汗ばんだ木瓜の花のように生暖なものではなく、雪の下もみじで凜とする。

部屋で、先刻これを着た時も、乳を圧えて密と袖を潜らすような、男に気を兼ねたものではなかった。露にその長襦袢に水紅色の紐をぐるぐると巻いた形で、牡丹の花から抜出たように縁の姿見の前に立つて、

（市川菅女。）と莞爾々々笑つて、澄まして衿を搔取つて、襟を合わせて、ト背向きに頸を捻じて、衣紋つきを映した時、早瀬が縁のその棚から、ブラッシを取つて、ごしごし痒そうに天窓を引掻いていたのを見ると、

「そんな邪険な撫着けようがあるもんですか、私が分けて上げますからお待ちなさい。」と云うのを、聞かない振でさつきと引込もうとしたので、

「あれ、お待ちなさい」と、下メ《したじめ》をしたばかりで、衝と寄つて、ブラッシを引奪ると、窓掛をさらさらと引いて、端近で、綺麗に分けてやって、前へ廻つて覗き込むように瞳をためて顔を見た。

胸の血汐ちしおの通うのが、波打って、風に戦そよいで見ゆるばかり、撓たわまぬ膚はだえの未開紅、この意
 気なれば二十六でも、紅くれなゐの色は褪あせぬ。

境内の桜の樹蔭こかげに、静々、夫人の裳もすそが留まると、早瀬かたわらが傍から向うを見て、

「茶店があります、一休みして参りましょう。」

「あすこへですか。」

「お誂あつちえ通り、皺しわくちやな赤毛布あかげつとが敷いてあつて、水々しい婆さんが居ますね、お茶を
 飲んで行きましょうよ。」

と謹んで色には出ぬが、午飯ひるに一銚子ひとちょうし賜ったそうで、早瀬は怪しからず可い機嫌。

「咽喉のどが渴かわいて？」

「ひりつくようです。」

「では……」

茶店の婆さんというのが、式かたのごとく古ぼけて、ごほん、と咳せくのが聞えるから、夫人
 は余り気が進まぬらしかったが、二三人子守女もりっこに、きよろきよる見られながら、ずつと入
 る。

「お掛けなさいまし。お日和でございます。よう御参詣なさいました。」

夫人が^{たたず}ゐんでいて掛けないのを見て、早瀬は懷中^{ふとこころ}から切立の手拭^{てぬぐい}を出して、はたはたと毛布^{けつと}を払って、

「さあ、どうぞ、」

笑つて云うと、夫人は婆さんを背後^{うしろ}にして、悠々と腰を下ろして、

「江戸児は心得たものね。」

「人を馬鹿にしていらつしやる。」

と、さしむかいの夫人の衣紋はずれに、店先を覗いて、

「やあ、甘酒がある……」

十一

「お止しなさいよ。先刻^{さつき}もあんなものを食^{あが}つてさ、お腹を悪くしますから。」

と低声^{こゝえ}でたしなめるように云つた、（先刻のあんなものは——鮪の茶漬で——慶喜公の邸あとだという、可懐^{なつか}しいお茶屋から、わざと取寄せた午飯^{ひる}の馳走の中に、刺身は江戸には限るまい、と特別に夫人が膳につけたのを、やがてお茶漬で掻^か込んだのを見て、その

時は太く嬉しがった。

得てこれを嗜むもの、河野の一門に一人も無し、で、夫人も口惜いが不可いそうである。
「ここで甘酒を飲まなくつては、鳩にして豆、」

と云うと、婆さんが早耳で、

「はい、盆に一杯五厘宛でございます。」

「私は鳩と遊びましょう。貴下は甘酒でも冷酒でも御勝手に召食れ。」

と前の床几に並べたのを、さらりと撒くと、颯と音して、揃いも揃って雉子鳩が、神代に島の湧いたように、むらむらと寄せて来るので、また一盆、もう一盆、夫人は立上つて更に一盆。

「一杯、二杯、三杯、四杯、五杯！」

早瀬はその数を算えながら、

「ああ、僕はたった一杯だ。婆さん甘酒を早く、」

「はいはい、あれ、まあ、御覧じまし、鳩の喜びますこと、沢山奥様に頂いて、クウクウかいのう、おとおお、」

と合点々々、ほたほた笑をこぼしながら甘酒を金から汲む。

見る見るうち、輝く玄潮くろしおの退いたか、と鳩は掃いたように空へ散つて、咄嗟とつさに寂寞せきばくとした日当りの地の上へ、ぼんやりと影がさして、よぼよぼ、蠢うごめいて出た者がある。

鼻の下はさまででないが、ものの切尖きつさきに瘦やせた頤おとがいから、耳の根へかけて胡麻塩髯ごましおひげが栗の毬いのように、すすすく、頬肉ほおじしがつくりと落ち、小鼻が出て、窪んだ目が赤味走つて、額の皺しわは小さな天窓あたまを揉もみ込んだごとく刻んで深い。色蒼あおく垢あかじみて、筋で繋つないだばかりげつそり肩の瘦せた手に、これだけは脚より太い、しっかりした、竹の杖を支ついたが、さまざま容子ようすの賤いやしくない落魄おらぶれらしい、五十近ぢかの男の……肺病とは一目で分る……襟垢えりごがぴかぴかした、閉糸とじいとの断きれた、寝ね寝子を今時分。

藁草履わらぞうりを引摺ひきずつて、勢いきおいの無さは埃ほこりも得立えてず、地の底に滅入めりこ込むようにして、正面から辿たどつて来て、ここへ休もうとしたらしかつたが、目ももう疎うとくて、近寄るまで、心着まばゆかなんだろう。そこに貴婦人があるのを見ると、出かかった足を内へ折曲まがげ、杖で留めて、眩まばゆそうに細めた目に、あわれや、笑を湛たたえて、婆さんの顔をじろりと見た。

「おお、貞ていさんか。」

と耳立つほど、名を若く呼んだトタンに、早瀬は屹きつとなつて鋭く見た。
が、夫人は顔を背けたから何にも知らない。

「主あ、どうさした、久しく見えなんだ。」

と云うさえ、下地はあるらしい婆さんの方が、見たばかりでもう、ごほごほ。

「方なしじゃ、」

思いの他、声だけは確であつたが、悪寒がするか、いじけた小児がいよいよやをすると同時に縮めた首を破れた寝ン寝子の襟に擦つて、

「埒明かんで、久しい風邪でな、稼業は出来ず、段々弱るばかりじゃ。芭蕉の葉を煎じて飲むと、熱が除れると云うので、」

と肩を怒らしたは、咳こうとしたらしいが、その力も無いか、口へ手を当てて俯向いた。「何より利くそうなが、主あ飲したか。」

「さればじゃ、方々様へ御願ひ申して頂いて来ては、飲んだにも、飲んだにも、大な芭蕉を葉ごとまるで飲んだくらいじゃけれど、少しも……」

とがつくり首を掉つて、

「験が見えぬじゃて。」

験なきにはあらずかし、御身の骸は疾く消えて、賤機山に根もあらぬ、裂けし芭蕉の幻のみ、果敢なくそこに立てるならずや。

「ごほごほと領うなずき領き、咳入りつつ、婆さんが持つて来た甘酒を、早瀬が取ろうとするのを、取らせまいと、無言で、はたと手で払った。この時、夫人は手巾ハンケチで口を圧おさえながら、甘酒の茶碗を、衝つと傍わきへ奪ったのである。

十二

「芭蕉の葉煎じたを立続けて飲まして、効験ききめの無い事はあるまいが、疾はやく快ようなろうと思いなさる慾よくで、焦あせらっしゃるに因つてなおようない、氣長に養生さっしゃるが何より藥じゃ。なあ、主ぬし、氣の持ちように依るぞいの。」

と婆さんは渠かれを慰めるような、自分も勢せいの無いような事を云う。

病人は、苦を訴うるほどの元氣も持たぬ風で、目で領き、肩で息をし、息をして、

「この頃は病氣やまいと張合う勇いさみもないで、どうなとしてくれ、もう投身なげみじゃ。人に由つては大に蒜んにくが可ええ、と云うだがな。大蒜は肺の藥になるげじゃけれども、私わしはこう見えても癆ろう咳いとは思わん、風邪のこじれじゃに因つて、熱さえ除とれば、とやっぱり芭蕉じゃ。」

愚痴のあわれや、繰返して、杖に縋すがった手を置替え、

「煎じて飲むはまだるこいで、早や、根からかぶりつきたいように思うがい。」
と切なそうに顔を獅^し噛^かめる。

「焦らつしやる事よ、苛^じれてはようない、ようないぞの。まあ、休んでござらんか、よ。主あどんなにか大儀じやろうのう。」

「ちつと休まいて貰^{もら}いたいがの、」

菅子と早瀬の居るのを見て、遠慮らしく、もじもじして、

「腰を下ろすとよう立てぬで、久しぶりで出たついでじゃ、やっとそこらを見て、歸りに寄るわい。見霽^{みはらし}へ上る、この男坂の百四段も、見たばかりで、もうもう慄^{ぞつ}然とする慄^{ぞつ}然とする、」

と重^{かさ}そうな頭^{かぶり}を掉^ふつて、顔を横向きに杖を上げると、尖^{さき}がぶるぶる震う。

こなたに腰掛けたまま、胸を伸して、早瀬が何か云おうとした、（構わず休まえ、）と声を懸けそうだったが、夫人が、ト見て、指^{はし}を弾^{はじ}いて禁^とめたので黙った。

「そんなら歸りに寄りなされ、気をつけて行かつしやいよ。」

物は言わず、睡^{ねむ}るがごとく頷くと、足で足を押動かし、寝ン寝子広き芭蕉の影は、葉がくれに破れて失せた。やがてこの世に、その杖ばかり残るであらう。その杖は、野墓に立

てても、蜻蛉も留まるまい。病人の居たあとしばらくは、餌を飼つても、鳩の寄りそうな景色は無かつた。

「お婆さん、」

と早瀬が調子高に呼んだ。

さすがに滅入っていた婆さんも、この若い、威勢の可い声に、蘇生よみがえつたようになって、

「へい、」

「今の、風説うわさならもう止しっこ。私は見たばかりで胸が痛いよ。」

と、威おどしては可いけそうもないので、片手で拝むようにして、夫人は厭々をした。

「いえ、一ツ心当りは無いか、家うちを聞いて見ようと思うんです。見物より、その方が肝心ですもの。」

「ああ、そうね。」

「どこか、貸家はあるまいか。」

「へい、無い事もござりませぬが、旦那様方の住まつしやりますような邸は、この居まわりにはござりませぬ。鷹匠町たかじょうまち辺をお聞きなさりましたか、どうでござります。」

「その鷹匠町辺にこそ、御邸ばかりで、僕等の住めそうな家はないのだ。」

「どんなのがお望みでござりまするやら、」

「^{やす}廉いのが可い、何でも廉いのが可いんだよ。」

「早瀬さん。」と、夫人が見つともないと^{おさ}圧えて云う。

「長屋で可いのよ、長屋々々。」

と構わず、遣るので、また目で叱る。

「へへへ、お幾^{いくら}干ばかりなのをお捜しなされまするやら。」

心当りがあるか、ごほりと咳きつつ、甘酒の釜の蔭を膝^{いざ}行つて出る。

「静岡じゃ、お米は一升幾^{いくら}干だい。」

「ええ。」

「厭よ、後生。」

と婆さんを避^よけかたがた、立構えで、夫人が肩を擦寄せると、早瀬は後^{うしろ}へ開いて、夫人の肩越に婆さんを見て、

「それとも一円に幾干だね、それから聞いて屋賃の処を。」

「もう、私は、」と堪^{たま}りかねたか、早瀬の膝をハタと打つと、赤らめた顔を手^{ハンケチ}巾で半ば蔽^{おほ}いながら、茶店を境内へ衝^つと出る。

十三

どこも変わらず、風呂敷包を首に引掛けた草鞋穿の親仁だの、日和下駄で尻端折り、高帽という^{あにい}壮佼などが、四五人境内をぶらぶらして、何を見るやら、どれも仰向いてばかり通る。

石段の下あたりで、緑に包まれた夫人の姿は、色も一際鮮麗^{あざやか}で、青葉越に^{ひづい}緋鯉の躍る池の水に、影も映りそうに^{たたず}ゐんだが、手巾^{ハンケチ}を振って、促^{あせ}がして、茶店から引張り寄せた早瀬に、

「可い加減になさいよ、極^{きま}りが悪いじゃありませんか。」

「はい、お忘れもの。」

と澄ました顔で、洋傘^{ひがさ}を持って来た柄の方を返して出すと、夫人は手巾を持換えて、そうでない方の手に取ったが……不思議にこの男のは汗ばんでいなかった。誰のも、こういう際は、持ったあとがしつとり、中には、じめじめとするのさえある。……

夫人はちよいと^{ふしめ}俯目になって、軽^{かろ}くその洋傘^{ひがさ}を支^ついて、

「よく気がついてねえ。（小さな声で、）——大儀、」

「はッ、主税御供仕りまする上からは、御道中いささかたりとも御懸念はござりませぬ。」

「静岡は暢氣のんきでしょう、ほほほほ。」

「三等米なら六升台で、暮しも楽な処ですって、婆さんが言いましたっけ。」

「あらまた、厭ねえ、貴下あなたは。後生ですからその（お米は幾千だい、）と云うのだけは堪か忍にして頂戴な。もう私は極りが悪くって、同行は恐れるわ。」

「ええ、そうおっしゃれば、貴女もどうぞその手巾で、こう、お招きになるのだけは止して下さい。余りと云えば紋切形だ。」

「どうせね、柳橋のようなわけには……」

「いいえ、今も、子守女もりっこめらが、貴女が手巾をお掉ふりなさるのを見て、……はははは、」

「何ですって、」

「はははははは。」

と事も無げに笑いながら、

「（男と女と豆煎、一盆五厘だよ。）ッて、飛んでもない、わッと囃はやして遁にげましたぜ。」

ツンと横を向く、脊が屹と高くなつた。引かなぐつて、その手巾をはたと地に擲つや否や、裳を蹴て、前途へつかつか。

その時義経少しも騒がず、落ちた堇色の絹に風が戦いで、鳩の羽はつと薫るのを、悠々と拾い取つて、ぐつと袂に突込んだ、手をそのまま、袖引合わせ、腕組みした時、色が變つて、人知れず俯向いたが、直ぐに大跨に夫人の後について、社の廻廊を曲つた所で追つ着いた。

「夫人。」

「……………」

「貴女腹をお立てなすつたんですか、困りましたな。知らぬ他国へ参りまして、今貴女に見棄てられては、東西も分りませんで、途方に暮れます。どうぞ、御機嫌をお直し下さい、夫人。」

「……………」

「英吉君の御妹御、菅子さん、」

「……………」

「島山夫人……………河野令嬢……………不可い、不可い。」

と口の裡うちで云つて、歩あ行き歩あ行き、

「ほんとうに機嫌を直して、貴女、御世話下さい、なまじつか、貴女にお便り申したために、今更ひとり独じや心細くつてどうすることも出来ません。もう決して貴女の前で、米ねの直は申しますまい。その代り、貴女もどうぞ貴族的でない、僕すまが住すまれそうな、實際、相談の出来そうな長屋式のお心掛けなすつて下さい。実はその御様子じや、二十円以内の家は念頭にお置きなさないように見受けたものですから、いささか諷する処あるつもりで、」

いつの間にか、有名な随神門も知らず知らず通越した、北口を表門へ出てしまった。

社は山に向い、直ぐ畠で、かえつて裏門が町続きになっているが、出口に家が並んでいるから、その前を通る時、主税も黙った。

夫人はもとより口を開かぬ。

やがて茶畑を折曲つて、小家まばらな、場末の町へ、まだツンとした態度でずんずん入る。

大巖山の町の上に、小さな溝があるばかり、障子の破やぶれから人顔も見えないので、その時ずツと寄つて、

「ものを云つて下さいよ。」

「おくさん
夫人、」

「……………」

十四

少時しばらく——主税ももう口を利こうとは思わない様子になって、別に苦にする顔かおつき色でもないが、腕こまぬを拱なりいた態で、夫人の一足後れに跟ついて行く。

裏町の中程に懸ると、両側の家は、どれも火が消えたように寂寞ひっそりして、空屋かと思えば、蜘蛛くもの巣を引くような糸車の音が何家どこともなく戸外おもてへ漏れる。路傍みちばたに石の古井筒があるが、欠目に青苔あおこけの生えた、それにも濡色はなく、ばさばさ燥はしやいで、流ながも乾からびている。そこいら何軒かして日に幾度、と数えるほどは米を磨ぐものも無いのであろう。時々陰に籠うめつて、しつこしの無い、咳せきの声の聞えるのが、墓の中から、まだ生きていると唸うめくよう。はずれ掛けた羽目に、咳止飴せきどめあめと黒く書いた広告びらの、それを売る店の名の、風に取られて読めないのも、何となく世に便りがない。

振返つて、来た方を見れば、町の入口を、真暗な隧道に樹立が塞いで、炎のように光線が透く。その上から、日のかげつた大巖山が、そこは人の落ちた谷底ぞ、と聳え立つて峰から哄と吹き下した。

かつ散る紅、靡いたのは、夫人の棲と軒の鯛、鯛は恵比寿が引抱えた処の絵を、色は褪せたが紺暖簾に染めて掛けた、一軒（御染物処）があつたのである。

廂から突出した物干棹に、薄汚れた紅の切が忘れてある。下に、荷車の片輪はずれたのが、塵芥で埋つた溝へ、引傾いて落込んだ——これを境にして軒隣りは、中にも見すばらしい破屋で、煤のふさふさと下つた真黒な潜戸の上の壁に、何の禁厭やら、上に春野山、と書いて、口の裂けた白黒まだらの狗の、前脚を立てた姿が、雨浸に浮び出でて朦朧とお札の中に踰れて活るがごとし。それでも鬼が来て覗くか、楽書で捏ちたような雨戸の、節穴の下に柎の枝が落ちていた……鬼も屈まねばなるまい、いとど低い屋根が崩れかかつて、一目見ても空家である——またどうして生まれよう——お札もかかる家に在つては、軒を伝つて狗の通るように見えて物凄。

フト立留まつて、この茅家を覗めた夫人が、何と思つたか、主税と入違いに小戻りして、洋傘を袖の下へ横えると、惜げもなく、髪で、件の暖簾を分けて、隣の紺屋の店前

へ顔を入れた。

「御免なさいよ、御隣家おとなり いえの屋を借りたいんですが、」

「何でございますと、」

と、頓興とんきような女房の声がする。

「家賃は幾千いくらでしようか。」

「ああ、貞造さんの家うちの事かね。」

余り思切った夫人の挙動ふるまいに、呆氣あつけに取られて茫然とした主税は、（貞造。）の名に鋭

く耳をそばだてた。

「空家ではござりませぬが。」

「そう、空家じゃないの、失礼。」

と肩の暖簾をはずして出たが、

「大照れ、大照れ、」

と言つて、莞爾にっこりして、

「早瀬さん、」

「……………」

「人のことを、貴族的だなんのって、いぎ、となりや私だって、このくらいな事はして上げるわ。この家じや、貴下だつて、借りたいと言つて聞かれないでしょう。ちよいと、これでも家の世話が私にや出来なくつて？」

さすがに夫人もこれは離れ業であつたと見え、目のふちが颯となつて、胸で呼吸をはずませる。

その燃ゆるような顔を凝と見て、ややあつて、

「驚きました。」

「驚いたでしょう、可い気味、」

と嬉しように、勝誇つた色が見えたが、歩行き出そうとして、その茅家をもう一目。

「しかし極が悪かつてよ。」

「何とも申しようはありません。当座の御礼のしるし迄に……」と先刻拾つて置いた董色の手巾を出すと、黙つて頷いたばかりで、取るような、取らぬような、歩行しながら肩が並ぶ。袖が擦合うたまま、夫人がまだ取られぬのを、離すと落ちるし、そうかと云つて、手はかけているから……引込めもならず……提げていると……手巾が隔てになった袖が触れそうだったので、二人が齊しく左右を見た。両側の伏屋の、ああ、どの軒にも怪しいお

札の狗が……

貸小袖

十五

今来た郵便は、夫人の許へ、主人の島山理学士から、帰宅を知らせて来たのだろう……
と何となくそういう気がしつつ——三四日日和が続いて、夜になってももう暑いから——
長火鉢を避けた食卓の角の処に、さすがにまだ端然と坐つて、例の（菅女部屋。）で、主
税は独酌にして、ビール。

塀の前を、用水が流るるために、波打つばかり、窓掛に合歡の花の影こそ揺れ揺れ通え、
差覗く人目は届かぬから、縁の雨戸は開けたままで、心置なく飲めるのを、あれだけの酒
好が、なぜか、夫人の居ない時は、硝子杯へ注げる口も苦そうに、差置いて、どうやら鬱
ぐらしい。

襖ふすまが開いた、と思うと、羽織なしの引掛帯ひっかけおび、結び目が摺ずつて、横になつて、くつろいだ衣紋えもんの、胸から、柔かにふつくりと高い、真白まっしろな線を、読みかけた玉章たまずさで斜めに仕切つて、衾おくみさ下りにその繰くり伸のした手紙の片端を、北斎が描いた蹴出けだしのごとく、ぶるぶるとぶら下げながら出た処は、そんじよ芸者それしやの風がある。

「やつと寝かしつけたわ。」

と崩るるように、ばつたり坐つて、

「上の児こは、もう原もとつから乳母ばあやが好いいんだし、坊も、久しく私と寝ようなんぞと云わなかつたんだけれども、貴下にかかりつきりで構かまいつけないし、留守にばかりしたもんだから、先刻さつきのあの取ツ着かれようを御覧なさい。」

と手紙を見い見せい忙せわしそうに云う。いかにもここで膳を出したはじめには、小児こどもが二人とも母様かあさんにこびりついて、坊やなんざ、武者振いきおいつく勢。目の見えない娘こは、寂さみしそうに坐つたきりで、しきりに、夫人の膝から帯をかけて両手で撫でるし、坊やは肩から負われかかつて、背ける顔へ頬を押おつつけ、躲かわす顔の耳許みみもとへかじりつくばかりの甘え方。見るまにぱらぱらに鬢びんが乱れて、面影も瘦やせたように、口のあたりまで振かかるのを搔かいかひかうその白やかな手が、空を掴つかんで悶もたえるようで、（乳母ばあや来ておくれ。）と云つた声が悲鳴のよう

に聞えた。乳母が、（まあ、何でもござります、嬢ちやまも、坊つちやまも、お客様の前で、）と主税の方を向いたばかりで、いつも嬢さまかぶれの、眠ったような俯目の、顔を見ようとしないので、元氣なく微笑みながら、娘の児の手を曳くと、厭々それは離れたが、坊やが何と云つても肯かなくつて、果は泣出して乱暴するので、時の間も座を惜しそうな夫人が、寝かしつけに行つたのである。

そこへ、しばらくして、郵便——だった。

すらすらと読果てた。手紙を巻戻しながら顔を振上げると、乱れたままの後れ毛を、煩さそうに搔上げて、

「ついぞ思出しもしなかった、乳なんか飲まれて、さんざ膏を絞られたわ。」

と急いで衣紋を繕つて、

「さあ、お酌をしましょう。」

瓶を上げると、重い。

「まあ、ちつとも召喚らないのね。お酌がなくなつては不可いの、ちよいと贅沢だわ。ほほほ、家も極まったし、一人で世帯を持った時どうするのよ。」

「沢山頂きました、こんなに御厄介になつては、実に済みません……もう、徐々失礼し

ましよう。」

と恐しく真面目に云う。

「いいえ、返さない。この間から、お泊んなさいお泊んなさいと云つても、貴下が悪いと云うし、私も遠慮したけれど、可い^いわ、もう泊つても。今ね、御覧なさい、牛込に居る母^か様から手紙が来て、早瀬さんが静岡へお出^{いで}なすつて、幸いお知^{ちかづ}己になったのなら、精一杯御馳走なさい、と云つて来たの。嬉しいわ、私。

あのね、実はこれは返事なんです。汽車の中でお目にかかった事から、都合があつてこちらで塾をお開きなさるに就いて、ちつとも土地の様子を御存じじゃない、と云うから、私がお世話をしてなんて、そこはね、可いように手紙を出したの、その返事、」

と掌^{てのひら}に巻き据えた手紙の上を、軽く一つとんと拍^うつて、

「母^{かあさん}様が可い、と云つたら、天下晴れたものなんだわ。緩^{ゆつく}り召^{めし}食^{あが}れ。そして、是非今夜は泊るんですよ。そのつもりで風呂も沸^{わか}してありますから、お入んなさい。寝しなにしまするか、それとも颯^{さつ}と流してから喫^{あが}りますか。どちらでも、もう沸いてるわ。そして、泊るんですよ。可^よくつて、」

念を入れて、やがて諾^{うん}と云わせて、

「ああ、昨日も一昨日も、合歡の花の下へ来ては、晩方寂しそうに帰ったわねえ。」

十六

さて湯へ入る時、はじめて理学士の書齋を通った。が、机の上は乱雑で、そこに据えた座蒲団も無かった、早瀬に敷かせているのがそれらしい。

机には、広げたままの新聞も幅をすれば、小児の玩弄物も乗って、大きな書棚の上には、世帯道具が置いてある。

湯は、だだっ広い、薄暗い台所の板敷を抜けて、土間へ出て、庇間を一跨ぎ、据風呂をこの空地から焚くので、雨の降る日は難儀そうな。

そこに踞んでいた、例のつんつるてん鞠子の婢が、湯加減を聞いたが上塩梅。

どつぷり沈んで、遠くで雨戸を繰る響、台所をばたばた二三度行交いする音を聞きながら、やがて洗い果ててまた浴びたが、湯の設計は、この邸に似ず古びていた。

小灯の朦々と包まれた湯気の中から、突然禪のなりで、下駄がけで出ると、颯と風の通る庇間に月が見えた。廂はずれに覗いただけで、影さす程にはあらねども、と見れ

ば尊き光かな、裸身はだみに颯と白銀しろがねを鎧よろつたように二の腕あたり蒼あおずんだ。

思わず打仰いで、

「ああ、お妙たえさん。」

俯向うつむいた肩がふるえて、

「お蔭かげ！」

蹣跚よろめいたように母屋の羽目に凭もたれた時、

「早瀬さん、」と、つい台所だいどころに、派手やかな夫人の声で、

「貴下、上ったら、これにお着換えなさいよ。ここに置いときますから、」

「憚はばり、」

と我に返つて、上つて見ると、薄べりを敷いた上に、浴衣がある。琉球紬つむぎの書生羽織ゆきみじかが添えてあつたが、それには及ばぬから浴衣だけ取つて手を通すと、桁ゆきみじか短に腕が出て着心の變な事は、引上げても、引上げても、裾が摺するのを、引縮めて部屋へ戻ると……道理こそ婦物おんなもの。中形模様の媚なまめかしいのに、藍あいの香が芬ぶんとする。突立つて見ていると、夫人は中腰に膝を支ついて、鉄瓶を掛けながら、

「似合つたでしょう、過日谷屋いつかが持つて来て、貴下が見立てて下すつたのを、直ぐ仕立て

さしたのよ。島山のはまだ縫えないし、あるのは古いから、我慢して寝衣ねまぎに着て頂戴。」

「むぎむぎ新らしいのを。」

と主税は袖を引張る。

「いいえ、私、今着て見たの、お初ではありません。御遠慮なく、でも、お気味が悪くはなくて。ちよいと着たから、」

「気味が悪い、」

「……………」

「もんですか。勿体至極もござらん。」

と極きまったが、何かまだ物足りない。

「帶ですか。」

「さよう、」

「これを上げましょう。」

とすつと立つて、上緊うわしめをずりと手繰った、麻の葉絞ちぢみの絹縮。

「……………」

目を見合せ、

「可^いいわ、」

とはたと畳に落して、

「私も一風呂入つて来ましょう。今の内に。」

主税はあとで座敷を出て、縁側を、十畳の客室^{きやくま}の前から、玄関の横手あたりまで、行つたり来たり、やや跣^{あしおと}音のするまで歩^{ある}行いた。

婢^{おさん}が来て、ぬいと立つて、

「夫人^{おくさま}が言いましけえ、お涼みなさりますなら雨戸を開けるでござります。」

「いや、宜^{よろ}しい。」

「はい。」と念入りに返事する。

「いつも何時頃にお休みだい。」

と親しげに問いかけながら、口不重宝な返事は待たずに、長火鉢^{わき}の傍へ、つかつかと帰つて、紙入の中をざつくりと掴んだ。

疾^{はや}い事、もう紙に両個^{ふたつ}。

「一個^{ひとつ}は乳母^{ばあや}さんに、お前^{おくさん}さんから、夫人に云わんのだよ。」

十七

寝たのはかれこれ一時。

膳は片附いて、火鉢の火の白いのが果敢ないほど、夜も更けて、寂と寒くなつたが、話に実が入つたのと、もう寝よう、もう寝ようで炭も継がず。それでも火の気が便りだから、横坐りに、褌を引合せて肩で押して、灰の中へ露わな肱も落ちるまで、火鉢の縁に凭れかかつて、小豆ほどんな火を拾う。……湯上りの上、昼間歩行き廻つた疲れが出た菅子は、髪も衣紋も、帯も姿も萎えたようで、顔だけは、ほんのりした——麦酒は苦くて嫌い、と葡萄酒を硝子杯に二ツばかりの——酔さえ醒めず、黒目は大きく睫毛が開いて、艶やかに湿つて、唇の紅が濡れ輝く。手足は冷えたろうと思うまで、頭に気が籠つた様子で、相互の話を留めないのを、余り晩くなつては、また御家来衆が、変にでも思うと不可ませんから、とそれこそ、人に聞えたら変に思われそうな事を、早瀬が云つて、それでも夫人のまだ話し飽かないのを、幾度促しても肯入れなかつたが……火鉢で隔てて、柔かく乗出していた肩の、衣の裏がするりと上つた時、薄寒そうに、がっくりと頷くと見ると、早急にフイと立つ……。

膝に搦んだ裳が落ちて、蹠踉めく袖が、はらりと、茶棚の傍の襖に当った。肩を引いて、胸を反らして、おつくらしく、身体で開けるようにして、次室へ入る。

板廊下を一つ隔てて、そこに四畳半があるのに、床が敷いてあつて、小児が二人背中合せに枕して、真中に透いた処がある。乳母が両方を向いて寝かし附けたらしいが、よく寝入っていて、乳母は居なかった。

トそこを通り越して、見えなくなつたきり、襖も閉めないで置きながら、夫人はしばらく経つても来なかつた。

早瀬は灰に突込んだ堆い巻、苧の吸殻を視めながら、ああ、喫んだと思い、ああ、饒舌つたと考える。

その話、と云うのが、かねて約束の、あの、ギョウテの（エルテル）を直訳的という註文で、伝え聞くかの大詩聖は、ある時シルレルと葡萄の杯を合せて、予等が詩、年を経るに従いていよいよ貴からんことこの酒のごとくならん、と誓つたそうだわね、と硝子杯を火に翳してその血汐のごとき紅を眉に宿して、大した学者でしょう、などと夫人、得意であつたが、お酌が柳橋でなくつては、と云う機掛から、エルテルは後日にして、まあ、題も（ハヤセ）と云うのを是非聞かして下さい、酒井さんの御意見で、お別れなすつ

た事は、東京で兄にも聞きましたが、恋人はどうなさいました。厭だわ、聞かさなくつちや、と強いられた。

早瀬は悉く^{くわ}懺悔^{ざんげ}するがごとく語ったが、都合上、ここでは要を摘んで置く。……

義理^{わかれ}から別離^{わかれ}話になると、お薦は、しかし二度芸者^{つとめ}をする気は無いから、幸いめ組の惣^そ助^{うすけ}の女房は、島田が名人の女髪結。柳橋は廻り場で、自分も結って貰って懇意だし、め

組とはまたああいう中で、打明話が出来るから、いつそその弟子になって髪結で身を立てる。商売をひいてからは、いつも独りで束ねるが、銀杏返^{いちょうがえ}しなら不自由はなし、雛妓^{おしやく}の

桃割ぐらいは慰みに結ってやって、お世辞にも誉められた覚えがある。出来ないことはあ

りますまい、親もなし、兄弟もなし、行く処と云えば元の柳橋の主人の内、それよりは肴^さ屋^{かなや}へ内弟子に入って当分梳手^{すきて}を手伝いましょう。……何も心まかせ、とそれに極^きまった。

この事は、酒井先生も御承知で、内証^{ないしょう}で飯田町の二階で、直々^{じきじき}に、お薦に逢つて下すつて、その志の殊勝なのに、つくづく頷^{うなず}いて、手ずから、小遣など、いろいろ心^{こころづけ}着^けがあった、と云う。

それぎり、顔も見ないで、静岡へ引込^{ひっこ}むつもりだったが、め組の惣助の計らいで、不意に汽車の中で逢つて、横浜まで送る、と云うのであった。ところが終列車で、浜が留まり

だったから、旅籠も人目を憚^{はば}って、場末の野毛の目立たない内へ一晚泊^{はたか}った。

（そんな時は、）

と酔っていた夫人が口を挟んで、顔を見て笑ったので、しばらくして、

（背中合わせで、別々に。）

翌日、平沼から急行列車に乗り込んで、そうして夫人^{あなた}に逢ったんだと。……

うつらうつら

十八

途中で談話^{はなし}に引入れられて鬱^{ふさ}ぐくらい、同情もしたが、芸者なんか、ほんとうにお止しなさいよ、と夫人が云う。主税は、当初^{はじめ}から酔わなきや話せないで陶然^{はじめ}としていたが、さりながら夫人、日本広しといえども、私にお飯^{まんま}を炊てくれた婦^{おんな}は、お薦^{おん}の他ありません。母親の顔も知らないから、噫^{ああ}、と喟然^{きぜん}として天井を仰いで歎ずるのを見て、誰が赤い顔を

してまで、貸家を聞いて上げました、と流石しりめにかけて、ツンとした時、失礼ながら、家では命は繋つなげません、貴女は御飯が炊けますまい。明日は炊くわ。米をにるのだ、と笑って、それからそれへ花は咲いたのだったが、しかし、気の毒だ、可哀相に、と憐あわれみ愍めづはしたけれども、徹頭徹尾、（芸者はおよしなさい。）……この後たとい酒井さんのお許可ゆるしが出て、私が不承知よ。で、さてもう、夜が更けたのである。

出て来ない——夫人はどうしたろう。

がたがた音がした台所も、遠くなるまで寂寞ひっそりして、耳馴れたれば今更めけど、戸外は数万の蛙かわずの声。蛙、蛙、蛙、蛙と書いた文字に、一ツ一ツ音があつて、天地あめつちに響くがごとく、はた古戦場を記した文に、尽く調ことごとくがあつて、章と句と齊ひとしく声を放つて鳴くがごとく、何となく雲が出て、白く移り行くに従うて、動揺どうよみを造つて、国が暗くなる氣勢けはいがする。

時に湯気の蒸した風呂と、底合ひあわいの月を思うと、一生の道中記に、荒れた駅路うまやじの夜の

孤旅ひとりたびが思出される。

渠かれは愁然として額を圧おさえた。

「どうぞお休み下さりまし。」

と例の俯向いた陰気な風で、敷居越に乳母が手を支いた。

「いろいろお使い立てます。」

と直ぐにずツと立つて、

「どちらですか。」

「そこから、お座敷へどうぞ……あの、先刻はまた、」と頭を下げた。

寢床はその、十畳の真中に敷いてあつた。

枕許に水指と、硝子杯を伏せて盆がある。煙草盆を並べて、もう一つ、黒塗金

蔕絵の小さな棚を飾つて、毛糸で編んだ紫陽花の青い花に、玉の丸火屋の残燈を包ん

で載せて、中の棚に、香包を斜めに、古銅の香合が置いてあつて、下の台へ鼻紙を。重し

の代りに、女持の金時計が、底澄んで、キラキラ星のように輝いていた。

じろりと視めて、莞爾して、蒲団に乗ると、腰が沈む。天鵝絨の括枕を横へ取つ

て、足を伸して裙にかさねた、黄縞の郡内に、桃色の絹の肩当てした搔巻を引き寄せる、

手が這つて、ひやりと軽くなかつた裏の羽二重が燃ゆるよう。

トタンに次の書斎で、するすると帯を解く音がしたので、まだ横にならなかつた主税は、搔巻の襟に両肱を支いた。

乳母が何か云つたようだったが、それは聞えないで、派手な夫人の声して、

「ああ、このまま寝ようよ。どうせ台なしなんだから。」

と云つたと思うと、隔ての襖ふすまの左右より、中ほどがスーと開いたが、こなたの十畳の京間は広し、向うの灯あかりも暗いから、裳もすそはかくれて、乳ちの下しげきの扱帯が見えた。

「お休みなさい。」

「失礼。」

と云う。襖を閉めて肩を引いた。が、幻の花環一つ、黒髪あたりのありし辺、宙に残つて、消えずに倅おもかげに立つ。

主税は仰向けに倒れたが、枕はしないで、両手を廻して、しっかと後腦を抱いた。目はハッキリと睜みひらいて、失せやらぬその幻を視めていた。時過ぎる、時過ぎる、その時の過ぎる間に、乳母が長火鉢の処ランブの、洋燈を消したのが知れて、しっこは、しっこは、と小児こどもに云うのが聞えたが、やがて静まつて、時過ぎた。

早瀬は起上つて、棚ありあけの残燈を取つて、縁へ出た。次の書斎を抜けるとまた北向きの縁で、その突当りに、便所かわやがあるのだが、夫人が寝たから、大廻りに玄關へ出て、鞠子の婢おさんの寝た裙すそを通つて、板戸を開けて、台所だいどころの片隅ひらきの扉から出て、小用を達たして、手を洗つて、

手拭てぬぐいを持つと、夫人が湯で使ったのを掛けたい、冷く手に触って、ほんのり白粉おしろいの香においがする。

十九

寢室ねまへ戻って、何か思切ったような意気込で、早瀬いそは勢いきおいよく枕して目を閉じたが、枕許こころの香は、包を開けても見ず、手拭の移香でもない。活々とした、何の花か、その薫の影はな
いが、透通ことうって、きらきら、露を揺ゆって、幽かすかな波を描いて恋を囁ささやくかと思われる一種微妙
な匂が有って、搔卷かいはらの袖を辿たどって来て、和やわらかに面を撫おもでる。

それを搔かい払はらうごとく、目の上を両手で無慚むざんに引ひ擦こすると、ものの香はぱつと枕に遁にげ
て、縁側ひっかえの障子の隅へ、音も無く潜んだらしかったが、また……有りもしない風を伝つて、
引返して、今度は軽かろく胸に乘る。

寝返りを打てば、袖の煽あおりにふつと払われて、やがて次の間と隔ての、襖ふすまの際に籠かこった気
勢はい、原もとの花片はなびらに香が戻って、匂は一処に集ったか、薫ひとしおが一汐高くなった。

快い、さりながら、強い刺戟を感じて、早瀬が寝られぬ目を開けると、先刻さつき（お休みな

さい。を云つた時、管子がそこへ長襦袢の模様を残した、襖の中途の、人の丈の肩あたりに、幻の花環は、色が薄らいで、花も白澄んだけれども、まだ歴々と瞳に映る。

枕に手を支き、むつくり起きると、あたかもその花環の下、襖の合せ目の処に、残燈の隈かと思えて、薄紫に畳を染めて、例の菫色の手巾が、寂然として落ちたのに心着いた。

薫はさてはそれからと、見る見る、心ゆくばかりに思うと、萌黄に敷いた畳の上に、一ひ簇の菫が咲き競つたようになって、朦朧とした花環の中に、就中輪の大きい、目に立つ花の花片が、ひらひらと動くや否や、立処に羽にかわつて、蝶々に化けて、瞳の黒い女の顔が、その同一処にちらちらする。

早瀬は、甘い、香しい、暖かな、とりとした、春の野に横わる心地で、枕を逆に、搔卷の上へ寝巻の腹ん這になつて、蒲団の裙に乗出しながら、頬杖を支いて、恍惚した状にその菫を見ている内、上にたたずむ蝶々と斉しく、花の匂が懐しくなつたと見える。

やおら、手を伸して紫の影を引くと、手巾はそのまま手に取れた。……が菫には根が有つて、襖の合せ目を離れない。

不思議に思つて、蝶々がする風情に、手で羽のごとく手巾を揺動かすと、一寸ばかり襖

が……開……い……た。

と見ると、手巾の片端に、紅の幻影が一条、柔かに結ばれて、夫人の間に、するすると繫つていたのであった。

董が咲いて蝶の舞う、人の世の春のかかる折から、こんな処には、いつでもこの一条が落ちてゐる、名づけて縁の糸と云う。禁断の智慧の果実と齊しく、今も神の試みで、棄てて手に取らぬ者は神の児となるし、取つて繫ぐものは悪魔の眷属となり、畜生の浅猿しさとなる。これを夢みれば蝶となり、慕えば花となり、解けば美しき霞となり、結べば恐しき蛇となる。

いかに、この時。

隔ての襖が、より多く開いた。見る見る朱き蛇は、その燃ゆる色に黄金の鱗の紋を立てて、董の花を搔潜った尾に、主税の手首を巻きながら、頭に婦人の乳の下を紅見せて囁んでいた。

颯と花環が消えると、横に枕した夫人の黒髪、後向きに、搔卷の襟を出た肩の辺が露に見えた。残燈はその枕許にも差置いてあったが、どちらの明でも、繫いだものの中は断たれず。……

ぶるぶる震うと、夫人はふいと衾ふすまを出て、胸を圧おさえて、熟じつと見据えた目に、閨みまわの内を
して、^{ほう}としたようで、まだ覚めやらぬ夢に、堇咲く春の野を徜徉さまようごとく、裳もすそも畳ただよに漾
つたが、ややあつて、はじめてその怪い扱しご帯の我を纏まとえるに心着いたか、あ、と忍び音に、
魔うなされた、目の美しい蝶の顔は、俯向けに堇の中へ落ちた。

思いやり

二十

妙子は同伴つれも無しにただ一人、学校がえりの態なりで、八丁堀のとある路地へ入つて来た。
通うその学校は、^{こうじまち}麹町辺であるが、どこをどう廻ったのか、真砂まさご町の嬢さんがこ
の辺へ来るのは、旅行をするようなもので、野山を越えてはるばると……近所ならで温習なつて
いる三味線さみせんも、旅の衣はすずかけの、旅の衣はすずかけの。

目で聞くごとくぱつちりと、その黒目勝みはなのを睥みはつたお妙は、鶯おんなじの声を見る時と同一

な可愛い顔で、路地に立つてみまわしながら、橘たちばなに井げたの紋、堀の内講こうじゅう中のお札を並べた、上原かんばらと姓だけの門札かどふだを視ながめて、単衣ひとえの襟をちよいと合わせて、すつとその格子戸へ寄つて、横に立つて、洋傘ひがさを支ついたが、声を懸けようとしたらしく、斜めに覗のぞき込んだ顔を赤らめて、黙うつつつて俯向ふしめいて俯目うつめになった。口許くちもとより睫毛まつげが長く、日にさした影は小さく軒下に隠れた。

コトコトとその洋傘ひがさで、爪先つまさきの土を叩たたいていたが、

「御免なさい。」

とようよう云う、控え目だつたけれども、朗ほがらかすに清きよしい、框かまちの障子越にずつと透とおる。

中からよく似た、やや落着いた静しずかな声で、

「はあ、誰方どなた？」

お妙は自分から調子が低く、今のは聞えない分に極きめていたのを、すぐの返事は、ちと不意討びつくりという風で、吃驚びっくりして顔を上げる。

「誰方、」

「あの……髪結さんの内はこつちでしょうか。」

「はい、こちらでございますが。」と座を立つた氣勢けはいに連れて、もの云う調子が婀娜あだにな

る。

と真正面まつしようめんに内を透かして、格子戸に目を押附おツつける。

「何ぞ御用。」

といくらか透いていた障子をすらりと開ける。粹で、品の佳いい、しっとりした縞しまお召に、黒縹くろじゆす子の丸帯した御新造風の円鬘まるまげは、見違えるように質素しじみだけれども、みどりの黒髪たぐいなき、柳橋こやしの小芳であつた。

立身たちみで、框から外を見たが、こんな門かどには最明寺、思いも寄らぬ令嬢風に、急いで支つぎひ膝ざになつて、

「あいにく出掛けて居おりませんが、貴嬢あなた、どちら様でいらつしやいますか。帰りましたら、直ぐ上りますように申しましょう。」

瞳も離さないで視めたお妙が、後馳おくればせに会釈して、

「そう、でも、あの、誰方かおいででしょう。内へ来て貰うんじゃないの。私が結つて欲しいのよ。どうせ、こんなのですから、」

と指でも圧おさえず、惜気おしげなく束髪おしげの鬘びんを掉ふつて、

「お師匠さんでなくつても可いいんです。お弟子さんがお在いなら、ちよいと結んで下さいな

。――
 縫^{すが}つて頼むように仇^{あど}なく云つて、しつかり格子に掴^{つか}まつて、差覗きながら、

「小母さんでも可いわ。」

我を（小母さん）にして髪を結つて、と云われたので、我ながら忘れたように、心から美しい笑顔になつて、

「貴嬢、まあ、どちらから。あの、御近所でいらつしやいますか。」

「いいえ、遠いのよ。」

「お遠うございますか。」

「本郷だわ。」

「ええ、」

「私ねえ、本郷のねえ、酒井と云うの。」

「お嬢様、まあ、」

と土間に一足おろしさまに、小芳は、急いで框から開ける手が、戸に掴まつたお妙の指を、中から圧^{おさ}えたのも気が附かぬか、駒^{こま}下駄^{げた}の先を、逆^{さか}に半分踏まえて、片棲^{かたづま}蹴^ま出しのみだれさえ、忘れたように瞻^{みまも}つて、

「お妙様。」

「小母さんは、早瀬さんの……あの……お蔭さん？」

二十一

「いらつしやいまし、」

と小芳がいたあたら太く更まつて、三指を突いた時、お妙は窮屈そうに六畳のじようぎ上座へ直されていたのである。

「貴嬢あなた、まあ、どうしてこんな処へ、たつた御一人なんですか。途中で何かございませんでしたか、お暑かったでしようのに。唯ただいま今手拭を絞つて差上げます。」

と一いつとき斉に云いかけられて、袖で胸を煽あおいでいた手を留めて、

「暑いんじゃないの、私きまり極が悪いから、それでもつて、あの、」

と袂たもとを顔に当てて、鈴のような目ばかり出して、

「小母さんが、お蔭さん？」と低声こゝろこゝろでまた聞いた。

「あれ、どうしましょう。あんまり思懸けない方がお見えなさいましたもんですから、私

は狼狽とつちてしまつてき。ほほほ、いうことも前後あとさきになるんですもの、まあ、御免なさいまし。

私は……じやありません。その……何でございますよ、お蔭さんが煩わづらつて寝ておりますので、見舞に來たんでございます。」

「ええ、御病氣。」と憂慮きづかわしげに打傾く。

「はあ、久しい間、」

「沢山たん、悪くつて？」

「いいえ、そんなでもないようですけれど、臥ふつておりますから、お髪ぐしはあげられませんでしょう。ですが、御緩ごゆつくり、まあ、なさいまし。この頃では、お増さんも氣に掛けて、早く歸つて参りますから、ほんとうに……お嬢さん、」

と擦寄みとつて、うっかりと見惚みとれている。

上あがりぐち 框まがが三疊で、直ぐ次がこの六疊。前の縁が折曲おりまがつた処に、もう一室ひとま、障子は真ま中んなかで開いていたが、閉つた蔭に、床があれば有るらしい。

向うは余所よその蔵で行詰つたが、いわゆる猫の額ほどは庭も在つて、青いものも少しは見える。小綺麗さは、酔のだくれには過ぎたりといえども、お増と云う女房の腕で、畳あおも蒼い。

上原とあつた門札こそ、世を忍ぶ仮の名でも何でも無い、すなわちこれめ組の住居、実は女髪結お増の家と云つてしかるべきであろう。

惣助の得意先は、皆、渠かれを称して恩田百姓と呼ぶ。註に不及、作取りのただ儲け、商売あきないで儲けるだけは、飲むも可よし、打ぶつても可よし、買うも可よしだが、何がさてそれで済もうか。儲けを飲んで、資本もとでで買つて、それから女房の衣服きもので打つ。

それお株がはじまつた、と見ると、女房はがちがちと在りたけの身しんしょう上へ錠をよろして、鍵を昼夜帯へ突込んで、当分商売はさせません、と仕事に出る、

トかますの煙草入に湯銭も無い。おなまめだんぶつ、座敷牢だ、と火鉢の前に縮すくまつて、下げ煙管ぎせるの投首が、ある時悪心増長して、鉄瓶ひつばを引外ひずし、沸にた立つた湯を流ながしへあけて、溝の湯気の消えぬ間に、笹蕎麦ざるそばで一杯いちを極きめた。

その時女房に勘当されたが、やつとよりが戻つて以来、金目な物は重箱まで残らず出入先へ預けたから、家には似ない調度の疎末そまつさ。どこを見てもがらんとして、間狭ませまな内には結句さつぱりして可よさそうなが、お妙は目を外らす壁張りの絵も無いので、しきりに袂たもとを爪繰つまぐつて、

「可とこいのよ、小母さん、髪結さんの許とこだから、極とこりが悪いからそう云つて来たけれど、髪

なんぞ結わなくったって構わなくってよ。ちつとも私、結いたくはないの、」
と投出したように云って、

「早瀬さんの、あの、主税さんの奥さんに、私、お目にかかれなくって？」

「姉さん、」

ト、障子の内から。

「あい、」と小芳が立構えで、縁へ振向いてそなたを見込むと、

「私、そこへ行っても可いかい？」

小芳が急いで縁づたいで、障子を向うへ押しながら、膝を敷居越に枕許。

枕についた肩細く、半ば搔巻を藻脱けた姿の、空蟬のあわれな胸を、瘦せた手でし

つかりと、浴衣に襲ねた寝衣の襟の、はだかったのを切なそうに掴みながら、銀杏返しの

鬢の崩れを、引結えた頭重げに、透通るように色の白い、鼻筋の通った顔を、がっくり

と肩につけて、吻と今呼吸をしたのはお蔭である。

お蔭は急に起上った身体からだのあがきで、寢床に添った押入の暗い方へ顔の向いたを、こなたへ見返すさえ術じゆつなそうであつた。

枕から透く、その細う振よれた背せへ、小芳が、密そつと手を入れて、上へ抱起すようにして、
「切なくはないかい、お蔭さん、起きられるかい、お前さん、無理をしては不可いけないよ。」

「ああ、難ありがと有う、」

とようよう起直つて、顱はちまき巻を取ると、あわれなほど振りかかる後れ毛を搔上げながら、

「何だか、骨が抜けたようで可笑おかしいわ、氣障きざだねえ、ぐったりして。」

と蓮葉はすはに云つて、口惜くやしそうに力のない膝しを緊め合わせる。

お妙はもう六畳の縁へ立つて来て、障子に掴のまつて覗のぞいていたが、

「寝ていらつしやいよ、よう、そうしておいでなさいよ。私がそこへ行つてよ。」

とそれまで遠慮したらしかったが、さあとなると、翻然ひらりと縁を切つて走込むばかりの勢いきおい

——小芳の方が一目先へ御見の済んだ馴染なじみだけ、この方が便りになったか、薄くお太鼓に結んだ黒繻子のその帯へ、擦すり着くように坐つて、袖のわきから顔だけ出して、はじめて逢つたお蔭の顔を、瞬じつもしないで凝ながと視める。

肩を落して、お蔭が蒲団の外へ出ようとするのを、

「よう、そうしていらつしやいなね。そんなにして、私は困るわ。」

「はじめまして、」

と余り白くて、血の通るのは覚束ない頸を下げて、手を支きつつ、

「失礼でございますから、」

「よう、私困るのよ。寝ていて下さらなくつては。小母さん、そう云つて下さいな。」

と氣を揉んで、我を忘れて、小芳の背中をとんと叩いて、取次げ、と急つて云う。

その優しさが身に浸みつか、お薦の手をしつかり握つた、小芳の指も震えつつ、

「お薦さん、可いから寝ておいでな、お嬢さんがあんなに云つて下さるからさ。」

「いいえ、そんなじやありません。切なければ直きに寝ますよ。お嬢さん、難有う存じま

す。貴嬢、よくおいで下さいましたのね。」

「そして、よく家が知れましたわね。この辺へは、滅多においでなさいましたことはござんせんでしようにねえ。」

小芳はまた今更感心したように熟々云つた。

「はあ、分らなくつてね。私、方々で聞いて極りが悪かつたわ。探すのさえ煩かしいんですもの。何だか、あの、小母さんたちは、ちよいとは、あの、逢つて下さらなかうと思

つて、私、心配ッたらなかつてよ。」

「私たちが……」

「なぜでございますえ。」

と両方へ身を開いて、お妙を真中まんなかにして左右から、珍らしそうに顔を見ると、俯向うつむきながら打微笑み、

「だって私は、ちつともお金子かねが無いんですもの。お茶屋へ行つて、呼ばなくつては逢えないのじゃありませんか。」

お薦がハツと吐息といきをつくつと、小芳はわざと笑いながら、

「怪我にもそんな事があるもんですか。それに、お薦さんも、もう堅気です。私が、何も……あの、もつとも、私に逢おうとおつしやつて下すつたのではござんせんが、」

となぜか、怨めしそうな、しかも優い目やさしで瞻みまもつて、

「私は何も、そんな者じゃありませんのに。」

「厭あどけよ、小母さん、私両方とも写真で見えて知つていてよ。」

と仇気あどけなく、小芳の肩へ手を掛けて、前髪を推込むばかり、額をつけて顔を隠した。

二人目と目を見合せて、

「極きまりが悪い、お薦さん。」

「姉さん、私は恥かしい。」

「もう……」

「ああ、」

思わず一所に同音に云った。

「写真なんか撮るまいよ、」——と。

二十三

お妙は時に、小芳の背後うしろで、内証ないしょうで袂のぞを覗いていたが、細い紙に包んだものを出して気兼ねそうに、

「小母さん、あの、お薦さんが煩わづらわつていらつしやる事は、私は知らなかつたんですから、お見舞じやないの、あのね、あの、お土産に、私、極きまりが悪いわ。何にも有りませんから、毛糸で何か編んで上げようと思つたのよ。」

だけれども何が可いか、ちつとも分らないでしょう。粹しゆな芸者衆しゆだから、ハイカラなも

のは不可^{いけな}いでしょう。靴足袋も、手袋も、銀貨入も、そんなものじゃ仕方が無いから、これをね、私、極りが悪いけれども持つて来ました。小母さんから上げて頂戴。」

「お喜びなさいよ、お嬢さんが、」

「まあ、」

と嬉しそうに頂くのを、小芳は見い見い、蒲団へ膝を乗懸けて、

「何を下すつたい。」

「開けて見ても可いかね。」

「早く拝見おしなねえ。」

「あら！ 見ちゃ可^い厭^やよ、酷^{ひど}いわ、小母さんは。」

と背中を推着^{おツつ}いて、たつた今まで味方に頼んだのを、もう目の敵^{かたき}にして、小突く。

お蔭は病気で氣も弱つて、

「遠慮^{おとな}しましょうかね、」と柔順しく膝の上へ大事に置く。

「ほんとうに、お蔭^{うらやま}さんは羨^{うらやま}しいわねえ。」

ときも羨^{うらやま}しそうに小芳が云うと、お妙はフト打仰向^{ひびろうど}いて、目を大きくして何か考えるようだったが、もう一つの袂^{ひびろうど}から緋天鵝絨^{がまぐち}の小さな蝦蟇^{がまぐち}口を可愛らしく引出して、

「小母さん、これを上げましょう。怒っっちゃ可厭よ。沢山たんとあると可いけれど、大な銀貨おおき（五十錢）が三個みつだけだわ。」

先の紙入せんの時は、お紙幣さつが……そうねえ……あの、四円ばかりあつたのに、この間落してねえ。」

と驚いたような顔をして、

「どうしようかと思つたの。だからちつとばかしだけけれど、小母さん怒らないで取つて下さいな。」

小芳が吃驚びっくりしたらしい顔を、お薦は振上げた目で屹きつと見て、

「ああ、先生のお嬢さん。……とも……かくも……頂戴おしよ、姉さん、」

「お礼を申し上げます。」

と作法正しく、手を支ついたが、柳の髪の毛の佳よさ。頭も得つむり上げず、声が曇つて、

「どうぞ、此金これで、苦界くがいが抜くけられますように。」

その時お薦も、いもと仮名書の包みを開けて、元氣よく発奮はげんだ調子で、

「おお、半襟を……姉さん、江戸紫の。」

「主税さんが好きな色よ。」

と喜ばれたのを嬉しげに、はじめて膝を横にずらして、蒲団にお妙が袖をかけた。

「姉さん、」

と、お蔦は俯向いた小芳を起して、膝突合わせて居直ったが、頬を薄蒼う染るまでその半襟を咽喉に当てて、頤深く熟と压えた、浴衣に映る紫榮えて、血を吐く胸の美しさよ。

「私が死んだら、姉さん、経帷子も何にも要らない、お嬢さんに頂いた、この半襟を掛けさしておくれよ、頼んだよ。」

と云う下から、桔梗を走る露に似て、玉か、はらはらと襟を走る。

「ええ、お前さん、そんな、まあ、拗ねたような事をお言いでない。お嬢さんのお志、私、私なんぞ、今頂いた御祝儀を資本にして、銀行を建てるんです。そして借金を返してね、

綺麗に芸者を止すんだよ。」

と串戯らしく言いながら、果敢ないお蔦の姿につけ、情にもろく崩折れつつ、お妙を中に面を背けて、紛らす煙草の煙も無かった。

小芳の心中、ともかくも、お蔦の頼み少ない風情は、お妙にも見て取られて、睫毛を幽に振わしつつ、

「お医者には懸っているの。」

「いいえ、私もその意見をしていた処でござんすよ。お医者様にもろくに診て貰わないで、薬も嫌いで飲まないんですもの、貴女からもそう云ってやって下さいましな。」
 と、はじめて煙草盆から一服吸って、小芳はお妙の声を聞くのを、楽しそうに待つ顔色。

お取膳

二十四

その時お妙の言ことばというのが、余り案外であつたのから、小芳は慌あわしく銀の小さな吸口を払はいて煙管きせるを棄てたのである。

「お医者もお薬も、私だつて大嫌いだわ。」

と至まつて真面目まじめで、

「まずいものを内服のせて、そしてお菓子を食べては悪いの、林檎を食べては不可いけいの、と

種々なことを云うんですもの。

そんな事よりねえ、面白いことをしてお遊びなさいよ。」

小芳が（まあ。）と云う体で呆れると、お蔭は寂しそうな笑を見せて、

「お嬢さん、その貴嬢、面白いことが無いんですもの、」と勢のない呼吸をする。

「主税さんに逢えば可いでしょう。」

「え、」

「貴女、逢いたいでしょう。」

二人が黙って瞻つても、お妙は目まじろぎもしないで、

「私だつて逢いたくつてよ。静岡へ行つてから、全く一年になるんですもの、随分だと思
うわ、手紙も寄越さないんですもの。私は、あんまりだと思つてよ。」

絵のお清書をする時、硯を洗つてくれて、そしてその晩別れたのは、ちょうど今月じゃ
ありませんか。その時の杜、若なんざ、もう私、嬰兒が描いたように思うんですよ。

随分しばらくなんですもの、私だつて逢いたいわ。」

と見る見る瞳にうるみを持ったが、活々した顔は撓まず、声も凜々と冴えた。

「それですから、貴女も逢いたかろうと思つてねえ。実は私相談に來たの。もっと早くか

ら、来よう、来ようと思つたんだけど、極きまりが悪いしねえ、それに私見たようなものには逢つて下さらないでしようと思つて、学校の帰りに幾いくたび度も九段まで来て止したの。

それでも、あの、築地から来るお友達に、この辺の事を聞いて置いて、九段から、電車に乗るのは分つたの。けどもねえ、一度万世橋めがねで降りてしまつて、来られなくなつた事があるのよ。

そのお友達と一所に来ると、新富座の処まで教えて上げましようツて云うんだけど、学校でまた何か言われると悪いから、今日も同一電車おなじに乗らないように、招魂社の中にしばらく居たら、男の書生さんが傍そばへ来て附くっ着いて歩ある行くんですもの。私、斬られるかと思つて可こ恐わかつたわ、ねえ、お臀しりの肉が薬になると云うんでしょう、ですもの、危いわ。

もう一生懸命にここへ来て、まあ、可よかつた、と思つてよ。

あのね、あの、」

と蓐とこの綴とじ糸を引張つて、

「貴女も主税さんも、父さんに叱られてそれでこうしているんだって、可哀相だわ。私なら黙つちやいないわ、我わがまま儘を云つてやるわ。だつて、自分だつて、母様かあさんが不可いけないと云うお酒を飲んで仕様が無いんですもの。自分も悪いのよ。

貴女叱られたら、おあやまなさいよ。そしてね、父さんはね、私や母様の云う事は、それは、憎らしくつてよ、ちつとも肯きかないけれど、人が来て頼むとねえ、何でも（厭だ。）とは言わないで、一々引受けるの。私ちゃんと伝授を知っているから、それを知らせて上げたいの、貴女が御病気で来られないんなら、小母さん、」

と隔てなく、小芳の膝に手を置いて、

「小母さんでも可ようござんす。構わないで家うちへいらつしやいよ。玄関の書生さんは婦おんなのお客様をじろじろ見るから極きまりが悪かったら遠慮は無いわ、ずんずん庭の方からいらつしやい。私がね、直ぐに二階へ連れてつて、上げるわ。そうするとねえ、母様がお酒を出すでしょう。私がお酌をして酔わせてよ。アハアハ笑つて、ブンと響くような大おおきな声を出したら、そしたらもう可いわ。」

是非、主税さんと呼んで下さい。電報で——電報と云つて頂戴、可くつて。不可いけないとか何とか、父さんがそう云つたら、膝をつかまえて離さないの。そして、お蔭さみさんが寂さみしがつて、こんなに煩わづらつていらつしやると云つて御覧なさい。あんなに可こ恐おそらしくつても、あわれな話だと直じきに泣なくんですもの、きつと承知するわ。

そのかわり、主税さんが帰つて来たら、日曜に遊びに行くから、そうしたらば、あの：

…」

と蓐とこの端につかまって、お蔭の顔を覗くようにして、

「貴女も、私を可厭いやがらないで、一所に遊んで頂戴よ。前ぜんに飯田町に行きたくつても、貴女が隠れるから、どんなに遠慮だったか知れないわ。」

もう二人とも泣いていたが、お蔭は、はツと面おもてを伏せた。

二十五

涙を払って、お蔭が、

「姉さん、私は浮世に未練が出た。また生命いのちが惜おしくなったよ。皆さんに心配を懸けないで、今日からお医師いしやにも懸りましょう、薬も服のむよ。」

お嬢さん、もう早瀬さんには逢えなくつても、貴女がお達者でいらっしゃいます内は、死にたくはなくなりました。」

と身をせめて、わなわな震える。

「寒気がするのねえ、さあ、お寝なさいよ、私が掛けて上げましょう。」

搔^か卷^{いま}の襟へ惜気もなく、お妙が袖も手も入れて引くのを見て、

「ああ、勿体ない。そんなになすつては不可^いません。皆^{みんな}がそうじゃないって言いますけれど、私は色のついた痰^{たん}を吐きますから、大切なお身体^{からだ}に、もしか、感染^{うつり}でもするとなりません。」

覚悟した顔の色の、颯^{さつ}と桃色なが心細い。

「可^いいわ！」

「可^いいわではござんせん。あれ、そして寒気なんぞしませんよ。もう私は熱くって汗が出るようなんです、それから、姉さん、」

と小芳を見て、

「何ぞ……」

と云うと、黙^{うなず}つて頷く。

「来たらね、こんな処でなく、あっちへ行つて、お前さん、お嬢さんと。」

「今日は私に任かせておくれ。」

「いいえ、」

「不可^いないよ、私がするんだよ。」

「お嬢さん、ああですもの。見舞に来て、ちよつと、病人を苛めるものがあつて、」

「無理ばかり云う人だよ、私に理由があるんだから。」

「理由は私にだつて有りますよ。あの、過般もお前さんに話したろう。早瀬さんと分れて、こうなる時、煙草を買え、とおつしやつて、先生の下すつた、それはね、折目のつかない十円紙幣が三枚。勿体ないから、死んだらお葬式に使つて欲しくつて、お仏壇の抽斗へ紙に包んでしまつてある、それを今日使いたいのよ。お嬢さんに差上げて、そして私も食べたいから、」

とただ言うのさえ病人だけ、遺言のように果敢なく聞えた。

「ああ、そんならそうおしな。どれ、大急ぎで、いいつけよう。」

「戸外は暑かろうねえ。」

「何の、お嬢さん。お嬢さんに上げるんだもの、無理にも洋傘をさすものか。」

「角の小間物屋で電話をお借りよ。」

「ああ、知つてるよ。あんまりあらくない中くらいな処が好かろうねえ。」

「私はヤケに大串が可いけれど、お嬢さんは、」

「ここで皆一所に食べるんでなくつちや、厭。」

「お相伴しますとも、お取膳とやらで、」

と小芳が嬉しそうに云う。

「じゃ、私も大きいの。」

「感心、」

とお蔦が莞爾^{にっこり}。

「驚きましたねえ。」

と立つ。

「御飯も一所よ。」

「あいよ、」

と框^{かまち}を下りる時、褌^{つま}を取りそうにして、振向いた目のふちが腫^{はれ}ぼったく、小芳は胸を抱

いて、格子をがらがら。

「お嬢さん、」

とお蔦が懷しそうに、

「もともと、そういう約束で別れたんですけれど、私の方へも丸一年……ちつとも便^{たより}がないんですよ。」

人が教えてくれましてね、新聞を見ると、すっかり土地の様子が知れるツて言いますから、去年の七月から静岡の民友新聞と云うのを取りましてね、朝起きると直ぐ覗^{のぞ}いて、もう見落しはしなかうか、と隙^{ひま}さえあれば、広告まで読みますんですが、ちつとも早瀬さんの事を書いてあつたことはありませんから、どうしておいでだか分りません。

この頃じや落胆^{がっかり}して、勢^{せい}も張合も無いんですけれども、もしやにひかされては見ています。

たつた一度、早瀬さんのことを書いてあつたのがござんしてね、切抜いて紙入の中へ入れてありますから、今、お目に掛けますよ。」

二十六

お薦^{しとね}は薦^{しとね}に居直つて、押入の戸を右に開ける、と上も下も仏壇で、一ツは当家の。自分でお薦^{しとね}が守するのは同居だけに下に在る。それも何となくものあわれだけれども、後姿^{つま}が棲^なの萎^なえた、かよい状^{さま}は、物語にでもあるような。直ぐにその裳^{もすそ}から、仏壇の中へ消えそうに腰が細く、撫肩がしおれて、影が薄い。

紙入の中は、しばらく指の尖で搔探さねばならなかったほど、可哀相に大切に蔵つて、小さく、整然と畳んで、浜町の清正公の出世開運のお札と一所にしてあつた、その新聞の切抜を出す、とお妙は早や隔心も無く、十年の馴染のように、横ざまに蓐に凭れながら、頸を伸して、待構えて、

「ちよいと、どんなことが書いてあつて。また掏賊を助けたりなんか、不可ないことをしたのじゃないの。急いで聞かして頂戴な。」

「いいえ、まあ、貴女がお読みなさいまし。」

「拝見な。」

と寝転ぶようにして、頬杖ついて、畳の上で読むのを見ながら、抜きかけた、仏壇の抽斗を覗くと、そこに仰向けにしてある主税の写真を密と見て、ほろりとしながら、力タリと閉めた。懐中へ、その酒井先生恩賜の紙幣の紙包を取って、仏壇の中に落ちた線香立ての灰を、フツフツと吹いて、手で撫でる。

戸外を金魚売が通つた。

「何でしょう。この小使は、また可訝なものじゃないの、」

とお妙が顔を赤うして云う。新聞に書いたのは（A B 横町。）と云う標題で、西の草

深のはずれ、浅間に寄った、もう郡部になろうとするとある小路を、近頃渾名してA B横町と称^{とな}える。すでに阿部郡^{べお}であるのだから語呂が合い過ぎるけれども、これは独語学者早瀬主税氏が、ここに私塾を開いて、朝からその声の絶間のない処から、学生が戯^{たわむ}にしか名づけたのが、一般に拡まつて、豆腐屋までがA B横町と呼んで、土地の名物である。名物と云えば、も一ツその早瀬塾の若いもので、これが煮焼^{にたき}、拭掃除、万端世話をするのであるが、通例なら学僕と云う処、粹^{いなせ}な兄哥^{あにい}で、鼻唄^{うた}を唱えたと云つても学問をするのでない。以前早瀬氏が東京で或^{ある}学校に講師だった、そこで知^{ちかづ}己の小使が、便つて来たものだそうだが、俳優^{やくしや}の声色が上手で落語も行^やる。時々（いらつしやい、）と怒鳴つて、下足に札を通して通学生を驚かす、とんだ愛敬もので、小使さん、小使さんと、有名な島山夫人をはじめ、近頃流行のようになって、独逸語をその横町に学ぶ貴婦人連が、大分御鼻^{ごひいき}頂である、と云う雑報の意味であつた。

小芳が、お暑い、と云いつつ、いそいそと歸つて来た。

話にその小使の事も交つて、何であろうと三人が風説^{うわさ}とりどりの中へ、へい、お待遠様、と来たのが竹葉。

小芳が火を起すと、気取氣の無いお嬢さん、台所へ土瓶を提げて出る。お蔭^{いきおい}も勢に連れ

て蹠踉^{よろよろ}起きて出て、自慢の番茶の焙^{ほう}じ加減で、三人睦くお取膳。

お妙が奈良漬にほうとなつた、顔がほてると洗つたので、小芳が刷毛^{はけ}を持って、颯^{さつ}とお化粧を直すと、お蔦がぐい、と櫛^{くし}を拭いて一齒入れる。

苦勞^{くろうと}人が二人がかりで、妙子は品のいい処へ粹になつて、またあるまじき美麗^{あでやか}さを、飽かず視^{なが}めて、小芳が幾度^{いくたび}も恍惚^{うつとり}気抜けのするようなのを、ああ、先生に瓜二つ、御^ご尤^{もつと}もな次第だけれども、余り手放しで口惜^{くやし}いから、あとでいじめてやろう、とお蔦が思ひ設けたが、……ああ、さりとは……

いづれ両親には内証^{ないしよ}なんだから、と（おいしかつてよ。）を見得もなく門口でまで云つて、遅くならない内、お妙は八ツ下りに帰つた。路地の角まで見送つて、ややあつて引返^{ひかえ}した小芳が、ばたばたと駈込んで、半狂乱に、ひしと、お蔦に縋^{すが}りついて、

「我慢が出来ない。我慢が出来ない。我慢が出来ない。あんな可愛いお嬢さんにお育てなすつたお手柄は、真砂町の夫人^{おくさん}だけれど、産……産んだのは私だよ。私の子だよ、お蔦さん、身体^{からだ}へ袖が触る度^{たんび}に、胸がうずいてならなんだ、御覧よ、乳のはつたこと。」

と、手を引入れて引緊^{ひきし}めて、わつとばかりに声を立てると、思わず熟^{じつ}と抱き合つて、
「あれ、しつかりおし、小芳さん、癩^{しかく}が起ると不可^{いけな}いよ。私たちは何の因果で、」

芸者なんぞになつたとて、色も諸分しよわけも知抜いた、いずれ名取おんなの婦ども、処女むすめのように泣いたのである。

小待合

二十七

「こうこう、姉あねえ、姉あねえ、目を開あいて口を利きねえ。もつとも、かつと開いたところで、富士も筑波も見えるかどうか、覚束ねえ目だけれどよ。はははは、いくら江戸前めえの肴さかな屋やだって、玄関から怒鳴り込む奴があるかい。お客だぜ。お客様だぜ。おい、お前めえの方で惣菜は要らなくつても、己おらが方で座敷が要るんだ。何を！座敷が無え、古風な事を言うな、芸者の霜枯じやあるめえし。」

と盤はんだい台をどさりと横づけに、澄まして天秤てんびんを立てかける。微醉ほろえいのめ組の惣助。商あ売きなの帰途かえりにまたぐれた——これだから女房が、内には鉄瓶さえ置かないのである。

立迎えた小待合の女中は、坐りもやらず中腰でうろうろして、

「全くおあいにくなんですよ。」

と入口を塞いだ前へ、平気で、ずんと腰を下ろして、

「見ねえ、身もんでえをする度に、たんび、どんぶりが鳴らあ。腹の虫が泣くんじやねえ、金子の音だ。びくびくするねえ。お望みとありや、千両束で足の埃をほこり払いて通るぜ。」

とあげ膝で、ボコポン靴をずぶりと脱いで、装もりじ塩おのこなたへボカン。

声が高いのもう一人、奥からばたばたと女中が出て来て、推おつか重かさなると、力を得たらしく以前の女中が、

「ほんとうにお前さん、お座敷が無いのですよ。」

「看板を下ろせ、」

と喚わめいて、

「座敷がなくば押入へ案内しねえ、天井だつて用は足りらい。やあ、御新規お一人様あ、」
と尻上りに云つて、外道面げどうづらの口を尖らす、相好塩吹の面のごとし。

「そつちの姉あねえは話せそうだな。うんや、やつぱりお座敷ござなく面づらだ。変な面だな。はははは、トおつしやる方が、あんまり変でもねえ面でもねえ。」

行詰つた鼻の下へ、握にぎりこぶし拳ねじこを捻ねじこ込ひっこすむように引擦ひつこすつて、
 「憚はばかんながらこう見えても、余よ所行そゆきの情婦いろがあるぜ。待まちええ合ええへ来て見繕こしれいで拵こしれえるよう
 な、べらぼうな長生ながいきをするもんかい。

おう、八丁堀のめの字が来たが、の、の、承知か、承知か、と電話を掛けねえ。柳橋の
 小芳とこさん許かしわやだ。柏屋つなじの綱次と云う美しいのが、忽然こつぜんとして顕あらわれらあ。

どうだ、驚いたか。銀行の頭取が肴屋に化けて来たのよ。いよ、御趣向おんそう！」
 と変な手つき、にゆうと女中の鼻頭はなさきへ突出して、

「それとも半纏はんでんぎ着は看板に障るから上げねえ、とでも吐ぬかして見ろ。河岸から鯨しよを背負しよ
 つて来て、汝てめえ許とこで泳がせるぞ、浜町界隈かいわい洪水だ。地震より恐怖おっかねえ、屋体骨やていぼねは浮上る
 ぜ。」

女中二人が目配せして、

「ともかくお上んなさいまし、」

「どうにか致しますから。」

「何だ、どうにかする。格子で馴染を引くような、気障きざな事を言やあがる。だが心底は見
 届けたよ。いや、御案内引。」

と黄^{きなこえ}声を発して、どさり、と廊下の壁に打^ぶ附^つりながら、

「どこだ、どこだ、さあ、持つて来い、座敷を。」

で、突立つて大手を拡げる。

「どうぞこちらへ、」

と廊下で別れて、一人が折^{おり}曲^{まが}つて二階へ上る後から、どしどし乱入。とある六畳へのめずり込むと、蒲団も待たず、半股引の薄汚れたので大胡^{おおあぐら}坐^ま。

「御酒^{ごしゆ}をあがりますか。」

「何升お燗^{かん}をしますか、と聞きねえ。仕入れてあるんじや追^おつくめえ。」

女中が苦笑いして立とうとすると、長々と手を伸ばして、据^{すえ}眼^{まなこ}で首を振つて、チヨ、舌鼓を打つて、

「待ちな待ちな。大夫^{たゆう}前芸^{つかまつ}と仕つて、一ツ滝の水を走らせる、」

とふいと立つて、

「鷺尾の三郎案内致せ。鴨^{ひよどり}越^{ごえ}の逆落しと遣れ。裏階^{うらばし}子から便所だ、便所だ。」
どつかの夜講で聞いたような。

二十八

手水鉢ちようずの処へめ組はのつそり。里心のついた振られ客のような腰附で、中庭越に下座

敷をきよろきよとみまわしたが、どこへ何んと見当附けたか、案内も待たず、元の二階へも

戻らないで、とある一室ひとまへのつそりと入って、襖ふすま際まぎわへ、どさりとまた胡坐あぐらになる。

女中あわただが慌しく駈込んで、

「まあ、どこへいらつしやるんですか。」

と、たしなめるように云うと、

「ここにいらつしやら。ははは、心配するな。」

「困りますよ。隣のお座敷には、お客様が有るじやありませんか。」

「構わねえ、一向構わねえ。」

「こちらがお構いありませんでも、あちら様で。」

「可いいじやねえか、お互たがえだ。こんな処へ来て何も、向う様だって遠慮はねえ。大家様の隠

居殿ともれいの葬礼ともれいに立つとつてよ、町内が質屋で打附ぶつかつたようなものだ。一ツ穴の狐だおらい。己

あまた、猫のさかるような高い処は厭だからよ。勘当された息子じやねえが、二階で寝る

と覺^{うな}されらあ。身分相当割床と遣^うるんだ。棟割^{むなわり}に住^すんでるから、壁隣^{にぎや}の賑^{にぎ}かなのが頼^{たの}もしいや。」

「不可^{いけ}ませんよ、そんなことをお言いなすつちや、選^{えり}好^{この}んでこのお座敷へいらつしやらないだつて、幾^{いく}らでも空^くいてるじやありませんか。」

「空^くいてる！　こう、たつた今座敷はねえ、おあいにくだと云つたじやねえか。氣障^{きざ}は言^いわねえ、氣障な事は云わねえから、黙^{もく}つて早く爛^{たん}けて来ねえよ。」

いいがかりに止むを得ず、厭^{いと}な顔して、

「じや、御酒を上るだけになすつて下さいよ、お肴^{さかな}は？」

「肴^肴は己^{おら}が盤台^{ばんたい}にあら。竹の皮に包^{つつ}んでな、斑^{ふち}鮭^{じやけ}の鎌^{とこ}ン処^{ところ}があるから、そいつを焼^やいて持^もつて来ねえ。薦^{すき}ちゃんが好^すだつたんだが、この節^{ふし}じや何^{なん}にも食^くわねえや、折角^{せきかく}残^{のこ}して歸^{かえ}つても今日^{けふ}も食^くうめえ。」

と独^{ひとりごと}言^いになつて、ぐつたりして、

「媽^{かかあ}々に遣^はるんじや張^{はり}合^あが無^なえ。焼^やいて来ねえ、焼^やいて来ねえ。」

女中^{おやぶ}は、氣違^{あやぶ}かと危^{あや}んで、怪訝^{けげん}な顔をしたが、試^しみに、

「そして綱次^{つなぢ}さんを掛^かけるんですか。」

「うんや、今度はこっちがおあいにくだ。ちつとも馴染なじみでも情婦いろでもねえ。口説きように因いつちや出来ねえ事もあるめえと思うのよ。もつとも惚おれてるにや惚おれてるんだ。待ちねえ、隣の室へやで口説いてら、しかも二人がかりだ。」

「ちよつと、」

と留めて姉さんは興さめ顔。

「こつちは一人だ、今に来たら、お前めえも手伝つて口説いてくんねえ。何だ、何だ、（と聞く耳立てて）純潔な愛だ。けつのあいたあ何だい。」

と、襖ふすまにどしんと顔つらを当てて、

「蟻とわたりの戸渡でいやあがらあ、べらぼうめ。」

「やかましい！」

隣の室へやから堪りかねたか叱咤しったした。

「地声だ！」

「あれ、」

と女中が留めようとする手も届かず、ばかりめ組が襖を開けると、いつの間に用意をしたか、取つて捨てた手拭の中から腹掛を出た出刃庖丁。

「この毛唐人めら、汝^{うぬ}、どうするか見やあがれ。」

あツと云つて、真^{まつさき}前に縁へ遁^にげた洋服は——河野英吉。続いて駈出そうとする照陽女学校の教頭、宮畑^{みやばた}閑耕^{かんこう}の胸^{むな}づくし、釦^{ぼたん}が引ちぎれて辻^{すべ}つた手で、背後^{うしろ}から抱込んだ。

「そ、そこに泣いていらつしやるなア大先生の嬢様でがしよう。飯田町の路地で拜んで、一度だが忘れねえ。此奴等^{こいつら}がこの地獄宿へ引張込んだのを見懸けたから、ちびりちびり遣りながら、痴^{こけ}の色ばなしを冷かしといて、ゆつくり撲^{なぐ}ろうと思つたが、勿体なくツて我慢ならねえ。酒井さんのお嬢さん、私^{わつし}がこうやつてゐる処を、ここへ来て、コン唐人打挫^{ぶつこじ}いておやんなせえ、お打ちなせえ、お打ちなせえ。

どうしてまたこんな処へ。……何、八丁堀へおいでなすつて。ええ、お帰んなさる電車で逢つたら、一人で遠歩きが怪しいから、教師の役目で検^{しら}べるツて、……沙汰の限りだ。

むむ、此奴等、活かして置くんじやねえけれど、娑婆^{けだもの}の違つた獣だ、盆に来て礼を云え。
—

と突飛ばすと、閑耕^{のめ}の匍^{からだ}つた身体が、縁側で、はあはあ夢中になつて体操のような手つきでいた英吉に倒れかかつて、脚が搦^{から}んで漾^{ただよ}う処へ、チャブ台の鉢を取つて、ばらり天窓^{あたま}から豆を浴びせた。惣助^{からから}呵々と笑つて、大音に、

「鬼は外、鬼は外——」

道子

二十九

夫の所好このみで白粉おしろいは濃いえんが、色は淡い。淡しとて、容色きりようの劣る意味ではない。秋の花は春のと違つて、艶えんを競い、美を誇る心が無いから、日向ひなたより蔭に、昼より夜、日よりも月に風情があつて、あわれが深く、趣が浅いのである。

河野病院長医学士の内室、河野家の総領娘、道子の倅おもかけはそれであつた。

どの姉妹きょうだいも活々して、派手に花やかで、日の光に輝いている中に、独り慎ましかで、しとやかで、露を待ち、月にあこがるる、芙蓉ふようは丈のびても物寂しく、さした紅も、偏ひとえに身み躰だらしく、装きぬつた衣も、鈴虫の宿らしい。

いつも引籠ひっこもり勝がちで、色も香も夫ばかりが慰むのであつたが、今日は寺町の若竹座で、

某孤兒院に寄附の演劇があつて、それに附属して、市の貴婦人連が、張出しの天幕を臨時の運動場にしつらえて、慈善市を開く。謂うまでもなく草深の妹は先陣承りの飛將軍。そこでこの会のほとんど参謀長とも謂つべき本宅の大切な母親が、あいにく病気で、さしたる事ではないが、推してそういう場所へ出て、気配り心扱いをするのは、甚だ予後のために宜しからず、と医家だけに深く注意した処から、自分で進んだ次第ではなく、道子が出席することになった。——六月下旬の事なりけり。

朝涼の内に支度が出来て、そよそよと風が渡る、袖がひたひたと腕に靡いて、引緊つた白の衣紋着。車を彩る青葉の緑、鼈甲の中指に影が透く艶やかな円髻で、誰にも似ない瓜核顔、気高く颯と乗出した処は、きりりとして、しかも優しく、媚かず温柔して、河野一族第一の品。

嗜も気風もこれであるから、院長の夫人よりも、大店向の御新姐らしい。はたそれ途中一土手田畝道へかかつて、青田越に富士の山に対した景色は、慈善市へ出掛ける貴女とよりは、浅間の社へ御代参の御守殿という風があつた。

車は病院所在地の横田の方から、この田畝を越して、城の裏通りを走つたが、突かけ若竹座へは行くのでなく、やがて西草深へ挽込んで、楫棒は島山の門の、例の石橋の際に

着く。

姉夫人は、余り馴れない会場へ一人で行くのが頼りないので、菅子を誘いに來たのであったが、静かな内へ通つて見ると、妹は影も見えず、小児達も、乳母も書生も居ないで、長火鉢の前に主人の理学士がただ一人、下宿屋に居て寢坊をした時のように詰らなそうな顔をして、膳に向つて新聞を読んでいた。火鉢に味噌汁の鍋が掛つて、まだそれが煮立たぬから、こうして待つてゐるのである。

気軽なら一番威かしても見よう処、姉夫人は少し腰を屈めて、縁から差覗いた、眉の柔な笑顔を、綺麗に、小さく畳んだ手巾で半ば隠しながら、

「お一人。」

「やあ、誰かと思つた。」

と髯のべつたりした口許に笑は見せたが、御承知の為人で、どうとも謂わぬ。

姉夫人は、やつぱり半分隠れたまま、

「滝ちゃんや、透さんは。」

「母様が出掛けるんで、跡を追うですから、乳母が連れて、日曜だから山田（玄関の書生の名）もついて遊びです。平時だと御宅へ上るんだけど、今日の慈善会には、御都合で

貴女も出掛けると云うから、珍らしくはないが、また浅間へ行つて、豆か麩^ふを食わしとる
ですかな。」

「ではもう菅子さんは参りましたね。」

「先刻^{さつき}出たです。」

なぜ待つててくれないのだろう、と云う顔^{かおつき}色もしないで、

「ああ、もっと早く来れば可^ようござんした。一所に行つて欲しかったし、それに四五日お
来^みえなさらないから、滝ちゃんや透さんの顔も見たくつて、」

と優しく云つて本意^{ほんい}なそう。一門^{うち}の中に、この人ばかり、一^{いち}人も小児^{にん}を持たぬ。

三十

姉夫人の、その本意無げな様子を見て、理学士は、ああ、気の毒だと思つと、この人物
だけにいつそ口重になつて、言訳もしなければ慰めもせず、希代にニヤリとして黙つて
しまう。

と直ぐ出掛けようか、どうしようと、気拔のした姿うら寂^{さみ}しく、姉夫人も言^{ことば}なく、手を

掛けていた柱を背せに向直つて、黒塀越に、雲切れがしたように合ね歡の散つた、日曜の朝の青田を見遣つた時、ぶつぶつ騒しい鍋の音。

と見ると、むらむらと湯気が立つて、理学士が蓋ふたを取つた、がよつぽど腹おなかが空いたと見えて、

「失礼します。」と碗を手にする。

「お待ちなさいまし、煮詰りはしませんか。」

と肉色の紹ろの長襦ながじゆばん袴はかまで、紹縮ちりめん緬つますの棲す摺ずる音ない、するすると長火鉢の前へ行つて、
科しなよく覗のぞいて見て、

「まあ、辛うござんすよ、これじゃ、」

と銅壺どうこの湯を注さして、杓しゃく文字で一つ軽く圧おさえて、

「お装つけ申しましょう、」と艶麗あでやかに云う。

「恐縮ですな。」

と碗を出して、理学士は、道子が、毛一筋も乱れない円鬚つやの艶こぼも溢あふさず、白粉の濃い襟えりを据えて、端然とした白襟、薄お納戸のその紗綾さやがた形小紋もんつきの紋もん着きで、味噌汁みそ汁を装よそう白々とした手を、感に堪えて見ていたが、

「玉手を労しますな、」

と一代の世辞を云つて、嬉しそうに笑つて、

「御馳走（とチュウと吸つて）これは旨い。」

「人様のもので義理をして。ほほほ、お土産も持つて参りません。」

その挨拶もせずに、理学士は箸もつけないで、ごっくごっく。

「非常においしいです。僕は味噌汁と云うものは、塩が辛くなきや湯を飲むような味の無いものだと思つたです。今、貴女、干杓に二杯入れたですね。あれは汁を旨く喰わせる禁厭ですかね。」

「はい、お禁厭でございます。」

と云つた目のふちに、蕾のような微笑を含んでいたから。

「は、は、は、串戯でしょう。」

「菅子さんに聞いて御覧なさいまし。」

「そう云えば貴女、もうお出掛けなさらなければなりませんまいで。」

「は、私はちつとも急ぎませんけれど、今日は名代も兼ねておりますから、疾く参つてお手伝いをいたしませんと、また菅子さんに叱言を言われると不可ません——もうそれ

では、若竹座へ参っております時分でしょうね。」

「うんえ、」

頬ばった飯に籠つて、変な声。

「道寄をしたですよ。貴女これからおいでなさるなら、早瀬の許へお出でなさい、あすここに居ましょうで。」

「しますと、あの方も御一所なんですか。」

「一所じゃないです。早瀬がああいう依怙地いこじもんです。半分馬鹿にっていて、孤児院の義捐ぎえんなんぞ賛成せんです。今日は会へも出んと云うそう。それを是非説破して引張出すんだと云いましたから、今頃は盛に長紅舌ろうしを弄しておるでしょう、は、はは、」

と調子高に笑つて、厭いやな顔をして、

「行つて見て下さらんか。貴女、」

「はい、」

となぜか俯向うつむいたが、姉夫人はそのまましとやかに別れの会釈。

「また逢違いになりませんように、それでは御飯めしあがを召食りかけた処を、失礼ですが、」

「いや、もう済んだです。」

その日は珍らしく理学士が玄関まで送つて出た。

絹足袋の、しずか静な畳ざわりには、客の来たのを心着かなかつた鞠子の婢も、おさん旦那様の踏みしだいて出るあしおと登音に、ひよつこり台所から顔を見せる。

「今日は、」

と少し打傾いて、姉夫人が、物優しく声をかける。

「ひゃあ、」と打魂消うったまげて棒立ちになつたは、ではい出入りをする、貴婦人の、自分にこんな様子をしてくれるのは、ついぞ有つたためし験が無いので。

車夫が門外から飛込んで来て駒下駄を直す。

「A B横町でしたかね。あすこへ廻りますから、」

「へい、へい、ペロペロの先生の。」と心得たるものである。

三十一

早瀬は、妹が連れて父の住居すまいへも来れば病院へも二三度来て知っているが、新聞にまで書いた、塾の（小使）と云う壮佼わかいものはどんなであろう。男世帯だと云うし、他に人は居ない

そうであるから、取次にはきつとその（小使）が出るに違いない、と籠勝こもりがちな道子は面白おもしろいものを見もし聞きくもしするような、物珍らしい、楽しみな、時めくような心持こころもちもして、早や大巖山が幌ほろに近い、西草深のはずれの町、前途さきは直ぐに阿部の安東村になる——近ちかろ評判のA B横町へ入ると、前庭に古びた黒塀めくを廻らした、平屋の行詰った、それでも一軒立ちの門構もんがまえ、低く傾いたのに、独語教授、と看板だけ新しい。

車を待たせて、立附けの悪い門をあければ、女の足でも五歩いつあしは無い、直じき正面の格子戸から物静かに音ずれたが、あの調子なれば、話声は早や聞えそうなもの、と思う妹の声も響おかす、可訝おかしな顔をして出て来ようと思つたその（小使）でもなしに、車夫のいわゆるペロペロの先生、早瀬主税、左の袖口の綻ほころびた広袖びとろのような緋かすりの単衣ひとえでひよいと出て、顔を見ると、これは、とばかり笑み迎えて、さあ、こちらへ、と云うのが、座敷へ引返ひっかえす途中になるまで、気疾きはやに引込んでしまったので、左右とうりょうの暇いとまも無く、姉夫人は鶴が山路に蹠ふ迷みまよつたような形で、机テーブルだの、卓子テイスブルだの、算を乱した中を拾つて通つた。

管子さんは、と先ず問うと、まだ見えぬ。が、いずれお立寄りに相違ない。今にも威勢たげの可い駒下駄の音が聞えましよう。格子がかりと鳴ると、立処たちどころにこの部屋へお姿が露あらわれますからお休みなさりながらお待ちなさい、と机わきの傍に坐り込んで、煙草たばこを喫のもうと

して、打棄^{うつちや}つて、フイと立つて蒲団を持出すやら、開放^{あけはな}しましょう、と障子を押開^{おっぴら}いたかと思うと、こっちの庭がもうちつとあると宜^{よろ}しいのですが、と云うやら。散らかつておりまして、と床の間の新聞を投^{ほう}り出すやら。火鉢を押出して突附けるかとすれば、何だ、熱いの、と急いでまた摺^{ずら}すやら。なぜか見苦しいほど慌^{あわただ}しげで、蜘蛛^{くも}の囀^すをかけるように煩^{うるさ}く夫人の居まわりを立ちつ居つ。間には口を續けて、よくいらつしやいました、ようこそおいで、思いがけない、不思議な御方が、不思議だ、不思議だ、と絶^{たえ}ず饒舌^{しゃべ}つたのである。

「まあ、まあ、どうぞ、どうぞ、」

とその中^{うち}に落着いた夫人もつい、口早になつて、顔を振上げながら、ちと胸を反^そらして、片手で煙を払うような振^{ふり}をした。

早瀬はその時、机の前の我が座を離れて、夫人の背後^{うしろ}に突立^{つった}つていたので、上下^{うへした}に顔を見合わせた。余り騒がれたためか、内気な夫人の顔^{かんばせ}は、瞼^{まぶた}に色を染めたのである。

と、早瀬は人間が變つたほど、落着いて座に返つて、徐^{おもむろ}に巻^{まきた}蓆^{ばこ}を取つて、まだ吸いつけないで、ぴたりと片手を膝^つに支^そいた、肩^{かた}が聳^{そび}えた。

「夫人^{おくさん}、貴女はこれから慈善^{じぜん}市へいらしつて、貧^{びん}者^{ぼうにん}のためにお働きなさるんですねえ

」。

と沈んで云う。

顔を見詰められたので、睫毛まつげを伏せて、

「はい、ですが私はただお手伝いでございます。」

「お願いがございます。」

と囁のめるがごとく、主税がはたと両手を支いた。

余り意外な事の体に、答すべうる術なく、黙ながしめつて流眊ながしめに見ていたが、果こうべしなく頭もたも擡もちげず、突いた手に畳つかを掴きつかんだ憂慮きづかわしさに、棄ても置かれぬ氣になつて、

「貴下、まあ、更あらたまつて何でございますの。」

とは云つたが、思入つた人の体に、氣味悪くもなつて、遁腰にげこしの膝を浮かせる。

「失礼な事を云うようですが、今日の催もよおしはじめ、貴女方のなさいます慈善は、博くまんべなく情なさけをお懸けになりますので、早ひでりに雨を降らせると同様の手段な。萎なえしぼんだ草樹も、その恵めぐみに依よつて、蘇いきかえ生るのでありますが、しかしそれは、廣大無辺な自然の力でなくつては出来ない事で、人間業わやじゃ、なかなか焼石しやうせきへ如露じよろで振懸けるぐらいに過ぎますまい。」

三十二

「広く行^{ゆきわた}渉るばかりを望んで、途中で群^{むらぎ}消えになるような情を掛けずに、その恵の露を湛^たえて、ただ一つのもの根に灌^{そそ}いで、名もない草の一葉だけでも、蒼^{あお}々と活^あかして頂きたい。

大勢寄つてなさる仕事を、貴女方、各々^{めいめい}御一人^{ずつ}宛で、専門に、完全に、一人^{にん}を救つて下さるわけには参りませんか。力が余れば二人です、三人です、五人ですな。余所^{よそ}の子供の世話を焼く隙^{ひま}に、自分の児^こに風邪を感^ひかせないように、外国の奴隷に同情をする心で、御自分お使いになる女中を勦^{いた}つてやつて欲しいんですが、これじゃ大^{おお}摺^づみのお話です、何もそれをかれこれ申上げるわけではないのです。

ところが、差当り、今日の前に、貴女の一^{ひと}雫^{しずく}の涙を頂かないと、死んでも死に切れない、あわれな者があるんです。

この事に就きましては、私^{わたくし}は夜の目も合わないほど心を苦めまして。」

とようよう少し落着いて、

「前^{ぜん}から、貴女の御憐愍^{ごれんみん}を願おうと思つていたんですけれど、島山さんのと違って、貴

女には輕々しくお目に懸る事も出来ませんし、そうかと云つて、打棄つて置けば、取返しになりません一大事、どうしようかと存じておりました処へ、実に何とも思いがけない、不思議な御光来で、殊にそれが慈善会にいらつしやる途中などは、神仏の引合わせと申しても宜しいのです。

どうぞ、その、遍く御施しになろうという如露の水を一雫、一滴で可うございます、私の方へお配分なすつてくださるわけには参りませんか。

御存じの風来者でありますけれども、早瀬が一生の恩に被ます。」

と拳を握り緊めて云うのを、半ば驚き、半ば呆れ、且つ恐れて聞いていたようだった。

重かつた夫人の眉が、ここに至ると微笑に開けて、深切に、しかし舐めるような優しい調子で、

「お金子が御入用なんでございますか。」

と胸へ、しなやかに手を当てたは、次第に依つては、直にも帯の間へ這つて、懷紙の間から華奢な（囊物）の動作である。道子はしばしば妹の口から風説されて、その暮向を知っていた。

ト早瀬の声に力が入つて、

「金子にも何にも、私が、自分の事ではありません。」

「まあ、失礼な事を云つて、」

と襟を合わせて面を染め、

「どうしましょう私は。では貴下の事ではございませんので。」

「ええ、勿論、救つて頂きたい者は他にあるんです。」

「どうぞ、あの、それは島山のに御相談下さいまし。私もまた出来ますことなら、蔭で——お手伝いいたしましょうけれど、河野（医学士）が、喧しゅうございますから。」

……差俯向いて物寂しゅう、

「私が自分では、どうも計らい兼ねますの。それには不調法でもございますし……何も、妹の方が馴れておりますから。」

「いや、貴女でなくては不可んです。ですから途方に暮れます。その者は、それにもう死にかかった病人で、翌日も待たないという容体なんです。」

六十近い老人で、孫子のもとより、親類らしい者もない、全然やもめで、實際形影相弔うというその影も、破蒲団の中へ消えて、骨と皮ばかりの、その皮も貴女、褥摺れに摺切れているじやありませんか。

日の光も見えない目を開いて、それでただ一目、ただ一目、貴女、夫人の顔が見たいと云います。」

「ええ、」

「御介抱にも及びません、手を取って頂くにも及びません、言をお交わし下さるにも及びません、申すまでもない、金銭の御心配は決して無いので。真暗な地獄の底から一目貴女を拝むのを、仏とも、天人とも、山の端の月の光とも思つて、一生の思出に、莞爾したいと云うのですから、お聞届け下さると、実に貴女は人間以上の大善根をなさいます。夫人、大慈大悲の御心持で、この願いをお叶え下さるわけには参りませんか、十分間とは申しません。」

と、じりじりと寄ると、姉夫人、思わず膝を進めつつ、

「どこの、どんな人でございますの。」

「直きこの安東村に居るんです。貞造と申して、以前御宅の馬丁をしたもので、……夫人、貴女の、実の……御父上……」

「その……手紙を御覧なさいましたら、もうお疑はありますまい。それは貴女の御父上、英臣さんが、御出征中、貴女の母様が御宅の馬丁貞造と……」

早瀬はちよつと言を切つて……夫人がその時、わななきつつ持つ手を落して、膝の上にひらりと翻然と一葉、半紙に書いた女文字。その玉章の中には、恐ろしい毒藥が塗籠んででもあったように、真蒼になつて、白襟にあわれ口紅の色も薄れて、頤深く差入れた、倅を屹と視て、

「……などと云う言だけでも、貴女方のお耳へ入れられる筈のものじゃありません、けれども、差迫つた場合ですから、繕つて申上げる暇もありません。」

で、そのために貴女がおできなすつたんで、まだお腹にいらつしやる間には、貴女の母様が水にもしうか、という考えから、土地に居ては、何かにつけて人目があると、以前、母様をお育て申した乳母が美濃安八の者で、——唯今島山さんの玄関に居る書生は孫だそうです。そこへ始末をしに行つてお在なすつた間に、貞造へお遣わしなすつたお手紙なんです。

馬丁はしていたが、貞造はしかるべき禄を食んだ旧藩の御馬廻の悴で、若氣の至りじゃ

あるし、附合うものが附合うものですから、御主人の奥様おくさんと出来たのを、嬉しい紛れ、鼻で指をさして、つい酒の上じや惚気のろけを云った事もあるそうですが、根が悪人ではないのですから、児こをなくすという恐おそろしい相談に震い上つて、その位なら、御身分をお棄てなすつて、一所に遁にげておくんなさい。お肯入れききい無く、思切った業わざをなさりや、表向きに坐込むと変った言種いいぐさをしたために、奥さんも思案に余つて、氣を揉んでいなすった処へ、思いの外用事が早く片附いて、英臣さんが凱旋がいせんでしょう。腹帯にはちつと間が在ったもんだから、それなりに日が経たつて、貴女は九月児ここのつきこでお在いなさる。

が、世間じや、ああ、よくお育ちなすった、河野さんは、お家が医者だから。……：そうでないと、大抵九月児は育たんものだと申します。また旧弊な連れんじゅう中は、戦争で人が多く死んだから、生れるのが早い、と云ったそうです。

名誉に、とお思いなすったか、それとも最初はじめての御出産で、お喜びの余りか、英臣さんは現に貴女の御父上おとうさんだ。

貞造は、無事に健かに産れた児の顔を一目見ると、安心をして、貴女の七夜の御祝いに酔ったのがお残懷なごりで、お暇を頂いて、お邸を出たんです。

朝晩お顔を見ていちや、またどんな不了簡ふりようけんが起るまいものでもない、という遠慮と、

それに肺病の出る身体、若い内から儂麻質があつたそうで。旁々お邸を出るとなると、力業は出来ず、そうかと云つて、その時分はまだ達者だった、阿母を一人養わなければならぬんですから、奥さんが手切なり心着なり下すつた幾千かの金子を資本にして、初めは浅間の額堂裏へ、大弓場を出したそうです。

幸い商売が的に当つて、どうにか食つて行かれる見込みのついた処で、女房を持つたんですがね。いや、罰は覲面だ。境内へ多時かかつていた、見世物師と密通いて、有金を攫つて遁げたんです。しかも貴女、女房が孕んでいたと云うじやありませんか。」

「まあ、」

と、夫人は我知らず嘆息した。

「忌々しい、とそこで大弓の株を売つて、今度は安東村の空地を安く借りて、馬場を拵えて、貸馬を行つたんですな。」

貴女、それこそ乳母日傘で、お浅間へ参詣にいらした帰り途、円い竹の埒に掴つて、御覧なすつた事もありましょう。道々お摘みなすつた鼓草なんぞ、馬に投げてやつたりなさいましたのを、貞造が知っています。

阿母が死んだあとで、段々馬場も寂れて、一斉に二頭斃れた馬を売つて、自暴酒を

飲んだのが、もう飲仕舞で。米も買えなくなる、粥も薄くなる。やっと馬小屋へ根太を打附けたので雨露を凌いで、今もそこに居るんですが、馬場のあとは紺屋の物干になったんです。……」

三十四

「私は不思議な縁で、去年静岡へ参って……しかもその翌日でした。島山さんのと、浅間を通った時、茶店へ休んで、その貞造に逢ったんです。それからこういう秘密な事を打明けられるまで、懇意になつて、唯今の処じや、是非貴女のお耳へ入れなくつてはなりませんほど、老人危篤なのでございます。」

私でさえ、これは一番貴女に願つて、逢つてやつて頂きたいと思ひましたから、今迄幾度か病人に勧めても見ましたけれども、いやいや、何にも御存じない貴女に、こういう事をお聞かせ申すのは、足を取つて地獄へ引落すようなもの。あとじや月も日も、貴女のお目には暗くなろう。お最惜い、と貞造が頭を掉ります。

道理だと控えました。もつとも私も及ばずながら医師の世話もしたんです、薬も飲ませ

ました。名高い医学士でおいでなさるから一ツ河野さんの病院へ入院してはどうか、余所な
がらお道さんの顔を見られようから、と云いましたが、もつての外だ、と肯きません。
清い者です。

人の悪い奴で御覧なさい、對手が貴女の母様で、そのお手紙が一通ありや、貞造は
一生涯朝から刺身で飲めるんですぜ。

またちつとでも強情がましい了見があつたり、一銭たりとも御心配を掛けるような考
あるんなら、私は誓つて口は利かんです。

そうじゃない！ ただ一目拝みたいと云う、それさえ我慢をし抜いた、それもです……
老人自分じゃ、まだ治らないとは思つていなかったからなので。煎じて飲むのがまだるッ
こし、薬鍋の世話をするものも無いから、薬だと云う芭蕉の葉を、青いまんまで嚙つたと
言います——

その元氣だから、どうかこうか葉が利いて、一度なんぞ、私と一所に安倍川へ行つて餅
を食べて茶を喫んで帰つた事もあつたんですが、それがいいめを見せたんで、先頃からま
たどツと褥に着いて、今は断念めた処から、貴女を見たい、一目逢いたいと、現に言うよ
うになつたんです。

容態が容態ですから、どうぞ息のある内にと心配をしていたんですが、人に相談の出来る事じゃなし、御宅へ参ってお話をしようにも、こりや貴女と対向いさしむかでなくっては出来ません。

失礼けれども、御主人の医学士は、非常に貴女を愛していらっしゃるために、恐ろしく嫉妬深い、と島山さんののに、聞きました。

ほとんど当惑していた処へ、今日のおいでは実に不思議と云つても可い。一言（父よ。）とおつしやつて、とそれまでも望むんじゃないのです。弥陀みだの白光びやくこうとも思つて、貴女を一目と、云うのですから、逢つてさえ下されば、それこそ、あの、屋中うちじゅう真黒まっくろに下った煤すすも、藤の花に咲かわつて、その紫の雲の中に、貴女のお顔を見る嬉しさはどんなでしょう。

そうなれば、不幸極まる、あわれな、情ない老人が、かえつて百万人の中に一人も得られない幸福なものとなつて、明かに端麗な天人を見ることを得て、極楽往生を遂げるんです、——夫人おくさん。」

と云つた主税の聲が、夫人の肩から総身へ浸渡るようであつた。

「貞造は、貴女の実うみの父親で、またある意味から申すと、貴女の生命の恩人ですよ。」

「は……い。」

「会は混雑しましょう。若竹座は大変な人でしよう。それに夜も更ふけると申しますから、人目を紛らすのに仔細しさいありません。得難い機会です。私わたくしがお供をして、ちよつと見舞に参るわけにはまいりませんか。」

と片手に燐寸マツチを持つたと思うと、片手が衝つと伸びて猶た予めらわず夫人の膝から、古手紙を、ト引取つて、

「一度お話した上は、たとい貴女が御不承知でも、もうこんなものは、」
と※と火を摺すると、ひらひらと燃え上つて、蒼くなつて消えた。が、靡なびきかかる煙の中に、夫人の顔がちらちらと動いて、何となく、誘われて膝も揺ら揺ら。

居い坐ずを直して、更あらたまつて、

「お連れ下さいまし、どうぞ。」

がらがらと格子の開く音。それ、言わぬことか。早や座に見えた菅子の姿。眩まばゆいばかりの装いで、坐りもやらず、

「まあ、姉さん！」

私語さつめごと

三十五

「もう遅いわ、姉さん、早くいらつしやらないでは、何をしているの、」
と管子は立つたままで急せきこ込んで云う。戸外おもての暑さか、駈か込んだせいか、赫かつと逆上のぼせた顔の色。

胸打騒さわげる姉夫人、道子がかえつて物静かに、

「先刻さつきから待つていたんですよ。」

「待つていたって、私は方々に用があるんだもの、さつさと行つて下さらないじゃ、」

「何ですねえ、邪よこしま険な、和女あなたを待つていたんですよ。来がけに草深へも寄つたのよ。一所に連れて行つて欲しいと思つて。——さあ、それでは行きましょうね。」

「私は用があるわ。」

「寄道をするんですか。」

「じゃ……ないけども、これから、この早瀬さんと一議論して、何でも慈善会へ引張り出すんですから手間が取れてよ。」

とまだ坐りもせぬ。

主税は腕組をしながら、

「はははは、まあ、貴女も、お聞きなさい、お菅さんの議論と云うのを。いくら僕を説いたって、何にもなりやしないんですから。」

「承わつて参りましょうか。」

と姉夫人が立ちかけた膝をまた据えて、何となく残惜そうな風が見えると、

「早くいらつしやなくなつちや……私は可いけれども、姉さん、貴女は兄さん（医学士）がやかましいんだもの、面倒よ。」

と見下す顔を、斜めに振仰いだ、蒼白い姉の顔に、血が上つて、屹となつたが、寂しく笑つて、

「ああ、そうね、私は前に参りましょう。会場の様子は分らないけれど、別にまごつくような事はありませんまいから。」

とおとなしく云つて、端然と会釈して、

「お邪魔をいたしました。」「とちよいと早瀬の目を見たが——双方で瞬きました。
「まあ、御一所が宜しいじやありませんか。お菅さんもそうなさい。」

「いいえ、そうしてはおられません、もつと、」

と声に力が籠って、

「種々いろいろお話を伺いとう存じますけれども……」

「私も、直じきだわ。」

「待つていますよ。」

と優しい物越しおしお、悄々と出る後姿。主税は玄関へ見送って、身を蔽おおいにして、密そつとその袂たもとの端をおさ压えた。

「さようなら！」

勢よく引返すと、早や門の外を輾輳れきろくとして車が行く。

「暑い、暑い、どうも大変に暑いね。」

菅子はもうそこに、袖を軽く坐っていたが、露の汗の悩ましげに、朱鷺色縮緬とぎの上へ
《うわじめ》の端を寛ゆるめた、辺あたりは昼顔の盛りのようで、明い部屋あかるに白々地あからさまな、衣きぬばかりが
冷すずしい蔭。

「久振だわね。」

「久振じゃないじゃありませんか。今の言種いぐさは何です、ありや。……姉さんにお気の毒で、傍そばで聞いていられやしない。」

「だって事実だもの。病院に入切はいりきりで居ながら、いつの何時なんどきには、姉さんが誰と話をしたツて事、不残のこらず旦那様御存じなの、もう思召おぼしめししたらないんですからね。」

それでも大事にして置かないと、院長は家うちじゅう中の稼いぎ人で、すっかり経済を引受けてるんだわ。お庇様かげさまで一番末の妹の九ツになるのさえ、早や、ちゃんと嫁入支度が出来てるのよ。」

道楽一ツするんじやなし、ただ、姉さんを楽たのしみにして働いているんですからね。ちつとでも怒らしちや大変なのだから、貴下も氣をつけて下さらなくっちゃ困るわ。」

「何を云つてるんです、面白くもない。」

「今の様子ツたら何です、厭いやに御懇ごねんごろね。そして肩を持つことね。油断もすきもなりはしない。」

「可い加減になさい。串戯じょうだんも、」

「だって姉さんが、どんな事があればツたつて、男と対向さしむかいで五分間と居る人じゃない

のよ。貴下は口前が巧くって、調子が可いから、だから坐り込んであるんじやありませんか。ほんとうに厭よ。貴下浮気なんぞしちゃ、もう、沢山だわ。」

「まるでこりや、人情本の口絵のようだ。何です、対向った、この体裁は。」

三十六

しめやかな声で、夫人が――

「貴下……どうするのよ。」

「……………」

「私がこれほど願つても、まだ妙子さんを兄さん（英吉）には許してくれないの。今までにもどんなに頼んだか知れないのに、それじゃ貴下、あんまりじゃありませんか。

去年から口説通しくどしきなんだわ。貴下がはじめて、静岡こちうらへ来て、私と知己ちかづきになったというのを聞いて、（精一杯御待遇おもてなしをなさい。）ツて東京から母さんが手紙でそう云つて寄越したのも、酒井さんとの縁談を、貴下に調べて頂きたければこそだもの。

母さんだつて、どのくらい心配しているか知れないんだわ。今まで、ついぞ有った験ためしは

無い。こちらから結婚を申込んで^は刎ねられるなんて、そんな事——河野家の不名誉よ、恥辱ツたらありませんものね。

兄さんも、どんなにか妙子さんを好いていると見えて、一体が遊蕩^{あそび}過ぎる処へ、今度の事じゃ失望して、自棄^{やけ}気味らしいのよ、遣り方が。自分で自分を酒で殺しちや、厭じゃありませんか、まあ、」

と一際^{こゝろ}低声で、

「ちよいと、いかな^{こッ}事でも小待合へなんぞ倒込むですって。監督^{おめつけ}の叔父さんから内々注意があるもんだから、もう疾^{とつ}くに兄さんへは家^{うち}でお金子^{かね}を送らない事にして、独立で遣れツて名義だけでも、その実、勘当同様なの。

この頃じゃ北町（桐楊塾）へも寄り着^{みんな}かないんですって。

だってどこに転がっていたって、皆^{みんな}お金子が要るんですよ。どこから出て？ いずれ借りるんだわ。また河野の家の事を知っていて、高利で貸すものがあるんだから困っちゃう。千と千五百と纏^{まと}ったお金子で、母様が整理を着けたのも二度よ。洋行させる費用に、と云って積立ててあつた兄さんの分は、とうの昔無くなつて、三度目の時には皆私たち妹の分にまで、手がついたんじやありませんか。

妙子さんの話が始まってからは、ちょうど私も北町へ行っていて知っているけれど、それは、気の毒なほど神妙になったのに。……

もともと気の小さい、懐育ちのお坊ちゃんなんだから、遊蕩あそびも駄々で可よかつたんだけれど、それだけにまた自棄になつちや乱暴さが堪たまらないんだもの。

病院の義にいさん兄は養子だし、大勢の兄弟なか中に、やつと学位の取れた、かけ替えのない人を、そんなにしてしまつちや、それは家うちでもほんとうに困るのよ。

早瀬さん、貴下の心一つで、話が纏きまるんじやありませんか。私が頼むんだから助けると思きつて肯きいて頂戴、ねえ……それじや、あんまり貴下薄情よ。」

「ですから、ですから。」

と圧おさえるように口を入れて、

「決けして厭だとは言いません。厭だとは言いやしない。これからでも飛んで行つて、先生に話をして結納を持つて帰りましょう。」

事もなげに打笑つて、

「それじや反あべこべ対だつた。結納はこちらから持つて行くんでしたつけ。」

「そのかわりました、（あの安東村の紺屋となりの隣家の乞食小屋で結婚式を挙げろ）ツて言うん

でしょう。貴下はなぜそう依怙^{いこじ}地に、さもしいお米の価^ねを氣にするようなことを言うんだらう。

ほんとうに串^{じょうだん}戯^しではないわ！ 一家の浮沈と云ったような場合ですからね。私もどんなに苦勞だか知れないんだもの。御覽なさい、瘦^やせたでしょう。この頃じゃ、こちらに、どんな事でもあるように、島山（理学士）を見ると、もうね、身体^{からだ}が萎^{すく}むような事があるわ。土間へ駈下りて靴の紐を解いたり結んだりしてやつてるじゃありませんか。

跪^{ひざまず}いて、夫の足に接吻^{キッス}をする位なものよ。誰がさせるの、早瀬さん。——貴下の意地ひとつじゃありませんか。

ちつとは察して、肯いてくれたつて、満更罰は当るまいと、私思うんですがね。」

机^{もた}に凭^{もた}れて、長くなつて笑いながら聞いていた主税^{しゅぜ}が、屹^{きつ}と居直つて、

「じゃ貴女は、御自分に面^{ほし}じて、お妙さんを嫁に欲^{ほし}いと言うんですか。」

「まあ……そうよ。」

「そう、それでは色仕掛になすつたんだね。」

「怒ったの、貴下、怒つちや厭よ、私。貴下はほんとうにこの節じゃ、どうして、そんなに気が強くなつたんだらうねえ。」

「貴女が水臭い事を言うからさ。」

「どつちが水臭いんだか分りはしない。私はまさか、夜内よるを出るわけには行かず、お稽古に來たつて、大勢入込みいれこなんだもの。ゆつくりお話をする間も無いじゃありませんか。

過日いつか何と言いました。あの合歡の花が記念だから、夜中にあすこへ忍んで行く——虫の音や、蛙かわずの声を聞きながら用水越に立つていて、貴女があゝの黒塀の中から、こう、扱帶しづぎか何ぞで、姿を見せて下すつたら、どんなだらう。花がちらちらするか、闇やみか、螢か、月か、明星か。世の中がどんな時に、そんな夢が見られましょう——なんて串じょうだん戲云うから、洗濯をするに可いの、瓜が冷せて面白いのツて、島山にそう云つて、とうとうあすこの、板塀を切抜いて水門こしらを拵こしらえさせたんだわ。

頭痛まんなかがしてならないから、十畳の真中まんなかへ一人で寝て見たいの、なんのツて、都合をするのに、貴下は、素通りさえしないじゃありませんか。」

「演劇しげいのようだ。」

と低声こしえで笑うと、

「理想実行よ。」と笑顔で言う。

「どうして渡るんです。」

「まさか橋をかける言種いいぐさは、貴下、無いもの。」

「だから、渡られますまい。」

「合歡の樹の枝は低くつてよ。搦つかまつて、お渡んなさいなね。」

「河童かつばじやあるまいし、」

「ほほほほ、」

と今度は夫人の方が笑い出したが。

「なにしろ、貴下は不実よ。」

「何が不実です。」

「どうかして下さいな。」

あらたま
——更あらたまつて——

「妙子さんを。」

「ですから色仕掛けか、と云うんです。」

「あんな恐い顔をして、（と莞爾^{にっこり}して。）ほんとうはね、私……自ら欺^{あざ}むいているんだわ。家のために、自分の名譽^{ぎせい}を犠牲^{ぎせい}にして、貴下から妙子さんを、兄さんの嫁に貰おう、とそう思つてこちらへ往來^{ゆきき}をしているの。

でなくつて、どうして島山の顔や、母様の顔が見ていられます。第一、乳母^{ばあや}にだつて面^{おもて}を見られるようよ。それにね、なぜか、誰よりも目の見えない娘が一番恐いわ。母さん、と云つて、あの、見えない目で見られると、悚然^{ぞつと}してよ。私は元氣でいるけれど、何だかそのために生身を削られるようで瘡^やせるのよ。可哀相だ、と思つたら、貴下、妙子さんを下さいな。それが何より私の安心になるんです。……それにね、他^{ほか}の人は、でもないけれど、母様がね、それはね、実に注意深いんですから、何だか、そうねえ、春の歌留^{かるた}多会時^{たかいとき}分から、有りもしない事でもありそうに疑^{うたぐ}つているようなの。もしかしたら、貴下私の身^み体^{からだ}はどうなると思つて？　ですから妙子さんさえ下されば、有形にも無形にも立派な言訳になるんだわ。ひよつとすると、母様の方でも、妙子さんの為にするのだ、と思つているのかも知れなくつてよ。顔さえ見りや、（私がどうかして早瀬さんに承知させます。）と、母様が口を利かない先にそう言つて置くから。よう、後生だから早瀬さん。」

言い言い、縋^{すが}るように言う。

「詰らん言を。^{こと}先生のお嬢さんを言訳に使って可いもんですか。」

「そうすると、私も、母さんの顔が見られなくなるかも知れませんか。」

「僕だつて生きて二度と、先生の顔が見られないように……」と思わず拳^{こぶし}を握つたのを、
我^{ひきし}を引緊められたごとくに、夫人は思い取つて、しみじみ、

「じゃ、私の、私の身体はどうなつて？」

「訳は無い、島山から離縁されて、」

「そんな事が、出来るもんですか。」

「出来ないもんですか。当^{あたりまえ}前だ、」

と自若として言う、呆れたように、また……莞爾^{にっこり}、

「貴下はどうしてそうだろう。」

三十八

「どうもこうもありません、それが当前じゃありませんか。義、周の粟^{くち}を食わずとさ
え云うんだ。貴女、」

と主税は澄まして言い懸けたが、常ならぬ夫人の目の色に口を噤んだ。菅子は息急しい胸を圧えるのか、乳の上へ手を置いて、

「何だつて、そりやあんまりだわ、早瀬さん、」

と、ツンとする。

「不都合ですとも！ 島山さんが喜ばないのに、こうして節々おいでなさるんです。

それでいて、家庭の平和が保てよう法は無い。実はこうこうだ、と打明けて、御主人の意見にお任せなさい。私もまた卑怯な覚悟じやありません。事実明かに、その人の好きな自分の許へ令夫人をお寄せ申すんだから、謹んで島山さんの思わくに服するんだ。

だから貴女もそうなさい。懊惱も煩悶も有つたもんか。世の中には国家の大法を犯し、大不埒を働いて置いて、知らん顔で口を拭いて澄ましていようなどと言う人があるが、間違っています。」

夫人はこれを戯のように聞いて、早瀬の言を露も真とは思わぬ様子で、

「戯談おつしやいよ！ 嘘にも、そんな事を云つて、事が起つたら子供たちはどうするの？」

と皆まで言わせず、事も無げに答えた。

「無論、島山さんの心まかせで、一所に連れて出ると、言われりや連れて出る。置いて行けとなら、置いて……」

「暢のんき気で怒る事も出来はしない。身に染みて下さいな、ね……」

「何が暢気だろう、このくらい暢気でない事はない。小使と私と二人口でさえ、今の月謝の収入じゃ苦しい処へ、貴女方親子を背負しよい込むんだ。静岡は六升代でも瘦腕こたにや堪こたえなさ。」

余あまりの事と、夫人は凝じつと瞻みまもつて、

「私がこんなに苦勞をするのに、ほんとに貴下は不実だわ。」

「いざと云う時、貴女を棄ちてて逐ちくてん電でもすりや不実でしょう。胴みを据まえて、覺悟きを極きめて、あくまで島山さんが疑うつて、重ねて四ツにするんなら、先まづへ真ま二ツになろうと云うのに、何が不実です。私は実は何にも知らんが、夫人おくさんが御勝手に遊びにおいでなさるんだなんて言いはしない。」

「そう云つてしまつては、一も二も無いけれど。」

「また、一も二も無いんですから、」

「だって世の中は、そう貴下の云うようには参りませんもの。」

「ならんのではない、なる、が、勝手にせんのだ。恋愛は自由です、けれども、こんな世の中じゃ罪になる事がある。盗賊どろぼうは自由かも知れん、勿論罪になる。人殺、放火つけび、すべて自由かも知れんが、罪になります。すでにその罪を犯した上は、相当の罰を受けるのがまたあたりまえ前まへじやありませんか。愚図ぐずぐず々々塗秘ぬりかくそうとするから、卑怯未練な、吝けちな、了見ひとが起つて、他と不都合しながら亭主の飯を食つてるような、猫の恋になるのがある。しみつたれてるじやありませんか。度胸を据えて、首の座へお直んなさい。私なんぞ疾とくに――先生……には面おもては合わされない、お薦……の顔も見ないものと思つている。この上は、どんなことだつて恐れはしません。

それに貴女は、島山さんに不快を感じさせながら、まだやつぱり、夫には貞女で、子には慈悲ある母親で、親には孝女で、社会の淑女で、世の亀鑑きかんともなるべき徳を備えた貴婦人顔をしようとするから、瘦せもし、苦勞もするんです。

浮気をする、貞女、孝女、慈母、淑女、そんな者があるものか。」

「じゃ……私を、」

と擦寄つて、

「不埒と言わないばツかりね。」

さすがに顔の色をかえて屹きつと睨にらむと、頷うなずいて、

「同時に私だつて、」

と笑つて言う。

その肩を突いて、

「まあ、仕ようの無い我わがまま儘だよ。」

三十九

「貴下は始めからそうなんだわ。……」

道学者の坂田（アバ大人）さんが、兄さんの媒なこうどぐち口を利くのが癪しやくに障るからつて、

（攫すり徒の手つだいをして、参謀本部も諭旨免官になりました。攫徒は、その時の事を恩にして、警察では、知らない間に袂たもとへ入れて置いて逆さか振ねじを食わしたように云つてくれたけれど、その実は、知つていて攫徒の手から紙入を受取つてやつたんだ。それで宜よろしくばお稽古にお出でなさい、早瀬主税は攫徒の補助をした東京の食詰くいづめ者ものです。）とこの塾を開く時、千鳥座かどこかで公衆に演説をする、と云つた人だもの——私が留めたから止した

けれど……」

早瀬の胸のあたりに、背うしろむ向きになって、投げ出した褌つまを、熟じつと見ながら、

「私、どうしたら、そんな乱暴な人を友だちにしたんだか。」

と自から怪むがごとく独言ひとりごとつと、

「不都合な方と知りながら、貴女と附合おんなじつてる私と同一でしよう。」

「だって私は、貴下のために悪いようにとした事は一つも無いのに、貴下の方じゃ、私の身みの立たないように、立たないようにと言うじやありませんか。早瀬さんへ行くのが悪いんなら、（どうでもして下さい、御心まかせ。）何のつて、そんな事が、譬たとえにも島山に言われるもんですか。」

島山の方は、それで離縁になるとして、そうしたら、貴下、第一河野の家名はどうなると思うのよ。末代まで、汚点しみがついて、系図けいずが汚れるじやありませんか。」

「すでに云々うんぬんが有るんじやありませんか。それを秘かくそうとするんじやありませんか。卑怯へきせつだと云うんです。」

「そんな事を云つて、なぜ、貴下は、」

少し起返うしろむつて、なお背向うしろむきに、

「貴下にちつとも悪意を持っていない、こうして名誉も何も一所に捧げているような、
と口惜くやしそうに、

「私を苦しめようとなさるんだろうねえ。」

「ちつとも苦しめやしませんよ。」

「それだって、乱暴な事を言つてさ、」

「貴女が困っているものを、何も好き好んで表おもてむき向にしようと言うんじゃない。不実だの、無情だの、私の身体からだはどうなるの、とお言いなさるから、貴女の身体は、疑の晴れくもりで——制裁を請けるんだ、と言うんです。貴女ばかり、と言ったら不実でしょう。男が諸共に、と云うのに、ちつとも無情な事がありますまい。どうです。」

と言う顔を斜めに視て、

「ですから、そんな打破ぶちこわしをしないでも、妙子さんさえ下さると、円満に納まるばかりか、私も、どんなにか気が易やすまつて、良心の呵責かしやくを免れることが出来ますツて云うのね。肯ききますまい！それが無情だ、と云うんだわ。名誉も何も捧げている婦おんなの願いじゃありませんか、肯きいてくれたつて可いいんだわ。」

「（名誉も何も）とおっしゃるんだ。」

「ああ、そうよ。」と振向いて清く目を睜く。

「なぜその上、家も河野もと言わんのです。名誉を別にした家がありますか。家を別にした河野がありますか。貴女はじめ家門の名誉と云う気障な考えが有る内は、情合は分りません。そういうのが、夫より、実家の両親が大事だったり、他の娘の体格検査をしたりするのだ。お妙さんに指もささせるもんですか。」

お妙さんの相談をしようと云うのなら、先ず貴女から、名誉も家も打棄つて、誰なりとも好いた男と一所になるという実証をお挙げなさい。」

と意気込んで激しく云うと、今度は夫人が、気の無い、疲れたような、倦じた調子で、「そしてまた（結婚式は、安東村の、あの、乞食小屋見たような茅屋で挙げろ）でしょう。貴下はまるツきり私たちと考えが反対だわ。何だか河野の家を滅ぼそうというような様子だもの、家に仇する敵だわ。どうして、そんな人を、私厭でないんだか、自分自分の気が知れなくツてよ。ああ、そして、もう、私、慈善市へ行かなくツては。もう何でも可いわ！ 何でも可いわ。」

夫人と……別れたあとで、主税はカツと障子を開けて、しばらく天を仰いでいたが、「ああ、今日はお妙さんの日だ。」と、呟いて仰向けに寝た——妙子の日とは——日曜を

意味したのである。

宵闇

四十

同、日曜の夜の事おなじよで。

日が暮れると、早瀬は玄関へ出て、かまち框に腰を掛けて、土間の下駄を引掛けたなり、ランプ洋燈を背後うしろに、片手を突いて長くなつて一人でいた。よくぞ男に生れたる、と云う陽気でもなく、虫を聞く時節でもなく、家は古いが、壁から生えたすすき芒も無し、絵でないから、一筆描がきの月のあしらいも見えぬ。

ト忌々いみいみしいと言えば忌々しい、あがり上かまち框ともしびに、灯を背中にして、あたかもかどび門火を焚いているような——その薄あかりが、格子戸を透すかして、軒で一度暗くなつて、中が絶えて、それから、ぼやけた輪を取つて、もうろう朦朧と、あまざれ雨曝の木目の高い、門の扉とに映つて、こうもり蝙蝠の影

にもあらず、空を黒雲が行通うか何どのように、時々、むらむらと暗くなる……また明る^{あかる}なる。

目も放さず、早瀬がそれを凝^{じつ}と視^{なが}める内に、濁つたようなその灯影が、二三度ゆらゆらと動いて、やがて礫^{つぶて}した波が、水の面に月輪^{おも}を纏^{まと}めた風情に、白やかな婦^{おんな}の顔がそこを覗^{のぞ}いた。

門^との扉^あが開くでもなしに……続いて雪のような衣紋^{えもん}が出て、それと映^{うつ}合^{りあ}つてくつきりと黒い鬢^{びん}が、やがて薄お納戸の肩のあたり、きらりと光つて、帯の色の鮮麗^{あざやか}になったのは——道子であつた。

門に立忍^そんで、密と扉を開けて、横から様子を伺つたものである。

一目見ると、早瀬は、ずいと立つて、格子を開けながら、手招ぎをする。と、立直つて後姿になつて、A^{アアベエ} B^{ベエ}横町の左右^{みまわ}を、す趣であつたが、うしろ向きに入つて、がらがらと後を閉めると、三足ばかりを小刻みに急いで来て、人目の関には一重も多く、遮るものが欲しように、また格子を立てた。

「ようこそ、」と莞爾^{にっこり}して云う。

姉夫人は、口を、畳んだ手巾^{ハンケチ}で压^{おさ}えたが、すツすツと息が忙^{せわ}しく、

「誰^{どなた}方も……」

「誰も。」

「小使さんは？」

ともう馴染んだか尋ね得た。

「あれは朝つから、貞造の方へ遣つてあります。目の離せません容態ですから。」

「何から何まで難^{ありがと}有う存じます……一人の親を……濟みませんですねえ。」

とその手巾が目障る。

「濟まないのは私こそ。でもよく会場が抜けられましたな。」

「はい、色艶が悪いから、控所の茶屋で憩^{やす}むように、と皆さんが、そう言つて下さいましたから、好^い都合に、点^{あかりのつきごろ}燈^{ろう}頃の混雑紛れに出ましたけれど、宅の車では悪うございますから、途中で辻待のを雇いますと、気が着きませんでした、それが貴^{あなた}下、片々^{かきめ}蠅^は目のようで、その可^こ恐^わらしい目で、時々振返つては、あの、幌^{ほろ}の中を覗きましてね、私はどんなに気味が悪うござんしてしよう。やつとこの横町の角で下りて、まあ、御門まで参りましたけれども、もしかお客様でも有つては悪いから、と少^{しばし}時^ち立^たつておりましたの。」

「お心づかい、お察し申します。」

と頭こうべを下げて、

「島山さんの、お菅さんには。」

「今しがた参りました。あんなに遅くまで——こちら様に。」

「いいえ。」

「それでは道寄りをいたしましたのでございましょう。灯あかりの点つきます少し前に見えましたつけ、大勢の中でございますから、遠くに姿を見ましたばかりで、別に言ことばも交まじわささないで、私は急いで出て参りましたので。」

「成程、いや、お茶も差上げませんで失礼ですが、手間が取れちゃまたお首尾が悪いと不可けません。直ぐに、これから、」

「どうぞそうなすつて下さいまし、貴下、御苦労様でございますねえ。」

「御苦労どころじゃありません。さあ、お供いたしましょう。」

ふと心着いたように、

「お待ちなさいよ、夫人おくさん。」

早瀬は今更ながら、道子がその白襟の品好く麗しい姿を視めて、

「宵暗でも、貴女のその態じや恐しく目に立つて、どんな事でまたその蠅目の車夫なん

ぞが見着けまいものでもありません。ちよいと貴女手巾を。」

と慌しい折から手の触るも顧みず、奪うがごとく引取つて、背後から夫人の肩を肩掛

のように包むと、撫肩はいよいよ細つて、身を萎めたがなお見好げな。

懷中からまた手拭を出して、夫人に渡して、

「姉さん冠りと云うのになさい、田舎者がするように。」

「どうせ田舎者なんですもの。」

と打傾いて、鬚にちよつと手を当てて、

「こうですか。」白地を被つて俯向けば、黒髪こそは隠れたれ、包むに余る鬢の馥の、雪

に梅花を伏せたよう。

主税は横から右瞻左瞻で、

「不可い、不可い、なお目立つ。貴女、失礼ですが、裾を端折つて、そう、不可んな。長

襦袢が突丈じや、やつぱり清元の出語がありそうだ。」

と口の裡うちに独言つぶやきつつ、

「お気味が悪くつても、胸へためて、ぐつと上げて、足袋との間を思い切つて。ああ、おいたわしいな。」

「厭いやでございますね。」

「御免なさいよ。」

と言うが疾はやいか、早瀬の手は空を切つて、体を踞しゃがんだと思うと、

「あれ、」

かつとなつて、ふらふらと頭重つむりく倒れようとした——手を主税の肩に突いて、道子はわずかに支えたが、早瀬の掌たなそこには逸早く壁の隅なる煤すすを掬すくつて、これを夫人の脛はざに塗つて、穂にあらわれて蔽おほわれ果てぬ、尋常なその棲つまはずれを隠したのであつた。

「もう、大丈夫、河野の令夫人おくがたとは見えやしない。」

と、框ランブの洋燈を上から、フツ！

とめとめきき、留南奇たよりを便に、身を寄せて、

「さあ、出掛けましょう。」

胸に当つた夫人の肩は、誘わるるまで、震えていた。

この横町から、安東村へは五町に足りない道だけれども、場末の賤が家ばかり。時に雨もよいの夏雲の閉した空は、星あるよりも行方遙かに、たまさか漏るる灯の影は、山路なる、孤家のそれと疑わるる。

名門の女子深窓に養われて、傍に夫無くしては、濫りに他と言葉さえ交えまじきが、今朝からの心の裡、蓋し察するに余あり。

我は不義者の児なりと知り、父はしかも危篤の病者。逢うが別れの今世に、臨終のなごりを惜むため、華燭銀燈輝いて、見返る空に月のごとき、若竹座を忍んで出た、慈善市の光を思うにつけても、横町の後暗さは冥土にも増るのみか。裾端折り、頬被して、男——とあられもない姿。ちらりとでも、人目に触れて、貴女は、と一言聞くが最後よ、活きてはいられない大事の瀬戸。辛く乗切つて行く先は……実の親の死目である。道子が心はどんなであろう。

大巖山の幻が、闇の氣勢に目を圧えて、用水の音凄じく、地を揺るごとく聞えた時、道子は涕さえ、衣の色さえ、有るか無きかの声して、

「夢ではないのでしょうか。宙を歩きますようで、ふらふらして、倒れそうでなりません。早瀬さん、お袖につかまらして下さいまし。」

「しつかりと！ 可い塩梅あんばいに人通りもありませんから。」
 人は無くて、軒を走る、怪しき狗いぬが見えたであろう。紺屋の暖簾の鯛の色は、燐火おにびとなつて燃えもせぬが、昔を知ればひづめの音して、馬の形も有りそうな、安東村へぞ着きにける。

四十二

道子は声も徜徉さまようように、

「ここは野原でございますか。」

「なぜ、貴女？」

「真中まんなかに恐しい穴がございますよ。」

「ああ、それは道端の井戸なんです。」

と透すかしながら早瀬が答えた。古井戸は地獄が開けた、大なる口のごとくに見えたのである。

早瀬より、忍び足する夫人の駒下駄が、かえつて戦おのきに音高く、辿々たどたどしく四辺あたりに響い

て、やがて真暗な軒下に導かれて、そこで留まった。が、心着いたら、心弱い婦は、得堪えず倒れたであろう、あたかもその頸の上に、例の白黒斑な狗が踞っているのである。

音訪う間も無く、どたと畳を蹴て立つ音して、戸を開けると、ついその框に真赤な

灯の、ほやの油煙に黒ずんだ小洋燈の見ゆるが同時で、ぬいと立ったは、眉の迫った、目

の鋭い、細面の壮俊で、巾狭な単衣に三尺帯を尻下り、粹な奴を誰とかする、すな

わち塾の（小使）で、怪！ 怪！ 怪！ アバ大人を掬損こねた、万太と云う攫徒である。

はたと主税と面を合わせて、

「兄哥！」

「……………」

「不可えぜ。」と仮色のように云った。

「何だ——馬鹿、お連がある。」

「やあ、先生、大変だ。」

「どう、大変。」

衝と入る。袂に縫って、牲の鳥の乱れ姿や、羽搔を傷めた袖を悩んで、塙のような戸を

潜ると、跣足で下りて、小使、カタリと後を鎖し、

「病人が冷くなつたい。」

「ええ、」

「今駈出そうてえ処でさ。」

「医者か。」

「お医者は直ぐに呼んで来たがね、もう不可^{いけ}えツて、今しがた歸つたんで。私^{わつし}あ、ぼうとして坐つていましたが、何でもこりや先生に来て貰わなくちや、仕様がなないと、今やつと気が附いて飛んで行こうと思つた処で。」

「そんな法はない。死ぬなんて、」

と飛び込むと、坐ると同時^{いつしよ}で、ただ一室^{ひとま}だからそこが褥^{しとね}の、筵^{むしろ}のような枕許へ膝を落して、覗^{のぞきこ}込んだが、慌^{あわただ}しく居直つて、三布蒲団^{みのふとん}を持上げて、骨^{あお}の蒼^{あお}いのがくツきり見える、病人の仰向けに寝た胸へ、手を当てて熟^{じつ}としたが、

「奥さん、」

と静^{しずか}に呼ぶ。

道子が、取つたばかりの手拭を、引摺^{ひきず}るように膝にかけて、振^{ふり}を繕^いう違^{いとま}もなく、押並^{ひざまず}で跪いた時、早瀬^{すゑ}は退つて向き直つて、

「線香なんぞ買つて——それから、種々要るものを。」

「へい、宜うがす。」

ぼんやり戸口に立つていた小使は、その跣足のまま飛んで出た。

と見れば、貞造の死骸の、恩愛に曳かれて動くのが、筵に響いて身に染みるように、道子の膝は打震いつつ、幽に唱名の声が漏れる。

「よく御覧なさいましよ。貴女も見せてお上げなさいよ。ああ、暗くつて、それでは顔が、」

手洋燈を摺らして出したが、灯が低く這つて届かないので、裏が紺屋の物干の、破櫃の下に、汚れた飯櫃があつた、それへ載せて、早瀬が立つて持出したのを、夫人が伸上るようにして、霑をもつた目を見据え、現の面で受取つたが、両方掛けた手の震えに、ぶるぶると動くと思うと、坂になった蓋を這つて、啊呀と云う間に、袖に俯向いて、火を吹きながら、畳に落ちて碎けたではないか！ 天井が真紫に、筵が赫と赤くなった。

この明で、貞造の顔は、活きて眼を開いたかと、蒼白た鼻も見えたが、松明のようにひらひらと燃え上る、夫人の裾の手拭を、炎ながら引摺んで、土間へ叩き出した早瀬が、一大事の声を絞つて、

「大變だ、帯に、」と一声。余りの事に茫^{ぼう}となつて、その時座を避けようとする、道子の帯の結^{むすびめ}目を、引断^{ひつき}れよ、と引いたので、横ざまに倒れた裳^{もすそ}の煽^{あお}り、乳^ちのあたりから波打つて、炎に燃えつと見えたのは、膚^{はだえ}の雪に映る火をわずかに襦袢に隔てたのであつた。トタンに早瀬は、身を投げて油の上をぐるぐると転げた。火はこれがために消えて、しばらくは黒白^{あやめ}も分かず。阿部街道を戻り馬が、遙^{はるか}に、ヒイインと嘶^{いなな}く声。戸外^{おもて}で、犬の吠ゆる声。

「可恐^{おつそろし}い真暗ですな。」

品々を整えて、道の暗さに、提^{ちようちん}灯を借りて歸つて来た、小使が、のそりと入ると、薄色の紋着を、水のように畳に流して、夫人はそこに伏沈んで、早瀬は窓をあけて、櫺子に腰をかけて、吻^{ほっ}として腕をさすっていた。——猛虎肉醉^{もうこにくにようてはじめてさむるとき}初醒時。揩磨^{かようをかいま}苛^か痒風助威^{してかぜいをたすく}。

廊下づたい

四十三

家の業でも、気の弱い婦おんなであるから、外科室の方は身震いがすると云うので、是非なく行かぬ事になつてゐるが、道子は、両親の注意——むしろ命令で、午後十時前後、寢際には必ず一度ずつ、入院患者の病室を、遍あまねく見舞うのが勤めであつた。

その時は当番の看護婦が、交代に二人ずつ附添うので、ただ（御気分はいかがですか、お大事になさいまし、）と、ただけれども、心優しき生うまれつき来の、自おのずから言外の情が籠るため、病者は少なからぬ慰安を感じて、結句院長の廻診より、道子の端麗な、この姿を待ち兼ねる者が多い。怪しからぬのは、鼻風邪ごときで入院して、貴女のお手ずからお薬を、と唸うなると云うが、まさかであろう。

で——この事たるや、夫の医学士、名は理順りじゆんと云う——院長は余り賛成はしないのだけれども、病人を慰めるという仕事は、いかなる貴婦人がなすつても仔細しさいない美德であるし、両親もたつて希望なり、不問に附して黙諾の体でいる。

ト今夜もばたばたと、上草履の音に連れて、下階したの病室を済ました後、横田の田畝たんぼを左に見て、右に停車場ステイションを望んで、この向は天氣が好いと、雲に連なつて海が見える、その

二階へ、雪洞ぼんぼりを手にした、白衣びやくえの看護婦を従えて、真中まんなかに院長夫人。雲を開いたように階子段はしごだんを上へ、髪が見えて、肩、帯あわわが露れる。

質素じみな浴衣に昼夜帯を……もつともお太鼓に結んで、紅鼻緒に白足袋であつたが、冬の夜よなどは寝衣ねまきに着換えて、浅黄しききの扱帯しききという事がある。そんな時は、寝白粉ねおしろいの香も薫る、それはた異香くん薫くずるがごとく、患者は御来迎、と称となえて随喜渴仰。

また實際、夫人がその風采とりなり、その容色きりようで、看護婦を率いた状さまは、常に天使のごとく拝まれるのであつたに、いかにやしけむ、近い頃、殊に今夜あたり、色艶すぐ勝れず、円鬚まるまげも重うそうに首垂うなだれて、胸をせめて袖を襲かきねた状は、慎いましげに床し、とよりは、悄しやう然ぜんと細こつて、何か目に見えぬ縛い縛しめの八重の縄で、風に靡なびく弱腰かけて、ぐるぐると巻かれたよう。従つて、前後を擁した二体の白衣も、天にもし有らば美しき獄卒の、法廷の高く高き処へ夫人を引立てて来たようである。

扉ドアを開放あけはなした室の、患者無しに行抜けの空は、右も左も、折から真白まっしろな月夜で、月の表には富士の白妙しろたえ、裏は紫、海ある氣勢けはい。停車場の屋根はきらきらと露が流れて輝く。例に因つて、室々へ、雪洞が入り、白衣が出で、夫人が後姿になり、看護婦が前に向き、ばたばたばた、ばたばたと規律正しい沈んだ音が長廊下に断えては続き、処々月になり、

また雪洞がぽつと明あかくなつて、ややあつて、遙かに暗い裏階うらばしご子へ消える筈はずのが、今夜は廊下の真中まんなかを、ト一列になつて、水彩みずさいしき色の燈籠の絵の浮いて出たように、すらすらこなたへ引返ひっかえして来て、中程よりもうちつと表階子へ寄つた——右隣が空いた、富士へ向いた病室の前へ来ると、夫人は立留つて、白衣は左右に分れた。

順に見舞つた中に、この一室だけは、行きがけになぜか残したもので。……

と見ると胡粉ごふんで書いた番号の札に並べて、早瀬主税と記してある。

道子は間なかに立つて、徐おもむろに左右を見返り、黙つて目礼をして、ほとんど無意識に、しなやかな手を伸ばすと、看護婦の一人が、雪洞を渡して、それは両手を、一人は片手を、膝のあたりまで下げて、ひらりと雪のひとかたまり一団。

ずつと離れて廊下を戻る。

道子は扉ドアに吸込まれた。ト思うと、しめ切らないその扉の透間から、やや背屈せかがみをしたらしい、低い処へ横顔を見せて廊下を差覗さしのぞくと、表階子の欄干てすりへ、雪洞を中にして、からみついたようになつて、二人附着くっついて、こなたを見ていた白衣が、さらりと消えて、壇に沈む。

四十四

寝台に沈んだ病人の顔の色は、これが早瀬か、と思うほどである。

道子は雪洞を裾に置いて、帯のあたりから胸を仄かに、顔を暗く、寝台に添うてゐんで、心を細めた洋燈のあかりに、その灰のような面を見たが、目は明かに開いていた。

ト思うと、早瀬に顔を背けて、目を塞いだが、瞳は動くか、烈しく睫毛が震えたのである。

ややあつて、

「早瀬さん、私に分りますか。」

「……………」

「ようよう今日のお昼頃から、あの、人顔がお分りになるようにおなんなさいましたそうでございますね。」

「お庇様で。」

と確に聞えた。が、腹でもの云うごとくで、口は動かぬ。

「酷いお熱だったんでございますのねえ。」

「看護婦に聞きました。ちようど十日間ばかり、全ツきり人事不省で、驚きました。いつの間にか、もう、七月の中旬なかばだそうで。」と瞑ねむったままで云う。

「宅では、東京の妹たちが、皆暑中休暇で帰つて参りました。」

少し枕を動かして、

「英吉君も……ですか。」

「いいえ、あの人だけは参りませんの。この頃じや家うちへ帰られないような義理になっておりますから、氣の毒ですよ。」

ああ、そう申せば、」と優しく、枕許の置棚を斜ななめに見て、

「貴下は、まあ、さぞ東京へお帰りなさらなければならなかったんでございましたように。あいにく御病氣で、ほんとうに間が悪うございましたわね。酒井様からの電報は御覧になりましたの？」

「見ました、先刻はじめて、」

と調子が沈む。

「二通とも、」

「二通とも。」

「一通はただ（直ぐ帰れ。）ですが、二度目のには、ツタビヨウキ（蔦病氣）——かねて妹から承っております。貴下の奥さんが御危篤ごきとくのように存じられます。御内の小使さんとそれに草深の妹とも相談しまして、お枕許で、失礼ですが、電報の封を解きまして、私の名で、貴下がこのお熱の御様子で、残念ですがいらっしやられない事を、お返事申して置きました。ですが、まあ、何という折が悪いのでございましょう。ほんとうにお察し申しております。」

「……病氣が幸です。達者で居たつて、どの面さつらげて、先生はじめ、顔が合されますもんですか。」

「なぜ？ 貴下、」

と、熱と頤じつおとがを据えて、俯向うつむいて顔を見ると、早瀬はわずかに目を開あいて、

「なぜとは？」

「……………」

「第一、貴女に、見せられる顔じゃありません。」

と云う呼吸いきづかいが荒くなって、毛布けつとを乗出した、薄い胸の、露あらわな骨が動いた時、道子の肩もわなわなして、真白な手の戦おのくのが、雪の乱るるようであつた。

「安東村へおともをしたのは……夢ではないのでございますね。」

早瀬は差置かれた胸の手に、お押し殺されて、あたかも呼吸の留るがごとく、その苦をくるしみ払わんとするように、やせほそ瘦細った手で握って、幾度も口を動かしつつ辛うじて答えた。

「夢ではありません、が、この世の事ではないのです。お、お道さん、毒を、毒を一思いに飲まして下さい。」

と魚の渴けるがごとくもた悶ゆる白歯に、傾く鬢びんからこぼるるよと見えて、衝と一片の花が触れた。

さつ颯となつた顔を背けて、

「夢でなければ……どうしましょう！」

と道子は崩れたように膝を折って、寝台の端に額を隠した。窓の月は、キラリとこうがいつや笄の艶に光って、ほんぼり雪燈は仄かに玉のごときうなじ頸を照らした。

これより前、看護婦の姿が欄干から消えて、早瀬の病室の扉が堅く鎖とぎされると同時に、裏階子うらはしごの上へ、ふとあらわ頭れた一人の婦があつて、堆い前髪にも隠れない、鋭い瞳は、屹と長廊下を射るばかり。それがあしおと跫音を密めて来て、隣の空室あきまへ忍んだことを、断つて置かねばならぬ。こは道子等の母親である。

——おなじ同一事が——同一事が……五晚六晚続いた。

四十五

妙なことが有るもので、夜ごとに、道子が早瀬の病室を出る時間の後れるほど、人こそ替れ、二人ずつの看護婦の、階子段の欄干を離れるのが遅くなった。

どうせそこに待っていて、一所に二階を下りるのではない——要するに、遠くから、早瀬の室を窺う間が長くなったのである、と言いかえれば言うのである。

で、今夜もまた、早瀬の病室の前で、道子に別れた二人の白衣びやくえが、多しばらく時宙にかかったようになって、欄干の処に居た。

広庭を一つ隔てた母屋の方では、宵の口から、今度暑中休暇で帰省した、牛込桐楊塾の娘たちに、内の小児こども、甥おいだの、姪めいだのが一所になった処へ、また小児同志の客があり、草深いっけの一家も来、ヴァイオリンが聞える、洋琴オルガンが鳴る、唱歌を唄う——この人数にんずへ、もう一組。菅子の妹の辰子というのが、福井県の参事官へ去年こぞの秋縁着いてもう児こが出来た。その一組が当河野家へ来揃うと、この時だけは道子と共に、一族残らず、乳母小間使と子

守を交ぜて、ざつと五十人ばかりの人数で、両ふた親がついて、かねてこれがために、清水港みなとに、三保に近く、田子の浦、久能山、江尻はもとより、興津おきつ、清見寺きよみなどへ、ぶらりと散歩が出来ようという地を選んだ、宏大な別荘もうけの設が有つて、例年必ずそこへ避暑する。一門の榮華を見よ、と英臣大夫妻、得意の時、昨年は英吉だけ欠けたが、……今年も怪しい。そのかわり、新しく福井県の頭官が加わるのである……さて母屋の方は、葉越に映る燈ともにも景氣づいて、小さいのが弄もてあそぶ花火の音、松こすえの梢に富士より高く流星も上つたが、今は静しずになった。

壇の下から音もなく、形の白い脊の高いものが、ぬいと廊下へ出た、と思うと、看護婦二人は驚いて退すつた。

来たのは院長、医学士河野理順である。

ホワイト襯衣しやつに、縞しまの粗い慢な筒服、上靴を穿はいたが、ビイルを叩あつたらしい。充血した顔の、額に顱割はちわれのある、髻ひげの薄い人物で、ギラリと輝く黄金縁きんぶちの目金越に、看護婦等を睨ねめ着けながら、

「君たちは……」

と云うた眼まなこが、目金越に血走つた。

「道子に附いているんじゃないか。」

「は、」と一人が頭にんこうべを下げる。

「どうしたか。」

「は、早瀬さんの室を、お見舞になります時は、いつも私わたくしどもはお附き申しませんでございます。」と爽さわやかな声で答えた。

「なぜかい。」

「奥様がおつしやいます。御本宅の英吉様の御朋友ですから、看護婦などを連れては豪えらそうに見えて、容体ぶるようで氣恥かしいから、とおつしやつて、お連れなさいませんので、は……」と云う。

「いつもそうか。」

と尋ねた時、衣兜かくしに両手を突込んで、肩ゆすを揺った。

「はい、いつでも、」

「む、そうか。」と言ひ棄てに、荒らかに廊下を踏んだ。

「あれ、主人あるじの跽あしおと音でございます。」

「院長ですか。」

道子は色を変えて、

「あれ、どうしましょう、こちらへ参りますよ。アレ、」

「院長が入院患者を見舞うのに、ちつとも不思議はありません。」と早瀬は寝ながら平然として云った。

目も尋常ただならず、おろおろして、

「両親も知りませんが、主人は酷い目に逢わせますのでございますよ。」としめ木にかけられた様に袖を絞って立窘たちすくむと、

「寝台ねだいの下へお隠れなさい。可いから、」

とむつくと起きた、早瀬は毛布けつとひるがえを翻して、夫人の裾を隠しながら、寝台に屹きつと身構えたトタンに、

「院長さんが御廻診ですよ！」と看護婦の金切声が物凄く響いたのである。

理順は既に室に迫つて、あわや開けようとする、どこに居たか、忽然こつぜんとして、母夫
人が立露たちあらわれて、扉に手を掛けた医学士の二の腕を、横ざまにグツと圧おさえて……曰く、
「院長。」

と、その得も言われぬ顔を、例の鋭い目で、じろりと見て、

「どうぞ、こちらへ。いいえ、是非。」

燃ゆるがごとき嫉妬の腕かいなを、小脇にしっかりと抱込んだと思うと、早や裏階子の方へ引いて退いた。――

蜚

四十六

「己おれが分るか、分るか。おお酒井だ。分ったか、しっかりしな。」

酒井俊蔵ただ一人、臨終いまわのお蔭の枕許に、親しく顔を差寄せた。次の間には……

「ああ、皆居みんなるとも。妙も居るよ。大勢居るから氣を丈夫に持て！　ただ早瀬が見えん、残念だろう、己も残念だ。病氣で入院をしていると云うから、致いたしかた方が無い。断念あきらめなよ。」

と、黒髪ばかりは幾千代までも、早やその下に消えそうな、薄白んだ耳に口を寄せて、
「未来で会え、未来で会え。未来で会ったら一生懸命に縋すがり着ついていて離れるな。己のよ
うな邪魔者の入らないように用心しろ。きつと離れるなよ。先生なんぞ持つな。

己はこういう事とは知らなんだ。お前より早瀬の方が可愛いから、あれに間違いの無い
ように、怪我の無いようにと思ったが、可哀相な事をしたよ。

早瀬に過失あやまちをさすまいと思う己の目には、お前の影は彼奴あいつに魔が魅さしているように見
えたんだ。お前を悪魔だと思った、己は敵だ。かたき間なかをせいたって処女きむすめじゃない。真逢まこといたく
ば、どんなにしても逢えん事はない。世間体だ、一所に居てこそ不都合だが、内証とこなら大
目に見てやろうと思つたものを、お前たちだけに義理がたく、死ぬまで我慢をし徹したか。
可哀相に。……今更卑怯な事は謂いわない、己を怨め、酒井俊蔵を怨め、己を呪のろえよ！

どうだ、自分で心を弱くして、とても活きられない、死ぬなんぞと考えないで、もう一
度石に喰くついても恢復なほつて、生樹なまきを裂いた己へ面当つらあてに、早瀬と手を引いて復讐しかえしをして見
せる元気は出せんか、意地は無いか。

もう不可いまいなあ。」

と、忘れたようなお蔭の手を膝へ取つて、熟じつと見て、

「瘠やせたよ。一昨日おととい見た時よりまた半分になった。——これ、目を開あきなよ、しっかりしな、己だ、分ったか、ああ先生だよ。皆みんな居る、妙も来ている。姉さん——小芳か、あすこに居るよ。

なぜ、お前は気を長くして、早瀬が己ほどの者になるのを待たん、己でさえ芸者の情婦いろは持余あましているんだ、世の中は面倒さな。

あの腰を突けばひよろつくような若い奴が、お前を内へ入れて、それで身を立って行かれるものか。共倒れが不便ふびんだから、剣突けんつくを喰わしたんだが、可哀相に、両方とも国を隔はつて煩わづらつて、胸一つ擦さすつて貰えないのは、お前たち何の因果だ。

さぞ待つているだろうな、早瀬の来るのを。あれが来るから、と云つて、お前、昨夜ゆうべ髪かみを結いつたそうだ。ああ、島田が好よく出来た、己が見たよ。――

と云う時、次の室まで泣音なくねがした。続いてすすり泣く声が聞えたが、その真先まっさきだったのは、お蔭かげのこれを結いつた、髪結のお増であつた。芸妓げいこ島田は名譽おんなの婦おんなが、いかに、丹精をぬきんでたろう。

上らぬ枕を取交えた、括蒲団くくりぶとんに一いちが沈しづんで、後毛おくれげの乱れさえ、一入ひとしおの可傷いたましさに、お蔭かげは薄化粧うすけいさえしているのである。

お蔭は恥じてか、見て欲^{ほし}かつたか、肩^{かた}を捻^{ひね}つて、鬚^{まげ}を真向きに、毛筋も透通るような頸^{うなじ}を向けて、なだらかに掛けた小搔^{こがい}巻^{まき}の膝^{あたり}の辺に、一波打つと、力を入れたらしく寝返りした。

四十七

「似合つた、似合つた、ああ、島田が佳^よく出来た。早瀬なんかに分るものか。顔を見せなさあ。」

とじりりと膝を寄せて、その時、颯^{さつ}と薄桃色の脛^{まぶた}の露^{うる}んだ、冷たい顔が、夜の風に戦^{そよ}ぐばかり、蓐^{しとね}の隈^{くま}に俯^{まおも}立つのを、縁^{あかり}から明^{あかり}取りの月影に透かした酒井が、

「誰か来て螢籠^{えいろう}を外しな、厭^{いや}な色だ。」

「へへい、」と頓興^{とんきやう}な、ぼやけた声を出して、め組が継^{つぎ}の当つた千草色の半股引^{はんももひき}で、縁側^{えんがわ}を膝立^{ひざだて}つて来た——婦^{おんな}たちは皆我^{われ}を忘れて六畳に——中には抱合^{かこ}つて泣いているのもあるので、惣助^{そうすけ}一人三畳の火鉢^{わき}の傍^{わき}に、割膝^{かき}で畏^{かしこ}まって、齒^くを喰^く切^いつた獅^{しが}嚙^{がみ}面^{づら}は、額^{ぬか}に蟬^{せみ}燭^{うそく}の流れぬばかり、絵にある燈台鬼^{とうだいおに}という顔^{がん}色^{しよく}。時々病人^{びやうじん}の部屋^{へや}が寂^{しん}とするごとに、隣

の女連の中へ、四ツ這に顔を出して、

（死んだか、）と聞いて、女房のお増に流眊しりめにかけられ、

（まだか、）と問うて、また睨めつけられ、苦笑いをしては引込んで控えたのが——大先生の前なり、やがて仏になる人の枕許、謹しんで這って出て、ひよいと立上って螢籠を外すと、居すくまった腰が据らず、ひよろり、で、ドンと縁へ尻餅。魂が碎けたように、胸へ乱れて、颯と光った、籠の螢に、ハット思ふ処を、

「何ですね、お前さん、」

と鼻声になつてゐる女房に劍呑けんのみを食つて、慌てて遁込にげこむ。

この物音に、お薦はまたぱつちりと目を睨みひらいて、心細く、寂しげに、枕を酒井に擦寄せると……

「皆居る、寂しくはないよ。しかしどうだい。早瀬が来たら、誰も次の室まへ行つて貰つて、こうやつて、二人許りで、言いたことがあるだろう。致方しかたが無い断念あきらめな。断念めて——己を早瀬だと思え。世界に二人と無い夫だと思え。早瀬より豪い男だ。学問も出来る、名も高い、腕も有る、あれよりは年も上だ。脊も高い、腹も確たしかだ、声も大い、酒も強い、借金も多い、男振ぶりもあれより増ましだ。女房もあり、情婦いろもあり、娘も有る。地位も名誉も段

違いの先生だ。酒井俊蔵を夫と思え、情^{いろいろ}夫と思え、早瀬主税だと思つて、言いたいことを言え、したいことをしろ、不足はあるまい。念仏も弥陀^{みだ}も何も要らん、一心に男の名^{とな}を称えるんだ。早瀬と称えて袖に縋^{すが}れ、胸を抱け、お蔭。……早瀬が来た、ここに居るよ。」

と云うと、縋りついて、膝に乗るのを、横抱きに頸^{うなじ}を抱いた。

トつかまろうとする手に力なく、二三度探りはずしたが、震えながらしつかりと、酒井先生の襟を掴^{つか}んで、

「咽喉^{のど}が苦しい、ああ、呼吸^{いき}が出来ない。素人らしいが、（と莞爾^{にっこり}して、）口移しに薬を飲まして……」

酒井は猶^た予^めらわず、水薬を口に含んだのである。

がつくりと咽喉を通ると、気が遠くなりそうに、仰向けに恍惚^{うっとり}したが、

「早瀬さん。」

「お蔭。」

「早瀬さん……」

「むむ、」

「先^せ、先生が逢つても可いって、嬉しいねえ！」
 酒井は、はらはらと落涙した。

おとずれ

四十八

病室の寢台^{ねだい}に、うつらうつらしていた早瀬は、フト目が覚めたが……昨夜あたりから、歩行^{ある}いて厠^{かわや}へ行かれるようになったので、もう看護婦も付いておらぬ。毎晩^{きま}極つたように見舞つてくれた道子が、一昨日^{おととい}の夜^よの……あの時から、ふツつり来ないし、一寝入りして覚めた今は、昼間、菅子に逢つたのも、世を隔てたようで心寂しい。室内を横伝い、まだ何か便り無さそうだから、寢台の縁に手をかけて、腰を曲げるようにして出たが、扉^との外^{しやうこ}になると、もう自分でも足の確^{たしか}なの^かが分つて、両側のそちこちに、白^{かな}い金^{だら}盥^{らい}に昇^{しやう}汞^こ水の薄桃色^{うすい}なのが、飛^と々の柱^{はしら}燈^{あかり}に見えるのを、氣の毒らしく思うほど、氣も爽然^{さつぱり}

して、通り過ぎた。

どこも寝入って、寂^{しん}として、この二三日めつきり暑さが増したので、中には扉^とを明けたまま、看護婦が廊下へ雪のような裙^{すそ}を出して、戸口に横^{よこた}わって眠ったのもあった。遠くで犬の吠ゆる声はするが、幸いどの呻^{うめき}吟^{いん}声も聞えずに、更けてかれこれ二時であろう。厠^{おもてばしこ}は表階^{とつ}子の取附きにもあつて、そこは燈^{あかり}も明^{あかる}いが、風は佳^よし、廊下は冷たし、歩^{ある}行^くくのも物珍らしいので、早瀬はわざと、遠い方の、裏階子の横手の薄暗い中へ入った。ざぶり水を注^かけながら、見るともなしに、小窓の格子から田圃^{たんぼ}を見ると、月は屋^やの棟に上つたろう、影は見えぬが青田の白さ。

風がそよそよと渡ると見れば、波のように葉末が分れて、田の水の透いたでもなく、ちらちらと光つたものがある。緩い、遅い、稲妻のように流れて、靄^{もや}のかかった中に、土のひだが数えられる、大巖山の根を低く繞^{めぐ}つて消えたのは、どこかの電燈^{ひらめ}が閃いて映つたようでもあるし、螢が飛んだようにも思われる。

手^{ちようず}水と、その景色にぶるぶると冷くなつて、直ぐに開けて出ようとする。戸の外へ、何か来て立っていて、それがために重いような気がして、思わず猶^{たぬち}予つて、暗い中に、昼間被^きかえた自分の浴衣の白いのを、視^{なが}めて悚^{ぞつ}然として咳^{せき}をしたが、口の裡^{うち}で音には出ぬ。

「早瀬さん。」

「お蔭か、」

と言つた自分の声に、聞えた声よりも驚かされて、耳を傾けるや否や、赫^{かつ}となつて我を忘れて、しやにむに引開けようとした戸が、少しきしんで、ヒヤリと氷のような冷いものを手に掴んで、そのまま引開けると、裏階子^{おおき}が大な穴のように真黒^{まっくろ}なばかりで、別に何にも無い。

瓦を噛^かむように棟近く、夜鴉^{よがらす}が、かあ、と鳴いた。

鳴きながら、伝うて飛ぶのを、^{ぼう}として仰ぎながら、導かれるようにふらふらと出ると、声の止む時、壇階子の横を廊下に出ていた。

と見ると打向い遙か斜めなる、渠^{かれ}が病室の、半開きにして来た扉^との前に、ちらりと見え
た婦^{おんな}の姿。――出たのか、入ったのか、直ぐに消えた。

ばたばたと、我ながら慌^{あわただ}しく登^{あしおと}音立てて、一文字に駆けつけたが、室へ入口で、思わず釘附にされたようになつた。

バサリと音して、一握^{ひとにぎり}の綿が舞うように、むくむくと渦^{うずま}くばかり、枕許の棚をほとんど転^{ころが}つて飛ぶのは、大きな、色の白^{ひとりむし}い蛾で。

枕をかけて陰々とした、燈の間に、あたかも鞠のような影がさした。棚には、菅子が活けて置いた、浅黄の天鵝絨に似た西洋花の大輪があつたが、それではなしに——筋一ツ、元来の藥嫌が、快いにつけて飲忘れた、一度ぶり残つた吞かけの——水藥の瓶に、ばさばさと当るのを、熟と瞻めて立つと、トントントンと壇を下りるような蹙音がしたので、どこか、と見当も分らず振向いたのが表階子の方であつた。その正面の壁に、一番明かつた燈が、アワヤ消えそうになつている。

その時、蛾に向うごとく、衝と踏込む途端に、

「私ですよ引」と床に沈んで、足許の天井裏に、電話の糸を漏れたような、夢の覺際に耳に残つたような、胸へだけ伝わるような、お蔭の音が聞えたと思うと、蛾がハタと落ちた。

はじめて心付くと、廁の戸で冷く握つて、今まで握緊めていた、左の拳に、細い尻尾のひらひらと動くのは、一尾の守宮である。

はつと開くと、雫のように、ぽたりと床に落ちたが、足を踏張つたまま動きもせぬ。これに目も放さないで、手を伸ばして藥瓶を取ると、伸過ぎた身の発奮みに、蹣跚けて、片膝を支いたなり、口を開けて、垂々と濺ぐと——水藥の色が光つて、守宮の頭を擡げて

睨むがごとき目をかけて、滴るや否や、くるくると風車のごとく烈しく廻るのが、見る見る朱を流したように真赤になつて、ぶるぶると足を縮めるのを、早瀬は瞳を据えて屹と視た。

四十九

早瀬はその水薬の残余を火影に透かして、透明な液体の中に、芥子粒ほどの泡の、風のごとくめぐる状に、莞爾して、

「面白い！」

と、投げる様に言棄てたが、恐気も無く、一分時の前は炎のごとく真紅に狂つたのが、早や紫色に變つて、床に氷ついて、翻つた腹の青い守宮を摘んで、ぶらりと提げて、鼻紙を取つて、薬瓶と一所に、八重にくるくると巻いて包んで、枕許のその置戸棚の奥へ、着換の中へ突込んで、ついでにまだ、何かそこらを探したのは、落ちた蛾を拾おうとするらしかったが、それは影も無い。

なお棚には、他に二つばかり処方違つた、今は用いぬ、同一薬瓶があつた。その一個

を取つて、ハタと叩きつけると、床に粉々になるのを見向きもしないで、躍上るように勢込んで寝台ねだいに上つて、むずと高胡坐たかあぐらを組んだと思うと、廊下の方を屹きつと見て、

「馬鹿な奴等！ 誰だと思う。」

と言うと斉ひとしく、仰向けに寝て、毛布けつとを胸へ。――鶏とりの声を聞きながら、大胆不敵いびぎな鼾いびきで、すやすやと寝たのである。

暁かけて、院長が一度、河野の母親大夫人が一度、前後して、この病室を差覗さしのぞいて、人知れず……立去つた。

早瀬はやせが目を覚ますと、受持の看護婦が、

「薬は召上りましたか。瓶が落ちて破われておりましたが。」

と注意をしたのは言うまでもなかった。

で、新あたらしい瓶がもう来ていたが、この分は平気で服した。

その日燈あかりの点くちと前に、早瀬は帯しめなを緊直おして、看護婦を呼んで、

「お世話になりました。お庇かげ様でどうやら助りました。もう退院をしまして宜しいそうで、後の保養は、河野さんの皆さんがいらつしやる、清水港の方へ来てしてはどうか、と云つて下さいますから、参ろうかと思ひます。何にしても一旦塾の方へ引取りますが、種い

ろいろ
 々用がありますから、人を遣つて、内の小使をお呼び下さい。それから、お呼立て申して済みませんが、少々お目に懸りたい事がございます。ちよつとこの室までお運びを願いたい、と河野さんに。……いや、院長さんじゃありません、母屋にいらつしやる英臣さん。
 」

「はあ、大先生に……申し上げましょう。」

「どうぞ。ああ、もし、もし、」

と出掛けた白衣びやくえの、腰の肥ふといのを呼留めて、

「御書見中でもありましたら、御都合に因つて、こちらから参りましても可ようございまして。」

馴染んでゐるから、黙うなずつて領うなずいて室を出て、表階子の方へ登あしおと音がして、それぎり忙いそしい夕暮の蟬の声。どこかの室で、新聞を朗読するのが聞えたが、ものの五分間経たつたのではなかつた。二階もまだ下り切るまいと思うのに、看護婦が、ばたばた忙せわしく引返して、発奮はつふみに突込むように顔を出して、

「お客様ですよ。」

「島山さんの？」

と言う、呼吸も引かず、早瀬は目を睜みはつて茫然とした。

昨夜ゆうべの事の不思議より、今目前まのあたりの光景を、かえつて夢かと思うよう、恍惚うつつとりとなったも道理。

看護婦の白衣にかさなつて、紫の矢や紺がすりの、色の薄いが鮮麗あざやかに、朱緞しゅどん子に銀と觀世水のやや幅細な帯を胸高に、緋ひ鹿かのこ子の背負しよいあ上げて、ほんのり桜色に上気しながら、こなたを見入ったのは、お妙である！

「まあ！……」

ときよとんとして早瀬はひたと瞻みつめた。

「主税さん。」

と、一年越ととせ、十年も恋しく百年も可懐ももとせなつかしい声をかけて、看護婦の傍かたわらをすつと抜けて真まつ直すに入ったが、

「もう快くつて？」

と胸を斜めに、帯にさし込んだ塗骨おうちの扇子も共に、差さ覗のぞくようにした。

「お嬢さん……」とまだぼうとしている。

「しばらくね。」

と前さきへ言われて、はじめて吃驚びつくりした顔をして、

「先生は？」

「宜しくツて、母さんも。」と、ちゃんと云う。

五十

寢台ねだいと椅子との狭い間、目前めざきにその燃ゆるような帯が輝いているので、二り下りようと
する、それもならず。蒼空あおぞらの星を仰ぐがごとく、お妙の顔を見上げながら、

「どうして来たんです。誰と。貴女あなた。いつ。どの汽車で。」と、一呼吸ひといきあわただに慌しい。

「今日の正午おひるの汽車で、今来たわ。惣助ツて肴屋さかなやさんが一所なの。」

「ええ、め組がお供で。どうしてあれを御存じですね。」

「お薦さんの事よ、」

と言いかける、口の荅つばみが動いたと思うと、睫毛まつげが濃くなつて、ほろりとして、振返ると、
まだそこに、看護婦が立っているの、慌たもとて袂を取つて、揉もみこ込むように顔を隠すと、美
しい眉のはずれから、振ふりひるが翻がえつて、朱鷺色ときの紹ろの長襦袢の袖が落ちる。

「今そんな事を聞いちや、厭！」

と突慥貪つつけんとんなように云った。勿な、問いそそこに人あるに、涙得堪ええず、と言うのである。看護婦は心得て、

「では、あの、お言託ことづけは。」

「ちと後にして頂きましょう。お嬢さん、そして、お伴をしました、め組の奴は？」

「停車場ステーションで荷物を取つて来るの。半日なら大丈夫だって、氷につけてね、貴下あなたの好きな魚を持つて来たのよ。病院なら直じき分ります、早くいらつしやいッて、車をそう云つて、あの、私も早く来たかつたから、先へ来たわ。皆みんな、そうやって思つてるのに、貴下あなたは酷ひどいわ。手紙も寄越さないんですもの。お薦さん……」

とまた声が曇つて、黙つて差俯さしうつむ向いた主税を見て、

「あの、私ねえ、いろいろ沢山話があるわ。入院していらつしやる、と云うから、どんなに悪いんだろうと思つたら、起きていられるのね。それなのに、まあ……お薦さん……私……貴下あなたに叱言こいごを言うこともあるけれど、大事な用があるから、それを済ましてから緩ゆつくりしましょうね。」

と甘えるように直ぐ變つて、さも親しげに、

「小刀はあつて？」

余り唐突な問だつたから、口も利けないで……また目を睜る。

「では、さあ、私の元結を切つて頂戴。」

「元結を？ お嬢さんの。」

「ええ、私の髪の毛、」

と、主税が後へずらなるとその膝に乗つたろう、色気も無く、寝台の端に、後向きに薄いお太鼓の腰をかけると、緋鹿子がまた燃える。そのままお妙は俯向いて、玉のごとき頸を差伸べ、

「お切んなさいよ、さあ、早くよ。父上も知つていてよ、可いんだわ。」

と美しく流眊に見返つた時、危なく手がふるえていた。小刀の尖が、夢のごとく、元結を弾くと、ゆらゆらと下つた髪を、お妙が、はらりと掉つたので、颯と流れた薄雲の乱る中から、ふつと落ちた一握の黒髪があつて、主税の膝に掛つたのである。

早瀬は水を浴びたように悚然とした。

「お薦さんに託つたの。あの、記念にね、貴下に上げて下さいって、主税さん、」

と向う状に、椅子の凭に俯伏せになると、抜いて持った簪の、花片が、リボンを打つて

激しく揺れて、

「もうその他には逢えないのよ。」

お薦の記念の玉の緒は、右の手に燃ゆるがごとく、ひやひやと練衣の氷れるごとき、筒井筒振分けて、丈にも余るお妙の髪に、左手を密と掛けながら、今はなかなか胴据つて、主税は、もの言う声も確に、

「亡くなつたものの髪毛なんぞ。……」

飛んでも無い。先生が可い、とおっしゃいましたか、奥様が可い、とおっしゃったんですかい。こんなものをお頭へ入れて。御出世前の大事なお身体じゃありませんか。ああ、鶴亀々々、」

と貴いものに触るように、静にその緑の艶を撫でた。

「私、出世なんかしたかないわ。髪結さんにでも何にでもなつてよ。」

と勇ましく起直つて、

「父さんがね、主税さん、病気が治ったら東京へお帰んなさいって、そうして、あの、…お墓参をしましょうね。」

日蝕

五十一

日盛りの田畝道には、草の影も無く、人も見えぬ。村々では、朝から蔭を下ろして、羽目を塞いだのさえ少くない。田舎は律義で、日蝕は日の煩いとして、その影には毒あり、光には魔あり、熱には病ありと言伝える。さらぬだにその年は九分九厘、ほとんど皆既蝕と云うのであつた。

早朝 日の出の色の、どんよりとしていたのが、そのまま冴えもせず、曇りもせず。鶏卵色に濁りを帯びて、果し無き蒼空にただ一つ。別に他に輝ける日輪があつて、あたかもその雛形のごとく、灰色の野山の天に、寂寞として見えた――

風は終日無かつた。蒸々と悪気の籠つた暑さは、そこらの田舎屋を圧するようで、空気は大磐石に化したのごとく、嬰兒の泣音も沈み、鶏の羽さえ羽叩くに懶げで、庇間にかけて階子に留まつて、熱と中空を仰ぐのさえ物ありそうな。透間に射し入る日の光は、

風に動かぬ粉にも似て、人々の袖に灰を置くよう、身動にも払われず、物蔭にも消えず、細かに濃く引包まれたかの思がして、手足も顔も同じ色の、蠟にも石にも固るか、とばかり次第に息苦しい。

白昼凝つて、尽く太陽の黄なるを包む、混沌たる雲の凝固とならんず光景。万有あわや死せんとす、と忌わしき使者の早打、しつきりなく走るは鴉で。黒き礫のごとく、灰色の天狗のごとく乱れ飛ぶ、とこれに驚かされたようになって、大波を打つのは海よ。その、山の根を畝り、岩に躍り、渚に翻つて、沖を高く中空に動けるは、我ここに天地の間に充満たり、何物の怪しき影ぞ、円なる太陽の光を蔽うやとて、大紅玉の悩める面を、拭い洗わんと、苛立ち、悶え、憤れる状があつたが、日の午に近き頃には、まさにその力尽き、骨菱えて、また如何ともするあたわざる風情して、この流動せる大偉人は、波を伏せ※きを収めて、なよなよと拈げた蒼き綿のようになって、興津、江尻、清水をかけて、三保の岬、田子の浦、久能の浜に、音をも立てず倒れたのである。

一分たちまち欠け始めた、日の二時頃、何の落人か慌しき車の音。一町ばかりを絶えず続いて、轟々と田舎道を、清水港の方から久能山の方へ走らして通る、数八台。真前の車が河野大夫人富子で、次のが島山夫人菅子、続いたのが福井県参事官の新夫人辰子、こ

れが三番目の妹で、その次に高島田に結ったのが、この夏さる工学士とまた縁談のある四番の操子で、五ツ目の車が絹子と云う、三五の妙齡。六台目にお妙が居た。

一所に東京へと云うのを……仔細あつて……早瀬が留めて、清水港の海水浴に誘つたのである。

お妙の次を道子が乗った。ドン尻に、め組の惣助、婦ばかりの一ひと群には花籠に熊蜂めぐが、此奴こいつ大切なお嬢の傍かたえを、決して離れる事ではない。

これは蓋し一門の大統領、従五位勲三等河野英臣の発議に因て、景色の見物をかねて、久能山の頂で日蝕の観測をしようとする催もよおしで。この人達には花見にも月見にも変りはないが、驚いて差覗いた百姓だちの目には、天宮に蝕の変あつて、天人たちが遁にげるのだと思つたろう。

共に清水港の別荘に居る、各々めいめいの夫は、別に船をしつらえて、三保まわりに久能の浜へ漕こぎ寄せて、いずれもその愛人の帰途かえりを迎えて、夜釣をしながら海上を戻る計画。

小兒こどもたち、幼稚おきないのは、傳もり、乳母など、一ひと群に、今日は別荘に残った次第。すでに前にも言つたように、この発議は英臣で、真前まっさきに手を拍うつて賛成したのは菅子で、余は異論なく喜んで同意したが、島山夫人は就なかなづく中得意であつた。

と云うのは、去年汽車の中で、主税が伊太利人に聞いたと云うのを、夫人から話し伝えて、まだ何等の風説の無い時、東京の新聞へ、この日の現象を細かに論じて載せたのは理学士であつたから。その名たちまち天下に伝えて、静岡では今度の日蝕を、（島山蝕）——とさえ称えたのである。

五十二

田に行く時、白鷺が驚いて立った。村を出る時、小店の庭の松葉牡丹に、ちらちら一行の影がさした。聯る車は、薄日なれば母衣を払って、手に手にさしかざしたいろいろの日傘に、あたかも五彩の絹を中空に吹き靡かしたごとく、死したる風も颯と涼しく、美女たちの面を払って、久能の麓へ乗附けたが、途中では人一人、行脚の僧にも逢わなかったのである。

蝕あり、変あり、兵あり、乱ある、魔に囲まれた今日の、日の城の黒雲を穿つた抜穴の岩に、足がかりを刻んだ様な、久能の石段の下へ着くと、茶店は皆ひしひしと真夜中のごとく戸を鎖して、蜻蛉も飛ばず。白茶けた路ばかり、あかあかと月影を見るように、寂

然^りとしてゐるのを見て、大夫人が、

「野蠻だね。」

と嘲笑^{あざわら}つて、車夫に指揮^{さしず}して、一軒店を開けさして、少^{しば}時休んで、支度が出来ると、
 帰りは船だから車は不^{のこらず}残帰す事にして、さて大なる花束^{おおい}の糸を解いて、縦に石段に投げ
 かけた七人の裾袂、ひらひらと扇子を使うのが、さながら蝶のひらめくに似て、め組を後
 押^{おし}えで、あの、石段にかかった。

が、河野の一族、頂へ上つたら、思いがけない人を見よう。

これより前^{さき}、相貌堂々として、何等か銅像の揺^ゆぐがごとく、頤^{おとがい}に髯^{ひげ}長き一個の紳士の、
 握^{にぎ}に銀の色の燦^{さん}爛^{らん}たる、太く逞^{たくま}き杖^{てつぎ}を置いて、ナポレオン帽子の庇^{ひさし}深く、額に暗^しき皺^{しわ}を
 刻^きみ、満面に燃^もるがごとき怒気を含んで、頂の方を仰ぎながら、靴音を沈めて、石段を攀^よ
 じて、松の梢^{こずえ}に隠れたのがあつた。

これなん、ここに正に、大夫人がなせるごとく、海を行く船の竜頭に在るべき、河野の
 統領英臣であつたのである。

英臣が、この石段を、もう一階で、東照宮の本殿になろうとする、一場^{みはらし}の見霽に上り着
 いて、海面^{うなづら}が、高くその骨組の丈夫な双の肩に懸^かつた時、音に聞えた勘助井戸を左に、

右に千仞の絶壁の、豆腐を削ったような谷に望んで、幹には浦の苦屋を透し、枝には白き渚を掛け、緑に細波の葉を揃えた、物見の松をそれぞと見るや——松の許なる据置の腰掛に、長くなつて、肱枕して、面を半ば中折の帽子で隠して、羽織を畳んで、懷中に入れて、枕した頭の傍に、薬瓶かと思う、小さな包を置いて、悠々と休んでいた一個の青年を見た。

と立向つて、英臣が杖を前につき出した時、日を遮った帽子を払つて、柔かに起直つて、待構え顔に屹と見迎えた。その青年を誰とかなす——病後の色白きが、清く瘠せて、鶴のごとき早瀬主税。

英臣は庇下りに、じろりと視めて、
「疾かつた、のう」と鷹揚に一ツ頤でしやる。

「御苦勞様です。」

と、主税は仰ぐようにして云つた。

「いや、ここで話しようと云うたのは私じやで、君の方が病後大儀じやつたろう。しかし、こんな事を、好んで持上げたのはそちらじやて、五分々々か、のう、はははは、」
と髯の中に、唇が薄く動いて、せせら笑う。

早瀬は軽く微笑ほほえみながら、

「まあ、お掛けなさいまし。」

と腰掛けた傍かたわらを指で弾はじいた。

「や、ここで可ええ。話は直じき分る。」と英臣は杖ステッキを脇挟わきんで、葉巻くわを銜くわえた。

「早解りは結構です、そこで先日のお返事は？」

「どうかせい、と云うんじやった、のう。もう一度云うて見い。」

「申しましようかね。」

「うむ、」

と吸つばいつけた唾つばを吐く。

「ここで極きめて下さいましようか。過このあいだ日、病院で掛合いました時のように、久能山で返

事しようじや困りますよ。ここは久能山なんですから。またと云っちゃ竜爪りゅうそうざん山へでも行かなきゃならない。そうすりや、まるで天狗が寄合よあひいをつけるようです。」

「余計な事を言わんで、簡単に申せ。」

と今の諧かいぎやく謔やくにやや怒気を含んで、

「私わしが対手あいてじや、立たちどころ処に解決してやる！」

「第一！」

と言った……主税の声は朗であつた。
ほがらか

「貴下あなたの奥さんを離縁なさい。」

隼

五十三

いちげんぼうじよう
一言亡状を極めたにも係わらず、英臣はかえつて物静ものしずかに聞いた。

「なぜか。」

「馬丁べっとう貞造と不埒ふらちして、お道さんを産んだからです。」

強こゝろばいて言を落着けて、

「それから、」

「第二、お道さんを私に下さい。」

「何でじゃ？」

「私と、いい中です。」

「むむ、」

と口の内で言った。

「それから、」

「第三、お菅さんを、島山から引取っておしまいなさい。」

「なぜな。」

「私と約束しました。」

「誰と？」

はたと目を怒らすと、早瀬は澄まして、

「私とき。」

「うむ、それから？」

「第四、病院をお潰^{つぶ}しなさい。」

「なぜかい。」

「医学士が毒を装^もります。」

「まだ有った、のう。」と、落着いて尋ねた。

「河野家の家庭は、かくのごとく汚れ果てた。……最早や、忤の嫁を娶るのに、他の大切な娘の、身分系図などを検べるような、不埒な事はいたしますまい。また一門の繁栄を計るために、娘どもを餌にして、婿を釣りますまい。」

就中、^{なかんずく}独逸文学者酒井俊蔵先生の令嬢に対して、身の程も弁えず、無礼を仕りました申訳が無い、とお詫びなさい。

そうすりや大概、河野家は支離滅裂、貴下のいわゆる家族主義の滅亡さ。そこで敗軍した大將だ。貴下は安東村の貞造の馬小屋へでも引込むんだ。ざっと、まあ、これだけさ。」と帽子で、そよそよと胸を煽いだ。

時に蝕しつつある太陽を、いやが上に蔽い果さんずる修羅の叫喚の物凄く響くがごとく、油蟬の声の山の根に染み入る中に、英臣は荒らかな声して、

「発狂人！」

「ああ、狂人だ、が、他の気遣は出来ないことを云って狂うのに、この狂気は、出来る相談をして澄ましているばかりなんだよ。」

舌もやや釣る、唇を蠢かしつつ、

「で、私^{わし}がその請求^{ききう}を肯^きかんけりや、汝^{きさま}、どうすツとか言うんじやのう。」と、太息^{たいし}を吐^ついたのである。

「この毒藥^{どくやく}の瓶^{びん}をもつて、ちと古風^{こふう}な事^{こと}だけれど、恐れながらと、遣^やろうと云^いうのだ。それで大概^{たいたい}、貴下^{きげ}の家^{いえ}は寂滅^{じやくめつ}でしようぜ。」

英臣^{えいちん}は辛^{から}うじて罵^{ののし}り得^えた。

「騙^{かたり}じやのう、」

「騙^{かたり}ですとも。」

「強^{ゆすり}請^{きこさま}じやが。汝^{きさま}、」

「強^{ゆすり}請^{きこさま}ですとも。」

「それで汝^{きさま}人間^{にんげん}か。」

「畜生^{ちくせい}でしようか。」

「それでも独逸語^{どいつご}の教師^{けうし}か。」

「いいえ、」

「学者^{がくしや}と言^いわれようか。」

「どういたしまして、」

「酒井の門生か。」

「静岡へ来てからは、そんな者じゃありません。騙です。」

「何、騙じゃ、」

「強請です。畜生です。そして河野家の仇あだなんです。」

「黙れ！」

と一喝、虎のごとき唸うなりをなして、杖ステッキをひしと握つて、

「無礼だ。黙れ、小僧。」

「何だ、小父さん。」

と云つた。英臣は身心ともに燃ゆるがごとき中にも、思わず掉ふりおろ下す得物を留めると、

主税は正面へ顔を出して、呵からから々と笑つて、

「おい、己おれを、まあ、何だと思う。浅草田畝たんぼに巢を持つて、観音様へ羽を伸のすから、隼はやぶさの力りきと綽名あだなアされた、掏摸すりだよ、巾着きんちやく切だよ。はははは、これからその気で附合いねえ、こう、頼むぜ、小父さん。」

「己おれが十二の小僧の時よ。朝露の林を分けて、塹ねぐらを奥山へ出たと思ひねえ。蛙けえろの面つらへ打ぶかけるように、仕かけの噴水が、白粉おしろいの禿はげげた霜しもげた姉さんの顔を半分に仕切つて、酒壺しやあと出ていら。その釣堀に、四人連づれ、皆洋服で、まだ酔の醒さめねえ顔も見えて、帽子は被かぶつても大童おおわらわと云う体だ。芳原げえりが、朝ツばら鯉を釣っているじゃねえか。

釣つてるのは鯉だけれど、どこのか田畝どじようの鰯いわしだろう。官員で、朝帰りで、洋服で、釣つてりや馬鹿だ、と天窓あたまから呑んでかかつて、中でも鮒ふならしい奴の黄金鎖きんぐさりへ手を懸ける、としまつた！ この腕うんを呻うんと握られたんだ。

掴つかえて打ちでもする事か、片手で澄まし込んで釣るじゃねえか。釣つた奴を籠かごへ入れて、（小僧これを持つて供をしる。）ツて、一睨ひとにらみ睨にらまれた時は、生れて、はじめて縮すくんだのさ。こりや成程ちよろツかな（隼）の手でいかねえ。よく顔も見なかったのがこつちの越度おちどで、人品骨柄を見たつて知れる——その頃は台湾の属官だったが、今じゃ同一所の税関長、稲坂と云う法学士で、大鵬たいほうのような人物、ついて居た三人は下役だね。

後で聞きや、ある時も、結婚したての細君を連れて、芳原を冷かして、格子で馴染なじみの女に逢つて、

（一所に登楼^{あが}るぜ。）と手を引いて飛込んで、今夜は情^{いろ}女^{おんな}と遊ぶんだから、お前は次の室^まで待つてゐるんだ、と名^み代^{ようだい}へ追いやつて、遊^{あそ}女^{いらん}と寝たと云う豪傑さね。

それツきり、細君も妬^やかないが、旦那も嫉^{じん}氣^{すけ}少しもなし。

いつか三月ばかり台湾を留守にして、若いその細君と女中と書生を残して置くと、どの婦^{おんな}も同^{おんな}一^だだ。前^{ぜん}から居る下役の媽^か々^かども、いずれ夫人とか、何子とか云う奴等が、女同士、長官の細君の、年^{とし}紀の若いのを猜^そん^ねだやつさ。下女に鼻薬を飼つて讒^{つげ}言^{ぐち}をさせたんだね。その法学士が内へ帰ると、（お帰んなさいまし、さて奥様はひよんな事。）と、書生と情交^{わけ}があるように言いつける。とよくも聞かないで、——（出て行^いけ。）——と怒鳴り附けた。

誰に云つたと思います。細君じゃない。その下女にさ。

どうです。のろかったり、妬^や過ぎたり、凡人^{わん}業^ぎじゃねえような、河野さん、貴下のお婿様^{さん}連にや、こういうのは有りますまい。

己^つが掴^かつたのはその人だ。首を縮^{すく}めて、鯉^への入^いつた籠^{かご}を下げて、（魚^ぎ籃^{らん}）の丁^で稚^ちと云う形で、ついで行^いくと、腹^{はら}こなしだ、とぶらりぶらり、昼頃まで歩^あ行^るいてさ、それから行つたのが真砂町の酒井先生の内だつた。

学校のお留守だったが、親友だから、ずかずかと上って、小僧も二階へ通されたね。

（奥さん、これにもお膳を下さい。）と掏摸すりにも、同一おんなじように、吸物膳。

女中の手には掛けないで、酒井さんの奥方ともあろう方が、まだ少わかかった——縮緬ちりめんのお羽織で、膳を据えて下すって、（遠慮をしないで召食めしあがれ、）と優しく言って下すった時にや、己おら始めて涙が出たのよ。

先生がお帰りなされると、四ツ膳の並んだ末に、可愛い小僧が居るじゃねえか。（何だい、）と聞かれたので、法学士が大口開いて（掏摸すりだよ。）と言われたので、ふツつり留やめる気になつたぜ、犬畜生だけ、情なさけには脆もろいのよ。

法学士が、（さあ、使賃だ、祝儀だ、）と一円出して、（酒が飲めなきや飯を食つてもう帰れ、御苦労だった、今度ツからもっと上手に攫やれよ。）と言われて、畳に喰くついて泣いていると、（親がないんだわねえ、）と、勿体ねえ、奥方の声がうるんだと思いねえ。（晩の飯を内で食つて、翌日あすの飯をまた内で食わないか、酒井の籠で飼つてやろう、隼。）と、それから親鳥の声を真似まねて、今でも囀さえずる独逸語だ。

世の中にや河野さん、こんな猿を養つて、育ててくれる人も有るのに、お前さん方は、まあ何という、べらぼうな料簡りょうけん方だ。

可愛い娘たちを玉に使つて、月給高で、婿を選んで、一家の繁昌はんじやうとは何事だろう。たまたま人間に生を受けて、しかも別嬪べっぴんに生れたものを、一生にたった一度、生命いのちとはつりがえの、色も恋も知らせねえで、盲鳥めくらどりを占めるように野郎の懷へ捻ねじ込んで、いや、貞女になれ、賢母になれ、良妻になれ、と云つたつて、手品の種を通わせやしめえし、そう、うまく行くものか。

見たが可い、こう、己おれが腕がちよいと触ると、学校や、道学者が、新粉細工しんこで拵こしらえた、貞女も賢母も良妻も、ばたばたと将棊倒しだ。」

英臣の目は血走つた。

五十五

「河野の家には限らねえ。およそ世の中に、家の為に、女の児こを親勝手に縁附けるほど慘むごたらしい事はねえ。お為ごかしに理窟を言つて、動きの取れないように説得すりや、十六や七の何にも知らない、無垢むくな女が、頭一ツ掉ふり得るものか。羞含はにかんで、ぼうとなつて、俯うつむ向くので話が極きまつて、赫かつと逆上のぼせた奴を車に乗せて、回生剤きつけのような酒をのませる、こ

いつを三々九度と云うのよ。そこで寝て起りや人の女房だ。

うっかり他ひとと口でも利きや、直ぐに何のかのと言われよう。それで二人が繋つなつて、光つた態なりでもして歩行あるけば、親達は緋ひ緘おとしの鎧よろいでも着たように汝うぬが肩身をひけらかすんだね。

娘が惚れた男に添わせりや、たとい味噌みそ漉こしを提ひげたって、玉の冠を被かぶつたよりは嬉うれしがるのを知らねえのか。傍はたの目からは筵むしろと見えても、当人には綾あや錦にしきだ。亭主は、おい、親のものじゃねえんだよ。

己が言うのが嘘だと思つたら、お道さんに聞いて見ねえ。病院長の奥様より、馬小屋へ入へつても、早瀬と世帯が持ちたいとよ。お菅さんにも聞いて見ねえ。」

「不埒ふらちな奴だ？」

と揺ゆいた英臣の髯ゆげの色、口を開あいて、黒煙に似た。

「不埒は承知よ。不埒を承知でした事を、不埒と言つたつて怯然びくともしねえ。豪えらい、と讃ほめりや吃驚びっくりするがね。

今更慌てる事はないさ、はじめから知れていら。お前さんの許とこのような家風で、媚めいを持たした娘たちと、情事いろこをするくらい、下女を演劇しばいに連出すより、もつと容易たやすいのは通相場よ。

こう、もう威張ったって仕ようがねえ。恐怖おっかなくはないと言え、」
と微笑ほほえみながら、

「そんな野暮な顔をしねえで、よく言うことを聞け、と云うに。――

おい、まだ驚く事があるぜ。もう一枝、河野の幹を榮さかえさそうと、お前さんが頼みにして
いる、四番目の娘だがね、つい、この間、暑中休暇で、東京から帰って来た、手入らずの
嬢さんは、医学士にけがされたぜ。

己に毒藥を装もらせたし、ばれかかったお道さんの一件を、穩便にさせるために、大奥方
の計らいで、院長に押附おっつけたんだ。己と合棒の万太と云う、幼馴染の掬摸なかつの夥間なかつが、ちや
んと材料たねを上げていら。

やつぱり家の為だろう。河野家の名譽のために、旧惡を知ってる上、お道さんと不都合
した、早瀬と云う者を毒殺しようと、娘を一人傷物にしたんじゃないか。

そこを言うのだ。児こどもよりも家を大切がる残酷な親だと云うのは、よ。

なぜ手について懺悔ざんげをしない。悪かった。これからは可愛い娘を決して名聞みやうもんのため
には使いますまい。家柄を鼻にかけて他の娘ひとに無礼も申掛けますまい、と恐入おそつてしまわ
ないよ。

小児こども一人犠牲にえにして、毒藥なんぞ装らないでも、坊主になつて謝あやまんねえな。」

五十六

おもてふ
面も触らず言を継ぎ、

「それに、お前さん何と云つた。——この間も病院で、この掛合をする前に、念のために聞いた時だ。——

たつて英吉君の嫁に欲しいとお言いなさる、私が先生わかしのお妙さんは、実は柳橋の芸者の子だが、それでも差支えは無いのですか、と尋ねたら、お前さん、もつての外な顔をして、いや、途方もない。そんな賤いやしい素性の者なら、たとえ英吉がその為に、憧こがれ死しをしようとも、己たち両親が承知をせん。家名に係わる、と云つたろう。

こう、お前めえたちにや限らねえ。世間なまけにやそうした情無なまけえ了簡な奴ばかりだから、そんな奴等つらあてへ面当つらあてに、河野の一家いつけを鎗やり玉だまに挙げたんだ。

はじめから話にならねえ縁談だから可いけれど、これが先生も承知の上、嬢さんも好いた男で、いざ、と云う時、そでねえ系図しらべをされて、芸者の子だというだけで、破談

にでもなつた時の、先生御夫婦、お嬢さんの心持はどんなだろう。

己おらそれを思うから、人間並にや附合えねえ肩書あくだつちつきの悪丁稚あくでつちを、一人前に育てた上、大切な嬢さんに惚おれてゐるなら添そわしてやろう、とおつしやつて下すつた、先生御夫婦のお志。掏摸の野郎と顔をならべて、似え而非道せ学者の坂田なんぞを見返そうと云つた江戸児のお嬢さんに、一式の恩返し、二ツあつても上げたい命を、一ツ棄てるのは安価やすいものよ。お前さんにや気の毒だ。さぞ御迷惑でございましょう。」

と丁寧ていねいに笑つて言つて、

「迷惑や気の毒を勘しん酌しゃくして巾着切が出来るものか。真人間でない者に、お前めえ、道理を説いたつて、義理を言つて聞かしたつて、巡査おまわりほどにも恐くはねえから、言句もんくなしに往生するさ。軍いくさに負けた、と思えば可よからう。

掏摸の指で突ついても、倒れるような石垣や、蟻で崩れる濠ほりを穿ほつて、河野の旗を立てていたつて、はじまらねえ話じゃねえか。

お前さん、さぞ口惜くやしかろう。打ちぶたくば打て、殺したくば殺しねえ、義理を知つて死ぬような道理を知つた己じやねえが、嬢さんに上げた生命いのちだから、その生命を棄てるので、お道さんや、お菅さんにも、言訳をするつもりだ。死んでも寂さびしい事はねえ、女房が先へ行

つて待つていら。

お薦と二人が、毒蛇になつて、可愛いお妙さんを守護する覚悟よ。見ろ、あの竜宮に在る珠は、悪竜が絡まとい繞めぐつて、その器に非ずして濫みだりに近づく者があると、呪殺すと云うじやないか。

呪のろ詛ろわれたんだ、呪詛のろわれたんだ。お妙さんに指を差して、お前たちは呪詛のろわれたんだ。
「

と膝に手を置き、片はん面おもてを、怪しきものの走るがごとく颯さと暗くなつた海に向けて、蝕すくある凄すしき日の光に、水底みなそこのその悪竜の影に憧るる面おも色もちした時、隼の力の容貌は、かえつて哲学者のごときものであつた。

英臣は苔蒸せる石の動かざるごとく緘かん黙もくした。

一声高らかに雉子きじが啼なくと、山は暗くなつた。

勘助井戸の星を覗のぞこうと、末の娘が真ま先さきに翻ひらり然と上つて、続いて一人々々、名ある麗人の靈のごとく朦朧もうろうとして露あわれた途端に、英臣はかねてその心構えをしたらしい、やにわに衣兜かくしから短銃ピストルを出して、衝つと早瀬の胸を狙つた。あわやと抱いだき留めた惣助はねたは倒おされて転んだけれども、渠危かあやうし、と一目見て、道子と管子が、身おを蔽おいに、背せより、

胸より、ひしと主税を庇つたので、英臣は、面を背けて嘆息し、たちまち狙を外らすや否や、大夫人を射て、倒して、硝薬の煙とともに、蝕する日の面を仰ぎつつ、この傲岸なる統領は、自からその脳を貫いた。

抱合つて、目を見交わして、姉妹の美人は、身を倒に崖に投じた。あわれ、蔦に蔓に留まつた、道子と菅子が色ある残懷は、滅びたる世の海の底に、珊瑚の碎けしに異ならず。

折から沖を遙に、光なき昼の星よと見えて、天に連つた一点の白帆は、二人の夫等の乗れる船にして、且つ死骸の倂に似たのを、妙子に隠して、主税は高く小手を翳した。

その夜、清水港の旅店において、爺は山へ柴芻に、と嬢さんを慰めつつ、そのすやすやと寐たのを見て、お蔦の黒髪を抱きながら、早瀬は潔く毒を仰いだのである。

早瀬の遺書は、酒井先生と、河野とに二通あつた。

その文学士河野に宛てたは。——英吉君……島山夫人が、才と色とをもって、君の為に早瀬を擒にしようとしたのは事実である。また我自から、道子が温良優順の質に乗じて、謀つて情を迎えたのも事実である。けれども、そのいずれの操をも傷けぬ。双互にただ黙

会したのに過ぎないから、乞う、兩位の令妹のために、その淑徳を疑うことなかれ。特に君が母堂の馬丁ばていと不徳の事のごときは、あり触れた野人の風説に過ぎなかった。——事實でないのを確めたに就いて、我が最初の目的の達しられないのに失望したが、幸か、不幸か、浅間の社頭で逢った病者の名が、偶然貞造と云うのに便つて、狂言して姉夫人を誘おびき出し得たのであった。従つて、第四の令妹の事はもとより、毒藥の根も葉もないのを、深夜蛾ひとりむしが燈に斃おちたのを見て、思ひ着いて、我が同類の万太と謀つて、渠をして調べしめた毒藥を、我が手に藥の瓶に投じて、直ちに君の家敵に迫つた。

不義、毒殺、たとえば父子、夫妻、最親至愛の間においても、その実否じつぷを正すべく、これを口にすべからざる底ていの条件をもつて、咄嗟とつさに雷発らいはいして、河野家の家庭を襲つたのである。私は掏賊すりだ、はじめから敵に対しては、機謀權略、反間苦肉、有ゆる辣手段らつしゅだんを弄して差支えないと信じた。

要はただ、君が家系門閥もんぱうの誇の上に、一部の間隙を生ぜしめて、氏素性、かくのごとき早瀬の前に幾分の讓歩をなさしめん希望に過ぎなかつたに、思わざりき、久能山上の事あらんとは。我は偏ひとえに、君の家敵の、左右一顧の余裕のない、一時の激怒を惜むおしとともに、清冽一塵の交るを許さぬ、峻厳なるその主義に深大なる敬意を表する。

英吉君、能^{あた}うべくは、我意を体して、より美^{うつくし}く、より清き、第二の家庭を建設せよ。人生意気を感じずや——云々の意を認^{したた}めてあつた。

門族の栄華の雲に蔽^{おお}われて、自家の存在と、学者の独立とを忘れていた英吉は、日蝕の日の、蝕の晴ると共に、嗟嘆^{さたん}して主税に聞くべく、その頭脳^{あきらか}は明に、その眼^{まなこ}は輝いたのである。

早瀬は潔く云々以下、二十一行抹消。——前篇後篇を通じその意味にて御覧を願う。はじめ新聞に連載の時、この二十一行なし。後単行出版に際し都合により、徒^とを添えたるもの。或^{あるい}はおなじ単行本御所有の方々の、ここにお心つかいもあらんかとて。

明治四十（一九〇七）年一〜四月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成12」ちくま文庫、筑摩書房

1997（平成9）年1月23日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第十卷」岩波書店

1940（昭和15）年5月15日

初出：「やまと新聞」

1907（明治40）年1～4月

入力：真先芳秋

校正：かとうかおり

2000年8月17日公開

2009年2月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

婦系図

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>